

## 藤田健君の世界ヒッチハイク

藤田健君は3年10か月に及び世界中をヒッチハイクしました。それを「思的生活を垣間見る」というブログで2007年3月から1年半に亘って紹介してきました。この記録はブログからその部分を抜粋したものです。

### 《韓国》

下関港からプサン港への出発は9月26日、韓国から次の訪問地中国へは10月5日、韓国の港「ピョンテク」から中国の港「龍眼」へ行くまでの9日間の記録である。

下関港からプサン港までの片道の値段は8,500+600=9,100円とある。この値段で一番近い外国・韓国に行けるということだ。「韓国プサン港に上陸後、ヒッチハイクを試みるが1台も載せてもらえず、かなり歩き北のはずれで野宿」をしたとある。初日から乗せてくれる車に恵まれず、初めから困難が待ち受けていた。国の習慣というのか、慣行というべきかその国ならではのものがあることが垣間みえる。ヒッチハイクだけならまだしも、野宿を交えた道行は厳しいものが待ち受けている。「翌日はトラックでウルサンまで乗せてもらえ、その後はソンさん夫婦のワゴン車に乗せてもらう。途中彼らの会社に立ち寄って、コーヒーや特殊な素材の石の製品をもらい、高速道路の食堂で昼食をご馳走になった。その後ウオンジュ着、別の車をヒッチして午後5時ソウルの到着し、物置で眠る」

韓国への訪問は初めてでないらしく、前の旅行で知り合ったピルスンという女性にご厄介になったと書かれている。「前の韓国旅行で知り合ったピルスンと会う。俺の顔を見るなり「ひげ、そりなさい」と説教。彼女は旅行会社で働いているらしく、日本語もかなりうまい。」という話がメモに記載されている。

ソウル到着の日は野宿であったが、翌日は2,500円、次の日には1,500円の宿を泊まり歩く。その後9月30日と10月1日はピルスンの家に泊めてもらう。

「ピルスンの家に泊めてもらうことになって朝食もいただいた。クリも茹でてくれた。人の家に泊めてもらうことになって、来月頭が連休のため、中国ビザは早めにとってしまったので、そのため7,000円と高くついた。ピルスンと一緒に、プルコギ〔牛肉の薄切りを甘いたれで焼いた料理〕やサムギョクサル〔豚の三枚肉〕を食べたり、食後コーヒーを飲みながら、人生について語ったり……………。彼女は友人の家に行き、俺が一人で部屋を使うことができた。2泊3日お世話になったピルスンの家をあとにし、お別れ、旅立ちに当たって、キムパブ〔海苔巻き〕を持たせてくれた。カムサハムニダ（ありがとう）。」

「ソウル郊外からヒッチをやるが、ワゴン型タクシーが止まってしまい、タダで最寄の駅まで乗せてくれた。流れで地下鉄に乗り、そこから少し歩いたところで野宿」地下鉄はソウルからスウォンまで乗る、という。

「スウォンからピョンテクまで短いヒッチをし、工事現場のプレハブで寝る。翌朝寒さで

起床。港のトイレで足を洗っていたら、警察に尋問された。中国行きのフェリーが明日なのでもう 1 泊しなければならないが、怪しまれるのも寒いのもいやなので、1,500 円の旅人宿(ヨインスク)に泊まる」という記述がある。それにしてももう野宿は 4 泊を数え、宿屋や泊めていただいた分は 5 日である。これで韓国のヒッチハイクは終わりとなり、中国の旅となる。

## 《中国》

### 10月6日

韓国のソウル付近の黄海の港・ピョンテクを中国山東省龍眼に向けて、大龍 SHIPPING のフェリーで渡る。雷雨で 2 時間の延着。この間船内で韓国人と懇意になった。

「この韓国人と一緒に威海市までタクシーを乗りおごってもらおう。その上豪華な昼飯、焼肉、キムチ、コーヒーまでいただいてしまう」夜は 20 元の宿に泊まったとある。

### 10月7日

「昼までヒッチハイクを試みるが、1 台も停まらず。很多出租汽車(タクシー多すぎ)バスに乗ることにする。夕食に五香肉」藤田君はこの経験から中国ではヒッチハイクは無理と思ったのか、これ以後ヒッチハイクについての記述はない。中国はまだモータリゼーションが始まったばかりです。ヒッチハイクなどに手を貸す余裕などまだないと思わる。彼はこのことを体で感じ取ったことでしょう。仕方なくバスで坊市まで行き、中国 2 日目は 1 泊 20 元の招待所に泊まることとなる。

### 10月8日

坊市から山東省の省都済南市にバスで向かう。31.5 元を要し距離がわかる。済南市では「中国で飲むジャスミン茶は美味しい。盛通旅館泊 [15 元]」

### 10月9日 泰山に行く

翌日は済南市から泰安市にある泰山にバスで 8 元払って乗る。「世界遺産の泰山に登るのは 60 元と高いのでやめて、山のふもとの天外村まで歩いて、名所の写真とダムだけ見て帰る」、河南省に入る

山東省の泰安市から河南省の省都鄭州市に向かってバスに乗る。128 元のバス代がかかる。このときのバスの状況を次のように書いている。

「ちょっと高めの立派なバスだったが、オーバーセールのようで、運転席近くの補助席に座る羽目になる。そのおかげで、茶や果物のサービスをもらえたり、美人のガイドさんと話せたから、良かった。途中の免費食堂も面白かった。路上で野宿」

### 10月10日 登封に行く

鄭州市から登封市へ向かう。バス代 14 元。「少林寺武術研究所で、訓練のため子供たちがムチでたたかれているのは、興味深かった」わざわざここを訪ねたのも、少林寺拳法を見るためだったのか。登封市から洛陽に行く、バス代 11 元。「市建招待所の 3 人間 (12 元) に泊まり、姜 (ジャン) さんと知り合った。彼の友達と 3 人で餃子を食べに行き、おごっ

でもらった上に、辞典までプレゼントしてくれた。謝謝（ありがとう）」

#### 10月11日 シルクロードに出発

「午前中、バスで龍門石窟へ。入場料は60元と高いけど、たまには観光したい。PM6:40 鉄道（硬座）で2泊3日の西域への長い旅が始まる。」

#### 10月12日・13日 シルクロードへ鉄道の旅

シルクロードに向かって昨日夕刻にウルムチ行きの列車に乗った。洛陽からウルムチまでの乗車料金は260元である。列車内様子は「列車に中で中島みゆきの「ひとり上手」や「鉄腕アトム」など、日本の歌の中国バージョンを聴いた。AM10:00に到着。10元の多人間宿に泊る」というように書かれている。2泊3日のような長旅に対し、このような痕跡しかないのは、半分はお疲れて寝ていたのかとも想像します。

#### 10月14日 天山観光

「天山天池へのツアー（140元）に参加。同乗の日本語の上手い中国人に、菓子と地図をもらった。山上には残雪があり寒かったが、残雪やたくさんの羊が見られた。」

#### 10月14日（続）トルハンに

「バスを降りたとたん『私は安岡力也』だというウイグル人に会った。確かにそっくりだった。野宿。」ここトルハンでは中国の旅で2度目の野宿をしたことになる。

#### 10月15日 トルハン見物

「町を散歩。古いモスク風の建物を、市場の裏で見た。TVで中国北方雪のニュース。ウルムチがあんなに寒かったのに、200kmも離れていない。ここトルハンが暖かいのは、海拔高度の違いだろうか？ 夜、涼皮（韓国の冷麺と似ている）を食べた。中心招待所（15元）に泊まる。」

#### 10月16日 哈密（ハミ）に

「バスのほうが鉄道よりは、ラクダを見たりしながら、シルクロードを通っているって感じがした。夕食はシシカバブとジャーファン（ピラフ）。虹橋招待所（15元）に泊まる。」

#### 10月17日 哈密から敦煌に

「観光地だけあって、英語や日本語の看板をいくつかみつけた。そこで、隋さんという日本語を話す現地ツアーオペレーターや、神戸から来たという日本人学生と、おしゃべりしながら茶を飲む。五環賓館のドミトリー（15元）泊。オーストラリア人とカナダ人と一緒の部屋」

#### 10月18日 敦煌から嘉峪関に

敦煌からバスで55.5元かけて嘉峪関に行く。嘉峪関に行ってもまた敦煌に戻る。西安に行くのにはこの嘉峪関から行くのが地図上では近い。ここ嘉峪関は万里の長城の最西端に位置し、有名などころである。「万里長城最西点。万佳招待所（10元）は、電気つかず」

#### 10月19日 嘉峪関から敦煌に戻る

「この町からバスの券を買おうとしたら、何か知らんけど、15日間有効とか言う保険に入らされ、乗車料金のほかに30元を取られた。後からこれは観光客狙いのボッタクリだと知

る。楽旅社（15 元）泊。ぬるいシャワーを使うのに、さらに 2 元」

#### 10 月 20 日 敦煌観光

「莫高窟と鳴沙山を観光。隋さんにまたお茶をご馳走になる。西域賓館（15 元）に泊まる」

#### 10 月 21 日 敦煌からゴルムドへ

「AM7:30 到着。天気は雪。サンダルはいて軽装の俺は明らかに場違い。寒いので、街を見て回ることにすままならない。やむなく PM10:00 発の夜行列車に乗る」ということになった。ここゴルムドは天空列車の始発駅で最近有名になったところである。

#### 10 月 22 日 ゴルムドから西寧へ

ゴルムドから青海省の省都西寧市に列車（46 元）に乗っていく。西寧市は人口 103 万人である。「(普客) の安い列車は湯が出ないことを知った。鐵路一局 招待所（8 元）泊」

陝西省西安に入る

#### 10 月 23 日・24 日 西寧から西安に

西寧市から西安市に向けて鉄道の旅（116 元）。水溜りが凍るほどの寒い朝。また夜行に乗る。環建委招待所（20 元）泊」

#### 10 月 25 日・26 日 西安から桂林へ

西安から鉄道にて桂林（189 元）に移動する。「この頃、列車の中で 1 泊して、翌日次の町へというのが、パターン化してきた。相席の黄さんたちと、おしゃべりし、菓子などをもらう。夜中、隣のブースのレイさんたちと、トランプ・ゲーム「五・八・玉」をして遊び、一緒に歌う。そんなこんなで、ほとんど眠れなかった。金光旅社（15 元）泊」

#### 10 月 27 日 陽朔観光

「バス 8 元（なぜか帰りは 7.5 元）で陽朔に行ってきた。桂林山水甲天下の漓江は、雨であいにくの天気。PM7:10, 初めて寝台の夜行バスに乗る。運悪く、ゆれで、夜中に何度も目が覚める。」

#### 10 月 28 日 桂林から広州市へ

「AM6:30 到着と同時にバスの陰で立小便をしていたら、近くのホテルの従業員に怒られる。謝っても許してもらえず、壁の「嚴禁小便罰金五十元」という注意書きを指し、50 元を払えという。「我不知道、不能払」（知らなかった、払えない）というと、ひざを蹴られた。何発か蹴った後、彼らは行ってしまったが、ムカついてきて追いかけ、50 元を彼らの手にとらせ、俺も蹴り返してしまい、とうとうけんかになる。彼らがホウキや棒を持ち出してきたところで、ホテルの支配人格の男が来て止めてくれた。服のいたるところがやぶけ、親指を捻挫した。」「珠海広場そばの華厦酒店 2F で、ヴィエトナム・ビザを申請（350 元）、3 日後受取」。体育大会開催中とかで、どこの宿も 100 元近くまで値を吊り上げており、久々に野宿。アベックと家族連れの多い公園で寝ていたら、夜中に警察に起こされた。その後は廃屋で寝る。」

#### 10 月 29 日・30 日 広州から珠海へ

広州から珠海へバス（50 元）の旅。「かなり豪華なバスに乗った。各席に水のペットボトル

あり。珠海の町を散歩。都会の割には、落ち着いてすっきりした印象。車站招待所（20 元）に2泊」

#### 10月31日 珠海から広州へ

珠海から広州へヴェトナムビザを受け取るためバス（35 元）で帰る。

「往路とは違う小さくて安めのバスを利用した。ヴェトナムビザ受領」

#### 10月31日（続き） 広州から深へ

珠海から広州に帰り、ヴェトナムビザを受領後深に鉄道（70 元）で行く。

「新空調 1 等軟座准高速」という。今まで最もデラックスな列車に乗った。香港に近いのでやっぱり発展している。中学の同級生〇〇に泊めてもらう。夕食は、彼の同僚の x x さんのおごり。」

#### 11月1日 西行きの夜行バス

「〇〇と朝食にカステラを食べお別れ、西行きの夜行バスに乗る」

#### 11月2日 深から南寧へ

深から南寧行きのバス（140 元）に乗る。南寧から凭祥へバス（15 元）で行く。

「ヴェトナムまでの直通の鉄道は値段も高いし、毎日あるわけではなく 5 日まで待たなくてはならないため中国ビザが足りないので、あきらめた。南祥招待所（10 元）泊」

#### 11月3日 凭祥で国境超えのため待機

「町を散歩。ヴェトナムのドンへの両替で少しもめる。同宿泊。」

#### 11月4日 凭祥からヴェトナム国境へ

凭祥から友誼関までワゴン車とオートバイを乗り継いで（4 元）国境を越える。

「ワゴン車（2 元）とオートバイ（2 元）を乗り継いで、友誼関（国境）へ。ノーヘルで乗るバイクタクシーの後部座席は、早くも東南アジアのにおい。再見中国！」

### ＝閑話休題「世界をヒッチハイクをして回る男の話」＝

ブログで「藤田健君の世界ヒッチハイク」というタイトルで連載している。この人には著者も興味を持っているので、少しずつお付き合いの度合いを深めている。普通の人とはどこかが違っている。面白く興味がある存在です。旅行メモには日常生活の困難さが書いていないのだが、どうでしたかという質問をしました。そうすると藤田健君から次のような答えが返ってきました。

「人間生きていくのに、水と食料があれば、本来、何とかなるのに、多くの人は、より快適な生活を求めるからこそ、より多くの費用や手間がかかるのですね。僕は、リュックサックひとつで、4 年近くもの間生活したので、寝るところ、食べること、トイレのこと、さまざまなことで多くの人たちに迷惑をかけ、また助けられてきました。申し訳なく、また感謝の気持ちでいっぱいです。」

このような返事でした。リュックひとつで世界を回る心構えが読み取れます。この「藤田健君の世界ヒッチハイク」は多くの人がやってみたいと思って読んでもらっています。で

もほとんどの人がやることは出来ません。それだからこそ、この記事に関心を持っていただいているのです。この次にはヴェトナムからカンボジア、タイ、バングラデシュ、インドへと展開していきます。

## 《ヴェトナム》

### 2002年11月4日 国境のドンダンからバスでハノイへ

「国境では、しきりに”motor bike?”と誘われたが、断って1時間弱歩く。町で、茶を誘われた。その中に中国人が1人いて、少し中国語で話し、バス停を教えてもらった。」(ハノイまでバス代約350円)「公園のベンチで野宿。夜中、娼婦っぽい女性に話しかけられるが、一言も分からない。寝袋暑く寝苦しい。」

### 11月5~6日 ハノイ滞在。

「カンボジア大使館でビザ即日交付 (US\$25)。Mua Roi Nuoc (水上人形劇) 鑑賞。白玉、あずき。ピーナツ、ココナツ、ぶどうなどのフルーツに、氷を入れた甘い che と呼ばれるデザートが、ものすごくおいしい。Anh Sinh (安心?)Hotel に2泊で、91.800ドン」

### 10月7日 ハノイから Chanh Hoa (チャンホアと日本語で言うのか?)

バスで行くベトナムドンで30.000を支払う。トンキン湾沿いの町。

「公園のベンチで野宿。ハノイよりは静かで安眠。」

### 11月8日 チャンホアからフェに向かう

バスで古都フェにベトナムドン50.000を支払って行く。「公園のベンチで野宿。朝方雨が降り屋根のあるところに。」

### 11月9日 フェ滞在

「早朝、ランニングしている71歳の地元のおじさんに話しかけられる。ほとんど言葉が通じないものの、一緒に体操をする。家まで招かれて家族とも話したので、泊めてくれるかなと思ったら、ホテルを紹介してくれるだけだった。Hoang Thanh Hue や Chua Linh Mu を観光。Duc Loi Hotel に50.000ドンで宿泊。水シャワーを浴びる。」

### 11月10日 フェよりダナンへ

バスで20.000ドンを支払う。「海のそばの建築中のアパートで眠る。」

### 11月11日 ダナンよりホイアンへ

バスで5.000ドン。「古い町並みは良かったけど、ちょっと観光地化されすぎの感じもした。安宿は満室で、US\$8以上のホテルしかなかったので、ホイアンに泊まらず、10kmほど歩いてヴィンディンへ。夜、街を歩いていると、Kagoさんたち家族に声をかけられ、茶とかヴィエトナム風麺「フォ」(フォは米の粉で作るうどん)をご馳走になる。その後、バスターミナルへ行くと、翌朝までバスはないといわれ、ベンチで眠ろうとしたら、バス会社の人ハンモックを貸してくれた。寝袋より涼しくて快適。現地人のやさしさに触れ

た夜・」

#### 11月12日 ビンディンからニャチャンへ

バスに乗り 100.000 ドンを支払って移動。「夜遅く着いたので、またその周辺で野宿しようとしたら、Thanh さんという人が「ここは危険だよ」ということを言って、彼のバイクに乗せてもらってフランス人経営のカフェまでつれてくれた。Cam on (ありがとう)。ヨーロッパからの酔っ払った太った女性が、泳いで服をなくしたとわめいていたので、俺のジャンパーを貸してやった。アジアの恩をヨーロッパに伝え、世界は平和になっていかないものだろうか……なんてことを考えながら。しばらくして、彼女のホテルまでジャンパーを返してもらいに行ったら、御礼に(?) 部屋に連れ込まれそうになったが、あいにく好みじゃないので丁重にお断りした。さてカフェに戻り、イスで仮眠している間に、ふと気が付くと、ポケットのチャックが開いており、中に入っていたトラベラーチェックがなくなっていた。盗まれた! ……と思ったら、ヴェトナム人女性が返しに来た。盗ろうとして現金じゃなかったのがっかりして返すのかと、怪しんだけど、本当に親切な女性だったかも知れない。いろいろあったが、そのカフェで夜を明かす。」

#### 11月13日 ニャチャン滞在。

「野宿が続いているので今日は宿に泊まる。O-shin Hotel (30.000 ドン) だった。ヴェトナムでもあの NHK 連続ドラマは大ヒット。」

#### 11月14~15日 ニャチャンからダラトへ

バスで移動 (35.000 ドン)。「山間の町で涼しく、教会がたくさんあってなんとなく高貴で、ヴェトナムらしくなく感じた。 自転車を借り、Thac Pongour (ポンゴールの滝) に行ってきた。“Thac “と「滝」、ヴェトナム語と日本語が似てて面白い。往復 100km、かなり疲れた。特に尻が痛い。ここで泊まった Hotel があたりで、広い部屋には茶があり、ポットに常にお湯を入れてくれ (中国と同じ)、TV 付きで、シャワーも温水。Hang Nga Hotel (2泊で 75.000 ドン)。」

#### 11月16日 ダラトからビエンホアへ

バスで移動 (40.000 ドン)。「街中の緑地で野宿しようとしたら、「ここはダメ」と言われ、商店の軒下を指示され、改めてそこで寝る。」

#### 11月17~18日 ビエンホアからホーチミンへ

バスで 6.000 ドンで移動。「1泊目、野宿。2泊目、ゲストハウスに泊まる (61.000 ドン)。」

#### 11月19日 ホーチミンからカンボジア国境の町 Go Dau へ

バスで移動 (バス代 12.000 ドン)「郊外のバスターミナル An Suong まで、1.000 ドン。そこから Go Dau までは 1 時間。10km 先の国境の町 Moc Bai へ歩いている途中の水田で、ヴェトナム人が良くかぶっているわら帽子を拾った。隅のほうにドブ臭かったので、川で洗ってかぶる。涼しくて軽くて、太陽をほぼ完全に遮ってくれて、暑い気候に最適のかぶりものだという事を初めて知った。 国境の両替人が、俺のおんぼろのワラ帽子を見て同情してくれたのか、それを捨て自分のをプレゼントしてくれた。Tam biet Viet Nam (さような

らヴェトナム)」

## 《カンボジア》

### 2002年11月19日 ヲトナム国境からカンボジア国境の町 Bavet へ（徒歩）

「Bavet International Guest House (18.000 Riel=約¥500)に泊まる。」

### 11月20~22日 Bavet からカンボジアの首都 Phnom Penh へ

「大きなバスはないようで、なぜか救急車が公共の交通手段。道はヴェトナムより数段悪く、車酔いした。メコン川には橋はなく、渡し舟 1 時間待ち。暑い。 前回の冬沖縄であった広島からの旅人と、偶然宿で再会。彼はタイから来てヴェトナムに向かうという。俺と反対のコース。情報交換。Capitol Guest House (R7.800) に3泊」

### 11月23~27日 Phnom Penh 滞在

「町を観光。宿をより安い Sada's Guest House (R6.000) に替え、たくさんの日本人、イギリス人、パキスタン人、韓国人旅行者と会う」

### 11月28日 Phnom Penh から Kampong Thom

「カンボジアでおそらく最もポピュラーな乗り物が、このピックアップだろう。車内に乗るより荷台のほうが安い。ただしデコボコ道で振り落とされる危険性は否めないし、トラックの縁の鉄の部分に長時間座るので、尻が痛くなる。たまに荷物の袋なんか積んであって、その上に座れるとラッキー！Kampong Cham で乗り換え、後半道悪し。宿の従業員と一緒に、夕食をただで食べさせてもらった。Penh Chet Guest House (R5.000) 泊。」

### 11月29日 Kampong Thom 観光滞在

「Sambor Prei Kuk の遺跡へ、バイクタクシー・(R12.000) で。入場料 R1.000. 寺は戦争でほとんど壊れていた。アンコールワットより古いらしい。宿に帰ると昨日の従業員の女性がまたおやつをくれて、マッサージして部屋で一緒に寝ようと誘われたが、なんとなく怪しげで断る。」

### 11月30日~12月2日 恵まれた滞在

「町を散歩して、民家で昼飯をご馳走になったり、宿では何かかにか食べさせてもらったり、恵まれた数日間だった。例の従業員の肩をもんでやり、洗濯を手伝った。」

### 11月3~4日 Kampong Thom から Siem Reap へピックアップで移動。(R8.000.)

「安宿を捜し歩いて、Millennium Villa の屋上の従業員の寝るところに、特別に R4.000 で泊めてもらうことになる。翌日は、腹痛でほとんど出かかず、休養。宿の人に、ご飯や薬をもらい、助けられる。蛙や蛇の焼き物を食べたのがわかったのだろうか？」

### 12月5日 工事で宿を移動

「屋上修復工事のため、俺の体調不良にもかかわらず、宿を追い出される。その代わりに、宿代2泊分はチャラにしてくれた。宿を移り、Takeo Guest House (R4.000) 泊。」

## 12月6～8日 観光滞在

「Kantha Bopa 病院で海外初献血してオリジナルTシャツをもらったり、Apsara ダンス(カンボジア伝統舞踊)を柵外から無料で見学したり、Aki-Ra 地雷博物館を訪れたり、ポン・ティア・コーン(アヒルの孵化寸前のゆで卵)を食べたり(腹を壊しているうちにゲテモノは食っとけという、無鉄砲ともいえる考え?)で過ごす。チェロコンサートで Prum 君と知り合った。日本に留学経験のある Prumm 君は、東京大学院卒で俺と同年。オートバイで西 Baray に連れて行ってくれたり、昼飯をおごってくれたり、Tシャツやクロマー(織布)を送ってくれて、さらに彼の自転車まで貸してくれた。アーコン(ありがとう)。日本に帰ったら、彼のお気に入りの製菓「アンメルツよこよこ」と、歯磨き粉{サンスター薬用メディカつぶ塩}を送ってやる約束をした。同宿泊。」

## 12月9日 アンコールワット観光

「昼間はいよいよ、世界遺産のアンコールワット観光。自転車で行ったのでタダ。夜は沖繩からの旅人と一緒に、Apsara ダンスをもう一度。いいものは何度見てもいい。」

## 12月10～14日 続いてアンコールワット観光

自転車で、トンレサップ湖畔のボート乗り場へ、水上集落見学に行った。その後、1日では到底見て回る事の出来ない巨大なアンコールの遺跡群 Banteay Kdei, Ta Prohm, Ta keo, Thmmanom, Prasat Kravan, Pre Rup, Ta som, Preah Khan, Bayonなどを巡り、Roluos 遺跡群を訪れた。監督は厳しくなく、タダで入場できるところも多い。なお、PM5:00過ぎは、公式に無料になる。夕方 Phnom Bakeng に登り夕日を見る。Prum 君から借りているタイ製の自転車のサドルが壊れ、修理(R3,900)。同宿泊。」

## 12月15日 Siem Reap から Sisophon へ

「ピックアップで集客中(満員とならないと出発しない)、別のピックアップに乗っている日本人旅行者と話したり、写真撮影したりして、時間をつぶす。Lyvan Guest House (R5,000)に泊まる。」

## 12月16～17日 Sisophon から Battambang へ移動。

ピックアップに乗って R3,000 支払う。

「Golden Parrot Guest House (R5,000)に2泊し、町を散歩。」

## 12月18日 Battambang から Sisophon へ

ピックアップに乗って移動。(R3,000)

「集客始めてから出発するまで1時間半くらいかかり、道も悪く疲れる。この最悪の乗り物とも、明日でお別れだと思えば、ホットする反面、少し寂しい(?!)。Lyvan Guest House (R5,000)に、また泊まる。」

## 12月19日 Sisophon から Poipet へ

ピックアップに乗っていく (R2,000)。

「タイ側の国境には賑わいがあり、カジノまであって、ヴェトナム側の国境とは明らかに違う様相。」

## 《藤田健君の世界ヒッチハイク》

2002年12月19日からカンボジアからタイに入り、ここでお正月を過ごした藤田君は2003年1月11日までタイで過ごした。2003年1月12日にインドへは空路で入国し、4月16日までインドに約3ヶ月間滞在した。その間インドを拠点にバングラデシュ、ネパールへと足を伸ばし、最後はパキスタンに立ち寄ることになる。インドについてはインドの地図を手に入れているので、カンボジアより少しは理解が進むと思います。藤田君は Kolkata から南部の海岸を回って、コモリン岬を回り、ゴアの付近から内部に入りアランガバード、ヴァラナシーからカルカッタへと回ってバングラデシュに入国します。

## 《インド》

**2003年1月12~13日 Kolkata** (West bengal 州) 「タイからの飛行機で着いたのは AM8:00 ちょっとすぎだったのに、市内バスはすごい混雑の上、共産党のデモに巻き込まれ、街中に行くのに昼過ぎまで掛かる。人口の多さを知る。道端の一人のインド人と知り合い、茶や飯をご馳走になった。でもその後、折り畳み傘と懐中電灯をせびってきたので、あげた。ちょっと怪しげ。 次の日、別のダージリン出身のインド人に声をかけられる。チャイをおごってもらい、トラム代も払ってもらって、一緒にヴィクトリアモニュメントを見に行く。やはり、ちょっと怪しげ。 Maria Hotel ドミトリー (70 ルピー=約 200 円) に 2 泊。」

**1月14~16日 Kolkata 滞在** 「昨日会ったダージリン出身のインド人と、ガンジス川の祭りを見物に行く。無料の昼飯カレー。いろいろ買わされそうになったので、夕食前に別れる。宿を替え、Salvation Army Guest House ドミトリー (Rs60) に 3 泊。」

**1月17~18日 Kolkata から Puri へ** 列車にて (料金 Rs119)、「列車の切符を買うのも初めてなので、カウンターをたらい回しされて一苦勞。その上腹具合が悪い。Passenger Train (鈍行) の 3 等はウワサ通りのすごい車内。人、人。ヒト……。 早朝に到着後、駅から歩いて浜へ出て、日の出を見た。その日から 5 日間くらい何かの祭りということで、大勢のインド人が、合唱したり、水浴びしていた。 Hotel Old Sagar Saikate 狭いシングル (Rs50) 泊。」

**1月19~20日 Puri 滞在。** ジャガンナト寺など観光。市場で相当くさいジュースを飲んで、いよいよ下痢が本格化。ベンガル湾に沈む夕日を眺め、波の音に耳をすませる。長期滞在大阪人のアミさんたちと restaurant シャムプーへ行き、タブラーなどインド音楽を楽しむ。同宿泊。」

**1月21日 Puri から Brahmapur へ** 電車で料金 RS58 **また Brahmapur から Gopalpel へ** バスで料金 Rs5、「夜、いつも通りの停電。これまでは宿にいたけど、今晚は町を歩いてい

で突然何も見えなくなったのでビビった。もちろん、地元の人には誰一人たじろぎもしない。星がメチャきれいだっただ。Hotel Rosalin シングル (Rs50) 泊。チャイのサービス付。」

**1月22日 Brahmapur から Srikakulam Road へ** 列車で料金 Rs48 「昨日と逆ルートでバスに乗り、駅へ行き列車に乗る。降車時、乗ってくる客で押されて、結局逆のドアから出た。子供は踏まれて泣いていたし、母親はサンダルを片方なくして困っていた。Sri Sai Durga Lodge ドミトリー (Rs18) 泊。」

**1月23~25日 Srikakulam Road から Vishakhapatnam へ** 列車で料金 Rs45、車両を間違えて乗ってベットがたまたまあいていたので、3等料金でA/C付きの寝台に乗ってしまった。さらに夜行に乗る。

**Vishakhapatnam から Vijayawada へ** 列車で料金 Rs50、南へ行きたいのに、北行きに乗ってしまい、Vizianagaram という途中の駅で降りて、特急に乗り換える。曇り空の朝の町を少し散歩して、また列車に乗り込む。」

**Vijayawada から Guntur へ** 列車で料金 Rs9、「バス (片道 Rs13) で Amravati へ行ってきた。川沿いの寺で真っ赤な衣装の僧侶を見たり、博物館 (入場料 Rs2) を見学したりした。Sri Gowri Shankar Lodge シングル (Rs45) に2泊。」

**1月26日 Guntur から Macherla へ** バスで料金 Rs48、「宿で働くセシヤさんに朝食にプリー (膨らんだ中が空洞のパン) をご馳走になった後、バスターミナルへ。さらにバス (Rs4) に乗り継ぎ Ethipothala の滝を見に行き、そこで M. A. クマール医師と知り合い、オートバイで街を観光して、夕食を頂き、泊めてもらった。とてもお世話になったのだが、その後もメールで寄付のお願いをしてくるので参った。」

**1月27日 Macherla から Nagarjuna Sagar へ** (バスで料金 Rs13) **Nagarjuna Sagar から Srisaillam へ** バスで料金 Rs64、「バスからダムを眺める。バスターミナルで野宿」

**1月28日 Srisaillam から Mahanadi へ** バスで料金 Rs63、「池のあるヒンズー寺院を見学 (入場料 Rs3)」 **Mahanadi から Nandyal へ** バスで料金 Rs7、National Lodge シングルに泊まる。(Rs40)」

**1月29日 Nandyal から Cuddapah へ** (バスで料金 Rs47) **Cuddapah から Tirupati へ** 列車で料金 Rs24、さすが南インド、車内はすいている。同席の人たちと歌ったり、楽しかった。野宿。」

**1月30日 Tirupati 滞在** 「Srigoyin Dara Jaswamy {2} Choultry という巡礼者用の無料宿泊施設に泊まった。要寝袋。洗濯するのにバケツを借りたら Rs5 のチップを取られた、保証金の Rs150 を返してもらうときにも、チップを要求されたので RS2 だけ払った。結果として Rs7 で泊まったことに。」

**1月31日 Tirupati から Chennai へ** 列車で料金 Rs27、「Hotel Tanil Nadu ドミトリー (Rs70) は、朝食付。」

**2月1~2日 Chennai から Mamallapuram へ** バスで料金 Rs22+5.5、「降りるところがわ

からず、乗り越してしまい、逆行のバスに乗って戻る。海あり、寺院あり、奇岩あり、彫刻家たちのカンコンたたく音が静かに聞こえる。雰囲気のある小さな村。D. Neelakadan Dhevak という宿は、主にヨーロッパからの旅行者で満室のため、ワラビキ屋根の下で寝させてもらい、半額 (Rs 25)、ここに2泊。」

**2月3日 Mamallapuram から Pondicherry へ** (バスで料金 RS30) **Pondicherry から Villupuram へ** バスで料金 Rs1、駅前で野宿、暑くてほとんど眠れず。」

**2月4日 Villupuram から Tiruchirapalli へ** 列車で料金 Rs30、列車がなぜか目的地前に停車。残りは仕方なくバスで (Rs4). Crescent GuestHouse シングル (Rs50) に泊まるには、パスポートのコピーが必要だった。

**2月5~6日 Tiruchirapalli から Madurai へ** 列車で料金 Rs28、また駅のホームで野宿。寝袋暑すぎ。頭痛、腹痛、首痛、ちょっとムリしすぎか。次の日は Sri Mi Naksi 寺を観光。中の彫刻はすばらしい。Sri Mi Naksi Lodge (RS50) 泊。」

**2月7日 Madurai から Rameswaram へ** 列車で料金 Rs28、列車が橋を渡るとき、車窓からの海がきれいだった。夜行バスで早々出発。

**2月8日 Rameswaram から Kanyakumari へ** バスで料金 Rs110、バスとトラックがすれ違うとき、積荷が窓に当たって割れた。ガラスの破片が席に飛び散ったが、乗客はそれほど動じていなかった。よくあることらしいのか……。インド南端のコモリンでは、ベンガル湾からの日の出と、アラビア海への日の入りの、両方を見た。Hotel Ganesh バスルーム付シングル (Rs70) 泊。」

**2月9日 Kanniyakumari から Nagercoil へ** (列車で料金 Rs7) **Nagercoil から Varkkallar へ** 列車で料金 Rs22、「絶景の海岸、切り立つ崖、そこから滴り落ちるおいしいミネラル水、そして美しい夕日、言うことのなしの町。K. K. House シングル (Rs40) 泊。」

**2月10~11日 Varkkallar 滞在** 「3泊4日の休養も、あまり体調は良くなかった。宿の人の芋料理で胃を癒す。同宿泊。」

**2月12日 Varkkallar から Kottayam へ** 列車で料金 Rs23 「Kandatir Tourist House シングル (Rs75) に1泊。」

**2月13日 Kottayam 滞在** 「駅で夜を明かす。」

**2月14~15日 Kottayam から Ernakulam へ** (列車で料金 (Rs14) **Ernakulam から Kannur へ** 列車で料金 Rs2、2本目の列車、乗り過ぎでしまったついでに、終点まで”きせる”しちゃった。すいません……。Hotel Abrash (Rs80) に泊まる。」

**2月16日 Kannur から Mangalore へ** 列車で RS48、「やや体調回復。Nirmar Lodge シングル (Rs65) に泊まる。」

**2月17~19日 Mangalore から Mysore へ** バスで Rs100、「夜行の急行バスに乗る。Mysore 到着後は、宮殿を観光し、National Lodge (Rs50) に2泊。」

**2月20日 Mysore から Bangalore へ** 列車で Rs25、「Sri Rajeshwari Guest House ドミトリー (Rs50) 泊」

**2月21日 Bangalore 滞在** 「Bangalore City 駅からは北方面へ Express Train しかないということで、北へ7km離れた Yeshwanthpura 駅へバス (Rs4) で移動。大都市は、こういうのがややこしい。V.K. Lodge ドミトリー (Rs60) に泊まる。」

**2月22日 Bangalore から Basampalli へ (列車で Rs35) Basampalli から Puttaparti へ** バスで Rs11、「夕方寺院礼拝。厳しい荷物検査。遠めに小さくサイババを見た。Passport サイズの写真1枚提出して敷地内の宿泊施設 Ashran ドミトリー (Rs20) 泊。関西の旅行者にシーツをもらう。」

**2月23日 Puttaparti から Dharmavaram へ (バスで Rs18) Dharmavaram から Guntakal へ** 列車で Rs26、「Hari Prasad Lodge 屋上 open プレース (Rs10) 泊。」

**2月24日 Guntakal から Bellary へ** 列車で Rs12、「町の人にジュースをおごってもらった。Bellary Lodge ドミトリー (Rs40) 泊。」

**2月25日 Bellary から Hospet へ** 列車で Rs15、「Sri Hampa Lodge シングルに (Rs50) に泊まる。」

**2月26~27日 Hospet から Hampi へ** バスで Rs5、「足の悪い Raju 君の経営する自転車屋の向かいの空き地に、蚊帳を張ったベッドを用意してもらい、1泊 Rs20 で泊まる。夜は牛と鶏と犬と猫が挨拶にやってくる。川で水浴び、屋内の fun よりも夜風は快適。岩山の一角で、別の日本人旅行者がまきをたいて雑炊を作っていて、一緒にいただいた。寺では、イスラエル人旅行者とおしゃべりして、湖を見に行っただ。」

**2月28日 Hampi から Hospet へ (バスで Rs5) Hospet から Hubli へ** 列車で Rs26、「Raju 君に最後のチャイを頂き、Karnataka 州で一番印象に残った町を去る。野宿。」

**3月1日 Hubli から Dharwad へ** 列車で Rs8、「夕方、久々の雨のため野宿は難しく、Gurpulkash Lodge シングル (Rs70) 泊。湯使用可。」

**3月2日 Dharwad から Panaji へ** バスで Rs64、「南西インドの小さな Goa 州にやって来た。野宿。」

**3月3-4日 Panaji から Mapusa 経由 Anjuna へ** バスで Rs10、「体調悪く、宿でよく眠る。夕方、パーティーを見学。Joe House 小屋丸ごと (Rs50) 泊。」

**3月5日 Anjuna から Mapusa 経由 Thivim へ (バスで Rs10) 更に Thivim から Sindhudurg へ** 列車で Rs35、「駅のトイレで吐いて下痢。構内で夜を明かす。」

**3月6日 Sindhudurg から Ratnagiri へ**  
列車で Rs27、「市街地までバスで (Rs6)。Dattatrey Lodge ドミトリー (Rs50) 泊。」

**3月7-8日 Ratnagiri から Ganapatipule 経由 Ratnagiri へ**  
バスで Rs47 [ ビーチで野宿して、翌朝早朝バスで戻り、列車に乗る。]

**Ratnagiri から Roha へ** 列車で Rs35、野宿。

**3月9-10日 Roha から Pune へ (バスで Rs75) Pune から Manmad へ** 列車で Rs46、「夜行で到着後、Sarika Lodge ツイン (Rs75) 泊。毛布がかゆくて寝心地悪し。」

**3月11-15日 Manmad から Aurangabad へ** 列車で Rs22、「炎天下の特急列車通過待ちは、かなりツライ。Ambika Lodge ツイン(Rs50)泊に1泊目。サンダル買う。もっと安い宿 Bajirang Lodge ドミトリー(Rs25)に移り、連泊する。」

3月16日 **Aurangabad から Ellora を見て Aurangabad へ**「暑くて喉がカラカラ。でも世界遺産に登録される洞窟群はやはりすごい。同宿泊。」

**3月17-18日 Aurangabad から Jalgaon へ** バスとジープ Rs81、「当初 Ajanta 洞窟へ行こうとしたけど、安宿ないし、昨日たくさん歩いて足が疲れているので、あきらめて Jalgaon まで来てしまった。Apuna Lodge ドミトリー(Rs40)泊。翌日は、ホリ祭で、食堂がほとんど閉まっていた困った。赤や青の水を顔中にぬりまくられた。その日は、夜行にて町を出発。」

**3月19日 Jalgaon > Khandwa** (列車で Rs26) **Khandwa > Indore** 列車で Rs25、「久々ものすごい混雑。インドの南と北の人口の違いを思い知った。腹の調子も悪い。 Siusakti Lodge シングル(Rs40)泊。」

**3月20日 Indore > Ujjain** (列車で Rs14)

**3月21-22日 Ujjain > Bhopal** (列車で Rs30) **Bhopal > Jhansi** 列車で Rs43、「Anand Lodge シャワー&トイレ付トリプル(Rs40)泊。」

**3月23日 Jhansi > Mahoba** 列車で Rs25 「Shibom Lodge シングル(Rs40)泊。」

**3月24日 Mahoba > Khajuraho** (バスで Rs30)「主に eastern group の寺院を見学。Hotel Lake Side ツイン(Rs20)泊。」

**3月25日 Khajuraho > Satna** (バスで Rs55)「ケン川美しい。Vindhya Lodge 白黒TVのあるドミトリー(Rs40)に泊まる。」

**3月26日 Satna > Varanasi** (列車で Rs83)「特急で着いたのが PM10:00 過ぎだったので、そのまま駅で仮眠。インド人同士、金を盗まれたとか何とかで、殴り合いのけんかをしていた。」

**3月27日-4月2日 Varanasi 滞在** 「遠藤周作の小説[深い河 (ディープ・リバー)]にも書かれた、有名な日本人安宿[久美子の家]のドミトリーに泊まる (Rs30)。火葬、祭り、舞踏を見て、ガンジス川の聖地を満喫。

**4月3日 Varanasi > Chandauli** (バスで Rs18) **Chandauli > Gaya** (列車で Rs31)「この列車、ものすごい混雑で、はじめはヤッターマンのように棒につかまっていないと車両から落ちそうだった。Hotel Muskan ドミトリー(Rs50)泊。」

**4月4日 Gaya > Bodh-Gaya** (バスで Rs6)「朝食にタリ(おかわり自由の定食で Rs10 はお得!)。Rainbow Guest House (Rs20)泊。」

**4月5-8日 Bodh-Gaya 滞在** 「ブッダの聖地だが、俺は悟りの代わりにカゼをこうむった。チベット料理のモモ(餃子)やトウクパ(ラーメン)を食べまくって、インドのスパイスに疲れた胃を癒す。宿がガラガラなので、他の旅行者に宣伝してくれと、ネックレス

をプレゼントされた。同宿泊。」

**4月9-10日 Bodh-Gaya > Gaya** (バスで Rs6) **Gaya > Asansol** (列車で Rs39)

**Asansol > Kolkata** (列車で Rs34) 「約3ヶ月振りに戻ってきた。Salvation Army Guest House ドミトリー(Rs60)泊。」

**4月11-15日 Kolkata 滞在** 「クリシュナの祭があって、無料のおじや(?)とジュースをもらい、寺でタブラーやシンバルによる熱狂のダンスを鑑賞することができた。Bangladesh visa も取得。同宿泊。」

**4月16日 Kolkata > Bangaon** (列車で Rs17)

「朝駅へ向かう途中、サンダルがぶっ壊れたので、新シューズ買った。Bangladeshへ」

### 《藤田健君の世界ヒッチハイク》

ヒンズー教の国インドからイスラムの国Bangladeshに入る。藤田君のメモからその両国の雰囲気伝わってくる。アジアでも最貧国といわれるBangladeshがこんなに心暖かい国であったとは驚きである。皆さんもその一部始終をとくにご覧あれ。為替レートは文中にあるごとく、70Tkが150円とあるので1Tkが2円強であることが分かる。

### 《Bangladesh》

**2003年4月16日 Benapole 徒歩入国。** 「徒歩にて入国。久しぶりにイスラムの国への旅行で、いつものように早速たくさんの方が温かく迎えてくれて、チャー(茶)やサモサ(揚げ物)やキャンディーをもらう。Hotel Rajaniganda (70Taka=約¥150)に泊まる。」

**4月17日 Benapole > Khulna** (列車で移動。珍しく料金の記載がない) 「町で声をかけてくれた Zelakon さんが、パラタ(南インド風薄パン)とオムレツとチャーを御馳走してくれた。その後、文房具店でノートももらった。Fanが壊れていたり、トイレがなかったりする点では、インドの列車と一緒にだが、窓に鉄柵がなくて、そんなに混まないのが、緑豊かな景色を存分に楽しめるのが、相違点だろうか。Hotel Sunday International (Tk50)泊。」

**4月18-19日 Khulna 滞在。** 「自然が美しいといわれる Mongla へ行こうと、Rupshaのバス terminal へ渡るフェリーに乗り、財布をなくした。気づいたときには、ジャケットのチャックが開いており、財布が消えていた。閉め忘れて川に落としてしまったのか、誰かが開けて盗っていったのか定かではない。日本円にして¥7-8万くらいは入っていたはず。Citi Bank カードや運転免許証が入っていたのも痛い。警察に行くと Tk500 貸してくれた。翌日、Travellers Cheques を現金に替え、金を返しに行くと、警察は一度は断り、遠慮がちに受け取った。同宿泊。」

**4月20日 Khulna > Barisal** (バスで移動 Tk90) 「今日も、オレンジジュース、アイスキャ

ンディー、やしの実、ビスケット、チャーといろいろ御馳走になり、昨日の財布の紛失を癒される。夕方かなり強い雨。Hotel Nasif (Tk40)泊」。

**4月21-22日 Barisal > Kuakata** (バスで移動 Tk80)「きれいな砂浜に沈みゆく太陽を拝みたいと2日間滞在してみたが、結局曇っていて夕陽は見られなかったものの、縞模様の美しいビーチや村の景色は良かった。Hotel Shoikat Village (Tk30)に2連泊。」

**4月23-24日 Kuakata > Barisal** (バスで Tk90) 往路より Tk10 高いので、急行なのか、細々と停まらないような気がしたが、それでも大きな川を6本渡るには、相変わらず時間がかかった。この国にはまだまだ橋の建設が必要だ。夜出発の旅客船に乗る。

**Barisal > Chandpur** (船。料金なし) 深夜に大混雑のフェリーの3等で到着した客のほとんどは、駅から列車で Chittagong を目指すようで、俺もそれになった。

**Chandpur > Chittagong** (列車で料金なし)「Hotel Al-Salamat (Tk70)に泊まる。」

**4月25-26日 Chittagong > Dhaka** (列車で料金なし)「席をちょっと尋ねただけで、警察からチップを要求された。Khulna の親切で善良な警察とはエライ違いだ。列車の中で乗客からネックレスをもらった。Hotel Sarma (Tk100)泊。」

**4月27日 Dhaka > Sylhet** (列車で Tk150)「列車内で知り合った学生の共同アパートみたいなところに泊めてもらった。駅からのリキシャー代も払ってもらって、beef カレー、ダール(豆)、卵パラタ、果物、ビスケット、チャーに至るまで、完全にお世話になった。ダンニャバッド(ありがとう)！」

**4月28-29日 Sylhet 滞在。**「学生たちと一緒に、茶畑を見に行った。静岡のとは似て非なるもので、面白かった。大学教授の家に訪問してイスラム教の話も聞いた。引き続き彼らのアパートに泊めてもらい、おしゃべりをして、chicken カレー、卵カレー、ドゥイ(ベンガリ風プリン、激旨!!!)などたくさん御馳走になる。」

**4月30日 Sylhet > Tamabil > Sylhet** (バスで Tk0)「インドへ行こうと、北の国境へ。学生たちにバス代払ってもらってしまった。しかし、俺は Road Permission を持っていないことを理由に、越境が許可されず、戻るハメに……。帰り道、学生のうちのひとりの知人の経営するレストランに寄り、美味しい食事でもてなしてもらって、湖や採掘場、そして田園風景を楽しんだ。Sylhet に戻り、友人宅を訪問してチャーを頂き、そこで今回の旅の終わりまで使うことになった世界地図(日本到着時ボロボロ)をもらった。もう1泊、学生宅に。」

**5月1日 Sylhet > Dhaka** (列車で Tk150)「今日もまた、チャーやチャナチュル(玉ねぎやトマトなどの野菜を小さく刻んで豆と一緒に辛いソースで混ぜ合わせたつまみ、これがかなり旨い!)をおごってもらおう。Hotel Beani Bajar (Tk100)泊。」

**5月2日 Dhaka 滞在。**「町を歩いていて、ひどいスクールにやられた。熱帯雨林!狭い部屋の宿に替える(Tk70)。」

**5月3日 Dhaka > Jessor** (バスで Tk150)「朝 passport オフィスへ行って、Road Permission をもらおうと try。しかし、北方の国境が閉まっている(俺は3日前、現に開いているのを

見たのに・・・)だの、インド大使館へ行けだの・・・情報が氾濫しているので、あきらめて Benapole を目指す。 Hotel Probal (Tk50)に泊まる。」

**5月4日 Jessor > Benapole** (列車で Tk15)「最後の緑豊かな車窓の風景を楽しんだ。結局この国で1回もチャーターを自分で払わなかったという世話になりよう……。国境では visa や Road Permission など一切問題なしで通過できた。小耳にはさんだ Road Tax というのも払わなくて済んだ。コダ・ハフーズ(さよなら)!インドへ戻る。」

## バングラデシュの旅について

4月16日より5月4日まで約20日間にわたるバングラデシュへの旅であった。地図の上ではこの国はインドのひとつの州ほどのものである。しかし藤田君にとっては今まで訪ねたアジアの国の中でも、一番親切に歓待してくれた国のようです。これはどうしてなのでしょうかね。イスラムの世界が持つ雰囲気のように藤田君は表現しているのだが、面白い発見ですね。貧しいといわれている国がとても親切であるということは、豊かになれば失われる何かがあるということではないでしょうか。厳しい競争にさらされると余裕がなくなるのでしょうかね、考えさせられる出来事でした。

## 《ネパール》

**2003年5月13日 Kakarbhitta > Dharan** (バス) 100NepalRupees (約¥160)「国境で、US\$30と写真1枚提出して、2ヶ月 visa 取得して入国。バスや宿にまで警察のチェックがあり厳しかった。Kisina Lodge シングル(Rs100)泊。」

**5月14日 Dharan > Pathlaya** [バス] Rs250「バスの Fan ベルトが切れて若干遅れる。降車と同時にひどい雨にやられて、夕方まで雨宿り。Deep Lodge シングル(Rs80)に泊まる。」

**5月15日 Pathlaya > Kathmandu** [バス] Rs80「またもや降車時は雨。この季節のこの時間は、いつもスコールなのか?同じ部屋に泊まっているベルギー人と日本人旅行者と一緒に、ちょっと高めのレストランで食事。Hotel California ドミトリー(Rs75)泊。」

**5月16-20日 Kathmandu 滞在**「パキスタン大使館で visa(90日有効、無料、写真2枚とパスポートのコピー必要)取得したり、Durbar 広場をはじめ、Swayambhunath 寺や Pashupatinath 寺や Bodhnath ストウパ(半球状の仏教建造物)、それに Patan を観光したりして過ごす。同室のベルギー人が、street チルドレンに飯をおごってやっていた。トレッキングを終えたばかりのドイツ人に、ハーブ tea を作ってもらう。」

**5月21-24日 Kathmandu > Pokhara** [バス] Rs126「この時期は曇りがちで、ヒマラヤ山脈を眺めるのは難しい。それでも夕方、雲の切れ間にチラッと白い頂きが見え隠れする。」

Devi Fall(入場料 Rs10)観光。Tashiling チベット村でバター味のチベット風 tea を御馳走になる。この味は、日本人にとって、ゲテモノに近い飲み難さ。

その翌日には、日帰り登山。Sarangkot へ登り、湖や段々畑を見下ろす。午前中は曇りで山の景色はイマイチ。皮肉にも、降りた後、夕方から、昨日よりさらにハッキリと山脈が見えた。夜、Hungry Eye Restaurant のネパール舞踊を、外から見学(中で見ると、高級料理注文しなきゃならないからね)。Hotel Surya ツイン(Rs40)に4泊。」

**5月25日 Pokhara > Bhairawa** [バス] Rs200 「途中、反政府デモだか何だかで、1時間ほど待たされる。宿の部屋は、牛に眼を突かれて重症を負ったネパール人と一緒。病院代をカンパしてくれと言われるが、断る。Golkah Lodge ドミトリー(Rs35)泊。」

**5月26日 Bhairawa > Lumbini > Bhairawa** [バス] Rs40 「ブッダ生誕の地には、建築中の寺が多かった。同宿泊。」

**5月28-29日 Nepalgunj > Dhangadhi** [バス] Rs200 「途中、強風のせいか、横転しているバスを見かける。同宿のネパール人教師と話す機会があった。日本仏教の霊友会に所属していて、結婚反対主義。ネパール人としては珍しい存在といえよう。アメリカを嫌い、妹はインド人と結婚しているそうだ。蚊も少なく快適な、Mahasholi Lodge ドミトリー(Rs25)に2泊。」

**5月30日 インド国境** 「朝まだ涼しいうちに、徒歩にて国境まで。かなり小規模な国境の村。Dhangadhi 出入国管理官によると、ここを通った外国人旅行者は、ここ1ヶ月の間、俺1人だけとのこと。」

**5月27日 Bhairawa > Butwal** [バス] Rs20 「運賃の支払に、お釣りが IndiaRupees で返ってきた。ネパール国内、特に国境付近では、インドの貨幣が普通に流通している。

**Butwal > Nepalgunj** [バス] Rs175 Bagoshagory Lodge シングル(Rs80)泊。」

## 《パキスタン》

**2003年7月2日 Wagah > Lahore** [バス] PakistanRupees12 (約¥25) 「インドの Atari 駅から徒歩1時間弱、国境に到着。夕方には国境閉鎖に際して、政治上仲の良くない、インド人とパキスタン人が互いに罵り合う、面白い儀式があるそうだが、暑いので待ちきれず、バスに乗ってしまう。Regale Internet Inn ドミトリー(Rs125)に泊まる。」

**7月3-4日 Lahore** 「昼はBadshahi モスクやLahore 城砦などを観光し、夜は熱狂的な太鼓で有名な Sufi ダンスを見学に行った。パキスタン風のビリヤードもやった。同宿泊。」

**7月5日 Lahore > Jhelum** (鉄道 Rs60) **Jhelum > Pind Dadan Khan** [ミニバス] Rs45  
**Pind Dadan Khan > Khewra** [大型トラクター] Rs0 「最後の6kmは歩こうとしたら、トラクターに拾われて、Salt Mine まで連れてってもらった。入場料が、パキスタン人 Rs30 に対し、外国人 US\$6 なので、中には入らなかった。その後、町の人々にコーラやらアイスクリームやらおごってもらった挙句、Masood の家に泊めてもらうことになった。夜、偶然

開かれた結婚式のパーティーに参加させてもらい、肉やチャパティ(薄パン)を御馳走になるという、貴重な体験。イスラム教徒は足の露出する短パンを極端に嫌い、長ズボンにはきかえるよういわれた。」

**7月6日 Khewra > Rawal Pindi** [ミニバス] Rs70 「Jee Lala Hotel ツイン(Rs100)泊。」

**7月7日 Rawal Pindi 滞在** 「鉄道で出発しようと思っていたが、医者であり詩人でもある青年と駅で出会い、泊めてもらった。彼はHasnatといい、医者にもかかわらず風邪をひいていた。無論医者が必ずしも風邪にかかりにくいとは限らないのだが…。彼の弟2人が朝食を作ってくれ、すっかり迷惑をかけてしまった。」

**7月8日 Rawal Pindi > Peshawar** [鉄道] Rs35 「宿で知り合った弁護士のNaimatがオートバイに乗せてくれて(パキスタンならではの3人乗り?!)、Ismaia 大学や Smugglers バザールを見せて回ってくれた。New Meheran Hotel シングル(Rs80)泊。」

**7月9日 Peshawar 滞在** 「今日もNaimatにチャイ(茶)やら chicken カレーやら mango ジュース(超甘くて新鮮!)やら御馳走になった。同宿泊。」

**7月10日 Peshawar > Mingora** [ミニバス] Rs80 「Kiyomi(古い日本人の彼女の名?)という internet カフェの主人のFarmanは、埼玉で8年働いていたという人で、日本語が話せて、泊めてくれていろいろもてなしてくれた。」

**7月11日 Mingora > Kalam** [ミニバス] Rs60 「パキスタン北部独特の美しい山河を眺めながら歩いていると、村人にチャイを御馳走になり、Gorkin という村にまたもや泊めてもらってしまった。この辺では、民間人が銃を持っているのが普通(?)なので、銃を手を持たせてもらって記念撮影した。」

**7月12日 Kalam > Madyan** [パトカー] Rs0 「Swat Valley のプチ観光を終え、南へ向かって歩いていると、優しい警察が乗せてくれた。」

**Madyan > Mingora** [ミニバス] Rs20 「再びこの町に帰ってきて、またFarmanに泊めてもらう。」

**7月13日 Mingora 滞在** 「Saidu Sharif の町を散歩したり、子供とサッカーしたりして遊ぶ。床屋で散髪して代金をFarmanに払ってもらった。彼には本当に世話になった。同家泊。この夜、しつこく飛び交うハエに悩まされ、ほとんど眠れなかった。」

**7月14日 Mingora > Timargarha** [ミニバス] Rs35 「昨夜のハエのせいで眠くて仕方がなく、野原で寝てたら、警察署に連れて行かれてなんと、仮眠させてもらった。仮眠した後、広場へ出ると、木に手をロープで縛られた囚人がいた。警官から「おまえもたたくか？」と棒を渡されたが、恐ろしくて断った。」

**Timargarha > Dir** [ミニバス] Rs35 「Kumrat Hotel ドミトリー(Rs10)に泊まる。」

**7月15日 Dir > Chitral** [ジープ] Rs150 「途中、標高3,118mのLowari Pass 越えは、道が悪い分、素晴らしい景色を楽しめた。Golden Hotel 外のベッド(Rs20)泊。涼しくて蚊はいない。」

**7月16日 Chitral 滞在** 「イスラム教の礼拝用のゴザ(Rs50)購入。美しいモスクが描かれ

ていて、野宿で寝るときにもいいかなと思ったのだが、これが後日チュニジアで厄介の種になるとは思いもしなかった。屋台でマントゥー(餃子の柔らかいやつ、1ヶ Rs1)を食べる。同宿泊。」

**7月17日 Chitral > Buni** [ミニバス] Rs35 **Buni > Mastuj** [ジープ] ヒッチハイク

**Mastuj > Pundar** [ジープ] Rs150 「2台目のジープで言葉の違いから生じるトラブルがあった。俺は Rs100 と思っていたけど、運転手は Rs1,000 だと思っていたのだ。結局 Rs150 で示談。料金交渉はしっかりせねばと、改めて自戒。野宿。少し寒い。流れ星たくさん見た。」

**7月18日 Pundar > Shamaran** [ミニバス] ヒッチ 「その後、2時間ほど歩いて疲れて、道路工事のテント小屋で休憩させてもらう。」

**Shamaran > Gupis** [トラクター] ヒッチ 「遅くて乗り心地も悪いが、チャイおごってもらったし、何しろ山々が美しかった。」

**Gupis > Gakuch** [トラック] ヒッチ **Gakuch > Gilgit** [ジープ] ヒッチ 「Garden Hotel トリプル(Rs50)に泊まる。」

**7月19日 Gilgit 滞在** 「標高 3000mを超える峠越えのヒッチハイクで疲れが出たのか、川の水飲んだのがマズかったのか…頭痛&腹痛で1日中寝込む。何も食べれず。同宿泊。」

**7月20日 Gilgit 滞在** 「トリプル bed を1人で独占して使っているの、長居するなら部屋代を倍に値上げするといわれ、フラフラになりながら別の安宿を探す。具合が悪くてもセコい貧乏根性だけは失わない自分に、やや嫌気がさす。

高所特有の真昼の強い日差しは容赦なく照りつける。Aman という土産屋のおじさんに、荷物持ちと宿探しを手伝ってもらわなかったら、どうなっていたことか…。 Golden Peak Hotel ドミトリー(Rs50)泊。」

**7月21-22日 Gilgit 滞在** 「3日振りに食べ物を口にする。下痢は止まらないものの、頭はスッキリしてきた。大口団体が入ったため、よりランクの低いドミトリーに移され、従業員と一緒に寝る(Rs40)。」

**7月23日 Gilgit > Danyor** [車3台] ヒッチ 「地元の学生に、昼食を御馳走になる。全快!」

**Danyor > Aliabad** [ミニバス] Rs50

**Aliabad > Karimabad** [オートバイ] ヒッチ 「Koushousan Guest House ドミトリー(Rs30)泊。」

**7月24-26日 Karimabad 滞在** 「Lahore でも会ったイギリス人 Suzie と韓国人旅行者と3人で Ultar 牧場へハイキングして氷河や滝を見たり、日本人学生と Altit 村へ登って谷全景を見たりして過ごす。日本のアニメ「風の谷のナウシカ」の舞台となったといわれる山間の観光地を満喫する。同宿泊。」

**7月27日 Karimabad > Gulmit** [ジープ] ヒッチ 「Suzie と一緒にヒッチハイク試みるが、2台目は代金請求された。」

**Gulmit > Pasu** [ミニバス] Rs25 「くしくも映画「インディーズ・ジョーンズ」の撮影

現場ともいわれる吊り橋で、崖から落ちそうになって、指を切る。山歩きに、油断は禁物！  
Batura Inn ドミトリー (Rs40) に泊まる。」

**7月28日 Pasu 滞在** 「Suzie と一緒に氷河を見に、トレッキング。小石が降ってきて結構危ないところもあり、かつて観光客が死んでることもあり、深入りせずに引き返す。

夜、2人とも地元の人のお家に招かれて夕食。取れたてアプリコットも。同宿泊。」

**7月29日 Pasu > Gulmit** [車1台短いヒッチの他は徒歩] 「朝 Suzie は中国方面行きのヒッチに成功してお別れ。一方、俺の南へのヒッチはあまりうまくいかず、午前中ずっと歩くハメに。景色と空気は最高。」

**Gulmit > Aliabad** [ミニバス] Rs25 「New Mountain Refuge Hotel ドミトリー (Rs40) 泊。」

**7月30日 Aliabad > Ghulmet** [車2台短いヒッチの他は徒歩トホホ]

「今日もヒッチはうまくいかず、たくさん歩く。陽射し強し。秀峰 Rakaposhi 岳のよく見える Zero Point でチャイを飲み一息ついたところで、ジープに乗ることにする。」

**Ghulmet > Gilgit** [ジープ] Rs15 「Horizon Guest House 従業員部屋 (Rs40) に泊めてもらう。」

**7月31日 Gilgit 滞在** 「街から 10km 離れたところにある、美しい岩の彫版 Kargah Buddha 観光。同宿泊。」

**8月1日 Gilgit > Komila** [ミニバス] Rs220 「明日でパキスタン滞在1ヶ月になるので、念のため外国人登録をしておく。写真2枚とパスポートの最初のページ&visaのコピー必要。Jalja Hotel ツイン (Rs50) に泊まる。」

**8月2日 Komila > Besham** [ミニバス Rs60] **Besham > Mansehra** [ミニバス Rs75] Taj Mahal Hotel シングル (Rs50) 泊。

**8月3日 Mansehra 滞在**

「町を散歩していると、ジュースやアイスクリームやピラフなどいろいろ御馳走になった。屋台での内臓の煮込み (Rs5) はなかなかイケた。」

**8月4日 Mansehra > Abbottabad** [ミニバス Rs11] **Abbottabad > Rawal Pindi** [ミニバス Rs55] 「Al Azam Hotel 窓なしシングル (Rs100) に泊まる。」

**8月5-6日 Rawal Pindi 滞在** 「Raja バザールや、近郊の Taxila 遺跡と博物館を見学し、ガンダーラ美術に触れる。おそらくイスラム教徒と思われる男性が、ブッダの頭像を作っているのは珍風景。同宿泊。」

**8月7-9日 Rawal Pindi > Lahore** [鉄道 Rs60] 「パキスタンの列車は、ただ単に観光客というだけで、Tourist 割引があるので嬉しい。もっとも、受け付けてくれない駅もあるし、発行までの手続きがかなり面倒くさいが・・・。Lahore では、PTDC (パキスタン観光開発公社) と鉄道局へ出向かなくてはならない。係員の仕事は概して遅い。同室の韓国人と一緒に食事。 Rawal Pindi Popular Inn ドミトリー (Rs100) に3泊。」

**8月10日 Lahore > Bahawalpur** [鉄道 Rs70] 「Tourist 割引は本来25%のハズなのに、

Rawal Pindi に続いて、ここ Lahore 駅でも 50%引いてくれた。ラッキー!着いたとたん、親切な兄ちゃんがオートバイに乗せて安宿まで連れてって来て、ポップコーンまでくれた。Imran Hotel シングル(Rs80)泊。」

**8月11-12日 Bahawalpur 滞在** 「1日目は街を散歩して博物館と図書館へ行ってきた。2日目は郊外の青と白のタイルが美しい Uch Shalif を訪れ、炎天下を歩き回った。同宿泊。」

**8月13-14日 Bahawalpur 滞在** 「昨日歩きすぎたせいか、食べ物のせいか・・・頭痛、腹痛、下痢、吐き気で丸2日ほとんど何も食べられず、宿で休養。従業員がいろいろ世話してくれた。」

**8月15日 Bahawalpur > Rohri** [鉄道 Rs100] 「軽い頭痛は残っているものの、出発することにした。明朝まで乗り継ぐ列車がないので、プラットホームで寝そべっていたら、駅の係員がトイレ&シャワー付きの waiting room を用意してくれた。シュクリア (ありがとう) !」

**8月16日 Rohri > Larkana** [鉄道] 昨日の切符引き続き有効 「Chein Hotel ツイン(Rs50)に泊まる。」

**8月17日 Larkana > Mohenjodaro > Larkana** [バス Rs20] 「インダス川沿いのモヘンジョダロ遺跡を見てきた。灼熱。何人かの地元民に危険な町と警告を受けたが、変な男が部屋を覗き込んできたほかは、みんな良い人だった。同宿泊。」

**8月18日 Larkana 滞在** 「床屋や自転車屋でチャイやサモサ(ひき肉入り揚げ物)を御馳走になる。今晚の夜行に乗るはずだったが、エンジン故障で7時間遅れ。ホームで少し仮眠。」

**8月19日 Larkana > Quetta** [鉄道 Rs70] 「熱帯から砂漠そして岩山へという、雄大な景色と気候帯の変化を楽しめるのは、Bolan Pass ならではのもの。吹き抜ける風が涼しい。Muslim Hotel シングル(Rs80)泊。」

**8月20-25日 Quetta 滞在** 「バザールを散歩、博物館を見学、両替、インターネット、ジュース屋でダラダラしたり、昼寝したり、とにかくのんびり過ごす。治安は良いが、やや空気の悪い街との印象。パキスタン人やアフガニスタン人をはじめ、台湾人やフランス人旅行者、そして数え切れないほどの日本人旅行者(夏休みの学生)とおしゃべり。同宿泊。」

**8月26-27日 Quetta > Taftan** [バス Rs250] 「いよいよイランへ向けて出発。国境行きのバスは当初 15:00 発と言っていたけど、段階的に結局4時間も遅らされた。客が集まらなかったかららしい。空席が目立ち、リュックサックが置いて、余裕を持って座れ、そして眠れたという点では良かった。

深夜 0:00 頃休憩のレストランは、砂漠のど真ん中で独特の雰囲気、旅情一杯!もともと腹の調子が悪く、何も食べなかったが・・・。荒野に昇る朝日が印象的。朝 8:00 到着後、チャイ2杯飲んで、出国。ホダ・ハフィーズ(さよなら!)

## 《イラン》

**2003年8月27-28日 Mirjave > Zahedan** [車] 15,000 Rials (約¥230) 「国境からの乗合 taxi は R20,000、バスは R15,000 とのことだったが、バスはパキスタン人がどんどん乗り込んで、すぐ満員になっていってしまった。仕方ないので歩き始めたら、一般の乗用車に拾われた。短パンで街を歩いていたら、警察に注意された。俺はそのとき知らなかったが、イランでは、外国人といえども違法である。Hotel Montazhimand シングル(R20,000)に2泊。」

**8月29-30日 Zahedan > Bam** [バス R12,000] 「Arg-e Bam 遺跡を外側から見る。砂漠の城。数年後には大地震で全壊することをこのとき知っていたら、入場料をケチらず入っていたら…。モスクやバザールも観光。Ali Amiri' s Legal Guest House ドミトリイ(R25,000)に2泊。」

**8月31日 Bam > Kerman** [バス R8,000] 「8ヶ国語を操るレザ君と知り合い、彼の家に遊びに行き、チャイ(茶)、ロティ(パン)、ぶどう、古コイン、ダスヴィー(イスラム教の数珠)などもらう。Iran Hotel シングル(R15,000)泊。」

**9月1日 Kerman > Sirjan** [バス] R8,000 「宿探し中、オートバイや車に乗せてもらってお世話になった。一方、裏路地で何もしていないのに棒でたたかれそうになった。Koem Hotel シングル(R25,000)に泊まる。」

**9月2日 Sirjan > Shiraz** [バス R20,000] 「カッターを持った若者集団に囲まれ、マットを盗られそうになる。金も要求してきたが、どうやら本気と言うより、ドラッグ で頭がおかしくなっているヤツラのような。それを小走りで逃れると、果物屋のトラックがメロンをくれて癒される。バスがよく分らなくて、terminal で5時間以上待ちぼうけ。具合悪くなる。映画付きの deluxe なボルボでやっと着いたのは PM10:30。気持ち悪くて宿探しの元気もなく、そのまま倒れこむように、公園で野宿。」

**9月3日** 「朝、1泊 R25,000 ということでチェックインしたホテル(ペルシャ語で読めず)、後から R50,000 と言われ、もめる。なんせ頭痛と下痢のため移動したくないのでねばる。結局最初の値で泊めてもらう。終日寝込む。」

**9月4-5日** 「早朝にチェックアウトして宿探ししていたら、パキスタンで会った日本人学生と再会。ツイン room をシェアすることにした。そのマサと一緒に街を観光して歩く。彼の体温計を借りたら熱が 37.6 度あったので、風邪薬をもらう。寝る前に、彼が日本製の蚊取り線香をたいてくれ、心地よく眠れた。イラン製は匂いがキツイ?!Darya Hotel ツイン(R30,000)泊。」

**9月6日 Shiraz > Marvdasht** [ミニバス] R2,200

「蚊取り線香のおかげで(?)体調が回復したので、マサと別れて Persepolis に向かう。Marvdasht から遺跡まではバスがなく、どのタクシーもかなりふっかけてくるので、まごつ

いているところに、教師のラヒームさんが現れ、彼らの家の昼食に招かれた。

チェロ・モルグ(レーズン入り白米と鶏肉)と焦げたヌン(カリッとした薄パン)にレモンをかけて食べる。ヨーグルトとチャイも頂き、ペルシャ絨毯で昼寝。至福のひとつ。家族と写真を撮った。英語はほぼ完全に通じなかった。

その後、英語を話す知人の車で Persepolis まで連れて行ってきて、軽くガイドまでしてくれた。もちろん無料で。もっとも彼らは仕事があるので早々に引き上げてしまったが……。帰りは Marvdasht まで、R1,000 の乗合タクシー get!

路上で Yazd 行きのバスを待っていたら、若者が石を投げてきたりしてからかうので、fighting ポーズをとったら、ザムザム(イランで有名なコーラ)のビンを割って反撃してきた。幸い仲間の一部が止めに入ったし、親切なおじさんが手を引いて救い出してくれたので、大事には至らなかった。そのおじさんと一緒に、バスをつかまえやすい郊外へ行く。」

**Marvdasht > Saadatshahr** [ミニバス] R2,500

**Saadarshahr > Policia** [乗合タクシー] R2,000 「そこから夜行バスに乗る。満席で通路にマットを敷いて寝る。」

**9月7日 Policia > Yazd** [バス R18,000] 「Amir Chakhmagh Hotel シングル(R35,000)泊。」

**9月8-10日** 「Masjed-e Jame や旧市街、沈黙の塔など観光。同宿泊。最終日はバス terminal で野宿。」

**9月11日 Yazd > Esfahan** [バス R11,500] 「Amir Kabir Hotel ドミトリー(R25,000)に泊まる。」

**9月12-13日** 「日本人旅行者 4-5 人で、世界の半分といわれる Naghsh-e Jahan や Sio-se(33)橋のチャイ・ハネ(喫茶店)でおしゃべりしたり、Masjed-e Jame を外側から眺めたり、バザールを散歩したりして楽しむ。夜バス terminal で Tehran 行きを探してみるが、昨日までの 3 連休の影響か、満席で乗れない。イラン人の乗客からサンドイッチやお菓子もらって慰められた。その日は野宿。」

**9月14-15日 Esfahan > Tehran** [バス R17,500] 「旧アメリカ大使館で、有名な[ドクロ]の”自由の女神”の落書きを見物。Khazar Sea Hotel シングル(R25,000)に 2 泊。」

**9月16-17日** 「宝石博物館を見学。宿を替え、Mehr Guest House シングル(R25,000)に 2 泊。」

**9月18日 Tehran > Chalus** [バス] R14,800 「久しぶりに豊かな緑。カスピ海へ向けて歩く。途中 Tehran からの 3 人の中年のキャンパーと一緒にいる。ヌンやらケバブ(串焼肉)やらジュースやら、いろいろもらってしまった。ここでは短パンでビーチを散歩しても問題ないようだ。海水での歯磨きはしょっぱかった。彼らのテントの横で、マットに寝袋を敷き野宿。」

**9月19日 Chalus > Rasht** [ミニバス] R7,500 「例の 3 人に、朝食としてヌン&はちみつ&バター、そして昨夜のケバブの残りを頂き、記念撮影をしてお別れ。ヘイリーマムヌーン(どうもありがとう)! Rasht に着いたときは雨で、またまた地元の人たちにいろいろ

おごってもらった。一方、バザールで「アフガニ？」と言われナイフをちらつかせた男に、ダスヴィー(Kerman でレザ君にもらったヤツ)を奪われてしまった。イランでは、難民アフガニスタン人への差別が根強い。日本人は顔が似ているので、よく間違われるようだ。

良いにつけ、悪いにつけ、複雑な1日が、何とか終わる。Fars Hotel シングル(R35,000)は、韓国の安宿のように、ベッドがなく床に古びた布団を敷いただけの部屋だった。」

**9月20-21日** 「今日も朝から雨。バス terminal へ向けて歩いていると、日本に10年住んでいたというサイさんに会った。タクシーで乗せてもらってバスを予約した後、彼の実家へ行って昼食を御馳走になった。魚のフライとプラムが激旨だった。それにしても、彼のように日本語の上手い輩はたいてい日本人の彼女がいる。昼寝の後、またタクシーで送ってもらって、予約してある夜行バスの前まで案内してもらおう。PM6:15発。」

**Rasht > Tabriz** [バス R33,000] 「AM4:45着。海拔高度の高さもあって早朝はかなり冷え込み、待合室で丸くなって仮眠。その後、Hotel Mashhad ドミトリー(R15,000)へ。アゼルバイジャン人なんかと一緒にの部屋でちょっと exciting!」

**9月22-23日** 「同宿のドイツ人 Helge、スペイン人 Joldi、オランダ人 Rogir と一緒に朝食を食べた後、バスで郊外の公園へチャイを飲み。そこの芝生で Joldi と柔道の試合。俺の負け。Masjed-e Kabud (カブドゥ・モスク) を外側から観光して、チャイ・ハネで地元の人に御馳走になった。野菜を買って宿に戻り、みんなでサラダを作った。その晩、Joldi と Rogir は夜行バスで Rasht へ旅立った。Joldi が、旅人用の素晴らしいインターネット・サイト Hospitality Club を教えてくれた。これは地元の人達と旅行者、ホストとゲストになる旅行者同士の交流の為の集いの場で、旅先での交流や自分の町のガイド、宿泊先の提供など、世界中に散らばっている会員たちが各自助け合う事を目的にうまれたもの。今後の俺の旅の宿代を大きく節約してくれたし、よりたくさんの出会いの元ともなった。[www.hospitalityclub.org](http://www.hospitalityclub.org) 夜、Helge とともにバザールを散歩して、チャイ・ハネに行った。どうもチャイを飲みすぎた1日だった。翌朝 Helge がカスピ海へ向けて出発。ものすごい量の荷物が、彼のホンダのオートバイに積まれていた。ヨーロッパ人の体力に感服。同宿泊。」

**9月24日 Tabriz > Maku** [バス R10,000] **Maku > Bazargan** [乗合タクシー] R2,000  
「雪帽子の Mt. Ararat が美しい。トルコへ出国。」

## 《トルコ》

(旧 **Türk Lirası** 1,000,000 = 約¥90)

**2003年9月24-25日 Gürbulak > Doğubayazıt** [dolmuş(ミニバス)] TL2,000,

国境では、美しい雪帽子の **Ağrı Dağı**(アララト山)が入国を迎えてくれた。たまたま宿が一緒になった日本人旅行者2人とスコットランド人旅行者と一緒に炭火焼肉を食べた。

この初めての夕食で、トルコ lokanta(食堂)では、パンが盛られた皿が空になれば盛ってくれる…そう、事実上食べ放題であることを知った。トルコの旅は、これまでのアジア諸国より、物価がやや高くなることは否めない。今後のトルコの旅において、lokanta で安めの一皿だけを頼み、後はおかわりのパンに、オリーブ油と酢をつけて、腹を満たすこともしばしば…。 Saruhan Hotel ドミトリー (TL4,000,000) 泊。

**9月26-28日** 1784年にクルド人によって建立された、丘の上にある **İshak Paşa Sarayı** (イシャク・パシャ宮殿) に登る。途中の乾いた大地とそそり立つ山々は絶景。

宮殿のそばのレストランで、トルコ音楽の Live を見た。本来は高級料理を頼まなくてはいけないところなのだろうが、欧米からの他の客の注文した料理をおすそ分けしてもらい、紛れ込んでしまった。客の一人カナダ国籍ギリシア生まれの Dimitri と意気投合し、周辺の山々を一緒に散策。ピクニック中の地元民に、肉や **çay**(茶)を御馳走になったり、カラフルなビーズをもらったり、クルド人の優しさに触れる。最後の晩のレストランでの Live は、davlu(両面太鼓)や zulna(ラッパ)も参加して、フォーク dance をみんなで踊って、大いに盛りあがった。その夜は、Dimitri と戦争や家族問題について語り合った。

Murat Camping ツイン(TL1,300,000)に3泊。Off シーズンのせいか安く泊まれた。

**9月29日 Doğubayazıt > Van** [トラック] ヒッチハイク 運転手は英語のまったく話せないクルド人。笑顔で乗せてくれた。 **Otel Diyarbakır** ツイン (TL3,000,000) 泊。

**9月30-10月1日** Van Kalesi(ヴァン城) 観光。墓近くで遊んでいる子供たちについていくと、細い道を抜けて、金網に穴が開いている所があり、入場料を払わずに登ることができた。トルコ最大の **Van gölü**(ヴァン湖)を見下ろす眺めは最高だった。Bazaar を散歩していると地元の人が **çay** やトマトをくれ、Yeni cami(新モスク)ではおじさんがにっこりと笑ってキャンディーをくれた。Lokanta で食べた **etli biber dolması**(ピーマン肉詰め)は、日本のとは違って、トマト sauce でよく煮込んであり旨かった。同宿泊。

**10月2日 Van > Akdamar** [トラック] ヒッチ Akdamar Camping テント泊。無料。

**10月3-4日** 俺はボート代をケチって訪れなかったが、湖の3km 沖に浮かぶ島には、10世紀建立の聖十字アルメニア教会があるという。天で、時折冷たい秋雨という、あいにくの天気。3日目の夕方、つかのまの晴れ間に、向こう岸の雪帽子の山が姿を見せ、雲に反射する陽光が湖面に映り、その燃える湖水に浮かぶ島を見た、あの一瞬は幻想的だった。幾人かのイスラエル人キャンパーと出会い、インドの Amritsar でイスラエル旅行者と会って以来久しぶりだなと思ったら、彼らがパキスタンやイランなどのイスラムの国へ自由に行き来できないことに気づき…望む世界平和。同テント泊。

**10月5日 Akdamar > Tatvan** [イスラエル人夫婦のレンタカー] ヒッチ 湖の波音を聴きながら目覚めるキャンプ生活とお別れし、いざヒッチハイク開始。すると、昨日テントが隣だったイスラエル人旅行者の夫婦が拾ってくれた。

**Tatvan > Diyarbakır** [ヴァン] ヒッチ トヨタのヴァンに乗っていたのは、アルメニア人とクルド人の男性。アルメニア人の方は、パンやコーラをくれたりして、感

じが良かったが、助手席のクルド人が運賃を要求したり、途中から後部座席に移ってきて、太腿の辺りを触ってくるので、かなり気持ち悪かった

Palas Oteli ドミトリー (TL3, 500, 000 だが、3 連泊で 10, 000, 000 に割引) 泊。

**10 月 6-7 日** Dicle Nehri (チグリス川) の水に触ってメソポタミアを感じたり、**Arkeoloji Müzesi** (考古学博物館) を見学したり、町を散歩がてら民芸品の鞆を買ったり、**çiğ köfte** (生肉ボール) 食べて過ごす。同宿泊。

**10 月 8 日 Diyarbakır > Siverek** [トラック] ヒッチ 前の座席は満員で、30 頭ほどの羊がいる荷台に乗せられ、揺られて行く。カーブの度に羊がどっと押し寄せる。しまいにや、おしっこも…!。体中臭くなる。

**Siverek > Feribot** (フェリーboat) 乗場 [トラック] ヒッチ **Atatürk Barajı** (アタチュルク dam) を渡るフェリーに乗る。車がなければ無料のようだ。船で Gazi さん達 4 人グループと知り合い、その先同乗させてもらう。

**Feribot 乗場 > Kahta** [Gazi さんのワゴン車] ヒッチ 彼らにはジュースやサンドイッチを御馳走になった挙句、宿代まで面倒を見てもらってしまった。尚、トルコでは、**Öğretmen Evi** (先生の家) という、主に教員用の宿泊施設に、比較的安く一般人でも泊れることがあるということ学んだ。**Öğretmen Evi** (TL5, 000, 000 は Gazi さん払い) 泊。

**10 月 9 日 Kahta > Karadut** [トラック 2 台] ヒッチ 地震によって破壊された古代銅像の頭と体が別れた珍風景でおなじみの、**Nemrut Dağı** (ネムルト山) を目指す。山道に入り、車通りが一気に少なくなる。

**Karadut > Nemrut Dağı** [給水車] ヒッチ タンクの上に座ると冷たくて気持ち良いが、ものすごく遅くて、途中の揺れによる水漏れに四苦八苦。運転手は、入山チケット売場の男性とも顔見知りのようだったが、まけてはもらえなかった (TL7, 000, 000)。でも、**çay** を 1 杯頂いた。標高 2, 150m の頂上は聞いたほど寒くはなく、頭像の写真撮ったりスケッチしたりしながら 1-2 時間ゆっくり過ごす。帰りは山の北側に降りることに決め、歩き始める。やはり車通りがない。

**Dağı > Malatya** [ヴァンの荷台] ヒッチ 満月の昇る頃、やっと 1 台のヴァンが停まってくれたが、満席のため荷台に乗るハメに…。山道駆け下りで生じる強風で、激寒! 空地で野宿。

**10 月 10 日 Malatya > Adıyaman** [車] ヒッチ この運転手とは” Merhaba (こんにちは)” しか話さなかったが、リンゴを 1 個買ってくれた。Firat Hotel ドミトリー (TL3, 000, 000) 泊。

**10 月 11 日** Kadir & Dona さんの洋服屋へ **çay** に招かれた。食事、ayran (ヨーグルト飲料)、baklava (シロップに漬けた甘い菓子)、さらにズボンまで頂き、T シャツを洗濯してもらい、一緒にダンスもして、予期せぬ楽しいひとときとなった。

**Adıyaman > Şanlı Urfa** [トラック] ヒッチ 公園で野宿。酔っ払いの男が、何を思ったか、俺にキスしてきて、気持ち悪かった。

10月12-14日 預言者 Abraham が生まれたとされる **Gölbaşı** 周辺を歩き回ったり、近郊の Harran の遺跡を、ヒッチハイクで見に行ったり(帰りはヒッチした運転手が途中までしか行かないということで、なんと **dolmuş** 代を払ってくれた!)して過ごす。 **Hotel Gül Palas** ドミトリー(TL3,500,000)に3連泊。

10月15日 **Şanlı Urfa > Birecik** [トラック] ヒッチ イラクから来たトラック運転手。「トルコは平和だ」と言っていた。

**Birecik > Gaziantep** [車] ヒッチ この運転手のオフィスまで乗せてもらって、**çay** と昼飯御馳走になった。バス停の近くでヒッチしていたら、警察官がピーナツとジュースをくれて、さらに、なんと…またもや「**dolmuş** 代を払ってやるから、乗りなさい」だって!

**Gaziantep > Kahramanmaraş** [**dolmuş**] 警察払い Oto gar(バス terminal) 付近 のモスクの庭に、寝袋敷いて眠る。

10月16日 **Kahramanmaraş > Kayseri > Avanos** [トラック2台] ヒッチ ついにトルコ旅行ハイライトの Cappadocia へ突入。空地のベンチで野宿。

10月17日 **Avanos > Göreme** [徒歩] **Çok güzel**(超美しい)岩山の景色を眺めながら、観光拠点の **Göreme** まで歩き宿を取る。Halil Pansion 洞窟部屋ドミトリー(TL4,000,000)泊。

10月18日 **Güvercinlik Vadısı**(鳩溪谷)のリンゴ畑を抜け、城砦都市 **Uçhisar** まで軽快に歩く。ついでに Ortahisar まで。夕暮れの **kale**(城)は幻想的!少し疲れた。同宿泊。

10月21日 **Göreme > Özüce > Göreme** [車計6台] ヒッチ 規模は小さめだが、入場料が安め(TL3,000,000)の地下都市見学。同宿泊。

10月22日 **Göreme > Yeşilhisar** [車計8台] ヒッチ 橋の下で野宿。夜中、数匹の犬にはえられる。

10月23日 **Yeşilhisar > Ovaçiftliği** [トラック] ヒッチ 降車地点から少し歩き Sultan 湿原へ。イタリア人旅行者 Andrea & Marco と出会い、彼らの望遠鏡で白フラミンゴを見た。彼らの camping カーに戻り、パスタやリンゴ、イタリアン **café**、そして、イスラム圏では入手極めて困難な豚肉ソーセージなど御馳走してもらった。その上、**Yeşilhisar** の少し先まで乗せてもらっちゃった。

**Yeşilhisar** の先 > **Kayseri** [トラック] ヒッチ 空地で野宿。蚊が少しうるさかった。

10月24日 **Kayseri > Sivas** [車計6台] ヒッチ 1台目のトラックの会社でオリーブを頂いた。余談ながら、このヨーロッパでよく食べられる{オリーブの塩漬け}、最初は嫌いだったが、数週間後には食べられるようになり、今ではやみつき!納豆でも梅干でも何でも、要は、慣れのようなだね。Sivas では学生寮のようところに泊まり、夜中みんなでサッカーした。**Öğretmen Seher Yıldırım Pansiyonu** ドミトリー(TL5,000,000)泊。

10月25日 **Sivas > Niksar** の手前 [トラック] ヒッチ 出発にあたって、学生の一人

Özgür が見送ってくれて、ヒッチも手伝ってくれた。その夜は、トラックの当初の目的地までたどり着けず、食堂なども一緒になった給油所で stop。運転席の後ろの仮眠ベッドで、眠らせてもらう。

**10月26日 Niksar** の手前 **> Ordu** [昨日と同じトラック] 昨日の夕食と今日の朝食も運転手におごってもらい、再び彼の Volvo のトラックに乗せてもらう。道中の紅葉が素晴らしい。Ordu では、岐阜で9年働いていたという **Önder** さんに日本語で話しかけられた。夜、彼の家に招かれ、黒海を望む夜景を楽しみながらの夕食。Ordu Palas Oteli シングル (TL4,000,000) 泊。

**10月27-28日** 本日より Ramazan(断食月)開始。やはり昼間大人は誰も飲食していないようだ。そして、日没と同時に lokanta 大混雑。同宿にさらに2泊。

**10月29日 Ordu > Samsun** [トラック] ヒッチ **Öğretmen Evi** ドミトリー (TL5,000,000) 泊。

**10月30-31日 Samsun > Sinop** [車] ヒッチ Alladin cami という高く壁がそびえるモスクが町の目印。砂浜に静かに波が打ち寄せる。古い教会を訪れたり、城壁をスケッチしたり、黒海周辺を散歩したり、行き会った学生達と一緒に特設市みたいところでたくさんさんの宣伝用商品をももらったり、夜その学生達とともに TV でトルコ league の大事なサッカーの試合“Galata Saray vs Beşiktaş”を観戦したりして過ごす。港の小屋などで野宿。

**11月1日 Sinop > Ayancık** [車] ヒッチ **Ayancık > Akgöl** [jandarma(憲兵)の車] ヒッチ **Akgöl > Türkeli** [dolmuş] 憲兵が手配してくれて TL0 憲兵の国家権力(の乱用?)で、dolmuş にタダで乗せてもらっちゃった。 **Türkeli > Çatalzeytin** [車] ヒッチ

昼下がりにこの車通りのほとんどない小さな村に着いた後、日没までヒッチハイク粘ったが…その甲斐もなく、待ちぼうけに終わってしまった。近所のアパートの住民が、その一部始終を見下ろしていて、親達が彼らの小さな子供達に、魚のから揚げやパン、そして果物を、俺のもとに届けるように言いつけ、Ramazan 明けの食事を分けてくれた。夕陽の映るオレンジ色の黒海を眺めながらの夕食は、まさに感動的な一コマとなった。

Teşekkür ederim(どうもありがとう)!

**Öğretmen Evi** ドミトリーだけで俺一人で独占(TL5,000,000)泊。

**11月2日 Çatalzeytin > Kastamonu** [dolmuş] TL7,000,000 昨日と同じ場所で半日ヒッチを試みるが、やはりダメで、久々に交通機関に金を払って乗る。沿岸では温暖だったトルコの気候も、内陸に入ると山間部では道中に積雪も見られ、冬の訪れを感じる。眠るところを探していたら、孤児院の子供達に菓子をもらい、院に連れてってもらった。つくづく恥知らずな貧乏旅行者の俺。子供達は院長にこの哀れな日本の乞食をそこに泊めてくれるように懇願しているようだった。孤児の方が普通の子より他者を思いやる心に長けているのか…?結局おじゃんになり(そりゃそうだ!)、野宿。寒っ。

**11月3日 Kastamonu > Karabük** [車] ヒッチ **Karabük > Safranbolu** [バイク] ヒッチ このバイクの兄ちゃんの知人が経営する雰囲気の良いホテルで、コーヒーを

一杯頂く。ヨーロッパ風の古い街並みが残る町を散歩。野宿。

**11月4日 Safranbolu > Karabük** [徒歩] Otel Ferah Palas ツイン(TL3,000,000)泊。

**11月5-6日 Karabük > Ankara** [トラック] ヒッチ この巨大な首都に Ramazan はあまり関係なさそう。Lokanta も昼間からバリバリ営業していた。どこの国の大都市でも、伝統は影を薄めてしまうということか…。Hisar (城砦) からの眺めは良かった。町外れで野宿2泊。

**11月7日 Ankara > Kulu** の手前の分かれ道 [トラック] ヒッチ トラックの運転手に lokanta で **çorba** (スープ) と kebab(肉スライス)頂く。

**Kulu** の手前>**Cihanbeyli** の手前 [車] ヒッチ 運転手がパンを1枚買ってきて、たまたまバターがリュックサックに残っていたので、昼食に何かおかずを買おうと売店へ。すると店主がオリーブの塩漬けとジュースを無料でくれて、さらに親切にナイフとテーブルまでも提供してくれた。

**Cihanbeyli** の手前 > **Konya** [Mustafa の車] ヒッチ 彼は少し英語を話し、着いてから **Mevlâna Müzesi**(回転ダンスで有名なメヴラーナの博物館)を案内してくれた。入場料を払ってくれた上に、{**Mevlâna** の7つの教え}の書かれた壁掛けと Ney(斜めに吹く立て笛)のCDまで買ってくれた。本日の締めくくりに、ちょうど日没頃ホテルにチェックインしたので、Ramazan 明けの夕食を従業員に分けてもらった。超幸福な一日! Otel Eser Palas ドミトリー(TL4,000,000)泊。

**11月8-10日** 冷たい雨が降り肌寒い日が続く。モスクなんかをスケッチ。同宿泊。

**11月11日 Konya > Manavgat** の12km手前 [トラック] ヒッチ 山間部は雪だが、海へ抜けると寒さはやや和らいだ。Lokanta 裏で野宿。

**11月12-13日 Manavgat** の手前 > **Peri > Antalya** [トラック2台] ヒッチ 古い街並みと青い地中海。Sabah Pansiyon(TL5,000,000)に2泊。

**11月14日 Antalya > Olimpos** [車] ヒッチ? …のつもりだったが、到着後、運転手は TL5,000,000 を要求。“Param yok(金ない)”と答えると、殴られた。くしくも、当時バック packers の間では知る人ぞ知る宿、**Kadir's Yörük Top Tree House** の目の前。運転手はそのまま行ってしまった。ローマ遺跡、美しいビーチ、Chimaera の自然永久炎を見物した後、主要道まで10km程歩く。**Gözleme**(トルコ式クレープ)食べて、野宿。

**11月15日 Olimpos > Kumluca > Demre** [車2台] ヒッチ 2台目は、9年日本で働いていたというトルコ人運転手と、JICA 関係の家族らしき秋田から来た母娘が乗っていて、Kekova 島にカニを食べに行くところだという。 **Demre > Kaş > Fethiye** [車 & トラック] ヒッチ 立派なボートがズラッと並ぶ港町。廃屋で眠る。

**11月16日 Fethiye > Göcek > Köyceğiz** [車3台] ヒッチ Tango Pension ダブル(TL5,000,000)泊。

**11月17日 Köyceğiz > Güllük** [トラック] ヒッチ トラックの運ちゃんに、道中、çay2杯とみかんを御馳走になった。エーゲ海沿いのこの美しい小村で、安宿探していた

ら、学生達にコーヒー誘われ、その勢いで、泊めてもらった。Menemen(トマトなどの野菜と卵を混ぜ合わせて炒めた料理)や **çorba** や果物でもてなされた。

**11月18-19日 Güllük > Bodrum** [トラック & 軽貨物車2台]ヒッチ 白い家々のひしめく港町。Şenlik Pansiyon ドミトリー(TL4,500,000)に2連泊。

**11月20日 Bodrum > Milas** [車] ヒッチ **Milas > Söke** [ワゴン車 & バス] TL0 バス会社専用のワゴンが停まり、oto gar まで乗せてくれて、さらにかなり豪華なバスに、幸運にも、タダ乗りさせてもらった。**Söke > Kuşadası** [トラック] ヒッチ モスクで足を洗い、歯を磨き(アッラーに感謝!) 建築中アパートで寝る。

**11月21-22日 Kuşadası > Selçuk** [トラック] ヒッチ 1日目は、Efes 遺跡へ。入場料が高いため、山を越えてタダで入り込んだ。ざっと見物したところで、係員に「チケットを見せろ」と追い出されてしまった。2日目は、**İsa Bei Cami**(イサ・ベイ・モスク)や Artemis 遺跡観光。Vardar Family Pension ツイン(TL4,000,000)

**11月23日 Selçuk > Ortaklar > Denizli** [ワゴン車 & 車] ヒッチ 2台目の車は俺と同年の娘とその母親の車。オレンジをくれてフレンドリーに話しかけてくれるさまは、古いイスラムの慣習からの脱却を感じさせる。**Denizli > Pamukkale** [車] ヒッチ

温水の流れる純白の岩山と、それを背景にたたずむ Hierapolis 遺跡は、まさに幻想世界! **İstanbul** で爆弾テロのニュースを耳にする。Mustafa's ユニット bath 付きだが掃除していないツイン room(TL4,500,000)泊。

**11月24日 Pamukkale > Denizli** [ワゴン] ヒッチ Lahmacun(Arabian 柔らかピザ)にサラダ & **çay** 付きで TL750,000 の夕食後、野宿。

**11月25日 Denizli > Nazilli** [車] ヒッチ **Nazilli > Kösk** [dolmuş] 酔ったおっちゃんが払ってくれた **Kösk > Aydın > İzmir** [ワゴン & トラック] ヒッチ 河辺で野宿。沿岸なので昨日より暖かく快眠。

**11月26-27日** Ramazan の締めくくりの **Bayramı** 祭。街でのんびり過ごす。Otel Yeni Sadik Bey 超狭苦しいシングル(TL4,500,000)泊。

**11月28日 İzmir > Bergama** の少し手前 [トラック] ヒッチ 検問近くでヒッチしていたら、警察に呼ばれた。きっとパスポート調べられて、いろいろ質問されるに違いないと思っていたら、全然そんなことはなく…なんと、トラック運転手と話をつけて、俺が乗れるように手配してくれた。**Bergama** の手前 **> Bergama** [İzmir 在住日本人家族の車]ヒッチ 野宿前のいつものパターンで、モスクで歯を磨いていたら、警察に囲まれた。彼らの国家権力によって、かなり綺麗な宿に格安で泊まれた。トルコ警察万歳!

Acroteria Pension ツイン(TL3,000,000)泊。

**11月29日** 遺跡群観光。丘の上の見晴らしの良い Acropolis には、牛や羊の放牧用の道をたどってタダで入れたが、もう一つの Asclepion は、軍基地に囲まれていて到底無理。お土産屋で青年に日本語教えたら、elma **çay**(リンゴ茶)2杯くれた。同宿泊。

**11月30日 Bergama > Edremit** [車] ヒッチ おばちゃんドライバー。女性一人の運

転はトルコのヒッチで初。野宿。小雨。

**12月1日** 実業家 Mustafa と知り合い(Konya でも同名の人と会ったナ)、**çay** を頂く。みかんを箱詰めしヨーロッパへ輸出している工場見学。**Köfte**(肉ボール) も御馳走になる。近郊の町 Akçay の高級レストラン&bar でもてなしてもらい、5ヶ月振りの散髪もしてもらい、しまいには、彼のオフィスの近くの立派なホテルに泊まらせてくれた。

Uytun Otel ツイン(推定 TL20,000,000 以上、Mustafa 払い)泊。

**12月2日 Edremit > Gökçalı** [トラック] ヒッチ 運転手の知人のホテルを紹介してもらい、そこまで乗せてもらった。Hotel Bıyık ツイン(割引してくれて、TL4,000,000)泊。

**12月3-4日** 松林とオリーブ樹、放牧される羊たち、そして石垣に囲まれた赤瓦の家並み…静かな村。トロイの木馬で有名な Truva も観光。同宿泊。

**12月5日 Gökçalı > Çanakkale** [ホテルの親戚の車] TL0 3泊おいしい食事を安く提供してくれたホテルに、別れを惜しみ出発。たまたま彼らの親戚が車で出掛けるというので、同乗させてもらった。**Çanakkale > Eceabat** [フェリー] TL1,100,000 Marmara 海を渡ったので、一応アジアからヨーロッパへ来たことになるようだ。Boomerang Bar のソファに無料で泊まらせてもらう。シャワーは TL3,000,000。

**12月6-8日** 付近を散歩して城や防空壕跡を見学。小雨と強風の悪天。同 bar 泊。

**12月9-10日 Eceabat > Keşan** [トラック] ヒッチ 日陰には積雪が残る肌寒い町。吐く息、真っ白。**Öğretmen Evi** トリプル(TL6,000,000)に2連泊。

**12月11日 Keşan > Gümrük** [車] ヒッチ Türk Lirası を Euro に両替して、トルコ出国スタンプも押してもらい、いざ国境越えしようとしたところで、兵隊に止められた。ギリシアへの数 km の橋を徒歩で渡るのは禁止されているので、バスかタクシーに乗って来い、と言う。英語の全く通じない兵隊に何とか頼み込んでいたら、隣で待機していたトラックが親切に乗せてくれたおかげで一件落着。**Güle güle**(良い旅を)!

## 《ギリシャ》

**2003年12月11日** 国境 >  $\Xi\alpha\nu\theta\eta$  [トラック] ヒッチハイク ギリシア入国。ヒッチハイカーの EU 圏への第一歩ということで、入国手続きはたくさんの質問、所持金のチェックと、厳しいものだった。生まれて初めてのヨーロッパ。野宿。

**12月12日**  $\Xi\alpha\nu\theta\eta$  >  $K\alpha\beta\alpha\lambda\alpha$  [車] ヒッチ ヒッチしようとした車の中には、冗談混じりに(?)運賃請求してくるのもいた。また、道路を歩いていると、警察からも軽い尋問を受けた。

$K\alpha\beta\alpha\lambda\alpha$  >  $\Theta\epsilon\sigma\sigma\alpha\lambda\omicron\nu\iota\kappa\eta$  [何台かの車] ヒッチ

イランで、スペイン人旅行者 J o l d i に教えてもらった Hospitality Club を使って、は

じめて地元のメンバーとコンタクト。Alexの家泊。ギリシアについての情報をもらう。

12月13-15日 記録なし。

12月16日 Θεσσαλονικη > Λαρισα [車] ヒッチ

12月17日 Λαρισα > Βολοσ [何台かの車] ヒッチ

12月18日 Βολοσ > Αθηνα [何台かの車] ヒッチ 首都アテネ到着。建築中の家で野宿。朝かなり寒い。

12月19日 記録なし。

12月20日 JTBのデスクへ出向き、バングラデシュでなくしたCiti Bankカードを再発行。Pangrayion Youth Hostel ドミトリー(10Euros)泊。

12月21日 Αθηνα > Πετραια [徒歩]

12月22-23日 Πετραια > Ηρακλειο [フェリー] E19.70 エーゲ海と地中海の狭間に浮かぶ、クレタ島上陸。クリスマス休暇で静か。

Ηρακλειο > Μαλια [車] ヒッチ

Μαλια > Αγιοσ Νικολαοσ [車] ヒッチ

Αγιοσ Νικολαοσ > Σητιεα [車] ヒッチ

12月24-25日 記録なし

12月26日 Σητιεα > Ιεραπετρα [車3台] ヒッチ

12月27-28日 Ιεραπετρα > Ηρακλειο [何台かの車] ヒッチ

Hraklion Youth Hostel ドミトリー(E10)泊。

12月29日 Ηρακλειο > Χανια [トラック] ヒッチ

12月30日 Χανια > Κισσαμοζ [車] ヒッチ 彼らの目的地以上に足を伸ばしてくれて、オレンジもくれた。

2004年1月1日 Happy New Year in Crete! 徒歩でΠολιρνιαという集落へ。熟年夫婦が家に招いてくれて、ケーキと酒を頂く。酒は強すぎて1口しか飲めなかったが…。雨の1日。

1月2日 Κισσαμοζ > Αντι Κυθηρα [フェリー] E8.50 住民30人で食堂も売店もない小島。もらったオレンジが1個残っていたので、かろうじてそれを食べた。岩と海の造形美はなかなかのもの。港の小屋で寝る。

1月3日 Αντι Κυθηρα > Καλαματα [フェリー] E18.10 船待ちのとき、住民がカレンダーをくれた。何もない島なので、欠航しなくて助かった。到着後空腹のため、barでΣουλακι(串焼き)など食べまくった。廃屋泊。

1月4日 Καλαματα > Κοπανακι [車] ヒッチ 運転手にギリシア名産のΣύκαξνραというドライフルーツをもらった。

Κοπανακι > Καλονερο [トラック] ヒッチ 運転手がペットボトルの酒をくれようとしたが、残念ながら俺は下戸。建築中の家で寝る。

1月5日 Καλονερο > Πυργοσ [車] ヒッチ

Πυργος > Αμάλιαδα [車] ヒッチ

Αμάλιαδα > Γαστροβνη [徒歩] 先進国では、食堂が高いので、いやおうなくスーパーでの軽食で済ましがちになる。スーパーで買い物したら、ワインをプレゼントされた。先に言ったように俺は飲めないけど、ヨーロッパらしいサービスに感激。倉庫泊。

1月6日 Γαστροβνη > Ανδροβιδα [徒歩] Θεοφανειαという祭日！年末年始は、どこの国でも、休日が多いもんなんだなあ。あられが降って驚いた。

Ανδροβιδα > Πατρα [車] ヒッチ 英語のかなり上手い学生の運転。やっぱりヨーロッパへ来ると、アジア諸国(インド・パキスタンを除く)と比べて、格段に英語を話せる人が多い。建築中家泊。

1月7-8日 建築中の家は誰も住んでいないし屋根があるので、どうしても野宿にとっては絶好の場所ということになってしまうが、早朝、工事の人たちが現れて、慌ててその場を去る。Ταβερνα(食堂)でランチしたら、ギリシア情緒に富んだラッパの演奏聴けた。ギリシア語で「食堂」は“ταβερνα”っていうのは面白い。Καστροや Ρωμῆικο Ωδειοなど観光。Patras Youth Hostel ドミトリー(E9)は、俺と隣のベッドのドイツ人以外は、ほとんどがアフリカ人労働者だらけで驚いた。

1月9-10日 Πατρα > Brindisi [船] E36 ギリシアーイタリア間のおそらく最も安いであろう Maritime Way の船(E30)は、今月下旬まで運休中のため、やむなく Med Link Lines(E40)のチケット購入。PM7:00 発。本来 26 歳未満のみの 10%割引してくれたのは助かった。

## 《イタリア》

2004年1月10日 Brindisi > Francavilla > Taranto [車2台] ヒッチバイク

アドリア海を越えて AM9:00 小雨降り肌寒いイタリア着、ヒッチ開始。路地の片隅泊。

1月11-12日 Taranto > Ginosa > Andriace [車 & ワゴン車] ヒッチ 2台目のオートバイを積んだワゴン車の、これからモトクロスやるという2人組に café 頂く。

Andriace > Crotone [車5台] ヒッチ 城の中に図書館、さすがイタリアおしゃれ！公園の木陰で2泊。

1月13日 Crotone > Pizzo [車4台] ヒッチ Autostrada(高速道路)内で「ヒッチバイクは禁止だよ」と、警察に何やらイタリア語で怒られ、パトカーで一般道まで乗せてもらう。Pizzo > Vibo Valentia [徒歩] 建築中の家で野宿。

1月14日 Vibo Valentia > Mesiano > Tropea [車 & オート三輪] ヒッチ インドの auto リキシャーみたいなのが、ここ南イタリアでもチラホラ見かける。2台目はそのおっちゃん。後ろは貨物で満杯なので、隣にギュウギュウ詰めで乗る。魚臭い。ビーチ泊。

**1月15日** Tropea > Panaia [ワゴン] ヒッチ パン屋のワゴンのおじさんが、運送先のスーパーでハムを買って、サンドイッチ作ってくれた。Grazie(ありがとう)！そこから10km前後歩く。Iopolo > Nicotera [車] ヒッチ Nicotera > Rosarno [school バス] ヒッチ Rosarno > Spartimento [トラクター] ヒッチ Spartimento > Villa San Giovanni [車2台] ヒッチ Villa San Giovanni > Messina [フェリー] E0 シチリア島へ渡る船はタダだった。建築中の家に泊まる。

**1月16日** 早朝、大工が現れ、いきなり電気がついたので、慌てて逃げるように脱出。あれれ？こんな状況ギリシアでもあったっけ……?Autostrada の入口でヒッチつかまらず疲れて座っていたら、浮浪者と思われたのか、少年からお恵みの20centisimi がなげられた。乞食人生まっしぐら…。路地の片隅泊。

**1月17日** Messina > Barcellona [車2台] ヒッチ Barcellona > Castloreale Terme [ワゴン] ヒッチ Castloreale Terme > Falcone [車] ヒッチ ビーチで痛いほど冷たいシャワー浴びて寝る。

**1月18日** Falcone > Tindari [スリランカの家族の車] ヒッチ Tindari > Patti [車] ヒッチ Patti > Gioio Marea [インドの家族の車] ヒッチ 今日のヒッチハイクは、アジアからの同朋に大いに助けられた。そこから15km歩いてCapo d'Orlandに到着。ビーチ泊。

**1月19日** Capo d'Orland > Sant Agata di Militello [徒歩]

Sant Agata di Militello > Acquadolci > Santo Stefano [ワゴン&車] ヒッチ  
どこもかしこもCeramiche (セラミック) アートで飾られた独特の町。空き地で野宿。

**1月20日** Santo Stefano > Palermo [ワゴン] ヒッチ 午前中一杯待ち、午後一番で乗せてもらった。駅構内泊。駅は、夜中カギかけるのに中で寝ていても追い出されないという、不思議なシステム。俺以外に黒人が1人寝ていた。

**1月21日** 今晚は雨、遂にはあられまで降ってきたので、野宿じゃなくて良かった。Hotel Regina シングル(E21)の部屋からは、古い教会が見えた。

**1月22日** Palermo > Cinisi [車 & 徒歩] ヒッチ Carini 付近でちょっと1台乗っけてもらった他は、ずっと歩く。靴下ボロボロ。草原泊。

**1月23日** Cinisi > Trapani [車] ヒッチ 今日はAutostrada 入口でのヒッチが成功。一気にシチリア島の西端着。路地の片隅泊。

**1月24-25日** 日本の梅雨のように、小雨が降り続く。最近歩き過ぎで足の裏が傷だらけだし、チュニジア行きを控えての休養のためにも宿をとる。Albergo Messina シングル(E18)に2泊。

**1月26日** Trapani > Tunis [フェリー] E42 チュニジアの祭日が近いらしく、イタリアへ出稼ぎに来ているチュニジア人労働者で券売場は大混雑。早くもアフリカの雰囲気。出発も3時間遅れ。

## 《チュニジア》

**2004年1月26日** Tunis 船で PM10:00 到着。大混雑の入国手続きが終わったのは真夜中。ビーチで野宿。

**1月27日** Citi Bank カードが ATM 不具合で使えない。イタリアで買ったチョコをかじってしのぐ。Hotel de Tunis (5Dinars=約¥450 金がないので後払いにしてもらう)泊。

**1月28日** やっと STB Bank の ATM で金をおろせて、一安心。より安い宿に移動。Hotel de la Liberte ツインの相部屋でシャワーなし(D3)泊。

**1月29-31日** 陽気なアラブ人、ゴチャゴチャした街並み、落ち着く…。夜、ラプレビ(豆をすりつぶしたボールにちぎったパンを入れ混ぜた料理)を食べたら、隣にいた、英語の流暢な、上品そうな、おばさまに、おごってもらった。同宿泊。

**2月1-2日** イスラムの大切な祝日 Aid-El-Idha。人々が羊を切って焼いている様子を時折見かける他は、シーンと静まり返っていた。ほとんどの店が閉まり、非常に困った。同宿泊

**2月3-18日** 朝食にドブ。本当にドブ色でドロツとしているが、甘くてまずくはない。何より安い(D0.3)。アフリカ旅行に先立ち各国の大使館へ visa などの情報収集。歩いて廻ったし、英語があまり通じないので、何日も時間がかかった。どうやら当初渡航を考えていた隣国アルジェリアやリビアの visa 取得は困難のようで、一度ヨーロッパへ海路で戻り、スペインから船でモロッコへ渡り、陸路で西アフリカへ下るルートが、俺の頭の中で濃厚になってきた。それにしてもイスラム圏の人は、信じ難いほど親切な人が多い。街を歩いていても、道を尋ねる前に教えてくれることがしばしば…。セミィという男と知り合う。彼の家までお邪魔するが、バスにはタダ乗りしてるし、¥や\$、Euro 紙幣見せろとか、怪しげ…。サッカーのアフリカ杯開催中のチュニジアに来て良かった。2002年にフランスを破ったセネガル、オコチャやカヌなどの名選手が名を連ねるナイジェリア、そして強豪モロッコに対して、次々と勝利を収め、とうとうホーム優勝してしまった！TVを見てみんな大いに盛り上がり、俺にもジュースをおごってくれたりした。日中、水道水で体を洗ってみたが、それほど冷たくはなかった。スッキリ！同宿泊。

**2月19日** Tunis > Ben Arous [徒歩] 22泊お世話になったホテルをチェック out し、歩き始める。Ben Arous > Sousse [フジ(偶然俺と同じ名)の車] ヒッチハイク

Hotel Karim 相部屋で共同の水シャワーあり(D2.5)泊。

**2月20-23日** 朝晩は涼しいが、日中はガラガラと太陽が照りつける。ビーチにはたくさんのお水着のヨーロッパ人。若い娘には当然、地元の男達から声がかかる。ホテルの同室の人は、土木関係の仕事できているという。隣の部屋の小太りのおっちゃんとは、互いに「アミーゴ」と呼び合った。何度かオレンジをくれた。同宿泊。

**2月24-25日** カゼ。セキが止まらず、頭痛と熱もあり。寝込む。ヨネスさんという親切なおじさんをはじめ、宿泊者達が心配して、オリーブ油にレモンと香辛料を入れた飲物、

火照る体に塗るレモン汁などで、チュニジア流に介抱してくれた。ヨネスさんは、夕食に肉料理を作ってくれた。ホテルの従業員に「薬を買ってきてやるからD6払いなさい」と言われ、「金ない」と答えたら、なんと(!)みんなでカンパして買ってくれた。同宿泊。

**2月26日** ヨネスさんや、アミーゴ(本名いまだ不明)達の助けで、頭痛と熱からは解放された。セキだけは残っていたが…。ヨネスさんが、また夕食に、マカロニを御馳走してくれた。「シュ克蘭(ありがとう)」と礼を言ったら、「アッラーに感謝しろ」と一言。同宿泊。

**2月27-29日** カゼが治ったので、ヨネスさんとアミーゴに café を一杯ずつ恩返し。すると、ヨネスさんは、牛乳やナツメヤシなんかでおいしい夕食を、またもや用意してくれるのであった。ヨネスさんの帰りが遅くて、いつもの夕食にありつけなかった晩に、隣の食堂に行ったら、D1 じゃ絶対赤字だろうというくらいテンコ盛りにしてくれた。優しさの町！

長期滞在ということで、宿代も D0.5 安くしてくれた。同宿泊(D2に値下げ)。

**3月1日** Sousse > Msaken [徒歩] Msaken > Kairouan [トラック] ヒッチ イスラムの聖地らしくモスクが乱立。日本人旅行者に 3 人も出会った。野宿しようと思ったら、ハビブ君と出会い、泊めてもらった。貧相だが、床の地面に厚手の布を敷き、日本の布団に似た感じで、寝心地が良かった。

**3月2日** 朝、ハビブ君が、質素だけど心のこもったサンドイッチを作ってくれた。

雨で肌寒い一日。昨日会った日本人旅行者のうちの一人とぼったり再会し、食堂で一緒にチキンを食べ、カフェでおしゃべり。廃屋で野宿。

**3月3日** Kairouan > Ouled Chamekh [louage(乗合タクシー)] D0 本来タクシーなのに、タダで乗せてくれた上に、café までくれた。Ouled Chamekh > Souassi [ヴァン] ヒッチ カリム君と出会い、自宅に招かれ、クスクス(北アフリカの郷土料理で、小麦と米の間のような食感といえようか…)を御馳走になり、泊めてもらう。

**3月4日** Souassi > El Jem [ヴァン] ヒッチ El Jem > Hencha [トラック] D1 ヒッチのつもりだったが、2 台目は金を取られちゃった。Hencha > Gabes [トラック] ヒッチ Auberge Nasfi 相部屋(D2)泊。

**3月5-8日** ヤシの木がニョキニョキと生えていて、南国を思わせる町。ビーチは Sousse の方が美しいような気がした。街外れのオアシスを散歩すると、東南アジアの小村と似た雰囲気。宿主の Nasfi はシャクシュカ(肉や魚、野菜などのトマト sauce 煮)やレモン、洗濯用洗剤などをくれたり、よく世話を焼いてくれた。同宿泊。

**3月9日** Gabes > Mareth [トラック] ヒッチ Mareth > Hooht Souk [ヴァン] ヒッチ このヴァンに便乗したまま、Jerba 島へ渡るフェリーに乗り込む。野菜売りのフェルジャニさん達と知り合い、夕食や茶を頂き、そのまま市場で野宿。

**3月10-12日** なりゆきで彼らの野菜売りを手伝うことに…。Midoun や El May といった町の市場で、アラビア語で値段を言ったり、野菜を袋に詰めたりした。単にお茶汲みにしても、日本の OL より少し大変(?!)。何しろ炭火おこしから始めるのだから。手伝いをしな

がら、野菜を中心とした料理を 3 食頂き、Eriadh にあるフェルジャニの家に、4 日間泊めてもらった。ナッツ入りの茶は珍しかった。相棒のミルドゥは毎晩、アジア人である俺に気を遣って(?)、ブルース Lee のクンフー映画の DVD を見せてくれた。

**3 月 13 日** Eriadh > El May [ヴァン] ヒッチ El May > Zarzis [車] ヒッチ エメラルド色の海水と白砂のコントラストが美しい。漁民に昼食を御馳走になる。建築中の家泊。

**3 月 14 日** Zarzis > Ben Guerdane [ヴァン] ヒッチ この町で通りがかりの学生 2 人と出会い、ヨーグルト&クッキー買ってもらった上に、次の町までの乗合ワゴンに無料で乗れるよう手配までしてもらった。Ben Guerdane > Smar [louage] D0

Smar > Tataouine の 10km 手前 [車] ヒッチ ここでもまた、タハル君という学生と知り合い、泊めてもらう。

**3 月 15 日** Tataouine の 10km 手前 > Tataouine [タハル君の父の車] タハル君の家で、朝食のパンとミルク tea 頂いて、彼の父の車で街まで送ってもらう。散歩していたら、ズワイヤと知り合いケーキ&コーラおごってもらい、夕食にも招待された。その上、明日から泊めてくれるという。Hotel Ennour シングル(D3)泊。

**3 月 16 日** ズワイヤと一緒に Ksar(古城) Dagare を見物し、彼の家で旨いスパゲッティの昼食。食後の散歩中、警察に職務質問された。チュニジアにはまだ民主主義は浸透していないのか、旅行者が許可なしで民家に泊まるのは規則違反と言われた。ズワイヤは、それを無視して泊めてくれた。

**3 月 17 日** Tataouine > Tataouine 近郊の Ksar 巡りへ [徒歩] この辺の所々の丘に、小部屋を積み上げたような独特の建築の面白い古城の遺跡が散在している。ズワイヤの家に荷物の一部を預けて身軽にし、それらを訪れる小旅行に出発。途中ハムザ君一家に招かれ、辺りで採れた草花とマカロニを混ぜた料理やヤギ乳、クスクスなど御馳走になり、ついには泊めてもらってしまった。

**3 月 18 日** Tataouine 近郊の Ksar 巡り [徒歩] Ksar Ouled Soltane の美しい住居跡を見学。その後、別の Ksar で野宿することに決めた。居合わせた地元の学生と一緒にたき火。

**3 月 19 日** Tataouine 近郊の Ksar 巡り > Tataouine [徒歩] Ksar 付近に住んでいる子供達がパンをくれたので喜んだら、後から金を要求されてがっかり…。物欲しげな子供達が ”bon bon(フランス語で candy の意)” と言いながら、後を付いて来る様は、戦後日本の ”give me chocolate” を思い起こさせる。いったん Tataouine に帰ってきた。以前宿泊した Hotel Ennour 泊。

**3 月 20 日** Tataouine > Ksar Ouled Debab [徒歩] 今度はホテルに荷物の一部を預けて、再びハイキング。途中、村人の家に招かれて、朝食を頂いた。日本では近年忘れがちな、ほのぼのとした家庭。Ksar Ouled Debab > Douiret [トラック] ヒッチ 大規模な古城遺跡群。オリーブの木の下で野宿。

**3 月 21 日** Douiret > Chenini [徒歩] 21km 歩き、少し疲れた。やはり大規模な遺跡群があり、岩山とヤシの木のハーモニーが美しい村。ここでも警察から職務質問。短く済んで、

コーラもおごってくれた。その後、売店へ食糧を買い求めに行くと、パンとヨーグルトを無料でくれた。小屋の上で野宿。

**3月22日** Chenini > Tataouine [徒歩] 途中、崖の上でピクニックしている学生達に呼ばれ、クスクスを御馳走になった。荷物を預けていた、Hotel Ennour へ戻る。

**3月23-25日** ズワイヤヤ、新たな友人イメッドなんかと遊んだり、日本人旅行者と偶然会ったり、スーク(市場)を散歩したり、カフェでくつろいだりして過ごす。ちょうど International Saharian Ksar Festival が開催されており、民俗衣装に身を包んだ戦士たちが、馬に乗って走り鉄砲を撃つパフォーマンスなどを見た。同宿泊。

**3月26日** Tataouine > Ghomrassen [車] ヒッチ 6km 歩いて、映画” Star Wars” のロケ地となったともいう Ksar Hadada を訪れる。Ksar Hadada > Beni Khedache [車3台] ヒッチ 景色のきれいな山道を越えて、Ksar Hallouf 着。親切な村民の家の横で眠らせてもらい、夕食まで出してもらった。

**3月27日** Ksar Hallouf > Matmata [ヴァン3台 & オートバイ] ヒッチ パノラマの道中。独特の洞窟住居。カフェの裏で野宿。

**3月28日** Matmata > Douz [ヴァン] ヒッチ 砂漠のツアーへの観光拠点の町なので、ラクダ・ツアーの客引きがものすごく多い。俺はそれを断り、2km 自分の足で歩いて白い砂の海を見てきた。午後から砂漠らしからぬ雷雨。土産屋の前で寝させてもらい、茶も頂く。

**3月29日** Douz > Tozeur [車 & ヴァン & ジープ] ヒッチ道中 Chott Jerida と呼ばれる塩湖は、日本では見られない珍風景。独特のレンガ造りの建造物が建ち並ぶ町。Hotel Essaâda シングル(D5)泊。

**3月30日** Tozeur > Chebika [車4台] ヒッチ 隆起した地層のうねりが大迫力。水晶のような石をたくさん拾った。Chebika > Tamerza [トラック] ヒッチ 閉業したレストランの軒先で野宿。

**3月31日** Tamerza > Mides [徒歩] 10km 歩き、その壮大な溪谷美を鑑賞。スケッチも楽しむ。Mides > Redeyef [ヴァン] ヒッチ この町で地元の人と仲良くなり、彼の家に招かれ茶菓子を頂き、いったんは泊めてもらうことになったが、例によって警察によって阻止されてしまった。Redeyef > Moulares [Chebikaで乗せてもらった同トラック] ヒッチ 深夜に着いたこの町で、マヘルと知り合い、今度は無事、泊めてもらった。

**4月1日** Moulares > Gafsa [車] ヒッチ Hotel El Bechir シャワーなしシングル(本来D5>連泊でD3に割引)泊。

**4月2-5日** ヤシの木の生い茂るオアシスの町で、のんびりと過ごす。19才の女学生に、俺の日本人独特のまっすぐな髪はどんなシャンプー使っているのか、きかれた。ただのセッケンなのにネ…。またもや警察に職務質問。パスポート &所持金チェックされた。同宿泊。

**4月6日** Gafsa > Bir El Hafey [ヴァン] ヒッチ この村で、村民の家に昼食に招待されて、少しくつろがせてもらう。Bir El Hafey > Oued Maiou [トラック] ヒッチ ヒッチ中

にも、警察から取調べを受けた。またしても村人に夕食頂き、泊めてもらった。

**4月7日** Oued Maiou > Sbeitla [ヴァン] ヒッチ ローマ時代の遺跡を、入場料を払わずに見学。ゴメンナサイ。 Sbeitla > Maktar [車3台] ヒッチ 夜着いたので、安宿を探そうか、野宿にしようかと、町をウロついたり地元の若者と路上で座り込んでおしゃべりしたりしていたら、警察に連行されてしまった。その晩は英語を話せる警察官が現れず、状況も良くわからぬまま、交番に泊まるハメに…。

**4月8日** 午前中一杯尋問。俺の長いヒゲ、俺のパスポートのパキスタンやイランの visa、またパキスタンで購入したイスラム教の礼拝用のゴザを気に留めて、しきりに俺がイスラム教徒かどうか質問した。テロリスト疑惑??? 食事も与えられぬまま、より大きい町へ移動することに…。腹が減ってることを訴えたら、パトカーの中でサンドイッチ買ってくれた。

Maktar > Siliana [パトカー] 何の説明もないまま、顔写真と指紋をとられそうになりモメる。 Siliana > Tunis [パトカー] 遂に刑務所のような施設に連れて行かれてしまった。警察官は監獄ではなく、OMI (Office Mundial Immigration) センターだと説明していたが、金網はあるし、銃を持った守衛はいるし、荷物検査で剃刀とロープは没収されたし(自殺防止?)…どう考えても監禁だった。

**4月9-11日** 1部屋 10人程収容、ぬるい共同シャワー、3食付。モロッコ、アルジェリア等からの、パスポート等になんらかの問題のある、労働者がほとんど。外出は無論許されないし、拘束の理由や期間の説明もない上に、日本大使館への連絡もさせてくれなかった。市内の警察署へ連行され尋問されて、アラビア語で書かれた2枚の書面にサインさせられた。号泣しているセネガルからの女性も見かけた。食事は、チキンや野菜、ヨーグルトなどバランスが取れていて、味も結構イケた。収容されていたモロッコ人の中に、スペイン語を話す男が一人いて、少し会話ができた。真偽の程は定かではないが、彼が言うには、この施設は囚人1人当り US\$20 程度、アメリカがテロリスト対策でチュニジアに資金提供しているとのことだった。そのモロッコ人や、リベリアからの英語を話す人達とおしゃべりしたり、朝と夕、布とヒモで作ったボールでサッカーしたり、それなりに楽しく過ごせた。センター泊。

**4月12日** Tunis > イタリアへ [フェリー] D59 結局、日本大使館に連絡もできず、自由行動もできないまま、強制国外退去処分になってしまった。…とはいえ、公式な手続きはないようだし、乗船券は自腹。同じ船に乗り合わせたスロヴァキアの自転車旅行者2人から、到着後入国管理官から visa 代名目 100Euros 請求され断ったところ、入国拒否になったという話をきいた。彼らと俺のパスポートは、チュニジア警察からイタリア船員に直接手渡されたので、船員は「どんな問題を起こしたのか」と大いに怪しんだが、俺が「チュニジアは本当に民主主義国家だと思いますか?」と問うと、納得してくれたようだった。…やっとな自由の身!

## 《イタリア》

**2004年4月13日** チュニジアより > Trapani [フェリー] チュニジア警察とのゴタゴタがあったので懸念された入国審査は、あっさり終了。久々に街を好き勝手に歩き回って、自由の身を満喫し、また、そのありがたさを思い知る。Trapani > Marsala [車] ヒッチハイク Marsala > Mazara del Vallo [車] ヒッチ 観光案内所でアメリカ人旅行者と知り合い、彼の宿に泊めてもらう。

**4月14日** 公園で Angelo さんと知り合い、彼の家に昼食に招かれた。話好きの優しい小太りのおじさんで、街をザッと案内してくれた。Angelo さんの家でしばらく居候していたオーストリア人の Alex は、イタリアを始めとしたヨーロッパの国々で路上生活を送っているという。涙を流して彼の子供の写真を見つめ、彼の母親が父親によって殺されたと言った。父親は刑務所で、Alex は独りぼっちで育ったらしい。半ば支離滅裂な話だったが、どうも彼の妻が彼に対する何らかの裏切りをして、家を出ざるを得なかったようだ。Pasta やステーキ、Apfelstrudel (オーストリア伝統 apple パイ) などの御馳走を頂く。後に、Angelo さんがホモであると判明し、彼の友人の性転換した2人の女性(?)にも会う。泊めてもらうことになり、Angelo さんのベッドで一緒に寝るようしつこく迫られたが、何とか逃れ、Alex と一緒に部屋に寝袋を敷いて寝た。…なんだか波瀾万丈の1日。

**4月15日** 早朝、Alex が列車で Trapani へ行くというので、駅まで見送り、切符代を払ってやった。俺も Angelo さんとこれ以上気まずい思いをしたくなかったので、悪いとは思っていたが世話になった彼に挨拶もなしで、そのまま出発することにした。

Mazara del Vallo > Selinunte [車3台] ヒッチ古代ギリシア遺跡観光後、ヒッチを続ける。Selinunte > Sciacca [車2台] ヒッチ2台目のレンタカーはオーストリアからの上品そうな若夫婦。同じ国からの旅行者といえども、Alex とはエライ違いだ。倉庫で眠る。

**4月16日** Sciacca > Agrigento [車] ヒッチ 運転手はクラシック好きの体育の先生。日本人指揮者の小沢氏をベタ誉めしていた。降車地から、神殿の谷を抜けて、市街地まで歩く。風雨強く寒い1日。橋の下で野宿。

**4月17日** Agrigento > Canicatti [車] ヒッチ Canicatti > Caltanissetta [トラック] ヒッチ今日も曇りがちで小雨のパラつく天気。Moncada 邸のレリーフや Castello di Pietrarossa 周辺の墓の彫刻が素晴らしい。さすが芸術のイタリア！廃屋で寝る。

**4月18日** Caltanissetta > Ponte Capodarso [徒歩]

車通りの少ない山道でヒッチできず 10km 程歩き、古いレンガ造りの橋にたどり着く。

Ponte Capodarso > Enna [車] ヒッチ 雨でずぶ濡れになりながらも、Castello di Lombardia 城など軽く観光。体育館裏泊。

**4月19日** ここ Enna はイタリア一標高の高い県庁所在地とあって、朝方少し寒い。建築中ビル泊。

**4月20日** Enna > Catania [車] ヒッチ Hospitality Club メンバーの Nicola と会い、映画を見て、泊めてもらった。

**4月21日** 朝食に、シチリア特産の *biscotti di mandorla*(アーモンド cookie)と紅茶を頂いた後、Nicola は仕事に行ったので、俺は独りで市内を観光。

夜、彼のいとこの Stefano と散歩に繰り出し、Catania 名物の *panino con cavallo*(馬肉サンドイッチ)や *selz limone*(塩レモン juice)を御馳走になる。Nicola の家泊。

**4月22日** Catania > Acireale [徒歩] 降り注ぐ太陽の下、青い海を眺めながらの散歩。空地で野宿。

**4月23日** Acireale > Fiume Freddo [車] ヒッチ Fiume Freddo > Naxos > Taormina [徒歩] ビーチ resort の町 Naxos から後の道は、丘を登る急勾配で疲れた。夜火花が打ち上げられていた。レストランの屋上で眠る。

**4月24日** Taormina > Messina [車] ヒッチ Messina > Villa S. Giovanni [フェリー] 0 Euro Villa S. Giovanni > Pizzo [車 4 台] ヒッチ シチリア島から渡る船は今回も無料だった。廃屋で寝る。

**4月25日** Pizzo > Striano [車] ヒッチ この運転手は Bologna で電気関係の仕事をしている人で、日本人サッカー選手中田英寿の部屋の工事も担当したそう。

Striano > S. Giuseppe V. [徒歩] 街角の、とある建物の、軒下で野宿。

**4月26日** S. Giuseppe V. > Pompei [徒歩] 遺跡は柵の廻りをグルっと歩き、外からチラホラと眺めることができた。Pompei > Portici [徒歩] 午後からも、Napoli 湾に沿って 10km 強歩く。踏み切りのそばで野宿。

**4月27日** Portici > Napoli [徒歩] 歩き過ぎで、さすがに足が棒のようになった。久々に宿を取り、一休み後、イタリア南都の美しき由緒ある教会巡り。Hostel of the Sun ドミトリー(E18)泊。

**4月28日** 朝食はシリアルやコーヒーなどの self サービスが付いていたので、時間をかけてたらふく食べ、昨日までの疲れを取るため、チェック out 時間ギリギリまで宿に居座り、休養。出発時、パキスタンで買った礼拝用のマットをどこかでなくしてきていたのに気づいた。野宿のときの敷物として重宝していたし、面白いお土産にもなると思っていたので、惜しい反面、イスラム過激派と間違われる可能性も低くなると思うと、少しホッとした。Napoli > Roma [セネガル人の車] ヒッチ イタリアに出稼ぎに来ているアフリカ人は結構多い。閉店後の店の前で寝る。

**4月29-30日** Piazza di Spagna( スペイン階段)や Fontana di Trevi(トレヴィの泉)や Bocca della Verita(真実の口) といったおなじみの名所を観光。Citta del Vaticano(ヴァチカン市国)にも行って来た。見所が多過ぎて歩き疲れた。野宿もう 1 泊。

**5月1日** Roma > Follonica [モヒカン&皮ジャンでパンクな 4 人組] ヒッチ

Follonica > Lucca [ドイツ人旅行者] ヒッチ 城壁に囲まれた古くて風情のある町。空地で眠る。

**5月2日** Lucca > Massaciuccoli [徒歩] トルコで会った Andrea の住所を教えてもらっていたので、訪ねてみる。テクテクと緩い山道を歩いて湖へ出る。そのほとりにある bird ウォッチングや観光ボート、カヌーなどが楽しめる” Oasi Massaciuccoli” という娯楽施設で、彼は働いていた。トルコ旅行中に望遠鏡を貸してくれた彼が、やけに鳥の種類や生態に詳しくあった理由が、今やっとわかった。食事も御馳走になり、泊めてもらう。

**5月3日** Andrea の施設にはボランティアの学生達がいて、午前中は彼らと湖畔の公園のテーブルを組み立てる手伝いをし、午後は森の散歩に連れて行ってもらい、海辺で一緒に昼寝をした。道中、珍しい鳥を見て、興奮して図鑑をひろげ、携帯電話で仲間と連絡を取り合う様子は、彼らがいかに愛鳥家であるかということを証明していた。夜は、Andrea とその彼女に、チャーハンとスープを作ってあげた。イタリアの田舎では、日本食を作りたくても、なかなか食材が入手し難いから、やむなく中華料理…。同施設泊。

**5月4日** Massaciuccoli > Pisa [Andrea の車] 朝、café を頂いて、すっかりお世話になって、車で送ってもらって、ciao (またね) ! 天気は雨。有名な Torre Pendente (ピサの斜塔) を真下から見上げ、大迫力! 路上で野宿。

**5月5-6日** 断続的に小雨、ときには雷鳴と共にあられが降ってきたりという、あいにくの悪天候。街を歩いていると、あの斜塔の他に、もう一つ別の傾いた塔のある教会をみつけた。この町は過去に地震でもあったのかな? アーチ型の門の下や、駅舎の裏で寝る。

**5月7日** Pisa > San Giuliano Terme [徒歩] 夕方、また激しいあられ。建築中の家で眠っていたら、夜中、足元まで浸水っ!

**5月8日** San Giuliano Terme > Lucca [徒歩] 再びこの町に戻って来て、Hospitality Club メンバーの Roberta の家に泊めてもらう。たくさんの彼女の友人が訪れて、食材をスーパーで買って、深夜までホーム party。オードブルはおいしかったものの、俺は言葉の壁と、眠さと、花粉症との戦いだった…。

**5月9日** Lucca > Empoli [車2台] ヒッチ 深夜までのパーティー後なので昼過ぎに起床して出発。橋の下で野宿。

**5月10日** Empoli > Ortimino [車] ヒッチ Ortimino > Monte Spertoli [徒歩] 緑濃い Toscana 地方の静かな小村に住む、Hospitality Club メンバーの Laura 夫人に、車で出迎えてもらい、七面鳥の豪華な食事を頂き、泊めてもらう。

**5月11日** Monte Spertoli > San Pancrazio [Laura 夫人の車] San Pancrazio > Firenze [徒歩] Laura 夫人に送ってもらった所からヒッチできず 20km 歩き、花の都まで。路上で寝る。

**5月12日** Firenze > Modena [ガーナ人のトラック] ヒッチ Napoli に続き、ここでもアフリカからの出稼ぎ労働者に助けられる。路地の片隅で眠る。

**5月13-14日** 静かで落ち着いた街並みは、南とは違う北イタリア独特の雰囲気。教会や宮殿の素晴らしい彫刻や絢爛豪華な建築を見ながら、散歩するのは楽しい。本来のイタリアの5月の天候を取り戻し、すこやかな晴天。そよ風に舞う白い綿毛が、花粉症を活発化さ

せ、くしゃみと鼻水、そして目がかゆくてたまらない…。野宿 2 泊。

**5 月 15 日** Modena > Reggio Emilia [車] ヒッチ Autostrada(高速道路)の本線でヒッチしていたら、警察に職務質問&荷物検査され、サービス area であるよう指示されちまった。

Reggio Emilia > Bergamo [トルコ人の車] ヒッチ “Merhaba(こんにちは)” など、久々にトルコ語で片言会話ができて面白かった。缶ジュースをもらった。広場のベンチで寝る。

**5 月 16 日** Hospitality Club メンバーの Maria に会い、Citta Alta(上街)を案内してもらった。Bergamo の歴史ある旧市街は、珍しいことに丘の上の城壁に囲まれた一画にあるのだ。

Maria の家族に Pizza やケーキ御馳走になり、泊めてもらう。

**5 月 17 日** Bergamo > Lecco [オープン car] ヒッチ 湖の背後に雪帽子の山がそびえる美しい町。Lecco > Lierna [Hospitality Club メンバーの彼氏の車 ] 次なるメンバーの Laura は学生で英語が話せるのだが、電話に出たのは母親でイタリア語のみ！どうにかこうにか話をつけて、車で迎えに来てもらい泊めてもらった。

**5 月 18 日** 朝食を頂いた後、Laura は試験勉強で忙しいということで、俺独りで街の散歩。お弁当にパンとサラミを持たせてくれた。30 度くらいまで気温が上がり、湖畔で昼寝すると気持ち良かった。Castello di Vezio と呼ばれる塔からの眺めも良かった。Laura の家泊。

**5 月 19 日** Lierna > Lecco [車] ヒッチ Lecco > Erba [ワゴン] ヒッチ

Erba > Como [車] ヒッチ ここも湖畔の町。スイス国境近し。公園で野宿。

**5 月 20 日** Como > Chiasso [徒歩 ]歩いて国境越え。スイスは EU 非加盟なので、パスポート検査あり。

## 《スイス》

**2004 年 5 月 20 日** Chiasso > Lugano [英語のすごく上手い男性] ヒッチハイク

ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の 4 つを公用語とするこの国は、さすがにイタリアよりも国際的で、英語を話す人が多いようだ。ちなみに、この辺りスイス南部の公用語はイタリア語。Citi Bank のカードが、チュニジアのときに続いて、また使えない。原因は不明だが、当面の食料に困る。イタリアの Lierna の Laura から、出発に際して持たせてもらったアメでしのぐ。Lugano > Bellinzona [女性 3 人] ヒッチ Bellinzona

> Biasca [イタリア語のみの男性] ヒッチ Biasca > Piotta [徒歩] 廃屋の裏で野宿。

**5 月 21 日** Piotta > Airolo [トラック] ヒッチ この町で、やっとカードで金を下ろせて、一安心。この先のアルプス越えにあたり、一般道は積雪のため今月一杯通行止めということで、高速道路でヒッチを余儀なくされる。しかし、始めるか始めないかのうちに、警察に制止された。さすが日本と並び称されるほど、ルールにお堅い国…反応が早い。しかた

なく鉄道を利用。**Airolo > Göschenen** [列車] 5.80 Swiss Francs (=約¥450) ここから北部地方の公用語はドイツ語。かなりスイスなまりがあるらしいが…。

**Göschenen > Altdorf** [車2台] ヒッチ 体育館のような施設の、外のベンチで寝袋を敷いていたら、Arnest さんという旅好きの男性が声を掛けてくれて、家に泊めてくれた。先進国でこのような行きずりの親切に遭遇する。

**5月22日** 朝、Arnest さんにコーヒーとヨーグルトを頂き、道中食にバナナとリンゴまでも持たせてもらう。**Altdorf > Luzern** [英語を少しだけ話す人] ヒッチ 小雨の中、有名な橋 Kapellbrücke など観光。 **Luzern > Willisau** [車3台] ヒッチ 静かな鉄道の駅のベンチの上で寝る。

**5月23日** **Willisau > Oberburg** [車3台] ヒッチ **Oberburg > Burgdorf** [徒歩] Hospitality Club メンバーの Devid に迎えに来てもらい、彼らの住む伝統的な農村の家へ。

**Burgdorf > Lyssach** [バス] SF3

芸術や音楽を愛好する若者達が、大きな古い伝統的な農家の家を買って、共同生活をしていた。自家製のパンとジャムは絶品！Devid 達の家泊。

**5月24日** **Lyssach > Kirchberg** [徒歩] **Kirchberg > Zuchwil** [車] ヒッチ 次なる Hospitality Club メンバーは学校の先生の Roger。彼は2台自転車を持っていたので、一緒にサイクリングがてら、Solothurn の旧市街を案内してもらった。手作りのタイ風カレーも御馳走になり、T シャツも頂いた。Roger の家泊。

**5月25日** 早朝、Roger と一緒にランニングして、ちょっと小高い林からアルプス山脈を眺める。昼間は、また一緒に自転車に乗り、コウノトリ保護区にもなっている **Altreu** という町へ行き、川沿いの雰囲気の良い野外レストランで食事後、Roger は学校の仕事のため帰ったので、独りでもう一息遠出して、**Büren** というかわいらしい町までサイクリング。

夕方、Roger のオートバイの後ろに乗せてもらい、彼の友人の住む山間の村へ行き、**Poule** という重い銀の球を投げてぶつけ合うゲームに交ぜてもらった。同家泊。

**5月26日** **Zuchwil > Langenthal** [徒歩] **Langenthal > Rothrist** [女性 & 犬2匹] ヒッチ

この女性はサウジアラビアで長く生活していたといい、当初の彼女の目的地より足をのばして乗せてくれた。「忙しい中すみません」と俺が言うと、「時間はあると思えばいつでもある」と答え、時間に追われがちなスイスの生活を批判した。スイスはヨーロッパの中でEUに加盟せず孤立しがちだし、島国日本と精神的にどこか共通点を感じる。

**Rothrist > Rapperswil** [車] ヒッチ ここで出会った Hospitality Club メンバーは、Carinne と Manuel。俺よりもずうーっと若い学生2人で、スカウトの友達同志。Carinne の父親はピアニストで、音楽に囲まれた家庭環境。弟のピアノと俺のギターの合奏は楽しかった。ヨーロッパで人気のテーブル soccer 盤ゲームや Poule をして遊んだり、スイス独特のおやつ **Birchermüsli**(オート flake、果物、チョコ chip など) を牛乳で和えたデザート)

を頂いたりして、楽しい時間を過ごす。Carinne の家泊。

**5月27日** Carinne の学校へ一緒に登校(?)。先生の許可を得て、フランス文学と物理の授業に参加させてもらった。もちろんチンプンカンプン?!放課後、Aarau の街の古い歴史的な建物を見物。路上 musician も芸術的なヨーロッパの街並みを背景にすると、日本のそれとはくらべものにならないほど良く映える。家に帰ると、両親が昼食に Raclette を御馳走してくれた。大きな丸いチーズを半分にカットし、切り口を溶かしてナイフで削ぎ落とし、そのトロトロのチーズをゆでたジャガイモにかけて食べる料理。伝統的にはチーズを火であぶったそうだが、近年は専用の電熱器が多くのあるようだ。激旨っ!夜、Carinne と Manuel と 3 人で映画(フランス語でほとんどわからず…)鑑賞後、Lenzburg へ移動し、今度は Manuel の家に泊めてもらう。

**5月28日** 日中は Lenzburg の街を独りで歩き回る。夜は Manuel と一緒に小高い丘に登ってサッカー。バカンス直前の大勢の学生達とおしゃべり。Manuel の火を吐くショーは迫力があり、夜景は美しかった。同家泊。

**5月29日** Lenzburg > Wohlen [ヴァン] ヒッチ Wohlen > Zürich [2人乗りのミニ車] ヒッチ スイスで一番大きな町。ただし首都は Bern だが…。Hospitality Club メンバー Tina は、タイでボランティア活動をしていたこともある賢い女性。彼女の boy フレンドやタイ人の友人との夕食に招かれ、川原でのインターネットを利用したスライド映画上映会を観た。Tina の家泊。

**5月30日** Tina 達とレストランでの食事に誘われたが、俺には高級すぎて残念ながらお断りし、独りで植物園や博物館など(もちろん入館無料の所ネ)を観光して廻る。

スッキリとした快晴で、湖の周りの広場では、水着でバレーやサッカーをしている人で溢れていた。海のないスイスらしい。湖越しのアルプス山脈の風景も、もっともスイスに似つかわしい景色の一つといえるだろう。同家泊。

**5月31日** Zürich > Kloten [徒歩] 小雨の中、2時間程歩くハメに…。大都市からのヒッチは難しいのが常。Kloten > Bürac [車] ヒッチ Bürac > Eglisau [車] ヒッチ そこから少し歩いた Hüntwangen-Wil 駅で、スイス最後になる Hospitality Club メンバー Jolanda と待ち合わせ。ロシア留学経験もある利発な女性。一緒にライン川の上流の滝を見に行き、ソーセージとアイスクリームを食べた。両親は夕食に Raclette を作ってくれた。Jolanda の家に泊めてもらう。

**6月1日** ドイツへ [Jolanda の父親の車] 朝食後、サンドイッチやジュースを昼食用に持たせてもらって、すっかり世話になった上に…なんと父親が国境を越え車で送ってくれた

## 《ドイツ》

**2004年6月1日** スイスより > **Singen** [Jolandaの父親の車] 国境の検問では、スイス人である Jolanda の父親はパスポートを一瞥しただけだったのに、俺のパスポートはかなり入念に調べられた。世話になりっぱなしだった父親とお別れ。

**Singen > Villingen** [女性ドライバー] ヒッチハイク ヒッチ発祥の国とも言われるドイツ1台目の車は女性による運転。旅行好きの人らしく、イタリア Elba 島の石を、激励の言葉に添えてプレゼントされた。Danke(ありがとう)。**Villingen > Schweningen** [徒歩] 橋の下で野宿。

**6月2日 Schweningen > Rottweil** [徒歩] 天気は、あいにくの雨。小高い丘の上に位置する旧市街を、ちょっと観光。金色をふんだんに使った、輝かしい装飾の施された家々が美しい。悪天でヒッチしにくいという判断で、夕方また歩く。

**Rottweil > Neukirch** [徒歩] バス停のベンチで寝る。

**6月3日 Neukirch > Bodel Shausen** [徒歩] なんだか勢いで、今日も30km以上歩き、肩こる。名城 Burg Hohenzollern のふもとに着いたときには、ちょうど激しい雨にやられ、登ってみるのは断念した。工場木材置き場で眠る。

**6月4日 Bodel Shausen > Tübingen** [徒歩] **Tübingen > Herrenburg** [ワゴン] ヒッチ **Herrenburg > Gärtringen** [地元ヒッチハイカーと一緒に乗る車] ヒッチ この車、俺より少し前に別のドイツ人カップルのヒッチハイカーをすでに拾っていて、同乗させてもらった。さすがヒッチ天国、乗せてもらう競争率も激しい(?)。 **Gärtringen > Heidelberg** [女性ドライバー] ヒッチ日本では俺一人でヒッチしていて、女性の車に拾われるのは稀だが、この国では入国4日目にしてすでに2台目。その上、パーキング area でk affee 一杯御馳走になってしまった。野宿。

**6月5日** 結果的にドイツで唯一人となった Hospitality Club メンバー Lena と会い、散歩へ。かのヘーゲルも思索にふけたという”Philosophien Weg(哲学の道)”と、クネクネと曲がりくねった”Schlangen Weg(へびの道)”と呼ばれる遊歩道を抜けて、城へ登り、緑に囲まれた旧市街の絶景を見下ろす。Lena の父親は心理学者で、禅の知識もあり、また芸術家でもある。色々な音楽の CD を聴かせてくれた。夜、Lena と父親と3人で、橋の上から花火見物。ヨーロッパ独特の雰囲気のある城を背景に打ち上げられる花火は、日本のとは一風異なる趣。パンにソーセージのスライスとチーズといった、ドイツならではの軽い夕食を御馳走になった。日本と違い、この国では昼食に重きを置く。Lena の家泊。

**6月6日 Heidelberg > Darmstadt** [ワゴン] ヒッチ **Darmstadt > Kassel** [デンマーク人家族] ヒッチ 気持ちの良い晴天の1日。墓近くの広場のベンチで野宿。

**6月7日 Kassel > Münden** [若い兄ちゃん] ヒッチ **Münden > Göttingen** [トラック] ヒッチ

**Göttingen > Potsdam** [親切な男性] ヒッチ この運転手には、お菓子や Kaffee ももらった。世界遺産に登録されており、あのポツダム会談の会議場に使われたという、Schloß Cecilienhof(ツェツィリエンホーフ宮殿)を観光。教会の前で寝る。

**6月8日** 天気がとても良い反面、花粉がウヨウヨ飛んでいて、くしゃみが止まらない。

18世紀に建造されたドイツを代表するロココ様式の、Schloß Sanssouci(サンスーシ宮殿)のある公園を歩き回る。日本人の団体旅行客も見かけた。廃屋で眠る。

**6月9日 Potsdam > Berlin** [徒歩] 首都まで30kmということで、さあ歩いてみようかと思ったら、どしゃぶりの雨!!!ずぶ濡れウォーキングは決して爽快とは言えない…。

スイス人 [Hospitality Club](#) [メンバーRoger](#) のオートバイで連れて行ってもらった、Zuchwil 近郊の山村で出会った、Stefan のアパートに泊めてもらう。

**6月10日** 昼間、Stefan は仕事のため、独りで Berliner Dom(ベルリン大聖堂)や Brandenburger Tor(ブランデンブルク門)などを観光。教会の前でゴスペル concert を見かけた。夕方、Stefan と一緒に、日本食 Imbiß へ繰り出す。レストランよりも安めのドイツ版ファースト food 店を”Imbiß”と呼ぶ。久々の巻き寿司と味噌汁に舌鼓を打つ。彼はそこの従業員は日本人だと言うので、俺が「こんにちは」と挨拶してみたが、返答なしで当惑顔。どこかアジア系の人達のようにだった。同家泊。

**6月11日 Berlin > Linum** [車] ヒッチ **Linum > Wittenburg** [トラック] ヒッチ

**Wittenburg > Hamburg** [アイルランド大好き青年] ヒッチ 旅行好きの青年のようで、運転中、彼が最近訪れたというアイルランドの話に終始していた。ドイツ第2の都市着。Außen Alster(外アルスター湖)の西岸のほとりのベンチで野宿。

**6月12-13日** St. Nicolai, Katharinen, Michaelis といった教会を訪れたり、Holsten ビール協賛のロック concert を見物したりして過ごす。

International Gay Festival が開催されていたので覗いてみると、「君、顔が興味深いから、写真撮らせてよ」と言われたが、その男性はゲイに間違いないので複雑な心境…。

湖の西岸のほとりの例のベンチに、寝袋を敷き、もう2連泊。向こう岸には歴史的な建物が立ち並び、それを背景にヨットやカヌー、そして水鳥たちが、湖面を静かに行き交う。

**6月14日 Hamburg > Kiel** [身障者ヘルパー] ヒッチ **Kiel > Flensburg** [大型ワゴン] ヒッチ レンガ造りの伝統的な家並みが美しい、国境の町。カフェの前のベンチで眠る。

**6月15日 Flensburg > デンマークへ** [徒歩] 朝、ビーチの海水浴客用の水シャワーで、体を洗い清め、出国。Tschüß(さよなら)!

## 《デンマーク》

2004年6月15日 ドイツよりデンマーク入国 > **Kruså** [徒歩] **Kruså > Kolding** [イスラムを異常に毛嫌う人] ヒッチ **Kolding > Odense** [東南アジア旅行好きの人] ヒッチ **Odense > Nyborg** [車] ヒッチ 北欧はほとんどの人が流暢に英語を話すため、運転手との会話も弾む。 **Nyborg > København** [会議に出席するというビジネス man] ヒッチ

いくら小さな国とはいえ、入国した日のうちに首都までたどり着けるとは、我ながら思っていなかった。しかも各島をつなぐ橋で、運転手が高額の通行料を支払っているのを見るにつけ、一銭も払わない己の傲慢さに後ろめたさすら感じ…。豊かな北欧ということで、安心して切って公園で寝る…が(!)、夜中、1人の男が俺の身边を物色しているじゃないか!!! 俺が驚いてガバッと起きると、男はそそくさと去って行った。暗がりの公園は物騒なので、より明るい教会そばのベンチに移動して、野宿。

6月16日 **Marmor Kirche**(マール教会)や、**Die Kleine Meejungfrau**(人魚姫像)などを観光後、昨日予想外に早く着いたので連絡できなかった、タイで知り合ったデンマーク国籍イラン人 Hashem に電話してみる。タイやイランをはじめとした、世界各国の旅行の話で盛り上がり、泊めてもらう。

6月17日 Hashem は軍の兵役義務で忙しい中、俺のためにどうかこうにか時間を割いてくれた。旨い手作りパスタの夕食後、タイでも教えてもらったイラン式トランプで遊ぶ。2度目とはいえ、1年半振りなのでルールを思い出すのに、四苦八苦…。同家泊。

## 《スウェーデン》

6月18日 **København > Malmö** [ワゴン] ヒッチ 船に乗ることになるだろうとばかり思っていた、スカンジナビア半島までの道は、海底トンネルのおかげで、幸運にもヒッチ成功! さすがEU圏内、国境もないに等しい。東の間のデンマーク旅行が終わる。スウェーデン入国。天気は雨。 **Malmö > Lund** [スーダン人 & アルジェリア人] ヒッチ ヨーロッパでアフリカ人に助けられるのは、これで何回目になるだろうか。用具室の横で眠る。

6月19日 **Lund > Helsingborg** [ルーマニア人] ヒッチ **Helsingborg > Ängelholm** [日本に3ヶ月滞在したという人] ヒッチ **Ängelholm > Halmstad** [若者] ヒッチ

**Halmstad > Getinge** [旧ユーゴスラビアからの3人組] ヒッチ **Getinge > Falkenberg** [デート帰りの中年男性] ヒッチ この日は、東ヨーロッパからの移民に、2回も拾われた。

最後の中年男性は離婚歴があり、現在交際中の女性と映画を見て、その帰りだと言う。先進国における高い離婚率の問題について、おしゃべり。

万国共通の天下のファースト food 店、McDonald's の横で、寝袋を敷いて寝る。

6月20日 **Falkenberg > Varberg** [インド人学生] ヒッチ 彼らは昨日の McDonald's の

従業員で、コーラとマフィンをくれた。**Varberg > Göteborg** [車] ヒッチ ここで北欧初となる Hospitality Club メンバーStellan と会い、泊めてもらう。街を観光後、ヨーロッパ人の 18 番(?) パスタを作ってもらい、TV でサッカー観戦。

**6 月 21 日** スウェーデンに来て以来、一番良い天気。Stellan と彼の同居人達と一緒に Rambergsstaden と呼ばれる丘へハイキング。夜は、その同居人の 1 人 Gika が、丹精こめて作ったラザニアとチョコ cake を御馳走してくれた。同家泊。

**6 月 22 日 Göteborg > Floda** [エジプト人のトラック] ヒッチ **Floda > Västerås** [エンジニア] ヒッチ **Västerås > Uppsala** [スチュワード] ヒッチ この British Airway の乗組員の男性が、気前良く自宅のインターネットと彼の携帯電話を貸してくれて、次の Hospitality Club メンバーと連絡が容易に取れた。Henrik と Simon という 2 人のメンバーと、もう 1 人の学生と一緒に暮らすアパートで、Vegetarian 食を頂き、泊めてもらう。北欧で菜食主義は、結構ポピュラーだ。

**6 月 23 日 Uppsala > Tönnebro** [陽気なおっちゃん] ヒッチ **Tönnebro > Sundsvall** [父親と娘] ヒッチ 続いての Hospitality Club メンバーは Maria という旅行好きの女性。最近訪れたキューバの写真を見せてもらう。時同じく中国人の友人が遊びに来ていて、一緒に泊めてもらう。

**6 月 24 日 Sundsvall > Hornön** [女性ドライバー] ヒッチ **Hornön > Bjästa** [新任教師] ヒッチ 次なる Hospitality Club メンバーの家が近づいてきたので、一度連絡を入れようと思って、公衆電話を探すが見当たらない。携帯電話の普及による弊害か…。困っていると現れたのが、元船乗りという元気なおじさん、Roland 氏。彼の携帯電話を貸してくれた上に、なんと、そのメンバーの家の前まで乗せてもらってしまった。 **Bjästa > Köpmanholmen** [Roland 氏] Roland 氏とここで泊めてもらうメンバー Iris 夫人は、偶然にも知り合いだった。小さな村だから無理もないだろうか(?)。Iris 夫人は、教育関連の職業に就き、女手一つで息子 2 人育てる強き母。近隣の林から絶えず小鳥が飛来する、北欧の田舎の生活を垣間見る貴重な滞在。

**6 月 25 日** この日は、一年で一番昼の時間が長い、Midsommar Festival(真夏祭)。

あいにくの雨だが、Iris 夫人に folk ダンスを見物に連れて行ってもらった。伝統的な木造の小屋で、民俗衣装を着た人々が、アコーディオンやバイオリンに合わせて踊る、いかにも北欧らしい催しに、大満足！昼食はスウェーデン郷土料理の魚の酢漬け、夕食は豚肉の御馳走。同家泊。

**6 月 26 日 Köpmanholmen > Örnsköldsvik** [Iris 夫人] 2 泊世話になった上に、20km 離れた大きな町まで送ってもらう。 **Örnsköldsvik > Umeå** [ワゴン] ヒッチ **Umeå > Vaännäs** [スケボーをしに行く若者 3 人組] ヒッチ **Vaännäs > Bjurfors** [兄ちゃん 2 人] ヒッチ

**Bjurfors > Lycksele** [犬乗ったジープ] ヒッチ 日が長く、夜遅くまでヒッチ可。公園の湖のベンチで、水鳥の鳴き声聴きながら寝る。

**6 月 27 日 Lycksele > Storuman** [バイアスロン選手] ヒッチ

## 《ノルウェー》

**Storuman > Moi Rana** [ドラマー] ヒッチ 美しい湖と山の Lappland 地方を抜け、いったんスウェーデン出国。ノルウェー1日目は観光案内所の前で眠る。遅い日没後も夕焼け状態が長く続き、朝 3 時頃にはもう日が昇り明るい。日本ではない面白い体験だが、野宿の身にはちとツライ。

**6月28日 Moi Rana > Storforshei** [ワゴン] ヒッチ **Storforshei > Løding** [オーストラリアからの女性一人旅] ヒッチ この旅行者もノルウェーが初めてということで、道路沿いの北極圏入りのモニュメントと一緒に興奮！また、道が不案内で遠回りするハメにもなってしまったのは、ご愛嬌。**Løding > Fauske** [オーストラリアから移住してきた男性] ヒッチ ノルウェーはヨーロッパ随一の物価の高さを誇るが、日本のように人口が密集していない影響だろうか、スーパーですら安い食材が見つげにくく苦勞した。駅のベンチで野宿。

**6月29日 Fauske > Ulsvåg** [ワゴン] ヒッチ この運転手の親戚の家に立ち寄り、茶菓子を御馳走になる。**Ulsvåg > Narvik** [ジープ] ヒッチ 運転手はヒゲ面の気さくなおじさんで、途中、フィヨルドを渡るフェリー代までも、払ってもらってしまった。ささやかなお礼として、船内でコーヒーを 1 杯おごった。ノルウェーでただ一人、そして今回の旅の最北の Hospitality Club メンバー、Jimmy の家に泊めてもらう。彼はこれまで約 100 カ国の旅行経験の持ち主で、後に俺が東ヨーロッパ旅行中、セルビアで短い再会を遂げることになる。

**6月30日** 午前中、Jimmy が仕事に行っている間、家の中で彼の世界各地の旅行の記念写真を見ていたが、何しろ滞在国数が多く、かなりの時間を要した。午後から、彼の車でフィヨルド観光の予定だったが、雨で中止。湖畔の彼の母親の家に招待され、ワッフルと紅茶を頂き、安らぎのひとつ。白夜は体験できたものの、雨で[真夜中の太陽]にはお目にかかれなかった。同家泊。

## 《スウェーデン》

**7月1日 Narvik > Riksgränsen** [スキーヤー兼ダイバー] ヒッチ ノルウェーを去り、スウェーデンにまた戻ってきた。**Riksgränsen > Kiruna** [リゾートで働いている人] ヒッチ **Kiruna > Svappavaara** [元ヒッチハイカー] ヒッチ **Svappavaara > Gällivare** [オーストラリア人] ヒッチ 道中、トナカイとキツネ数回出現！キャンプ用薪を保管してある木造の倉庫で寝る。

**7月2日 Gällivare > Hakkas** [トラック] ヒッチ **Hakkas > Morjärv** [車] ヒッチ 明るいので、つい夜遅くまでヒッチしてしまい、町に着いたときには、どの店も閉まっ

ており、夕食抜き。缶コーラで腹を満たす。閉店後のカフェの敷地内で野宿。

**7月3日** **Morjärv > Töre** [パキスタン人夫婦] ヒッチ **Töre > Kalix** [ヒッチハイクを将来したいと考えている人] ヒッチ **Kalix > Karlsborg** [若者2人] ヒッチ **Karlsborg > Sangis** [トラック] ヒッチ **Sangis > Haparanda** [Stockholm からドライブしてきたという人] ヒッチ **Haparanda > Tornio** [徒歩] 歩いてスウェーデンを後にし、国境を越え、フィンランド入国。学校の敷地内で野宿。

## 《フィンランド》

**7月4日** **Tornio > Oulu** [マラソンrunner] ヒッチ 店の屋外展示品の、小型ログ cabin の中で、寝袋を敷いて寝る。余談ながら、フィンランドの通貨は Euro だが、北欧の物価の高さのせいか、おおらかな国民性のせいか、いさ知らず、他国では流通している 1cent や 2cents 硬貨が、この国ではほとんど使われない。価格は 5cents 単位で切り上げたり切り捨てたりされるのだ。

**7月5日** **Oulu > Kempele** [タイ人と結婚している男性] ヒッチ

**Kempele > Jyväskylä** [英語が全くダメなトラック運転手] ヒッチ 気温 20 度くらいなのに、湖で少女達が元気に泳いでいた。湖畔の更衣室で眠る。

**7月6日** **Jyväskylä > Kangasala** [父親と娘] ヒッチ とてもフレンドリーな親子で、途中、父親の仕事である工場建設予定地の視察に立ち寄りペンと帽子をもらい、コーヒーを御馳走になり、その上、約束してある Hospitality Club メンバー Emmi と携帯電話で連絡まで取ってくれた。Emmi は主婦。幼い息子の Leevi と、ヒゲを引っ張られたり…無邪気に遊ぶ。雨上がりの夕方、庭で、珍しい 2重虹 を見た。Emmi の家泊。

**7月7日** 午前中、Emmi と Leevi と連れ立って、森を抜けて湖まで散歩。翌日の Leevi の誕生パーティーに備えての、スーパーでの買い出しにも付き合う。夕方、俺が、日本風の砂糖を入れた卵焼きと、簡単なスープ(残念ながら味噌汁ではない)を作ったあげたら、お返しに Emmi が、パンケーキを作ってくれた。夜、サウナでソーセージを焼いてくれた。フィンランドはサウナ発祥国で、日本の風呂のように各家庭に設置されていることも珍しくはない。今日も雨。同家泊。

**7月8日** **Kangasala > Hyvinkää** [女性3人] ヒッチ 久々の晴天。丘の上で野宿。

**7月9日** **Hyvinkää > Jokela** [徒歩]

北欧最後となる Hospitality Club メンバー Tomi は、優しくて恰幅の良い男性。

ロシア人の奥様は英語教師。偶然その日が彼女の誕生日 (Leevi の次の日じゃないか!) で、Tomi が彼女のために作った愛情たっぷりの苺ケーキに、俺もありつけた。Tomi の家泊。

**7月10日** 小雨の中、Tomi と彼の妻と3人で、郊外の森へハイキング。やや時期尚早だが、道端にブルーberry が生えていて、採り放題！食べ放題！湖畔で Tomi が持参したソーセー

ジを焼いて食べた。自然の中で食べると旨さは格別！フィンランドの湖畔には大抵、誰でもピクニック出来るように、薪や鉄の網、そしてベンチやテーブルといった施設が、あらかじめ整っているようだ。夜、帰宅後にも Tomi が、鶏のスパイシー焼きを御馳走してくれて、これまた旨し！食後は、やっぱりサウナ！ここは共同住宅なので曜日交代とのこと。同家泊。

**7月11日 Jokela > Helsinki** [Tomi と Vera と共に彼らの自家用車で] Tomi 夫妻が、崇高なる首都を、一緒に観光案内してくれることに。市電と徒歩で、町のたぐさんの見所を案内してもらい、写真も撮ってくれた。安い船は明日まで待たねばならず、橋の下で寝袋にくるまり、一夜を明かす。

**7月12日** 早朝、橋近くのアパートの前で歯を磨いていたら、飲み明かして朝帰りの若者が声を掛けてきた。彼の名は Simo、部屋でコーヒーによばれた。酔っていて上機嫌に旅の話などをし、船旅に備えてサンドイッチと菓子を持たせてくれた。

**Helsinki > エストニアへ** [船] E15 フィンランドを去り、バルト3国の旅へ！

## 《エストニア》

**2004年7月12日** フィンランド > Tallinn [船] エストニアの首都は、おとぎばなしの世界のように可愛らしい町。Hospitality Club メンバーの Kalvi 君と会い、一緒にバスで郊外の家まで。

**Tallinn > Laagri** [バス] 15 Kroon (=約¥130) Kalvi 君にフランス式のコーヒーを淹れてもらい、泊めてもらう。

**7月13日 Laagri > Pärnu** [ママさんドライバー] ヒッチハイク **Pärnu > Reiu** [優しい夫婦] ヒッチ **Reiu > Saulkrasti** [若い兄ちゃん] ヒッチ 3台目の車が、ラトヴィアまで乗せてくれた。国境に両替所がなかったので、親切にも最寄の銀行に寄ってくれた。結局エストニアにはたった1泊の滞在となった。

## 《ラトビア》

**7月14日** 母親においしい料理をたくさん頂いたが、きゅうりの漬物は、西ヨーロッパのピクルスとは違い、どちらかというと日本の浅漬けのような味だったので、懐かしかった。Inga の車で Bīrinu と Turaida の城を観光。入場料の一部を彼女が払ってくれた。夕食は、彼女の兄夫婦も一緒に、庭でバーベキュー。同家泊。

**7月15日 Saulkrasti > Rīga** [車] ヒッチ 美しい旧市街観光後、仕事を終えた Inga とそ

の友人と待ち合わせ、Hospitality Club の会合へ。世界各地の有志メンバーが、随時交流会を開いているというのは小耳に挟んだことがあったが、自分が出席するのは初めて。俺と同じく旅行中で他のメンバー宅に泊めてもらっているフランス人やブラジル人のメンバーともおしゃべり。会合で知り合ったメンバーの1人 Bebe の家に、首尾良く今夜の宿をお願いした。彼女は動物をこよなく愛する菜食主義者で、俺が中国で犬を食べたことを告げると、言葉を失っていた。

## 《リトアニア》

**7月16日 Riga > Iecava** [父親と息子] ヒッチ **Iecava > Bauska** [トラック] ヒッチ  
**Bauska > Muita** [ワゴン] ヒッチ **Muita > Panevėžys** [Adrian] ヒッチ

この小さな赤い車を運転する屈強なポーランド人 Adrian が、国境を越えてリトアニアまで乗せてくれた。彼は反戦運動でイラクも訪れたことがあるというから驚き。彼の携帯電話で次の Hospitality Club メンバーに連絡をとってくれた。

そのメンバー夫婦のアパートに泊めてもらう。彼ら自身も、旅行のときはヒッチハイクだといい、旅先の写真を見せてもらい、いろいろおしゃべり。翌朝は、出発にあたってサンドイッチを作ってもらい、ヒッチしやすいポイントまで送ってもらった。

**7月15日 Panevėžys > Kaunas** [若いカップル] ヒッチ **Kaunas > Marijampolė** [大男2人組] ヒッチ この国ではヒッチは相当ポピュラーのようで、Kaunas のハイウェイで3グループが並んで待っているのを見かけた。野宿しようと街をウロウロ歩き回っていると、17-18 才くらいの若者達が泊めてくれた。

**7月18日** 天気良好！昨日の若者達と一緒に、湖で泳ぎ、サッカー。苺がちょうど時期で、たらふく食べさせてもらい、イモ料理も頂く。日本語を教えて、リトアニア語を学んだ。Labas(こんにちは)、Kaip laikasi?(元気?)、Ačiū(ありがとう)、Iki(さよなら)…。

若者の1人の家に、もう1泊、泊めてもらう。

**7月19日 Marijampolė > Kalvarija** [フレンドリーなおじさん] ヒッチ  
**Kalvarija > ポーランドへ** [ドイツ人夫婦] ヒッチ

## 《ポーランド》

**2004年7月19日** リトアニアより > **Suwałki** [ドイツ人夫婦] ヒッチハイク 夕方のにわか雨に、雨宿り場所を探していたら、自転車に乗った人の家に招かれ、紅茶、コーヒー、パンを頂き、そのまま彼に泊めてもらう。

**7月20日 Suwałki > Firej** [車6台] ヒッチ

その日最後にヒッチしたトラックは、Lublin の30km 北に位置する、Firej という小さな村に停まり、給油所で野宿。そこで働いていた親切なおじさんが、有料トイレを無料で使

わせてくれた上に、紅茶とサンドイッチまで御馳走してくれた。Dziękuję(ありがとう)!

**7月21日 Firej > Rzeszów** [車5台] ヒッチ 公園で寝る。

**7月22日** 昨日、おととい、と丸2日間ずっとヒッチしっぱなしだったので、今日のはんびりと街を散歩。気温31度の猛暑の中の教会巡りはゆるくないが…。事務所の軒下で眠る。

**7月23日 Rzeszów > Tarnów** [ヴァン] ヒッチ 野宿続きで、やや寝不足。街の中心の教会でウトウト…。ハッと目覚めると、ミサに参加していた。バチ当たり?!郊外のまた別の教会の軒下で野宿。

**7月24日 Tarnów > Kraków** [ワゴン2台] ヒッチ ポーランドはヒッチ最適国といえるだろう。地元の人でも老若男女問わず、あちこちでやっている。地元の女性ヒッチハイカーとも一度同乗した。大学の裏で寝る。

**7月25-26日** 街には美しい建造物が溢れ、Street パフォーマーも豊富。

夕方 Krakow 郊外で、英語の全く話さないアル中の男性が寄ってきて、どうやら彼の所に泊めてやると言っているようだ。ホームレスの彼の寝床である木の下で古ぼけたソファで、降り続く雨の下、2人の男が一夜を明かすのはチョット無理。残念ながら、彼の親切な申し出を辞退せざるを得なかった。野宿。

**7月27日 Kraków > Ruda Śląska** [車] ヒッチ この国に来て初めての Hospitality Club メンバー、Marcin の家に泊めてもらう。

**7月28日** Marcin も最近訪れたというトルコ旅行の話をしたり、彼の弟とギターを弾いたりして遊ぶ。母親の手作りの伝統料理 Kluski śląskie(イモをすりつぶした、真ん中に小さな穴のある、丸い団子)は、モチモチで美味しかった。同家泊。

**7月29日 Ruda Śląska > Katowice** [トラック] ヒッチ

**Katowice > Bielsko Biała** [Dariusz さんの車] ヒッチ 天気は雨。1週間前の猛暑がウソのよう…。2台目にヒッチした車の Dariusz さんの勤める会社の事務所に招かれ、パンやソーセージやトマト juice、そしてコーヒーを頂いた。さらに、彼の知人の家に泊めてもらえるように取り計らってくれた。

**7月30日** 朝、Dariusz さんが出勤前に知人宅へやって来て、俺を車に乗せ登山口まで送ってくれたので、山林を散歩。鹿を3頭見かけた。知人宅に帰り、トマト soup やサンドイッチを御馳走になり、もう1泊世話になる。

**7月31-8月1日** Dariusz さんの家に移動し、さらに2泊する。夜景を見に連れて行ってもらったり、先日とは異なる山林をハイキングしたり、庭でバーベキューしたり、存分にもてなしてもらった。

**8月2日 Bielsko Biała > Skoczów** [Dariusz さんの車] Dariusz さんが20km西の町まで車に乗せてくれて、お別れ。公園のベンチに座り一息ついていると、突然の雨に見舞われた。慌てて雨宿りしようと、つい貴重品の入った小さな鞆をベンチの上に置き忘れてしまった。雨が上がり、戻ってみると、鞆は置いてあったものの、物色されたような跡があった。時計とペンが抜かれていたが、驚いたことに、財布は残されていた。どうして???

公園付近に時計とペンも落ちていないかと、ウロウロ探し回っていると、その行為を怪しく思った警察官が寄ってきた。訳を話すと、警察官は公園でたむろしていた年配の男の所へ行き、なんとその2点を押収してくれた。お礼も兼ねて、古びたペンをその男にプレゼント。

**Skoczów > Mikołów** [おしゃべりな男性] ¥1 日本のコインをくれと言うので、財布の隅にあった1円玉をあげた。公園で眠る。

**8月3日 Mikołów > Gliwice** [車] ヒッチ **Gliwice > Opole** [トラック] ヒッチ

この町では、Ruda Slaska で世話になった Marcin の彼女である、Anna の家に泊めてもらうことになっていた。Anna の弟 Bartek とバレーボールをして遊ぶ。

**8月4日** 自転車を貸してもらい、Anna と Bartek と一緒に3人で、歴史情緒の残る旧市街を観光。昼はいったん家に帰り、Anna が Kotlet Schabowy(カツレツ)を焼いてくれた。ポーランドでもドイツと同じように、昼食がメインで、夕食は軽く取るのが普通。夕方、Bartek と2人で自転車で湖へ行き泳ぐ。カルシウムを多く含んだ水ということで、真っ青な綺麗な湖。夜、彼の友達とサッカー。疲れた。同家泊。

**8月5日** 朝食を頂き、弁当にサンドイッチと kompot(果物を砂糖水で煮た飲み物)を持たせてもらって、出発。姉弟は郊外まで見送ってくれた上に、途中で Opole で一番美味しいという lody(アイスクリーム)を買ってくれた。2人と別れを惜しみ、ヒッチ開始。

**Opole > Kapkowice** [爽やかな青年] ヒッチ **Kapkowice > Koźle** [ドイツ語で話す人] ヒッチ 会社の軒下で野宿。

**8月6日 Koźle > Kędzierzyn** [徒歩] Hospitality Club メンバーの Ewa さんの家族が、駅まで出迎えてくれた。近くの食堂で、Gołabki(ロールキャベツ)と kasza(蕎麦の実)、そして果物などを御馳走してもらい、彼らの子供と一緒に、近郊のダチョウ園にも連れて行ってもらった。俺は、パキスタンで買った礼拝用のゴザをイタリアのどこかでなくして以来、ダンボールを寝るときに敷いていたが、見かねた Ewa さん達が、柔らかいピンクのキャンプ用マットをくれた。結局それを今回の旅の終わりまで使わせて頂くことになった。

彼らの庭にはテントが張っており、そこで眠らせてもらう。

**8月7日 Kędzierzyn > Kłodzko** [車3台] ヒッチ この町でも別の Hospitality Club メンバー Alexandra に泊めてもらう。

**8月8日** Alexandra の父親の車で近郊の村々を案内してもらう。Polanica Zdroj に湧く飲む炭酸ミネラル水は珍しく、Szczytna の岩山からの眺めは素晴らしく、Kudowa Zdroj の Czaszka 教会の何千ものドクロは大迫力、Nambierzyce の博物館も昔の農耕具や生活用品を見れて面白かった。同家泊。

**8月9日** Kędzierzyn で会った Ewa さんの親類の家が Kłodzko にあるので、是非寄ってみるよう言われ、住所もきいていたので、訪問してみる。草花で飾られた美しい庭で食事を御馳走になった。英語が通じず誤解も多かったが、アジアからやってきた俺のために特別に、普段は用意しない白米を出してくれたり、テレビで CNN ニュースを見せてくれたり、

親切にしてもらって泊めてもらった。

**8月10日 Kłodzko > Boboszőw** [車] ヒッチ ポーランドを去り、チェコへ。

## 《チェコ》

**2004年8月10日** ポーランド国境 > **Mladkov** [徒歩] 国境からヒッチできず、10km程歩く。暑い。

**Mladkov > Žamberk > Hradec Kralové** [ワゴン2台] ヒッチハイ 建物の横で野宿。

**8月11日 Hradec Kralové > Praha** [トラック] ヒッチ カーradioから聴き心地の良い音楽が流れるトラックに乗せてもらい、麗しの首都到着。夜、公園のベンチで寝ていると、頭上でかすかな物音が…。なんと、泥棒が俺のリュックサックを物色しているじゃないか!俺が驚いて声を上げると、泥棒はすばやく貴重品の入った小さな鞆を抜き盗って、走り去ろうとした。どこに金目のものがあるのか、俺を起こさないように静かに、すでにチェック済みだったのだ。んーさすが…なんて、感心している場合じゃない!リュックサックを茂みに置き、慌てて走って追いかける。泥棒は走りながら、盗った鞆を調べて、彼にとって重要でないもの(Travellers Cheques など)を投げ捨てて逃げる。俺はそれらを拾いながら、なおも後を追いかける。公園を出た街角で追いついたところで、運良くパトカーが通りかかったので、泥棒は鞆を放り出して去っていった。鞆の中には財布が無事残っていて助かった。野宿の際、貴重品は肌身離さず持つべきだな、と当たり前のことながら改めて感じた。

**8月12日** 人気の多い広場で寝ていたら、朝方、警察に蹴り起こされ、パスポートをチェックされた。踏んだり蹴ったり(文字通り?!)の一夜となった。

Národní Divadlo(国立劇場)の前で、Hospitality Club メンバーDunst と待ち合わせる。

彼はチェコ北部の田舎の出身で、Prahaに一人暮らしの学生。一緒にピザを食べ、素晴らしい建築物が集結する **Staroměstské Nám**(旧市街広場)や、ヨーロッパに現存する最古の石橋 **Karlův Most**(カレル橋)を観光。2人寝るのがまさにギリギリの、Dunstの狭い学生寮泊。

**8月13日 Praha > Kolín** [赤のFord] ヒッチ **Kolín > Čáslav** [黄のオープン car] ヒッチ **Čáslav > Svitavy** [茨城の東海村の原発で働いていたという人] ヒッチ

チェコで2人目となるHospitality Club メンバーLadaに会う。その晩は、彼の彼女の兄の祝賀会があり、ついでに俺もそのパーティーに招かれた。美味しいオードブルに舌鼓を打つが、俺が酒を飲めないのは惜しかった。何しろ出席者が口を揃えて、「チェコのビールは世界一!」と言うんだから…。Ladaの家泊。

**8月14日** 朝、5km離れたVendol村で、LadaのチームのNohejbalu(footバレー)の試合を観戦。手ではなく足で行なうバレーボールで、この辺りでは地元リーグがあるほどポピュ

ラーなスポーツ。Lada とその彼女がスロヴァキア人の同級生の別荘に遊びに行くというので、行き先が同じ俺も彼らの車で随行させてもらうことになった。

## 《スロヴァキア》

**Svitavy > Bytča** [Lada の車] スロヴァキア入国。国境を越えて車に乗せてもらった上に、菓子や飲物まで頂いてしまった。街外れの山中の別荘に、俺も 1 泊させてもらう。Lada の友達と、静かな庭で、スープやチキンなどを御馳走になり、柔道もして遊ぶ。彼らはやはりビールで盛りあがっていた。

**8 月 15 日 Bytča > Martin** [Lada の車] Lada に近郊の大き目の町まで送ってもらい、お別れ。広場でブラスバンドの野外演奏を見た。優しいドラムの音色と混声 4 部合唱の澄んだ歌声が、聴き心地よかった。建物の裏で野宿。

**8 月 16 日 Martin > Zvolen** [ワゴン] ヒッチ スーパーの外階段の踊り場で寝る。

**8 月 17-18 日** 街を歩いていると、金やらタバコやら何回かせびられた。その一方で、野宿していたら、そんな俺の姿を哀れんでか、コインをそっと置いて行こうとした人もいた。

チェコもスロヴァキアも、EU に加盟したばかりで、経済も混乱しており、治安も良いのか悪いのか、いまいっつかみどころがないというのが現状だろうか…。野宿 2 連泊。

**8 月 19 日 Zvolen > Lučenec** [最近ギリシアに旅行してきたという人] ヒッチ

**Lučenec > Fíľakovo** [東京にも来たことのある競歩の選手] ヒッチ

**Fíľakovo > Biskupice** [上半身裸の兄ちゃん] ヒッチ

**Biskupice > Radzovce** [笑顔のオジサン] ヒッチ

## 《ハンガリー》

**Radzovce > Salgótarján** [徒歩] 歩いて国境を越え、ハンガリー入国。運動場のベンチで野宿。

**8 月 20 日** Szent István napja(聖イシュトヴァーンの祝日、西暦 1,000 年に István が初代ハンガリー国王となったことを記念した祭日)で、どこもかしこも閉店。

おまけに今日は金曜日で、明日も明後日も銀行が開かず、スロヴァキア Korún をハンガリー Forint に替えらず、途方に暮れる…。幸い親切な地元の男性が両替してくれたので助かった。 **Salgótarján > Eger** [フランス人の旅行者のカップル] ヒッチ 司教座の中心の、美しいバロックの町。城に登り絶景の眺望を楽しむ。マンション間の空地で寝る。

**8 月 21 日 Eger > Füzesabony** [サングラスをかけたスキンヘッドの人] ヒッチ

**Füzesabony > Tiszafüred** [大音量の音楽がかかっていた白ワゴン] ヒッチ

かつてウラル山脈の麓に住んでいた、アジア系の民族だったと言われるマジダル人(騎馬遊牧民族)が、9世紀頃に住み着いたと伝えられる大平原、Hortobágy を通ったときには、車窓から出店が溢れている祭りの様子を見かけた。

**Tiszafüred > Debrecen** [父親と息子 2 人] ヒッチ ここで泊めてもらった Hospitality Club メンバー Julia の家族の 1 人が、たまたま長期外出中で、台所、食卓、居間、TV 付きのはなれを、丸ごと使わせてもらった。

**8 月 22-24 日** 4 泊もさせてもらったが、Julia は忙しいのか、あまり姿を見せなかった。3 日間のうちに、1 回パイを持ってきてくれただけだった。まあその分、スーパーで買って来た食材で自炊して、TV を見ながら、のんびり過ごすことができたが…。ハンガリーの代表的な野菜の一つ、パプリカを料理してみて、色によって辛さが違うこと、切るときに触った手で目をこするとヒリヒリが数時間取れないで苦しむこと、の 2 点を学んだ。街のギャラリーを巡り、絵画を楽しむ。教会や噴水の美しさもさることながら、墓地の中の立派な建物が印象的だった。同家泊。

**8 月 25 日** 出発の日の朝も、結局 Julia にはお別れも言えずに、鍵を部屋に残し、ひっそりと出発。**Debrecen >** ルーマニアへ [Viktor 氏の車] ヒッチ このハンガリー最後に乗せてもらった Viktor 氏には、ルーマニアで大いに世話になる。

## 《ルーマニア》

**2004 年 8 月 25 日** ハンガリーより **> Carei** [Viktor 氏の車] ヒッチハイク

Debrecen で拾ってもらった Viktor 氏に、引き続き乗せてもらう。彼は英語を話さなかったもので、意思疎通は難しかったものの、非常に面倒見の良いおじさんだった。途中のレストランで、ハンガリー名物の Gulyás(牛肉と玉ネギやパプリカなどから作られるシチュー)を御馳走になった。彼の目的地の町に着くと、なんと俺の宿まで面倒見てくれた。どうやら、彼が宿代を払ってくれたらしい。馬屋の 2F の宿泊施設泊。

**8 月 26-28 日** 計 4 泊させてもらうことになったこの馬屋は、古城の横の歴史的な建物で、テニスコートもある大きな公園の中に位置していた。2 日目の雷雨の夜には、どうしたことか水道から水が出なくなり、3 日目からは公園で祭りが始まり、夜中も音楽がガンガン騒々しかったが、タダで泊まる身には文句は言えない。4 日目の夜、Viktor 氏と再会して、祭りのビア garden へ繰り出す。彼はビールを飲み、俺はコーラやコーヒー、ポップコーン、そしてルーマニア名物の Mici(羊の挽肉に香辛料を加えてグリルにした、つくねのような食べ物)などを頂き、AM3:00 頃まで飲み明かした。

**8 月 29 日** 俺は昼近くまでぐっすり眠っていたが、Viktor 氏は仕事があるので、早朝ハンガリーへいったん帰ったという。申し訳ない…。宿の人の話では、彼は昼に Carei に戻って来るとのこと。戻ってきた Viktor 氏は、俺を隣町まで送ってくれた。彼の恐るべき体

力に感服。

**Carei > Satu Mare** [Viktor 氏の車] ボールペンを記念に頂いて、お別れ。本当に世話になりっぱなしだった。野宿。

**8月30-9月1日** ルーマニア初の Hospitality Club メンバーはアメリカ人で、ボランティア英語教師の Austun。彼のコンピューター部品と野菜の買い物に付き合いながら街を案内してもらい、互いに簡単な料理を披露し合い、彼の女友達(やはり英語教師)とカフェでおしゃべり…とはいえ、native speaker との会話は難しい。2人の会話はほとんど聞き取れず…。Austun の家に2泊。

**9月2日 Satu Mare > Sighetu Marmăției** [ワゴン] ヒッチ ルーマニアのヒッチハイクは、一般的に料金を払うことになっているらしいが、とりあえず1台目は払わずに済んだ。駅のそばの空地で寝る。

**9月3日** 観光案内所で、とある男性から話しかけられ、彼の働いている博物館を、特別に無料で見学させてもらった。その後、カフェで彼の知人の日本人も紹介された。JICA から派遣されている木工の先生。日本語の本に飢えていると言うので、ハンガリーでもらった、無料日本語パンフレットをあげたら、喜んでた。**Sighetu Marmăției > Săpânța** [馬車] ヒッチ 馬が引くリヤカーの隅の方に座らせてもらいのんびりと進むのも、北部辺境の地、この Maramureș 地方ならでは。俺が停めたというよりも、馬車の方から乗せてくれた感じ…。村に着いてまもなく知り合った、元歴史の先生という Ștețca さんの家に招かれ、パンとサラミと梨を御馳走になる。小さな村なので当然彼はルーマニア語しか話さず、ほとんど会話不可能。裸電球はあるものの水道がない粗末なその家に、泊めてもらう。

**9月4日** 一風変わった墓地、Cimitirul Vesel (陽気な墓)を観光。民芸作家の村人 Ion Stan Patras 氏が、青を基調とした色鮮やかな彫刻を施し、生前の生活や死の原因などその人の人生を描いた、約 800 もの墓群は大変面白かった。木造としては世界一高いという教会 Mănăstirea Săpânța-Peri をスケッチ。全長 78m とのことだが、半地下の礼拝堂部分は木造ではなく石造のため、最も高いのは Surdești 村にある教会であるという意見もあるようだが…。夜、Ștețca さんの知人の家でスープやパンと牛乳などでもてなしてもらう。別の知人にスイカももらった。同家泊。後で知ったことだが、Maramureș 地方を訪れる観光客が、地元民に泊めてもらい、謝礼を払う慣習があるそうだ。俺は払わなかったから、Ștețca さんはがっかりしたかもしれない。

**9月5日 Săpânța > Sighetu Marmăției** [自転車] ヒッチ 往路は車通りが少なく、馬車に助けられたが、復路は果たして…とっていたら、使い込んだ自転車に乗った男性が荷台に乗せてくれた。2人乗るとぶっ壊れそうだったし、重さに耐え必死にこぐ彼の姿はナミダものだった。申し訳なくて、お礼にコーヒーを一杯おごったら…さらにそのお返しにと、彼の仕事先の個人宅に連れて行かれ、菓子やジュース、リンゴや梨の歓待を受けた。野宿。

**9月6日 Sighetu Marmăției > Ferești** [ビジネス man の車] ヒッチ

**Ferești > Baia Mare** [トラック] ヒッチ 秋めく山間の静かな村々を抜ける、心地よいドライブ。建築中の建物で眠る。

**9月7日** さすがジプシーの国だけあって、大都市には street チルドレンが結構いる。スーパーで買った2リットルの安いジュースを、分け合って一緒に飲んだ。

**Baia Mare > Recea** [徒歩] 夕方、とりあえずこの工業都市から抜け出し、隣町まで歩き、教会の横で夜を明かす。

**9月8日 Recea > Dej** [ワゴン] ヒッチ 朝方、濃い霧。乗る前に” Gratuite(タダ)?”と聞いた時点で、走り去ってしまう車2台あり。

**Dej > Cluj-Napoca** [3人組の若者] ヒッチ このような幹線でもいまだに、インドのように牛がノシノシと歩いている。尚、この時ルーマニアはEUに加盟する前であった。Placinta(クレープのような、パイのような、焼き菓子)は美味。廃ビルで寝る。

**9月9-10日** 昨夜の雨の後から、気温が急に下がったような気がする。いよいよ秋か…。美しい教会の中は風がしのげて良いが、ついコックリ、コックリとやっていると、おばさんに叱られた。祈る所で、眠る所じゃないもんネ、すみません…。Sarmale(米入りロールキャベツ)を食べた。そういえば、同じようなのをポーランドでも食べたっけ…。ロールキャベツの発祥の地は、東ヨーロッパかロシア辺りなのかな?野宿2連泊。

**9月11日 Cluj-Napoca > Turda** [車] ヒッチ

この運転手のおすすめスポットが、近郊にあるというので行ってみる。

**Turda > Cheile Turzii** [ヴァン] ヒッチ 自然保護区のようになっていて、本来入場料 25,000lei(=約¥100)なのだが、どういうわけか、タダにしてくれた!切り立つ白い岩山は絶景。川で久々に体を洗い、川原で寝る。

**9月12日 Cheile Turzii > Turda** [徒歩] 牛や羊と挨拶を交わし、犬にイヤというほど吼えられながら、農道を歩き近道。夕方、野外劇を観た。内容は理解できなかったが、どうやらコメディのようだった。俺の姿を珍しそうに眺める、何10人もの子供達に囲まれたのは、ヨーロッパでは初めて。野宿。

**9月13日 Turda > Sebeș** [ワゴン] ヒッチ 道を尋ねると、何人かは親切にも、その場所まで連れて行ってくれた。カフェで、ケチって安くて少量のコーヒー(5,000lei)を注文したら、気を利かしたマスターが満杯にサービスしてくれ、客の1人が2杯目をおごってくれた。街外れの草原で眠る。

**9月14日** 顔洗い歯磨きに、市場の水道を使い、オヤジに使用料を払えと言われ、そそくさ逃げる。夜、住宅地で、わけのわからないルーマニア語の歌を教わり、一緒に唄う。同草原泊。

**9月15日 Sebeș > Sibiu** [ハンガリー人] ヒッチ ドイツ人のたくさん住む町で、建造物もドイツ式のものが多い。駅の待合室で寝る。

**9月16日** 駅の水道で洗濯して服をベンチで干していたら、駅員に追い出された。この国は、と一つても親切な人と、一昔前のおエライさんみたいなイヤな感じの人の差が、かな

り激しいような気がする。市場で Gogoși(揚げドーナツ)を買って食べ、果物売りに桃をもろう。工事現場で夜を明かす。

**9月17日 Sibiu > Brașov** [英語話す人] ヒッチ この運転手とは信仰などについて話した。ヨガなどアジア文化にも興味を示し、オーソドックスからプロテスタントに転教したキリスト教徒だという。日本出国前に作った Citi Bank のカードの2年間の有効期限がまもなく切れるので、手数料はもったいないが、いったん現金化して Travellers Cheques を作ったら、2時間もかかった。こういう事務処理は、西ヨーロッパですべきだったか…。

じとじと雨の1日。大学の建物の軒下で眠る。

**9月18日 Brașov > Sinaia** [カップル] ヒッチ 高級別荘地で、立派な建物が乱立する。壁画の美しい教会 Mănăstirea Sinaia の向かいに、古い売りに出された別荘があり、その玄関で寝る。

**9月19日 Sinaia > București** [またもやカップル] ヒッチ チェコの Praha 以来、久々の首都来訪。やはりデカくて歩き疲れる。電気屋の前で座り込んでいたら、店の主人が笑顔で、「ゆっくりお休み」とでも言うように、TV を俺のほうに向けてくれた。一方、シンナー遊びをしている少年達にも出くわした。空地で野宿。

**9月20-21日** カラパチア山脈を越えて南へ来たら、また夏の暑さが舞い戻って来たようだ。ルーマニア人として初の Hospitality Club メンバーの Mihai のアパートに2泊お邪魔する。彼はビール、俺はコーラで、仏教などについて語り” Baraka” という世界旅行しているような不思議な映画(?)と一緒に観た。

**9月22日 București > Giurgiu** [男3人組] ヒッチ ドナウ川によって隔てられた国境の橋は、歩いて渡ることは許されない。さてどうしたものかと思案していると、スロヴァキア人ヒッチハイカーと一緒に、通りがかりのバスに無料で乗せてもらえることになった。**Giurgiu >** ブルガリアへ [トルコ人運転のバス]

## 《ブルガリア》

**2004年9月22日** ルーマニア国境 [徒歩] ブルガリア語はロシア語と似ており、キリル文字使用。街角で野宿。

**9月23日 Русе > Велико Търново** [元ヒッチハイカー] ヒッチハイク いにしへの首都らしく、歴史を感じさせる雰囲気のある町。古城をスケッチ。観光地なので、宿の勧誘がややしつこかった。住宅裏の空地で寝る。

**9月24日 Велико Търново > Казанлък** [車3台] ヒッチ この国は、他のヨーロッパ諸国に比べ、車の停まってくれる確率が低い。道を尋ねた地元の人々は、いたって親切。野宿。

**9月25日 Казанлык > Гурково [若者] ヒッチ** ヒッチの待ち時間がかなり長く、効率が悪いので、久々に公共交通機関を利用。

**Гурково > Сливен [列車] 2.40 лв (=約¥200)**

**Сливен > Ямбол [ミニバス] 2 лв** Hospitality Club メンバーに連絡するために、Автогара (バス terminal) 近くのカフェで電話を借りようとしたら、親切な男性がメンバーに電話してくれて、さらに彼がそのカフェに迎えに来てくれるように、段取りしてくれた。Явор 君と会い、泊めてもらう。

**9月26日** 午前中、散歩がてら、トルコ時代からのモスクや市場、古い城壁や公園など、Явор 君に街案内してもらう。午後からは、父親の車を Явор 君が運転し、彼の友人も加わり3人で、近郊の Котел 村の博物館や、山間の滝などを観光。夜は、母親の手料理を御馳走になり、同家泊。

**9月27日 Ямбол > Сливен [Явор 君の車] ハチミツ&チーズ&サラミ&コーヒー** という、典型的なヨーロッパ風の、美味しい朝食を頂いた後、Явор 君にヒッチハイクしやすそうな地点まで送ってもらい、お別れ。

**Сливен > Пазарджик [父親と息子] ヒッチ**

**Пазарджик > София [笑顔だけど会話なし] ヒッチ** 首都到着。市場を歩いてただけで、見知らぬオジサンにビデオ撮影された(なぜ?)。野宿。ただし雨のため、いろいろな所へ移動を余儀なくされる。大都市は面倒臭い。

**9月28日** 半そで短パンじゃ、肌寒いような天気。ブルガリアで2人目の Hospitality Club メンバー Невена と会う。髪を短く刈った活発で話しやすい女性。彼女とそのルーム mate の暮らすアパートに泊めてもらう。

**9月29日** 早朝 Невена は仕事に行ってしまったので、昼間は独り、豪華な祭壇と巨大なシャンデリアが見事な Алехандер、Невскй Катедралなどを観光。昼過ぎ強雨!夜は、Невена と一緒に、雰囲気の良い” Подо Липите ” というレストランへ行き、ブルガリア民俗音楽のライブを楽しむ。同家泊。

**9月30日 София > Перник [徒歩] 30km 歩き、さすがに疲れ、Автогара で長時間休んでいたら、係員に追い出される。子供が3人、舌を出してからかってきた。それ以外は静かな町。廃校で寝る。**

**10月1日 Перник > Кюстендил [車2台] ヒッチ** 夕方、この国に来て初めて、警察からパスポートを調べられる。廃屋で野宿。

**10月2日 Кюстендил > Гюешево [車] ヒッチ** ブルガリア出国、陸路にてマケドニア入国。

## 《マケドニア》

**2004年10月2日 Деве Баир > Крива Паланка [トラック] ヒッチ**

ハイク マケドニア入国初日から、地元民の温かい歓待の洗礼を受けることになる。手始めに売店でコーラとスナック菓子をおごってもらう。その後、街外れに住む **Јане** の家に招かれ、コーヒー、果物、そして食事を頂き、遂には泊めてもらう。

**10月3日 Крива Паланка > Куманово** [ミニバス] 70 Денар (= 約¥150) **Куманово > Скопје** [バス] Д50 **Скопје > Тетво** [バス] Д90 ここで迎えてくれた Hospitality Club メンバーは、若者4人組だった。

そのうちの1人、**Перо** の家泊。彼は芸術家肌で独特の雰囲気があり、一緒に民俗楽器を演奏すれば、communication に言葉は不要?!

**10月4日** 4人のメンバーの連携プレーで、モスクや博物館、市場、そして教会を案内してもらい、レストランで御馳走になり、たまり場の bar の”EXIT”でおしゃべり。今夜は別のメンバーの家に移り、写真家である **Самир** に泊めてもらう。

## 《セルビア》

**10月5日 Тетво > Јажинце** [トラック] ヒッチ マケドニアを出国し、コソボに入る。入国スタンプが押されなかったのが気になったが、そもそもここは、フラフラと旅行者が訪れるような所ではなかったということ、後で思い知ることになる。

**Globočica > Prishtinë** [アルバニア人] ヒッチ この運転手の経営するハンバーガーshopで、軽食頂く。建築中の家で野宿。

**10月6日** 当時、コソボは独立した国ではなく、セルビア・モンテネグロに属していた(この両国が独立を果たしたのは、それから数年のことだったが…。現在コソボは国連暫定行政ミッションが管理している)。この地域の政治体制は、依然として流動的のようである。通貨はEuroで、国連の車がビュンビュンと走っている。建物や道路に戦争の形跡が少しあるが、街中の雰囲気は一応平和。青年達とサッカーをした。空地で寝る。

**10月7日 Prishtinë > Mitrovicë** [ワゴン] ヒッチ このコソボの中核都市は、真中で南北に仕切られて、あたかも国境のようだ。対立するアルバニア人とセルビア人の実勢上の境界線が、この辺りで引くことができるという。その地点には橋があり、パスポートのチェックこそなかったが、兵士が警戒に当たり、鉄線が張りめぐらされていた。尚この橋を境に通貨もEuroからセルビアDinaraに変わる。反米のアルバニア人の少年達と話す。川のほとりで眠る。

**10月8日 Mitrovicë > Leposavić** [車] ヒッチ セルビアへの公式な国境(…とっていいものかどうか、わからんが…)に到着。しかし、俺のパスポートにセルビア・モンテネグロへの入国スタンプがないことを理由に、入国(?すでに入っちゃってるんだケド…)拒否。

規則の詳細はわからないが、結論としては、マケドニアからコソボを経由してセルビアへ陸路で行くことは許されない、ということらしい。陸路で行くには、来た道を帰り一度マケドニアへ戻り、より東方のコソボを経由しない国境へ向かう以外に、方法はないよ

うだ。 **Leposavić > Mitrovicë** [国連の車] ヒッチ 一般人を国連の公用車に乗せることは禁止されているが、このインド人の国連職員は規則を無視して拾ってくれた。交通量も少ない、こんな所をフラついている外国人旅行者を、助けないではいられなかったに違いない。野宿。

**10月9日 Mitrovicë > Prishtinë** [スイスに11年住んでいた人] ヒッチ

**Prishtinë > Ferizaj** [ドイツで働いていた人] ヒッチ ここに住む人々は、不安定な政治と経済に翻弄され、国を出て他のヨーロッパ諸国で働くことを余儀なくされるのかもしれない。街角で知り合った Fadil が、コーヒーや夕食を御馳走してくれた上に、彼の親戚の家に泊めてもらった。久々のシャワーで、体の汚れを落とす。

## 《マケドニア再入国》

**10月10日 Ferizaj > Kaçanik > Hani-Elezit** [車2台] ヒッチ コソボに入ったときよりも10km程東の国境から、再びマケドニアに帰る。今回もやはり、スタンプは押されなかった。

**Влаце > Скопје** [トルコ語を少し話す人] ヒッチ

**Скопје > Куманово** [hip-hop 好き 3人組] ヒッチ その少年3人のhip-hopパーティーに招待される。この日の出席者に東洋人は俺だけで、若者達が興味深そうに(冷やかし半分に?)寄ってきた。真夜中にパーティーを退席し、夜道を歩いていたら、警察に怪しまれて捕まってしまった。[被疑者の権利箇条書き]のような紙を見せられたので、日本大使館に連絡したいと訴えると、急に怒り出したり、賄賂を要求するようなそぶりを見せ、ほとんどの警官が英語を話さず、ヤバい雰囲気。警察署で夜を明かす。

**10月11日** 朝食も与えられないまま、簡易裁判所のようなところに連れて行かれる。観光客が3日以上マケドニアに滞在するには、書類を警察署に提出して許可を受けなくてはならないという。俺はそんな規則知らんから、もちろんそんな許可取っちゃいない。ちなみに、団体客はホテルや旅行会社を通じてやっているとのことだが…。昨日コソボから戻って来たばかりで、まだ実質2日の滞在なのにもかかわらず、肝心の入国スタンプを押してもらえなかったの、パスポートだけ見ると10月2日から9日間も滞在しているかのように見えてしまうのだ。それにしても、1回目のマケドニアの滞在も4日間だったが、何のお咎めもなかったし…どうも、腑に落ちない。罰金も 11,000 と試してみたり、200Euros と試してみたり(10倍も違うじゃんか!)…。貧乏旅行者だから何とか勘弁してくれと懇願すると、[警告書]を渡された。内容は、24時間以内に国外へ出ることの命令と、今後1年間のマケドニアへの入国の禁止。何はともあれ、罰金を払わないで済んだし、警察からも裁判(?)からも解放され、晴れて自由の身。サンドイッチ屋で腹ごしらえし、居合わせた親切な男性が、セルビアの国境まで車で送ってくれた。皮肉にも、その彼は非番の警官だった(!)。 **Куманово > Прешево** [親切な警官]

## 《セルビア》

やっとのことでセルビア入国。今回はしっかりと入国スタンプ押印!

**Preševo > Bujanovac** [徒歩] セルビアでは公式にはキリル文字、一般にはラテン文字が使われるという、一風変わったシステム。これも政治の混乱に起因するのだろうか…。橋の下で野宿。

**10月12日 Bujanovac > Vranje** [登山家] ヒッチ Hospitality Club メンバーNataša の家泊。彼女の友人の家で、映画鑑賞。

**10月13日** 午前中 Nataša が、古い文筆家の家を改造した博物館、ジプシーtown、教会などを案内してくれた。絵描きである彼女は、俺のスケッチの手ほどきもしてくれた。昼食に、母親の手作りの旨い魚のマリネを御馳走になる。父親もまた画家で、絵の具の匂いの漂うアトリエも、ちょっくら拝見。同家泊。

**10月14日** Nataša の知り合いが地元ラジオ局のアナウンサーをしており、俺を旅行のよもやま話などを携えたゲストとして招いてくれた。計らずもヨーロッパ放送へのデビュー(?)を果たす。その後、友達の通う音楽学校とジムにも、見学に連れて行ってもらう。

100kmほど北の町 Niš に住む Nataša の弟、Dragan にも泊めてもらうことになり、父親の車で駅まで送ってもらい、なんと列車代まで払ってもらってしまった。素晴らしき家族!

**Vranje > Niš** [列車] Nataša の父親払い Dragan が駅まで出迎えてくれ、友人達と一緒にお茶を飲み、泊めてもらう。

**10月15日** かつてオスマン・トルコ帝国の侵攻に抵抗し殺されたセルビア人の、952ヶものドクロが埋め込まれている、Ćele Kula(ドクロの塔)へ、Dragan に連れて行ってもらった。

その後、ヒッチしやすい郊外のハイウェイまで、彼の車で送ってもらう。

**Niš > Beograd** [ドイツで働いていたアルバニア人] ヒッチ Hospitality Club メンバーŽarko のアパートに泊まる。

**10月16日** 午前中、雨の中、Žarko に城など街案内してもらう。ちょうど、ノルウェーで世話になった Hospitality Club メンバーの Jimmy も Beograd 旅行中で、バス terminal で待ち合わせ。しかし、俺は Žarko と共に彼の出身地である田舎へ行く予定だったので、わずか5分の再会となってしまい、残念無念。

**Beograd > Čačak** [バス] 405 Dinara (=約¥700) Žarko の両親の家に泊まり、シチューを御馳走になる。

**10月17日** Žarko の父親のものすごく古い車で山へドライブの帰り道、パンクしてタイヤ交換。不幸は重なり、彼の母親が急病。俺は、急遽家を出るハメになり、野宿。

**10月18日 Čačak > Beograd** [ワゴン] ヒッチ 建築中のビルで寝る。

**10月19日 Beograd > Indija** [床職人] ヒッチ **Indija > Novi Sad** [サッカー好きな人] ヒッチ 中欧風のたたずまいが特徴的な、ドナウ川沿いに広がるセルビア第2の都市。

この町では Hospitality Club メンバーMiloš の学生寮に泊まる。同じく学生の Ugi と相部屋。2人のベッドの間、床の狭いスペースに、俺の寝袋を敷き寝る。

**10月20-21日** 食事はほとんど学生食堂で、Miloš におごってもらう。 同学生寮泊。

**10月22日** 昨日 Miloš 達とコンサートへ行ったときに、日本語で話しかけられて知り合いになった、Olivera と一緒に博物館へ。入場料を払ってもらっちゃった。彼女は六本木の外人クラブで働いていたことがあり、日本人は西洋人と違い、意見を表に出さず付き合いにくい面もあるが、それは人口密度の濃い日本で世渡りしていく上での、やむを得ない手法なのかも知れない、と指摘していた。彼女の家にも招かれ、クッキーを食べながら、おしゃべり。日本製の緑茶と海苔も頂き、おみやげに、木製の十字架のネックレスももらった。同学生寮泊。

**10月23-24日** 友達と Petrovardin 城へ登り、見下ろした街の風景をスケッチ。

日曜日には、Ugi の親戚の家で豪華なランチに招待された。Gibanizao(チーズ pie)は特に絶品！結局、1週間も Miloš の学生寮に滞在しちまった。

## 《クロアチア》

**10月25日 Novi Sad > Backa Palanka** [クロアチア人] ヒッチ 歩いて国境を渡り、クロアチア入国。**Ilok > Šarengrad** [警察の車] ヒッチ パトカーじゃなかったの、たぶん彼の私用車だろう。警官らしからぬ気楽な彼と、その同僚にコーヒーを淹れてもらい、ドナウ河川敷で飲む。**Šarengrad > Vukovar** [生真面目な男性] ヒッチ この警官でもない一般人に乗せてもらう前に、パスポートを検査された。**Vukovar > Vinkovci** [青年2人] ヒッチ 戦争の跡が残る建物を見た。物置の中で寝る。

**10月26日 Vukovci > Županja** [父親と娘] ヒッチ **Županja > Zagreb** [オーストリア在住のボスニア人] ヒッチ ここで会った Hospitality Club メンバー Matija は自分の家を持たず、友達の家を転々としている。その晩は、彼の女友達のアパートに泊めてもらった。

**10月27日** 芸術家ら若者達が、公有地や廃屋などに無断で居座り、自由な場としている squat。旅人もそこへ無料で泊まれる情報を Matija から聞き、そこまで出向く。シャワーもなく快適とは程遠いが、居住者にゴミ捨て場から拾ってきた食料でパスタを作ってもらったり、チェコからのヒッチハイカーが採ってきた栗を食べさせてもらったり、みんなで座禅を組んだり…楽しかった。夜中、Matija が鼻歌混じりに現れ、居住者であるパンク風の女性達と、激しい口論になる。クロアチア語なので内容はわからないが、取っ組み合いのケンカをして、とうとう彼が追い出されてしまい、大変びっくりした。

**10月28日 Zagreb > Karlovac > Rijeka** [車2台] ヒッチ アドリア海に面する港町。Hospitality Club メンバー Luisa の家に泊めてもらう。

**10月29日** 午前中、Luisa と一緒に、街を散歩がてら、市場で昼飯の材料を買い、作って食べる。午後、独り Trsat 城を観光。雨の中階段を上るのは一苦労。夜、Luisa とチェスをした後、紙で将棋のコマを作り、ルールを教えた。同家泊。

## 《スロヴェニア》

10月30日 **Rijeka > Rupa** [イタリアへ行く男性2人組] ヒッチ 徒歩で越えた国境では荷物検査あり。スロヴェニア入国。**Jelšane > Ilirska Bistrika** [若者2人組] ヒッチ  
**Ilirska Bistrika > Ribnica** [徒歩]かなり歩いて、日もとっぷり暮れる。野宿。

10月31日 **Ribnica > Postojna** [優しい男性] ヒッチ **Postojna > Ljubljana** [中年女性2人] ヒッチ スロヴェニア1人目のHospitality ClubメンバーStane氏の家に泊めてもらう。レストランで御馳走してもらい、お土産に伝統音楽のCDをもらった。

11月1日 本日はVsi Sveti(万聖節)。Stane氏に墓参り見物に連れて行ってもらう。菊の花を供え親類と会うのは、日本の盆と同じ。墓の周りに置かれたカラフルなろうそくが美しかった。Stane氏は次の目的地までのバス代までも面倒見てくれた。

**Ljubljana > Ajdovščina** [バス] Stane氏払い この国2人目のHospitality Clubメンバー、女性教諭のMajaの家に泊めてもらう。

11月2日 緑深い田園風景の村。昼食にtunaパスタを頂く。夜は、Majaと母親の合作の郷土料理、Štruklji(パイ生地にチーズと玉ネギのソースをかけた料理)を御馳走になる。同家泊。

11月3日 **Ajdovščina > Gorizia** [Majaの車] Majaとその彼氏の車で途中の城や教会を観光しながらイタリアへ。

## 《イタリア》

2004年11月3日 **Gorizia > Cormons > Udine** [車2台] ヒッチハイク Hospitality ClubメンバーのCristinaの家泊。女手一つで子育てしているらしい。隣町Cividaleまでドライブ。ルームmateにサンドイッチやお菓子も御馳走になった。

11月4日 **Udine > Palmanova** [軍隊嫌いの人] ヒッチ  
**Palmanova > San Giorgio di Nogaro** [徒歩] 川沿いのちょっとした広場で野宿。

11月5日 **San Giorgio di Nogaro > Muzzana** [車] ヒッチ  
**Muzzana > San Michele al Tagliamento** [徒歩]  
**San Michele al Tagliamento > Portogruaro** [車] ヒッチ どうもヒッチハイクの調子が悪いので、久し振りに、鉄道利用。**Portogruaro > Padova** [列車] E4.65 ここで泊めてもらったHospitality Clubメンバーの家庭は、イタリア人の夫とスペイン人の妻。彼らの幼い娘と、お絵描きをして遊ぶ。

11月6日 息子のサッカーの試合観戦。Pastaやらpizzaやら頂く。同家泊。

11月7日 **Padova > Bergamo** [20年イタリア在住ルーマニア人] ヒッチ  
**Bergamo > Canonica d'Adda** [徒歩] 公園のすべり台の上で寝る。

11月8日 **Canonica d'Adda > Milano** [創価学会員] ヒッチ

**Milano** の西部 > **Milano** の南部 [インド旅行帰りの人] ヒッチ

**Milano** の南部 > **Genova** [アラブ人] ヒッチ 今回の Hospitality Club メンバーはイタリア語とフランス語しか話さず、電話してみたけど、会話不能。一度電話を切り、困り果てていると、たまたまそこにいたエクアドル人が助けてくれて、俺の代わりに電話してくれ、待ち合わせ場所までも決めてくれた。その Stefano 氏の家に着くと、パソコンの翻訳ソフトでなんとかか会話。広い家でたくさんの空きベッドがあった。Stefano 氏の家泊。

**11月9日** 気温がグッと下がり冬到来。Stefano 氏の家族に昼食を御馳走になる。

雨の中、街を散歩。大理石をふんだんに使った豪華な建築。同家泊。

**11月10日** **Genova** > **Arenzano** [徒歩] ヒッチが上手くいかず、ひたすら歩く。海越しに眺める Genova の夜景は美しかった。

駐車場の階段の下で野宿。雨風がしのげて、暖房も少し入っており、助かった。

**11月11日** **Arenzano** > **Varazze** [徒歩] **Varazze** > **Savona** [老夫婦] ヒッチ この老夫婦の家に招かれ、昼食を御馳走になった上に泊めてもらう。息子は世界をまたにかけるビジネス man で、アメリカでも仕事をしているので、英語がとても流暢だった。親戚が日本人と結婚して、現在神戸に住んでいるといい、そこから送られてきた{麦茶}を家族の誰もが飲めないという。この国が café の国であることを実感(!)。俺がありがたく頂く。懐かしの味。以後、しばらく旅行中の飲物として、大変重宝する。

**11月12日** **Savona** > **Vallecrasia** [ペルー人] ヒッチ 関西で3年弱働いたことがあるというトラックのペルー人。トラックの中で2人で一緒に、長渕剛の「乾杯」を大声で歌った。

**Vallecrasia** > フランスへ [徒歩]

## 《フランス》

**2004年11月12日** イタリアより > **Menton** [徒歩] 空き家の裏で野宿。

**11月13日** **Menton** > **Monaco** > **Villefranche Sur Mer** [徒歩] 天気が良いこともあり、Côte d'Azur の海岸線に沿って、どんどん歩く。泳いでいる人もチラホラ。小国モナコも歩き抜ける。港のトイレの横で寝る。

**11月14日** **Villefranche Sur Mer** > **Nice** [徒歩] ヨットやボートが停泊する地中海リゾートの港町から5km歩いて、南フランスにおいて一大観光地である Nice 着。旧市街はお洒落なカフェなどが立ち並ぶが、アジア系レストランがかなりあり、黒人も多く、また乞食も少なくはない。大学の敷地内で眠る。

**11月15日** 郊外まで歩き、翌日のヒッチハイクに備える。高架下で野宿。

**11月16日** **Nice** > **Mandelieu** [フランスやモロッコをヒッチ旅行した人] ヒッチ Autoroute(高速道路)内でヒッチして、警察に注意を受ける。

**Mandelieu** > **Aix-en-Provence** [ハンモック商人] ヒッチ この長髪の運転手は、メキシコ、インド、南アフリカでハンモックを仕入れ、ヨーロッパで売りさばくという仕事を

している人で、富士山登頂経験あり。公園のベンチで寝る。

**11月17日** 草原に霜が降りてくくらい寒い朝。地中海岸と内陸はエライ気温差。結局フランスでただ1人となった Hospitality Club メンバー、Magali の家に泊まる。乗馬用の100頭以上の馬に囲まれた、静かなたたずまい。夕飯に Flamenkuke(フランス風のピザといったところか…)を御馳走になった。

**11月18日** Magali は仕事なので、旧市街まで車で送ってもらい、独りで歩き回る。Le Pavillon de Vendôme(ヴァンドーム館)や La Cathédrale St Sauveur(救世主大聖堂)、そして L'église de la Madeleine(マドレーヌ寺院)などを観光。夕方 Magali と待ち合わせして、カフェで一緒に Wiener コーヒーを飲む。帰宅後、Escalope de veau Panée(仔牛の薄い肉のパン粉焼き)を頂く。また、日本に行ったことのある家族が買ってきたという、缶詰の{dry 納豆}なるものを試食。外国人のお土産用なのか、日本人の海外出張用なのか知らないが、こんなの初めて食った！同家泊。

**11月19日 Aix-en-Provence > Lunel** [フランス語のみ話す人] ヒッチ 住宅地のはずれで眠る。

**11月20日 Lunel > Montpellier** [車] ヒッチ 多くの国際 festival が催される開放的な町。北アフリカからの移民の若い男女数人に話しかけられ、彼らの顔をデッサンしたら、30セントもらった。廃線路の横で野宿。

**11月21日 Montpellier > Fabrègues** [4WD] ヒッチ

**Fabrègues > Sète** [ちょっと市内観光のドライブ付!] ヒッチ

**Sète > Béziers** [若いカップル] ヒッチ **Béziers > Gruissan** [チェコからの若者3人組] ヒッチ 夕方方拾ってくれたこの青い camping カーは、チェコからの旅行者。夕食にパスタを御馳走になる。彼らはポルトガルを目指しており、明日も引き続きスペインまで乗せてくれるという。車の横に寝袋を敷いて寝る。

**11月22日 Gruissan > スペインへ** [同 camping カー] チェコ3人組にが、朝食にコーヒーとパン、昼食にトマト soup を出してくれた。主要道路で行くよりも miner な山道に行く方が、車が少なく早いだらうとの彼らの判断は、残念ながら間違っていた。クネクネ道でゆっくりしか走れない上に、燃料消費も激しく失策であった。唯一の救いは、美しき雪帽子のピレネー山脈か…。ダメ押しに、トンネルでは予期せぬ E8.84 もの通行料を徴収。さすがに彼らが哀れになり、また、世話にもなったので、ここは一念発起…俺が払う。山を越え、イベリア半島へ。

## 《スペイン》

**2004年11月22日 フランスより > Manresa** [チェコからの若者3人組] 俺と一緒にチェコ人の若者の1人がここで降車。その Martin 君が、この町で泊めてもらうことになっている彼の友人の家に、一緒に行ってみよう誘われたので付いて行く。Martin 君の友人の家

に泊めてもらう。久々のシャワーでスッキリ。

**11月23日 Manresa > Barcelona** [大阪弁のボリビア人] ヒッチハイク スペイン1台目のヒッチが、いきなり日本語を話す人だったのでビックリ!この国最大の港湾都市に到着。Antoni Gaudí の作品群で、世界遺産にも登録されており、夜景の見下ろせる Parc Güell(グエル公園)の茂みの中で、あつかましくも野宿。光荣!

**11月24日 Barcelona > Sant Boi de Llobregat** [徒歩] 大都市特有の入り組んだ高架群は、ヒッチハイカーの敵。空き地で寝る。

**11月25日 Sant Boi de Llobregat > Castelldefels** [徒歩]

**Castelldefels > Cubelles** [東京に友人がいるという夫婦] ヒッチ

**Cubelles > Tarragona** [有機農業をしている女性] ヒッチ ローマ遺跡や古いカテドラルの残る美しい町。郊外の草むらにはウサギがピョンピョン。国名の España はフェニキア語の「うさぎ」が語源という説もある。廃屋で眠る。

**11月26日 Tarragona > Reus** [スペイン語のみの人] ヒッチ

**Reus > Móra la Nova** [ルーマニア人のトラック] ヒッチ みかんとサンドイッチをくれた、この親切なトラック運転手と別れた直後、奇跡が起こる。イランで会った Joldi に、君の所に行くよ、という E-mail を数日前に打っておいたのだが、彼の住所や電話番号は知らないし、具体的な日時や待ち合わせ場所も決めていなかった。…にもかかわらず、その彼の乗った友人の車が、偶然俺の歩いている真横を通ったのだ!俺と Joldi は、道端で驚いて顔を見合わせ、再会を喜び合い、そのまま一緒に彼の住む村まで。

**Móra la Nova > Flix** [Joldi の友人の車] あの Hospitality Club を教えてくれた張本人でもある、Joldi の家に泊めてもらう。

**11月27-28日** Joldi と、イラン以来久しぶりに、柔道の試合。また負け。これで2連敗!悔しい…。友達と bar へ繰り出したら、夜遅くまでおしゃべりし続け、2日酔いで翌日昼まで寝ているのは、いかにもスペインらしい。父親の農作業を見学した後、ウサギ肉のバーベキューに舌鼓を打つ。生まれて初めて食べたが、上品な鶏肉のような味で美味しかった。Joldi の家や、近郊の町にある友人の家に滞在。

**11月29日 Flix > Lleida** [Barcelona 在住の人] ヒッチ **Lleida > Alcarrás** [ほんの短い距離] ヒッチ **Alcarrás > Fraga** [英語 ok で、会話弾む] ヒッチ

**Fraga > Candasnos** [荒い運転] ヒッチ **Candasnos > Zaragoza** [ポルトガル人のトラック] ヒッチ 公園のすべり台の上で野宿。かなり冷え込み、マフラーと寝袋にくるまる。

**11月30日 Zaragoza > Madrid** [劇団員のカップル] ヒッチ 首都到着。インドで会った Manu と再会。彼の彼女の家に泊めてもらう。

**12月1-2日** Manu に食事をいろいろ作ってもらう。彼の母親や妹とも会い、bar で小料理の御馳走も。同家泊。

**12月3日 Madrid > Espinosa de Los Monteros** [Manu の車] Manu は北スペインの

山間の村に新居を買ったばかりで、現在その古いあばら家の修理の真っ最中で、住めるように工事中とのこと。そこへ一緒に連れて行ってもらう。フランス国境に近い北部山麓地方で寒く、Manu がカゼ気味だったこともあり、1泊目は宿を取る。Hostal Sancho García (E19) 泊。

**12月4日 Espinosa de Los Monteros > Las Machorras** [Manu の車] Manu の新天地である、緑豊かな村に到着。小雨が降り、肌寒い。夜、bar でトランプ遊び。この辺りは過疎が進み、空き家を都会からの若者達が安く買い、自分たちで修理して、一種の独自の community らしきものを作り上げており、Manu もそのうちの 1 人。今晚は、友人の家に泊めてもらう。その彼もインド旅行が好きな口だった。暖炉で暖まる。

**12月5-8日** Manu の家は、ほとんど手付かずで、ガスボンベと懐中電灯はあるものの、まだ水道も電気もない。敷居で囲った一面に、簡易ストーブを持ちこみ、寝袋にくるまって寝る。入り口の扉(…といっても、ただのつかえ棒だが…)を作ったり、将来引く予定の電気のメーターとその配線の下地作りをしたり…。寒いけど、自然の中での労働は心地よい。こういう山村での生活に助け合いは不可欠で、community の若者同志で定期的に会合を開いているという。俺もその会合に同席させてもらい、皆が持ち寄った手料理をつまむ。

Manu が炭火でじっくり煮込んでくれた paella(フライパンで作るスペイン風炊き込みご飯)は、もーんのすごうつく旨かった。

**12月9日 Las Machorras > Madrid** [Manu の車] 約1週間の滞在を終え、都会へ戻る。Manu のアパートにしばらく泊めてもらうことになる。Manu は外出してしまったが、彼と一緒に暮らす2人のルーム mate が、DVD で映画を見せてくれたり、スープを作ってくれたり、いろいろともてなしてくれた。

**12月10-11日** 今日もDVDの映画を見たり、クイズのゲームをしたりして過ごす。同アパート泊。

**12月12-13日** Manu が連れて行ってくれた rastro(蚤の市)でカタツムリを食べたり、プラド美術館(日曜は入場無料)観光したり、アフリカ旅行に備え黄熱病の予防接種を受けたりする。同アパート泊。

**12月14日 Madrid > Los Angeles** [Manu の車] Manu に隣町まで車で送ってもらい、Adiós(さよなら)。レストランの裏で野宿。

**12月15日 Los Angeles > Pinto** [徒歩] 車の停めやすいレストランの近くだったのに、3時間ヒッチ待ちぼうけに終わり、あきらめ歩く。**Pinto > Aranjues**[クリスマス休暇でバイト先の配達中の学生2人] ヒッチ 美しい王宮の町を散歩。線路のそばの空地で寝る。

**12月16日 Aranjues > Ocaña** [ブルガリア人のトラック] ヒッチ **Ocaña > Sevilla** [アジア旅行から帰ったばかりの3人] ヒッチ タイルで装飾された建築など、徐々にアラビアの匂い…。ヒッチした3人が、野宿に最適と教えてくれた、Parque de Maria Luisa という公園で眠る。

**12月17日 Sevilla > Cádiz** [ハンガリー人のカップル] ヒッチ Andaluçia 地方なら  
ではの、降り注がばかりの陽光…。ビルの片隅で寝る。

**12月18日 Cádiz > San Fernando** [徒歩] スペインの autovia(高速道路)は入り  
組んでいて、本当にヒッチしにくい。また歩くハメに…。

**San Fernando > Algeciras** [surfer] ヒッチ 急ぐ旅ではないので、このサーファー  
と Barbate と呼ばれる海岸で一休み。彼は自分で巻いたマリファナ(?)を吸い、俺は彼から  
もらったサンドイッチと果物を食べた。野宿。

**12月19日 Algeciras > モロッコへ** [フェリー] E20 ヨーロッパ大陸を去り、いざ、ア  
フリカ大陸へ出陣！

## 《モロッコ》

**2004年12月19日 スペインより > Tanger** [フェリー] 港は客引きや物乞いがたくさん  
で、ヨーロッパとは明らかに異なる雰囲気。**Tanger > Oued Gzenaya** [小さい青いワゴン車]  
ヒッチハイク **Oued Gzenaya > Salé** [英語少ししか話さない人] ヒッチ 草むらで野宿。

**12月20日 Salé > Bouknadel** [徒歩] 天気は雨。道端で警察から尋問、パトカーで連行  
される。チュニジアでの逮捕が頭をよぎる…。幸い、警察署に別の用事できていた  
Hospitality Club メンバーの Abderrahim が、偶然俺の拘束を知り助けてくれた。彼とは前  
もって E-mail で連絡済みで、泊めてもらう手はずになっており、俺がそろそろ訪問すること  
も知っていた。警察への宿泊の申告も済ませ、Abderrahim の家に泊めてもらう。

**12月21日** Abderrahim の家は、畑に囲まれた静かな丘の上に位置し、少し歩くと崖の上  
から真っ青な大西洋が見下ろせる。彼は今までに、世界各国からたくさんの客を迎えてき  
ており、彼の家の壁は人の名前などの落書きで一杯だった。俺もそこに“JPN Fujita”と  
書き込んできた。その日も、別の Hospitality Club メンバー、イギリス&アメリカ&アル  
ゼンチンの女性旅行者3人組が泊まっていて、彼の小さな家は、さながら国際ゲスト house  
の様相。水道はなく井戸水で、温水シャワーは使えないので、ハンマーム(公衆浴場、7 Dirham  
= 約¥100)へ。夕方、Abderraim の父親の車で、Rabat の高級ホテルへ行き軽食を頂き、帰  
りがけに bar でケバブとジュースを御馳走になった。同家泊。

**12月22日 Bouknadel > Salé** [青年2人組] ヒッチ **Salé > Rabat** [徒歩] 首都のモー  
リタニア大使館でビザが取れると思っていたけど、受け付けてもらえず Casablanka の領事  
館へ行くように言われた。通りすがりの中年女性に昼飯御馳走になった。空き地で寝る。

**12月23日 Rabat > Casablanka** [フランスで経済学講師をしてる人] ヒッチ モーリタ  
ニア領事館でビザを、午前中に申請、夕方受領(D200)。小雨が降っていたので、とあるマ  
ンションの階段の踊り場で寝袋を敷いていたら、懐中電灯と棒を持った守衛のような男に  
追い出された。住宅地の片隅で眠る。

**12月24日 Casablanka > El Jadida** [車3台] ヒッチ 3台目の2人組は途中食堂に寄っ

て、蜂蜜ソースのかかったセンメン(油の層と共に折り重ねて焼く、薄い生地がしっとり重なった、クレープのようなもの)とアチャイ(茶)をおごってくれた。 城壁に囲まれた歴史ある町。シャワー修理中の Hotel Agdal(D15)に、割引価格で泊まれた。

**12月25日 El Jadida > Sidi Smail** [3人乗っていたワゴン車] ヒッチ この運転手の青年は、オランダ在住とのことで、英語が少し話せた。 道端で Kamal 君という少年と知り合い、彼の家を招かれ、昼食を頂き、泊めてもらった。

**12月26日 Sidi Smail > Sidi Bennour** [内装屋] ヒッチ 雨の中車を待っていると、土木作業用か何かのテントの中に招き入れられ、アチャイと軽食を頂く。

**Sidi Bennour > Marrakech** [車3台] ヒッチ 2台目は taxi だったので、運賃を要求してきたが、結局払わないで済んだ。オリーブ畑で野宿。

**12月27日 Marrakech > Chichaoua** [トラック] ヒッチ

**Chichaoua > Imintanoute** [英語わずかに話す人] ヒッチ 車中から、雪帽子のアトラス山脈を眺める。Hotel Essalam(D30)泊。1週間ぶりの温水シャワー。

**12月28日 Imintanoute > Ait Melloul** [トラック] ヒッチ

**Ait Melloul > Sidi Bibi** [男3人] ヒッチ

**Sidi Bibi > Tiznit** [夫婦とその妹] ヒッチ

**Tiznit > Amtoudir** [George 氏] ヒッチ このフランス人は、モロッコに移住してホテルを開業。人里離れた山間のオアシスにある、彼のホテルに食事付きで無料で2泊させてもらうことになる。Auberge Ondirait Le Sud 泊。

**12月29日** 午前中、谷を3km歩いてオアシスの源泉へ行き、スケッチしてきた。 午後は、George 氏の知り合いの地元の若者の案内で、agadir(古城)観光。夕方、地元の少年達とサッカー。肉と野菜を甘いソースで煮た、旨い夕食。同宿泊。

**12月30日** 今日もサッカーをしたり、民家の面白い扉や窓のスケッチをして、午前中を過ごす。クスクス(小麦と米の間のような食感の北アフリカ郷土料理)とオムレツの昼食後、George 氏が外出するということで、彼の車に便乗して、俺も出発。途中、地元の警察官を、ヒッチ気味に拾っていた。

(注) 藤田君から次のような解説が送られてきた。

アフリカでは助け合いの精神が色濃いのか警察官や民間人をついでに車で拾い乗せていくのは日常的に行われている。

**Amtoudir > Bouizakarne** [George 氏]

**Bouizakarne > Tan-Tan** [Marco] ヒッチ またもやフランス人の車。彼もモーリタニアを目指しており、フランスから持参した古着や酒などを売りながら旅行資金に充て、最終的には彼の乗ってきたその中古車を売り払い、飛行機で帰るそうだ。 乗せてくれた礼に、サンドイッチとアチャイをおごる。部屋をシェアして Hotel El Madina(D30)泊。

**12月31日 Tan-Tan > Boujdour** [同車] 引き続き Marco の車で南へ。休憩した町 Tarfaya で、民家に招かれ、クスクスを御馳走になる。今晚は Marco がホテルに泊まり、俺は野宿を試みる。…夜、Zine 君という英語ペラペラの若者と知り合い、ビーチへ散歩した後、彼の家に泊めてもらい、魚料理を頂く。

**2005年1月1日** サハラ砂漠の西端の小村での年越し。南アジアへの大津波のニュースをTV で見た。Marco の宿泊しているホテルを訪ね、今日も乗せてもらうよう話をつける。明日でお別れ。 **Boujdour > Dakhla** [同車] Camping Moussafir (D20) 泊。テントがないので、置いてあった廃車の中に寝袋を敷いて寝た。

**1月2日 Dakhla > El Argoub** [ジープ & ヴァン] ヒッチ

**El Argoub > Cap Barbas** [ドイツ人2人の camping カー] ヒッチ Thomas と Swen というドイツからの旅行者。旅は道連れで、モーリタニアまで乗せてもらうことに…。

その晩はビーチで夜を明かす。Thomas はイビキが大きいので、車の外のテントで寝るといふ。俺はその隣で、砂浜に寝袋。砂漠の夜は寒く、焚き火して、服を何枚も着重ね、マフラーを巻き、眠りにつく。

**1月3日 Cap Barbas > Guergrat** [同 camping カー] 延々と続く砂漠、単調な景色。砂丘の上に登り、そこから沈む夕日を眺める。砂に埋もれた無数の弾丸を拾った。戦争の爪痕だろうか…。草切りガマ状の砂丘のふもとで、焚き火を囲み、ひっそりと野宿。

**1月4日 Guergrat > モーリタニア国境** [同 camping カー]

## 《モーリタニア》

**2005年1月4日 モロッコ国境 > Nouadibou** [ドイツ人2人の camping カー] 2日前にヒッチハイクして、一緒に旅を続けている Thomas と Swen の車に、引き続き同乗。延々と続く単調な砂漠の運転と、度重なる入国管理官のパスポートやビザのチェックなどで、気が滅入ってしまったのか、Swen は気が立っているようだった。モロッコと比べ、町の様子も猥雑になり人々の肌の黒さも増し、一層アフリカらしくなる。Baie Du Levrier Camping ドミトリー (1,000 Ouguiya = 約¥400) 泊。

**1月5日 Nouadibou > Nouakchott** [同 camping カー] 結局、Thomas 達に、首都まで乗せてもらうことになる。舗装された道は消え、砂にタイヤを取られながらの Paris ダカール rally のような過酷なドライブ。運転者はさぞ気疲れしたであろうが、俺は後部座席で寝転び、楽チン、楽チン。もしも彼らが拾ってくれなかったら、この区間のヒッチは相当難しかったかもしれない…。当時モーリタニアで唯一人の Hospitality Club メンバーだった、アメリカ人ボランティア英語教師の、Jay さんの家に泊めてもらう。たまたま、他のアメリカ人も集まってのホーム party が開かれていて、御馳走にありつけた。そのうちの1人 Luke という青年の住む、Kiffa という町を訪れてみることにする。

1月6日

マリ大使館で、ビザ取得(Ø2,500)。Jayさんのお手製の豆料理を頂く。同家泊。

1月7-9日 **Nouakchott > Kiffa** [トラック] ヒッチハイク 500km程なのでスグ着くと思っていたが、{少ない交通量}と{悪い道}に進路を妨げられる。しかも、乗せてくれた大型トラックは、重い荷物を積んだオンボロで、パンクを繰り返しながら、のんびりと進む。タイヤの修理を手伝おうにも、車整備の知識はないし…なんせ言葉が通じない(モータニアの公用語はアラビア語方言のハッサニーヤ語)ので、傍観するよりどうしようもない。トラックに乗っていたのは、親分と子分のような2人。ややぶっきらぼうに感じたが、朝昼晩3食+チャイ(茶)を俺の分まで用意してくれて、優しかった。ほとんど自炊なので、その分も時間を費やし、結局3日かかった。Lukeの家に泊めてもらう。彼自身もNouakchottから乗合taxiで数日前に帰宅したばかり。ドアが壊されていて、泥棒が入っていたという。必ずしも治安は良くないようだ。

1月10-11日 下痢で寝込む。Parisダカールrally出場者によるイベントが催されていて、Lukeは会場へ行って世界各国からのdriverと話したり楽しんできたようだったが、残念ながら、俺は動けなくて彼の家で横になっていた。計3泊休息させてもらい、無事回復。

1月12日 **Kiffa > Efam Le Khe Deiratte** [車2台] ヒッチ 2台目の運転手の家に招かれ昼食を頂く。温かい大家族にいにしえの日本を思い起こす。そこから少し歩いた所の税関のような建物で呼び止められた。パスポートか何かのチェックかなあと思っていたら、あったかい牛乳を出してもらって、そこに寝かせてもらう。

1月13日 **Efam Le Khe Deiratte > Kobenni** [車4台] ヒッチ Lukeの紹介で、やはりボランティアのアメリカー人青年、Jaredの家に泊めてもらう。イスラムの国で、アメリカ人3人の家を泊まり歩くことになるとは…何の因果だろうか。

1月14日 Jaredの家には電気はなく(…というよりも、この町自体にまだ電気が通っていないのだが…)、自家発電式のラジオが、唯一の文明製品(?)。同家泊。

1月15日 **Kobenni > Gogui** [徒歩] 国境で、警察官が、出国税(?)としてØ2,000の支払を要求してきたが、きっぱりと断ると、あっさり引き下がり、急に親切になり、水もくれた。マリへ。

《マ リ》

2005年1月15日 **Gogui** この国境の町には、出入国管理の施設がなく、スタンプも押ししてもらえず、公式には入国前か…?村民ムジャラさんの家に泊めてもらう。

1月16日 **Gogui > Diandioume** [トラック] ヒッチ

**Diandioume > Nioro** [ロバの引く荷車に10km程乗せてもらった他は、徒歩]この町へ通ずる道路脇に出入国管理事務所があり、入国スタンプget。ここでも、地元民シラさんの家に泊めてもらう。

**1月17日 Diandioume > Nioro** [トラック風バス]CFA 7,500 Francs (=約¥1,500)

前半の 200km 程は砂利道で結構ゆれました。ここで、西アフリカと中部アフリカ地域の旧フランス植民地を中心とする多くの国で用いられている共同通貨、CFA Franc について触れておく。Banque Centrale des Etats de l' Afrique de l' Ouest(西アフリカ諸国中央銀行、BCEAO)発行のものと、Banque des Etats de l' Afrique Centrale(中部アフリカ諸国銀行、BEAC)発行のものに2種類あり、当初1フランス Franc = CFA 50 Francs の固定レートであったが、現在は基軸通貨を Euro としており、1 ユーロ= CFA 655.957 である。またまた、internet カフェで働くオスマンに泊めてもらう。

**1月18-20日** マリの公用語はフランス語だが、現地語の国語としてバンバラ語、フルフルデ語、ソンガイ語、タマシエク語の4つが指定されている。ジョリバ川(バンバラ語で「赤い川」の意、ニジェール川のこと)のカヌーをスケッチしたり、木槌で布をトントンと叩く仕事を見学&体験したり、レゲエ concert(チケット CFA1,000)を鑑賞したり、同宿のオランダ人自転車旅行カップルや、中国語を5年勉強してるベルギー人らと話して楽しむ。ブルキナ・ファソ大使館で3ヶ月ビザ(CFA13,200)も即日取得。Auberge La Paix というホテルを、値切って、超汚ねえ、蚊がブンブン、電気もつかなければ、鍵もかからん、壁も崩れそう…でも、一応シングル(CFA2,000)に3泊。

**1月21-22日** タバスキ(アラビア語ではEid al-Adha、犠牲祭のこと)の祝日で、朝の祈りの後、羊を殺してさばいて料理。俺も、道端で遊んだ子供の家連れられ、焼肉などを御馳走になる。先日のレゲエと同じ場所で、今度は、アフリカ本場の音楽のコンサート(今回も CFA1,000)鑑賞。ジャンベをはじめとした打楽器の演奏がサイコー!あれは白人にも黄色人種にも真似できない、黒人独特のみなぎるパワーのなせる技だろう。また、マリ音楽は、他のアフリカ諸国と一風変わった、魅惑のメロディーが興味深い。

柔道の国際経験を持つというアリ君と知り合い、道場を見学し、彼の家に2泊滞在する。

**1月23日 Bamako > Baguineda** [オートバイ1台と車2台] ヒッチ 村外れの店で足を洗うためにバケツに水を1杯もらったついでに、泊めてもらう。水も電気もなく、暑さと蚊であまり眠れなかった。顔を洗うのも、井戸水。

**1月24日 Baguineda > Zantiguila** [ジープ & ワゴン車 & トラック] ヒッチ

**Zantiguila > Sevare** [フランス人旅行者2人] ヒッチ ここでもフランスからの旅行者に助けられ、超古いトヨタのpick-upトラックの荷台に乗せてもらう。しかし、途中バッテリー関連の故障で、現地の若者と俺と一緒に車を押すハメに…。フランス人2人は、押してくれた若者達にチップを払っていた。日没後やつのことで到着。フランス人たちは多分ホテルに泊まるので、俺はその辺で野宿しようとしたら、売店の兄ちゃんに泊めてもらった。ミネラル水ももらった。

**1月25日 Sevare > Mopti** [中年女性ライダーの後部座席] ヒッチ 女性のオートバイのヒッチというのは、後にも先にもあまり記憶にない。英語の堪能なスレイマンと知り合い、水浴び&洗濯させてもらい、ジョリバ川岸に停泊しているカヌーの上で甘い茶をすすり

ながら音楽を聴いた。彼は旅行者を相手に仕事しているらしく、ツアーなどの売り込みがしつこく、彼の家に CFA1,000 で泊めてくれるという。友達気分が崩れて、出て行こうとしたら、1泊だけ特別にタダで泊めてもらった。

**1月26日** スレイマンの家を去り、出発しようとするも、足の傷が痛む。安物の靴と歩き過ぎのため、擦り傷が数ヶ所あった。路上で座りこんでいたら、近所の人が家の中で休ませてくれ、食事まで用意してくれ、また薬までも塗ってくれ、とうとう泊めてもらった。

**1月27-28日** 結局その家に、10日以上も世話になることに…。インチ（バンバラ語で、ありがとう）!主に相手をしてくれたのは、俺と同じ位の年頃と思われる、アルナ。彼は現地語とフランス語しか話さないの意思疎通は難しかったが、背が高く優しい男だった。

マリ独特の泥で造られたモスクをスケッチしたり、アルナのオートバイの後ろに乗せてもらって街を案内してもらったり。途中でチェーンが外れ修理。アフリカのオートバイの多くが、いまだにペダル付きで、始めは人力でこいでエンジンを始動させるもの。

**1月29-31日** 調子に乗ってたくさん歩いて、足の傷が悪化。屋内に閉じこもり、TVなど見て過ごす。トォは、雑穀類を挽いた粉を熱湯で練り団子状にした、面白い料理。アフリカの主食はどここの国も、呼び名こそ変われど、大体コレ!夜は、たまり場、斜め向かいのアルナの友人宅でトランプ。甘い紅茶を飲み、ピーナツをつまみながら、サリフ・ケイタなどのマリ音楽を聴く。アルナの家泊。

**2月1-4日** 足の傷が治らないのを見かねたアルナに、半ば強引に病院に連れて行かれる。アフリカの病院初体験。注射すれば早く直ると言われたが、値段と衛生状態が心配だったので、塗り薬と飲み薬だけ処方してもらう(CFA1,900)。包帯の巻き方などは、かなり手荒かった。毎晩、例のたまり場で、レゲエを聴きながらトランプ遊び。ちなみに Bob Marley は、あたかも英雄のように、マリの男児誰しもが崇拝しているといっても過言ではない。

夜少し涼しくなってきたせいか、風邪気味。同家泊。

**2月5-6日** 風邪本格化。寒気、咳、頭痛。朝、昼ともまともに食べられず。アルナに果物を買ってきてもらう。また、アルナの友人が、ノドに効くという炭酸水のような飲み薬をくれた。翌日は、アルナ達の手厚い看護のおかげで、頭痛は残るものの、少し回復。同家泊。

**2月7日** 足の傷も風邪も完全回復ではないが、長いこと居座っているの、今日こそは体に鞭打ってでも、何とか出発にこぎつける。アルナのオートバイで、乗合 taxi 乗り場へ。

**Mopti > Bandiagara** [乗合 taxi] CFA2,000 マリ人口の約90%はイスラム教徒だが、この地域に住む Dogon と呼ばれる人々は、土着の伝統宗教を信仰している。壮大な崖の中腹にへばりつくような独特の集落が、一大観光スポットとなっているが、足の傷のこともあり、残念ながら俺はそこまでは訪れなかった。

**Mopti > Bandiagara** [徒歩] 少し歩き、Dogon の雰囲気味わう。村で元気な少年の兄弟と知り合い、泊めてもらう。

**2月8日 Djonbolo > Djiguibombo** [徒歩] 足の傷で歩きたくないのに安い公共交通

機関が見つからず、歩きながらヒッチを試みる。**Djiguibombo > Kanikombole** [ヨーロッパ人の pick-up トラックの荷台] ヒッチ 断崖のパノラマ…あの裏に例の Dogon の集落があるのかな…?と想像をめぐらす。**Djiguibombo > Kanikombole** [トラック] ヒッチ やや大き目の町に出て、やっと手頃な公共交通機関を見つけたので、利用する。

**Bankass > Koro** [乗合ワゴン] CFA1, 500 国境近くの町で、腹ごしらえした後、国際バスに乗り、マリ出国。**Koro > ブルキナ・ファソへ** [バス] CFA3, 000

## 《ブルキナ・ソファ》

**2005年2月8日 マリより > Ouahigouya** [バス] 国際バスで Thiou 国境から入国。到着したのは、夜になってから…。バス terminal で、翌日出発旅客にまぎれて、仮眠させてもらう。やや蚊に刺される。

**2月9-13日** 足の傷が癒えるまで、この町でゆっくり休養をとることにする。

Hotel Liberté ドミトリー(CFA2, 000)に5連泊。

**2月14日** 明日の出発に備えて、また、バス terminal で仮眠。こうして、宿代を1泊分浮かす。

**2月15日 Ouahigouya > Ouagadougou** [バス] CFA3, 000 西アフリカの宿代は概して高め。ある hotel の従業員に安宿を尋ねたら、親切にもオートバイの後ろに乗せてくれて、文化センターのような所まで連れてってくれた。Maison de Jeunes シングル(CFA1, 500)泊。日本語に訳すと「青少年の家」というその施設は、アフリカ独特の派手で楽しい壁画で飾られており、伝統音楽と舞踊の練習風景も見学できる面白い場所。尚、ブルキナ・ファソの公用語は、フランス語。

**2月16-19日** 日射病だろうか…?体調を崩す。特に夜、激しい頭痛に悩まされる。同宿泊。

**2月20日** 連日寝込んでる俺を見かねて、向かいに住む心優しき青年が、薬と濡れタオルで看病してくれた。おかげ様で、その夜、かなり良くなったような気がした。同宿泊。

**2月21日** 体調すっかり回復!ビザ用の顔写真を撮影するために写真屋へ行きがてら、久々の散歩。向かいの青年に挨拶をしに行ったら、モスクへの礼拝に誘われて、一緒にお祈り。病気の治った礼はアッラーに…とでも言うのだろうか…。夕方、女性だけの楽団による民俗舞踊を見学。2人の女性が双方向から走ってきて、闘うように尻と尻をぶつけ合う、一風変わったドンケツ・ダンス(?)だった。同宿泊。

**2月22日** ガーナ大使館で、パスポートを預けて、CFA15, 000 支払い、ビザ申請。同宿泊。

**2月23日** 同じ宿に滞在していたマリの musician と知り合い、おしゃべり。午後から、断水。トイレもシャワーも、水道からいっさい水が出なくなる。同宿泊。

**2月24日** 午後にビザ発給予定なので、ガーナ大使館へ。しかし、もう1人の日本人の申請者と間違えたとか何とかいう大使館側の手違いで、明日の午前中にもう1度来るように言われる。

クスクス(北アフリカの主食の穀類)をヨーグルトであえた甘いデザート、デゲが美味しくはまってしまい、食べ過ぎて下痢!引き続き断水だし…さんざんな1日。同宿泊。

**2月25日** ガーナ大使館に約束の10:00に行くと、まだ出来ておらず(!)、午後再度来るように言われる。いやはや、アフリカだなあーと思う。午後、やあーつとのものでビザ受領。大使館からの帰り道、自称 Jimmy というおしゃべりな男に出会う。彼の家の井戸水で水浴びさせてもらい、夕食を御馳走になり、明日から泊めてもらうことになった。

今晚で Maison de Jeunes に通算 11 泊目となる。それなのに、支払ったのは 10 泊分の CFA15,000 のみ…。計算ミスなのか、断水の分の割引価格なのか知らんが…儲けもの!

**2月26-3月11日** Jimmy の家にタダで泊めてもらうのをいいことに、思わず長居してしまう。水道も電気もないが、井戸とろうそくがある。当然扇風機もなく、暑く寝苦しく、蚊にも刺される。彼はガーナにいたこともあり、英語が上手い。巧みな話術を駆使して、民芸品などをヨーロッパ旅行者などに高く売りつけ、稼いでいるようだが、実際にはほとんど定職を持っていない。ヘビー-smoker で酒飲み。酔うと特に饒舌になり、愚痴も多くなった。彼は一応、敬虔な(!)イスラム教徒で、礼拝だけは絶対に怠らなかった。俺と一緒に親戚や友人宅を巡り、挨拶回りをした。どうやら、珍しい東洋人をダシにして、金を借りまくっているようだった。金持ちの友人の家で、高級料理にありつけたが、その友人は Jimmy の家賃をも面倒みてやっているらしかった。そのうちに、俺にまで小銭を借りようとしたことも…。一方で、酔ったときなど、気前良くおごってくれることもあった。刹那的な彼の生き方を理解し難く、何度もモメた。AIDS を患っているという彼の兄の家を訪れたときなどは、その寝たきりの姿を目の当たりにして、無言のうちに義援金を催促されているかのように面食らった。そんな中でも、FESPACO という映画祭や、ジャンベ太鼓の迫力の演奏を楽しんだ。また、Jimmy のいきつけのカフェの女主人と仲良くなって、飲物やつまみをおごってもらったり、忙しいときには洗い物を手伝ったりした。

**3月12日** Jimmy の家に荷物の一部を預けて、身軽にして、西方への小旅行に出発。

**Ouagadougou > Tanghin-Dassuri** [ビジネスマンの乗用車] ヒッチハイク

**Tanghin-Dassuri > Ouahabou** [男性2人組の乗用車] ヒッチ

**Ouahabou > Pâ** [マリからのトラック] ヒッチ Bar で出会った青年にピーナツをもらい、一緒に{公開DVD}を見に行く。まだ庶民にはDVDプレーヤーが高価で手が届かないため、持っている家で入場料を取り、上映会をやっている。ちょうど、昔の日本の野外上映会みたいな感じ。青年の家に泊めてもらう。

**3月13日 Pâ > Bobo-Dioulasso** [トラック] ヒッチ 市場の鶏売場で Jack と知り合う。彼のオートバイの後ろに乗せてもらって、街をザッと観光させてもらって、鶏肉スパゲッティを頂き、泊めてもらう。

**3月14-16日** Jack とその兄弟が、オートバイで周辺の小村を案内してくれた。一步街から離れると、本当に貧しく原始的な生活が展開されていた。子供達の服はボロボロ、あるいは裸。飲み水となる池の灰色に濁ったドロのような水を見たときには、言葉を失った。

同家泊

**3月17日 Bobo-Dioulasso > Koumbia** [オートバイ 2 台] ヒッチ **Koumbia > Hounde** [トラック] ヒッチ **Hounde > Pâ** [古い大型のオートバイ] ヒッチ この男と一緒に bar で一休み。彼自身はビール、俺にはオレンジ juice を注文し、燃料を満タン入れて、「ちょっとそこまで…すぐ戻る…」という感じで、俺を置いてどこかへオートバイで行き、そして 2 度と戻らなかった。そのまま消えてしまったのだ!!! その男は店の人に、俺がこれから空港まで送るべく友人であるという嘘をつき、安心させて騙していたのだ。大型バイクであったため、給油量はかなりの量。店は大損害を受けた。一連の詐欺に、俺の存在が関与したことに、大いに後ろめたさを感じながらも、CFA350 のジュース代だけ払って、その場を去る。先日、{公開 DVD} を一緒に見た青年の家に、もう 1 度泊めてもらった。

**3月18日 Pâ > Boromo** [ハンドルがきしむほど古うーいトラック] ヒッチ **Boromo > Ouagadougou** [BMW の夫婦] ヒッチ Jimmy と再会し、“Ouaga Jungle” というナイト club で、アフリカとフランスの音楽とダンス、そしてファイヤー show を楽しむ。Jimmy の家泊。

**3月19-23日** Jimmy と相変わらずの議論を交えながら、散歩し、カフェでくつろぐ。同家泊。

**3月24日 Ouagadougou > Pô** [トラック] ヒッチ この地域の家々は、白黒の幾何学模様が壁にペイントされていて、興味深い。とある bar で水浴びさせてもらい、その裏で眠る。

**3月25日 Pô > Dakola** [写真家のオートバイの後部座席] ヒッチこのライダーは、ガーナ国境で、旨い鶏肉飯や飲物を御馳走してくれた。

## 《ガーナ》

多言語国家だが公用語は英語なので、これまでの旧フランス植民地の国々と比べて、意思疎通の上で格段と旅がしやすくなる。イスラム教だけでなくキリスト教徒も増えてきた。

**2005年3月25日 Paga > Navrongo > Chiana** [オートバイ 2 台] ヒッチハイク

そこからヒッチできず歩く。そのうち次の町に着くだろうと甘く見ていたら、砂利道になり、荒野が延々と続く。何台かの車が俺に目もくれず真横を猛スピードで駆け抜けて行った。ペットボトルに汲んであった水も飲み尽くし、疲れ果てて木の下で野宿。

**3月26日 どこかの草原 > Basisan** [徒歩 5km 程] やつとのことで村にたどり着き、まずは民家に行って水をもらい、ガブ飲み。生き返るウッ! Garri (乾燥カッサバを砕いたもの) も頂き、休息を取る。 **Basisan > Wa** [tro-tro (ガーナではミニ bus をこう呼ぶ)] 10,000 Cedis (=約¥130) Travellers Cheques 両替前で所持金が限られており、値切りに値切って、

本来 40,000 をまけてもらった。その様子を見て憐れんだ銀行員が、次の tro-tro 代を払ってくれた。

**Wa > Jirapa** [tro-tro] 銀行員払い この町へ来るべくより良い道の存在を後になって知ったが、俺は悪い道を選んでしまった挙句、北へ少し戻る羽目に。ガイド book を持たぬ旅に、こういう無駄は付き物。ここでは、Hospitality Club メンバーのドイツ人医師を訪ねることになっていた。小さな町なので、tro-tro の車内で出会った青年が、そのドイツ人医師を知っており、家まで案内してくれた。Funk 医師の家に泊めてもらう。

**3月27日** Funk 医師の妻はガーナ人で、お手製の Banku (乾燥トウモロコシを水につけ、柔らかくならしたら潰して練り、その生地を煮て、オクラ汁などで食べる) を御馳走になる。この日は Easter で、彼らと一緒に教会へ。アフリカ音楽に合わせ、打楽器を打ち鳴らし、賑やかに歌い踊るミサの様子は、ヨーロッパとは全く異なる雰囲気! 彼らの知人宅で、non アルコールの Pito (トウモロコシを発酵させた薄茶色でホロ苦く甘酸っぱい果実酒) も頂く。Barka (ダガール語で「ありがとう」)。同家泊。

**3月28日** Easter Monday。Funk 夫妻とピクニックへ。同家泊。

**3月29-30日** 町を散歩したり、Funk 医師の仕事がてら車で隣町 Lawla 観光したり…。同家泊。

**3月31日** **Jirapa > Wa** [またもや仕事がてら、Funk 医師の車] Funk 医師の妻の買い物ついでに、市場を案内してもらい、お別れ。**Wa > Kunfabiala** [大学建設のトラック] ヒッチ **Kunfabiala > Tuna** [司祭の車] ヒッチ寝床を探してたら、地元の子供達が「教会に泊まれば…」と誘う。でも、もしもタダで泊まれるのなら、ここまで乗せてくれたさっきの司祭が、何か言ってくれたらどうし…半信半疑のままついて行く。教会に着くと、あっさり断られ、結局、野宿。

**4月1日** **Tuna > Bole** [Zakari さんのトラック] ヒッチ このトラックの貨物の積載終了次第、ガーナ中部の Kumasi まで乗せてもらえることに…。超面倒見の良い運転手 Zakari さんに、Fu-fu (カッサバやプランテイン 〈料理用バナナ〉、またはヤム 〈長イモに似てる〉) などの穀類を茹でて、杵と臼にソックリの道具でつき、モチ状にした料理) を御馳走になる。トラックの横で寝る。

**4月2日** **Bole > コート・ジボワール国境 > Bole** [Zakari さんのトラック] 国境まで貨物を積みに行くトラックに便乗。細い川の向こうに、入国こそしないけれど、コート・ジボワールの地を一目見て帰って来た。同トラック横泊。

**4月3日** **Bole > Kumasi** [Zakari さんのトラック] 道悪く何度も修理。早朝から深夜までかけて進む。途中、別のトラックが穴ボコにはまり横転している無残な姿を見かけた。同トラック横泊。

**4月4日** 街角で出会った若者に泊めてもらう。メダースィ(トゥイ語で「ありがとう」)!

**4月5日** **Kumasi 市街地 > Kumasi 南端** [車] ヒッチ 久々の大都市で、郊外へ抜けるのだけでも、一苦勞。真偽のほどは定かでないが、日本人船乗りとのハーフだという、自

称 Watanabe 君と知り合う。母親にキノコ飯を作ってもらい、泊めてもらう。英語の小説ももらった。

**4月6日 Kumasi > Amasie** [トラック] ヒッチ **Amasie > Tweapeasi** [政治家かつ農家] ヒッチ **Tweapeasi > Tarkwa** [車] ヒッチ 駅周辺で出会ったクリスチャン family に泊めてもらう。

**4月7日 Tarkwa > Takoradi** [中型トラック] ヒッチ このトラックにも Fu-fu を頂く。ギニア湾へ、アクワーバ(ファティエ語で「ようこそ」)。

ガーナ人として初の Hospitality Club メンバー、George の家に泊めてもらう。

**4月8-9日** George が急遽出張で、家を出なくてはならなくなったが、俺がもう数日滞在したいだろうとの気配りで、なんと!hotel を2泊分先払いして用意してくれた。

Dicfarm Hotel シングル(George 払い)に2連泊。

**4月10日 Takoradi > Shama Junction** [トラック] ヒッチ

**Shama Junction > Beposo** [ヒッチできず、徒歩] 歩いていると、途中の民家に招かれ、昼飯を御馳走になる。市場で野宿。

**4月11日 Beposo > Cape Coast** [マリのトラック] ヒッチ ガーナの海辺は、かつて”Gold コースト”と呼ばれ、金の輸出で栄え、植民地時代には「奴隷海岸」と呼ばれ、奴隷を収容していた城砦が残っている。1653年に建てられた Carolusborg という城砦の中を見学するには入場料があるので、俺は外側からの観光のみ。ダンサーの Shama と Bobo 達と知り合い、泊めてもらう。

**4月12日** Shama 達の所属する民俗舞踊団”African Footstep International”の練習見学。メンバーにデンマーク女性が1人混じっていた。同家泊。

**4月13日** 近郊の Elmina の海沿いの高級ホテルで、Shama 達の演舞を観る。俺は大満足したが、Bobo は納得いかず反省していた。終了後、高級料理にもありつけて、ラッキー!同家泊。

**4月14日 Cape Coast > Moree** [2人組の車] ヒッチ

**Moree > Abandze** [Amsterdam 城砦を眺めながら、海沿いを歩く] ヒッチ

**Abandze > Accra** [至れり尽せりのトラック] ヒッチ この運ちゃんは菓子や果物を買ってくれて、俺が首都で泊めてもらうことになっている Hospitality Club メンバーのフィリピン人と、彼の携帯電話で連絡を取ってくれた。挙句の果てに、彼の自宅にトラックを停めた後、taxi に一緒に乗り、運賃も払ってくれて、メンバーの家のすぐ近くまで送ってくれた。スゴイ! Jhonnell は国連職員で、もう1人のフィリピン人と一緒に、庭付きの大きな屋敷に住んでいた。久々に東洋人と会い、懐かしさを覚える。Jhonnell の家泊。

**4月15日** 隣国トーゴで暴動のニュースを耳にし、通過するようにさらに隣国のベナンへ抜けてしまえるように、ベナン大使館へ行きビザ取得(CFA10,000)しておく。同家泊。

**4月16-18日** 市街地や海岸の住宅地を歩き回り、体調を崩す。同家泊。

**4月19日** トーゴ大使館でビザ取得(CFA20,000)。帰り道、気分が悪くなり、公園のベンチ

に倒れこむ。近所の方が家に招き入れて介抱してくれた。下痢、嘔吐後、しばらく横にならせてもらい、ちょっと回復した頃を見計らって、なんとか Jhonnell の家まで帰る。同家泊。

**4月20-24日** 激しい頭痛…汗が大量に出て、寒気がする。下痢と嘔吐のため、頻繁にトイレへ。朝から晩まで、ほとんどずっと眠る。初日は何もノドを通らなかった。

Jhonnell がマラリアの薬を買ってきてくれ、同居人がアジア風の胃に優しい食事を作って世話してくれたおかげで、数日後になんとか回復。同家泊。

**4月25日 Accra > Teshie** [徒歩 10km] 牧師かつ教師の Hospitality Club メンバー、Frederick 氏の家に泊めてもらう。

**4月26-5月1日** 彼の学校を少し見学。教会へも行き、相変わらず大音量のアフリカ音楽が流れ、叫びに近い祈りのド迫力の礼拝。近々引っ越す予定の Achimota という町にある豪邸も訪れた。Frederick 氏の家や、彼の友人の家を泊まり歩く。

**5月2日 Teshie > Tema** [徒歩] 新たな Hospitality Club メンバーの Emmanuel が、バス terminal まで出迎えてくれて、そこから彼の住む地区まで一緒に tro-tro に乗り、その料金も払ってもらった。**Tema > Afienya** [tro-tro] Emmanuel 払い 彼の友人の父親の経営する bar で夕食を御馳走になる。Emmanuel の家泊。

**5月3-10日** Emmanuel のベッドに俺が眠らせてもらい、彼自身は床に寝た。ワルイね。

彼の姉の夫が、マンゴーとカシューnuts の畑を持っており、見学させてもらい、その採れたての実を味見させてもらった。絶品! 友人に自転車を借り、一緒に近郊の Ashiaman と Dodowa の村を観光。砂利道を必死でこぎ、俺は疲れ果ててしまったが、彼はへっちゃらで、アフリカ人のみなぎるパワーに感服。最後の晩餐には、Emmanuel の姉がお手製の Fu-fu を作ってくれ、その夫が白地に黒でアフリカ風の格子模様の入ったシャツを贈ってくれた。

**5月11日 Afienya > Tema** [tro-tro] またもや Emmanuel 払い

**Tema > Kpone Junction** [男2人と女1人] ヒッチ

**Kpone Junction > Pram Pram** [女2人と男1人] ヒッチ

**Pram Pram > Sogakope** [ナイジェリア人] ヒッチ ボルタ川のほとりで、ガーナ最後の Hospitality Club メンバー、Richard さんと待ち合わせ。彼は妻子と小さな家に住んでいるので、俺のためにわざわざ宿を用意してくれた。

Happovers Lodge シングル(Richard さん払い)泊。

**5月12-16日** 夜は宿で独りぼっちだが、朝食と夕食は Richard さんの家に招かれ、昼食は大抵彼の妻の勤める bar でプランテインや貝、豆料理などを御馳走になった。

日曜日に教会に行った時には、俺のボロボロの服を見かねて、アフリカの気候風土に適した、緑色の新しいシャツをプレゼントしてくれた。Akpe(エウエ語で「ありがとう」)!

彼の妻の妹が、浄水場やダチョウ園、図書館などを案内してくれた。ここでの最後の晩餐は、Tirapia と呼ばれる高価な白身の魚。旨い!同宿泊。

**5月17日 Sogakope > Aflao** [ビール積載トラック] ヒッチ ポーという少年と知り合い泊めてもらう。子供部屋に押しこまれ4人でザコ寝。夜中、豪雨で部屋まで浸水。野宿じゃなくて助かった。

**5月18-22日** 扇風機のない子供部屋は暑過ぎて、俺はしばしば庭で寝させてもらった。彼の家では大きな釜でパンを焼き売っていて、たまに焼き立てのをタダでもらった。最終日、ポーと彼の友達が一丸となって、物や金を要求してきたので、嫌な気分。

**5月23日 Aflao > トーゴ国境** [徒歩]

## 《トーゴ》

**2005年5月23日 ガーナ国境 > Lomé** [徒歩] 大統領選挙後の暴動での混乱直後なので、治安に一抹の不安があったが、庶民の生活においてはとりあえず落ち着きを取り戻したようだ。再び公用語は、フランス語に戻る。国境では、オートバイ taxi の客引きや、強引な観光ガイドが、ややウザったかったものの、懸念された入国管理官からの賄賂の要求もなく、すんなりと通過。トーゴで唯一人となった Hospitality Club メンバー、René の家に泊めてもらう。

**5月24-29日** René はサッカー選手、練習見学。兄と姉妹2人と4人で暮らしていて、Akoume(トウモロコシ粉を練ったものを、オクラ汁などで食べる)を作ってくれたり、おやつを買ってくれたり世話してくれ、ペンやTシャツや帽子までプレゼントしてくれた。

ハンバーガー店“Mc Donald's”はいまや多くの国の首都にある。トーゴの首都には未だ出店しておらず“Al Donald's”という類似店を見つけ、苦笑した。4月下旬に起こった大統領選挙後の暴動と、それに対する政府の弾圧の様子を、いろいろ話して聞かされた。軍が民家にまで押し入って政治犯の検挙をやったとか、報道機関の発表の死傷者数は実際よりはるかに少ないとか…。人によって意見が分かれ(新聞やニュースでさえも!)、ましてや外国人には理解し難い。大統領官邸のある一画は、バリケードと番兵を設け、かなり広範囲にわたって道路を封鎖してあり、迂回しなくてはならなかった。その他はいたって平和だが、1度だけ、警察と市民との激しい言い争いの場面に遭遇した。同家泊。

**5月30日** 家を出るに当たって、René の姉妹2人が、別れを惜しんで泣いてくれたのには驚いた。アフリカ人の情は、先進国のそれとは比較にならぬほど深いものなのだろうか…。

路上で知り合った、電子工学学生の Gui 君と仲良くなり、泊まって行けと言うので、もうしばらく Lomé に滞在することにする。彼はカメルーン人との2人暮らし。

**5月31-6月3日** Gui 君の学校へ連れて行ってもらったり、食事をしながらおしゃべりしたり、同居人のカメルーン人と政治論を交わしたりして過ごす。同家泊。

**6月4日** トーゴの北部には、観光客にとって面白い村があるそうだが、今回は政治情勢が不安定なので、あまり動き回らず、早々に隣国を目指すことにする。天気はあいにくの雨。

**Lomé > Lomé 郊外** [オートバイ] ヒッチハイク **Lomé 郊外 > Aneho** [ベナン人]

ヒッチ 小国のため、あつというまに東側の国境の町に到着。夜、Akoume を食べた食堂で、そのまま1晩泊めてもらう。夜中豪雨。

**6月5日 Aneho > ベナン国境** [徒歩 5km]

## 《ペナン》

**2005年6月5日 トーゴ国境 > Agoué** [徒歩 5km] **Agoué > Cotonou** [乗合 taxi2台 乗り継ぎ] CFA1,000 Hospitality Club メンバーの Ramanus に電話してみたが、フランス語しか通じず会話困難。それでもどうにか、街の一角にあるスタジアムで待ち合わせすることに成功。彼はオートバイで迎えに来てくれたが、何らかの事情で彼の家には泊めてもらえないらしい。お互いの意志疎通がもどかしく、英語を話す友人の元へ連れて行ってもらうことにした。その友人は俺と Ramanus の通訳をしてくれ、電話で別の友人と連絡を取ってくれて、その結果、Modeste という人の家に泊めてもらえることになった。

**6月6日** Modeste と同居人は2人暮らしで、夜間は彼らのオートバイを屋内に収納するので(防犯上か?)、かなり狭苦しかったが、電気も水道もあり(たまに調子悪くなったが…)、扇風機を回せば暑苦しくなく眠れた(彼らにとっては、涼しすぎるようだったが…)。

Modeste もその同居人も、やはりフランス語しか話さないが、夕食を作って御馳走してくれたり、いろいろ面倒を見てくれた。ナイジェリア大使館へ行くが、居住者にしかビザを発給していなかった。同家泊。

**6月7-8日** ナイジェリアのビザが取れないので、北側にあるニジェールへ行くことにする。ニジェール大使館へ行き、CFA22,500 で、翌日ビザ受領。同家泊。

**6月9日 Cotonou > Porto-Novo** [徒歩 32km] 歩いている途中に出会った1人のナイジェリア人が、パイナップル juice をおごってくれた。地元の警察官と仲良くなり、bar でソーダ水とココアをおごってもらい、オートバイで彼の家まで連れて行ってもらう、夕食を御馳走になり、泊めてもらった。

**6月10日** 早朝、その警察官は仕事へ。その後、出発に際して、彼の妻が CFA1,000(宿泊代?)を要求してきた。嫌な気分になり、CFA100 だけ払って、家を出る。この国の行政上の首都はここ Porto-Novo だが、実質的には Cotonou の方が大きく、またほとんどの大使館などもここにはない。Ramanus の実家がこの町にあり、電話番号をあらかじめ聞いていたので、かけてみる。父親が出たが、通信網のトラブルか何かで途中で切れ、それ以降つながらなくなってしまった。さてどうしたものか…と、当てもなくフラついていると、Ramanus の弟だと言う青年がオートバイに乗って現れた。彼らは、父親の命により、ずっと街中を捜してくれたのだ。もっとも、東洋人旅行者を見つけるのは、彼らにとってそんなに難しい作業ではなかったようだが…。 Ramanus は不在だけど、実家の彼の部屋に泊めてもらう。

**6月11日** 父親が、知人を訪ねて、ナイジェリア国境付近の村へ行くというので、オート

バイの後ろに乗せてもらって、細い未舗装のガタガタ道を進む。途中から雷雨にやられ、ドロドロ、びしょ濡れ。知人の家では、たき火で体を温め、トウモロコシを焼いてもらって食べた。同家泊。

**6月12日** Ramanus が帰省し、知人を訪ねがてら、ドライブ。アフリカの人々は、本当に知人を訪ねるのが好きだ。今日も雨。夕方、彼の妻と一緒に、車で Cotonou へ戻る。

**Porto-Novo > Cotonou** [Ramanus の車] 再び、Modeste の家泊。

**6月13日** Bar で Ramanus と Modeste はビール、俺はカフェオレで、最後の夜に乾杯。彼らには世話になりっぱなしだった。同家泊。

**6月14日 Cotonou > Parakou** [列車] CFA4,000 イタリア以来、久々に鉄道を利用。扇風機なしの暑い車内はほぼ満席で12時間、決して快適とは言えないが、インドの3等に比べたらはるかにましだ。日もとっぷりくれた頃、やっと到着。道端で Ouissouf と知り合う。英語がかなり上手く、日本人と一緒に働いたこともあるという。彼の家に泊めてもらう。

**6月15日** 昼までぐっすり眠る。午後、Ouissouf の働く綿工場を見学。同家泊。

**6月16日** 出発に当たって、Ouissouf が少し見送ってくれた後、綿工場までの taxi 代名目で金をせびってきたので、嫌な気分で見送られる。この頃、このパターンばかりだナ。

**Parakou > Kandi** [音楽スタジオで働く人] ヒッチハイク 道の真中で、緑色のカメレオンが佇んでいるのを見た。どうやらアスファルト色には変色できなかったようだ。

**Kandi > Malanville** [トラック] ヒッチ そこから、ニジェール川に架かる橋を渡り、出国。

## 《ニジェール》

**2005年6月16日 ベナン国境 > Gaya** [オートバイ] ヒッチハイク パン屋の青年と知り合い、泊めてもらう。部屋の中はパンを焼く熱気で暑すぎて眠れず、庭にむしろを敷いて、扇風機をつけてやっと寝れた。

**6月17日 Gaya > Koté Koté** [学校建設の車] ヒッチ **Koté Koté > Dosso** [古い車] ヒッチ **Dosso > Niamey** [JICA と共に働いているベルギー人] ヒッチ 首都到着。夕方雷雨。店先で雨宿りしていたら、オジサンが心配して泊めてくれた。アフリカ典型的な大家族の狭い部屋に、もう子供達は寝ていたが、俺のせいで起こされ、端へ端へと詰めさせられて、「川」の字が縦横無尽に何ヶ所もできてしまうザコ寝。

**6月18-24日** Camping Touristique というキャンプ場で、テントもバンガローも何もなく、低木で囲まれた空間に、寝袋を敷いて寝る。一応藁葺き屋根の下なので雨はしのげ、荷物は預ってくれ、シャワーも浴びれた。1週間でCFA10,000。ナイジェリア大使館では火曜日と木曜日にしかビザ申請を受け付けておらず、窓口の係員の仕事振りも怠惰に感じた。当

初、ベナンでと同じように、居住者のみへしか発行できないようなことを言っていたが、頼みこむと(?)取れた(CFA16, 200)。庶民の住宅地へ行くと、伝統的な泥を固めて建てられた家々が軒を連ねている。その間隙を縫って散歩すると、まさに異国情緒たっぷり！Nescafé 主催のイベントで、無料コーヒーを飲みながら、音楽&ダンス見物したり、見ず知らずの人が話しかけてきたり、食事を御馳走してくれたり、楽しく過ごす。

**6月25日 Niamey > Sdrey** [徒歩 20km] **Sdrey > Dosso** [米積載トラック] ヒッチ車窓からキリン見た。そのトラックの横に、寝袋を敷いて眠る。蚊に刺され、痒うィ！

**6月26-27日 Dosso > Galmi** [同トラック] 荷は重いし、タイヤは古いし、ガス欠はするし…で 3 日間の長旅となった。助手の若者達が親切で、飲物や菓子をおごってくれたり、甘い茶を淹れてくれた。雨の日には、トラックの運転席の後ろの仮眠スペースで、寝させてもらった。

**6月28日 Galmi > Maradi** [同トラック] 街角の人だかりを覗いてみると、蛇使いの男が 3 匹のキングコブラを操っていた。しばらく見ていると、彼はどうやらマムシ薬の行商人であることがわかった。歯を磨こうと店先に座り、オバサンに石投げられる。怖っ。こりゃ野宿はできんワイと思って、ブルキナ・ファソのようにバス terminal へ行き、このベンチで寝る

**6月29日** バス terminal を宿代わりにして、付属の有料シャワー(CFA50)で体と衣服を洗った。バケツを借りたら、洗剤までくれた。荷物も預ってくれた。グラウンドで若者とサッカーをして遊んだ後、見ていた子供達に囲まれて、次から次に握手を求められ、一躍スター気分！彼らは東洋人をあまり見かけないのだろう。あまりの子供達の熱狂振りに、大人達に叱られ蹴散らされていた。同バス terminal 泊。

**6月30日 Maradi > Danja** [徒歩 12km] **Danja > Danissa** [3人組のオンボロ車] ヒッチ 小さな村なので、ここに来た東洋人は数えるほどしかいないらしく、何もしていないのに、子供達に一気に囲まれてしまった。リーダー格の数人が、木の枝を振りかざして、彼らを追い払う。始めのうちは、キャッキョッと笑いながら逃げていた子供達だが、そのうちに、転んでひざを擦りむいて泣く幼い子まで出てきた。群集は時に危険だ。大人達が注意しても、一向に子供達はいなくならず、俺は彼らに囲まれ何時間も動けないまま、日が暮れてゆく。気の利いた若者が、パンやジュースを差し入れてくれた。そのままそこで野宿しようとしたら、警察に連行された。逮捕取調べか…と思ったら、特に何もきかれず、国境イミグレーションに泊めてもらった。ちょっと拍子抜け。

**7月1日 Danissa > ナイジェリア国境** [出入国管理官の車] ナイジェリア側のイミグレーションまで乗せてくれた。

## 《ナイジェリア》

**2005年7月1日 ニジェール国境** ビザでは 30 日の滞在が許可されているのに、入国管理

官は20日滞在しか認めてくれない。英語が公用語なので、執拗に抗議してみるが、相手にされず、管理官はスタンプを押し、奥の部屋に去ってしまった。やや急ぎ足の旅にしなければならぬ。検疫でイエローカードを見せると、係官は「黄熱病だけじゃ不十分、他の予防接種も必要」と言う。入国拒否になってはかなわんと、粘ること数10分…通してくれた(ホッ)。やれやれ、アフリカに、ルールってもんは果たして存在するのだろうか?。

**Magma Jibia > Katsina** [2人組] ヒッチハイク

**Katsina > Kano** [優しいオジサン] ヒッチ霧雨の中、工事現場の空地にて野宿。

**7月2日 Kano > Dakazare** [トラック] ヒッチ 夕食&コーラ&みかんを御馳走になり、そのトラックの横に寝袋を敷いて寝る。

**7月3日** 20日以内にヒッチでナイジェリアを回れるか心配なので、公共交通機関を使う。

**Dakazare > Kaduna** [乗合 taxi] 100 Nairas (=約¥75)

**Kaduna > Abuja** [ミニ bus] 300 新設されたばかりの首都。建物も道も綺麗でヨーロッパにいるかのよう。パスポートがビザとスタンプでいっぱいになってきたので、日本大使館へ行き、ページの増補。3,125と予想以上に高かった。Internet カフェで夜を明かす(overnight パック料金で300)。

**7月4-5日 Abuja > Ibadan** [中型 bus] 1,280 夜行バスで移動。街外れで野宿。

**7月6日** 街外れなのでバス停もどこだかわからぬまま歩いていると、トラックがたくさん停まっている所で、運転ちゃんたちにメシを食わせてもらった上に、車を用意してもらった。

**Ibadan > Lagos** [トラック] 0 Hospitality Club メンバーの Sola の家に泊めてもらう。

**7月7日** Lagos は旧首都だけあって、恐ろしく巨大で人口も多い。そのため供給電力が需要に追いつかず、停電が多く生活し難い。TV やラジオなどの電化製品が揃っていても使えずに、ろうそくで一夜を過ごすことを余儀なくされる家庭も多い。裕福な家には発電機がある。Travellers Cheques を両替できる銀行を苦労して探した挙句、手数料を E30 も取られた。帰り道、道路が封鎖されて、パーティーのようなものが催されていたので、通りぬけようとしたら、ビール瓶を手に持ったものすごい剣幕の男達に追い出され、迂回した。

Sola の家族に夕食を御馳走になり、同家泊。

**7月8日** Sola は早朝に仕事へ行ってしまった。彼は忙しいビジネス man らしい。

家族が朝食にパンを買ってくれた。France パンではなく、ここでは主に、British ブレッド、そう日本でもおなじみの角食。柔らかくて美味しかった。

**Lagos > Benin City** [ミニ bus] 1,200 次なる Hospitality Club メンバーの Clifford 君の家に泊まる。

**7月9日** 午前中は雨のため、部屋で DVD を観て過ごす。午後、Clifford 君と一緒に、大学のキャンパスを散歩。アフリカらしい力強くもひょうきんな彫刻群が並んでいたの、その1つをスケッチ。夕食に Eba(カッサバ団子)などを頂き、同家泊。

**7月10日 Benin City > Warri** [Clifford 君の親類の車] Clifford 君の家を後にし、た

また来ていた彼の親類に同乗させてもらう。次の町へのバスを探し歩いているうちに、夜になった。この辺り南部の河川域に広がる石油産出地帯では、外国人を対象とする誘拐事件が頻発している。交差点で出会った軍人が「夜歩きは危険だ」と言って、彼の宿舎までオートバイで連れて来てくれて、泊めてくれた。その軍人は妻を火事で亡くし、現在1人暮らし。口数はあまり多くなく、アフリカ人らしからぬクールな人柄。翌朝、再びオートバイで、バス terminal まで送ってくれた。

**7月11日 Warri > Awka** [ミニ bus] 800 この国最後の Hospitality Club メンバーの Obinna 氏が車で出迎えてくれた。彼はマラリアで具合が悪く、しかも誕生日だという。最悪のタイミングの訪問となってしまったが、誕生日祝にファースト food 店で小さなマフィンを買ってあげた。Eba や焼きトウモロコシ、そしてジュースなどいろいろ御馳走になる。彼の家には発電機があったので快適。Obinna 氏の家泊。

**7月12日** 朝食にパンと紅茶を頂いて、Obinna 氏の車でバス停まで見送ってもらう。新品のシャツとペンをお土産にもらった上に、バス代までも払ってもらってしまった。

**Awka > Enugu** [ミニ bus] Obinna 氏払い **Enugu > Calabar** [乗合 taxi] 900  
道路整備など行き届いており、折り目正しい街との印象。建築中の家で野宿。

**7月13日** カメルーン大使館でビザ取得(CFA51,000)。中部アフリカの旅は、ビザ代が高いのが難。安宿を探して尋ね回っていたら、ある青年が彼の家に、2食付 500 で泊めてくれた。

**7月14日** 食堂で知り合ったオジサンが「無料で泊めてやる」と言うので、時間を約束していったん別れ、夜電話してみるがつながらず、そのまま Tel 店の物置で眠らせてもらった。

**7月15-16日** 新しい歯ブラシを買ったり、ズボンの修理をしたり、細々した用事を済ます。  
土曜日の朝 9:00-11:00 のみ無料の internet カフェを見つけた。アフリカでタダは初!  
水道なし、停電あり、居心地まあまあの、Queenset Guest House(800)に2連泊。

**7月17日 Calabar > Ikom** [ミニ bus] 650 そこから国境まではもう一息なのだがバスがなく、taxi は高いので、歩き始める。夕立にやられズブ濡れで歩いていると、村民が家に招き入れて泊めてくれた。

**7月18日 村民の家 > カメルーン国境** [その一家の男性のオートバイ] ナイジェリア出国に当たって、賄賂請求も一切なかった。かなり危険な国との前評判だったが、俺にとっては素敵な 18 日間の旅となった。

## 《カメルーン》

**2005年7月18日 ナイジェリア国境 > Eket** [徒歩]

川に架かる橋を渡り入国した途端に、急に未舗装のガタガタ道になり交通量も激減。

その時期は雨季で、水浸しでドロドロの道を歩いて行くのは、かなりしんどかった。

**Eket > Eyumojock** [車] ヒッチハイク 1台目の車に運賃を要求されたので断り、2台目にやっと乗せてもらえたものの、揺れに揺れて気分が悪くなってしまった。村のはず

れの bar のベンチで仮眠させてもらうが、あまり気分は回復せぬまま、また歩き始める。そこから山道になり、キツイ坂が続く。 **Eyumojock > Akwen** [徒歩] 軍基地に着いたときには、激しい頭痛でフラフラだった。兵士達に肩を支えられ、何とか本部まで連れて行ってもらい、司令官の許可を取り、とりあえず軍基地に泊めてもらった。

**7月19-21日** 軍基地といっても、設備は乏しく、電気はないし、川の水が生活用水である。ただし、山間なので水質は良好で、支流から引いた天然のシャワー(滝?)の水量はめいっぱいだった。兵士達が紅茶やパンやバナナなどを出してくれたが、あまり食べられず、みんなフレンドリーだったのに、頭痛と下痢と吐き気が収まらず、笑顔で会話することもできなかった。何日か横になっていれば良くなるだろうと楽観視し、その軍基地泊。

**7月22-23日** 1日のうちでも波があり、水浴びや洗濯ができるときもあれば、トイレに起き上がるのもままならないときもあった。調子の良いときに、荷物をまとめて出発の準備を試みたが、いざリュックを背負って歩こうとすると、体がいうことを聞かなかったりした。軍医に薬を処方してもらっても、兵士達にパンやスープを頂いても、結局全て吐いてしまった。食欲が若干湧いても、胃袋自体が何も受け付けない感じ。世話になった兵士の1人に、ナイジェリアで Obinna 氏にもらった新品のシャツを、お礼としてプレゼントした。使い回して申し訳ないが…。軍医に体温を測ってもらうと、38度あった。気が進まなかった注射も打ってもらったが、あまり良くならなかった。同軍事基地泊。

**7月24日** 1週間程たち、みるにみかねた司令官は、とうとう俺を病院に送ることに決断。

出発に当たって、荷造りも兵士達に任せて、歩けずに両脇を支えてもらい、ふんばったときに下痢をもらしてしまい軍医に尻を拭いてもらう始末…ほとんど赤ん坊。

**Akwen > Manfe** [乗合 taxi] どうやら司令官が払ってくれたらしい 車の揺れで、吐き気がこみ上げる。途中ぬかるみにはまったタクシーを、他の乗客が手押しで助けているときも、俺は独り車内でグッタリ…。体を動かさず気力がないのだ。検問で警察に質問されてもパスポートを見せるのが精一杯で、上手く質問に答えられなかった。病院に着くと同時に車椅子に乗せられ、即点滴。トイレ&シャワー付きの静かな個室を用意してくれて、そのまま病院泊…っていうか入院!

**7月25日** 頭痛と下痢は残るものの、大分落ち着いてきた。今日も朝から晩まで点滴。

保険に入っていないし、どこで次に Travellers Cheques を両替できるかもわからないので、入院費が心配になり、看護師に何度も尋ねると、なんとタダにしてくれた!奇跡!!!

尚、カメルーンなど中部アフリカ諸国で流通している共同通貨の CFA Franc は、西アフリカ諸国のそれとは紙幣も硬貨も異なるが、額面は1ユーロ= CFA 655.957 と変わらない。

**7月26日** 医者サインをもらい、病名が typhoid(腸チフス)であったことを知る。本調子ではないものの、無料で診てもらった身ゆえ、無理をしてでも退院。雨の中、そんなに遠くないバス terminal まで歩くのも、一苦勞。途中、男性が荷物持ちを手伝ってくれ、ありがたいと思いきや、後で物や金を要求してきて、余計に疲れる。

**Manfe > Bamenda** [ミニ bus] CFA4,000 ここではナイジェリア人の Hospitality

Club メンバーの Uche 氏に泊めてもらう。

**7 月 27-28 日** Uche 氏の家のバルコニーからは山林が見渡せ、トウモロコシ畑に囲まれた静かなたたずまい。彼は妻子を抱えて、ビジネスに行き詰まり、大変な中、俺の汚らしい長髪とヒゲを切ってくれたり、寝袋を洗ってくれたり、街案内してくれたり、よく面倒を見てくれた。1 食 CFA300 払ったものの、ボリューム満点の奥さんの手料理も御馳走になった。腸チフスの名残だろうか…咳がひどいので、Uche 氏に良薬を紹介してもらった。同家泊。

**7 月 29 日 Bamenda > Bafoussam** [ミニ bus] CFA1,000 この町で、やっと Travellers Cheques を両替できたが、手数料を 15%程取られた。ちなみに、ナイジェリアに近い西部のみ公用語は英語で、ここから先はまたフランス語。

**Bafoussam > Douala** [中型 bus] CFA2,000 雨の夜道を歩いていると、背の高い青年と知り合い、泊めてもらった。彼の家は工業地帯の一面に位置し、騒音が激しく、狭い部屋だった。俺がそのとき beach サンダルを履いていて、膝下が泥だらけになってしまったのを見て、彼は自分の運動靴をくれた。

**7 月 30 日 Douala > Yaoundé** [bus] CFA2,000 ここ首都のバス terminal で出迎えてくれたのは、カメルーン人として唯一人となった Hospitality Club メンバーの Brice 君。タクシーと一緒に彼の家まで向かう (CFA1,300)。内心「高い」と思ったけど、わざわざ迎えに来てもらったんだし…必要経費…やむを得ないか…。Brice 君には他に 4 人の兄弟姉妹がいて、男子と女子部屋に分かれて 2 段 bed が用意されており、ユース hostel のドミトリーにでも泊まっているかのようだった。夕食にスパゲッティを頂いた後、姉妹達に近所の散歩に連れて行ってもらった。路傍の街灯が、夜中のうちに何者かによって盗み去られたという話を聞いた。Brice 君の家泊。

**7 月 31 日** 午前中、Brice 君の大学などを散歩し、街案内してもらう。午後、彼の両親経営の“tel 店”で、ちょい通信状況不安定のインターネットを無料で使わせてもらう。昼食は、plantain(料理用バナナ)に、plumb と呼ばれる紫色のほのかに酸っぱい木の実を付け合わせて。木の実の食感は、アボガドのようにも、またバターのようにも感じた。Brice 君の両親達は、週末そこに集まって会合を開き、地域や家族の問題を話し合う場を設けているという。日本の大都市では、こういう付き合いが希薄かもしれない。トランプをして遊んだが、カードがフランス式で、例えば絵札の Jack が Valet、Queen が Dame、King が Roi と変わっていて、少し戸惑った。夜、隣に住んでいるコンゴ人を紹介してもらい、俺の今後(コンゴ?! )の旅の予定を組むために、いろいろ情報を教えてもらう。カメルーンからコンゴに直接入国すると、陸路がなくジャングルの中を舟で下らなくてはならなくて、現在治安もあまり良くないようだ。どうやらガボン経由の道が良さそうということを知る。同家泊。

**8 月 1 日** ガボン大使館へ行き、ビザ取得(CFA35,000)。写真不要とは珍しい。夕食に taro(サトイモに似てる)を御馳走になって、同家泊。

**8 月 2-9 日** 姉妹達の作る Fu-fu(カッサバやプランテインなどの穀類を茹でて、モチ状に

した料理)や Bobolo(カッサバから作った細長い団子を、バナナの葉で包んだ料理)は絶品だった。博物館を見学したり、観光案内所でカメルーンの地図やお土産用のバッチをもらったり、図書館で今後のアフリカ旅行の計画を立てたりした。Brice 君の家が居心地良く、つい長居。

**8月10日 Yaoundé > Ambam** [ミニ bus] CFA2,500

**Ambam > 検問所** [乗合 taxi] CFA1,000 (払い戻し) 一度は国境行きの乗合タクシーに乗り込んだものの、検問所で一悶着があった。俺のイエローカードを見て、コレラの予防接種を打っていないことに、警察官が難色を示したのだ。俺は「黄熱病だけで充分」と主張しモメる。そのうちに警察官が単に難癖をつけて、賄賂請求をしていることに気付き、ますます強気で挑むが、相手もなかなか引かない。他の乗客もいることだし、俺だけそこで降り、運賃を払い戻してタクシーには先に行ってもらった。数10分の議論の後、警察官は「気をつけろ、俺は警察だゾ!」と捨て台詞を残し、ようやくあきらめた。組織的ではないようだし、そんなに悪質ではなく、事情のわからない外国人相手に、からかい半分で、ダメモトの小遣い稼ぎをやっているように感じられた。 **検問所 > Minyin** [徒歩 5km 程]

興奮冷め遣らぬまま歩いていると、村の若者達に招かれて、魚のピーナツ soup 煮やカッサバ、サトウキビなどでもてなしてもらい、相一う当っ癒される。ここでも官民の差を痛感!小さな村なのに、Bamenda 出身の英語を話す青年や、赤道ギニア出身のスペイン語を話す医者らが住んでいて、コスモポリタンな雰囲気。そのまま村民に泊めてもらう。

**8月11日 Minyin > Eking** [徒歩] 朝食を頂いた後、仕事へ行く若者達と一緒に、歩き始める。途中の検問所では賄賂請求はなく、出入国管理もフレンドリーだった。国境の川に架かる橋は現在建設中のため、船で渡らなくてはならない。手漕ぎボートの船頭が値段を提示してきたが、簡素な平べったいフェリーの方が安そうだったので、そちらへ行き交渉。車も数台載せれるそのフェリー(と言うよりも、巨大な板)は無料だった。バングラデシュで財布をなくしたあのフェリーを思い起こさせる。ガボンへ。

## 《ガボン》

**2005年8月11日 Eboro > Ozakong** [徒歩 10km] 歩いている途中の小村で、娘さんから水とバナナをもらった。農作業帰りのオジサンと道連れになり、彼の家で旨い魚の夕食とミント tea を御馳走になった。彼はそこの村長で、そのまま泊めてもらった。

**8月12日 Ozakong > Bitam** [徒歩 18km] 入国以来いくつかの小さな集落を歩き抜け、やっと町らしい町にたどり着いた。さすがに腹が減り、大きなサンドイッチを続けざまに2つほおぼる。ここの出入国管理で、1日遅れの入国スタンプをもらう。賄賂の請求などは一切なかったが、パスポートの最初のページとビザのページのコピーを提出しなくてはならず(自腹!)、コピー屋を往復したり何だりで、かなり面倒臭かった。

**Bitam** > [夜行のミニ bus で、一気に首都へ] CFA12,000

**8月13日** > **Libreville** 久々の大西洋を望むギニア湾。ほぼ赤道直下である。

Hospitality Club メンバーの Boris はコンゴ出身。彼の母語である Lingara 語はガボンでも広く通じるし、どちらの国も公用語はフランス語で、生活に支障はない。また、彼はフランス人の会社でコンピューターによる広告看板印刷の仕事をしており、英語も話せる。

ナイト club へ行き、ルンバの live 鑑賞後、泊めてもらう。

**8月14-18日** 独立記念日は17日のみだが、なぜか官公庁は長い連休を取っており、大使館も閉館。Boris は仕事で忙しく、俺は独りで街を散歩したり、彼の家で TV を見たり、本を読んだり、ゆっくりさせてもらった。同家泊。

**8月19-24日** 4日間に渡る連休が明けて、コンゴやさらに隣国のアンゴラ大使館へ行き、情報収集。ビザ代が高いので、コンゴをとばしてアンゴラへ船で行ってしまおうかとも考え、それならば船賃はいくらか…そもそも国際船が就航しているのか…またその日程は…と、調べなくてはならないことが次々と湧く。図書館へ行ったり、直接港へ行って聞き込みしてみたりしたが、アフリカの情報ってヤツはどうも信憑性が低く、人によって言うことが違ったり…。Boris は気前良く「何日でも居て ok」と言ってくれるので、慌てずに済んだ。同家泊。

**8月25-26日** 例の船の件は、熱心な聞き込みの結果、港で漁業をしているある韓国人の船乗り頼む…というわけのわからない方向まで発展してしまい、とうとう断念した。コンゴのビザは transit(通過)だと比較的安く取れることが判明し、アンゴラのビザも取っておき、コンゴは急ぎ足で通過してしまおう…という計画に変更。アンゴラ大使館へ行くと、まず俺の短パンを見た受付のオッサンに、「長ズボンに履き替えて来い」と怒られ出直す。その上、高あーいビザ代 CFA60,000 を払い、翌日取得。同家泊。

**8月27日** Boris の家の付近の路上で、タクシーを待つ日本人旅行者と出会った。

※コイツが曲者で、いろいろ悩みの種となったのだが、個人を中傷するような文章をブログ上に公表するのに抵抗がある…が、仮に「H君」とでもして載せちゃうかっ?!

H君はマラリアから回復して退院してきたばかりとのことだった。同郷のよしみで、彼を Boris の家に招き、紅茶やパンでもてなして、その日はそれでお別れ。同家泊。

**8月28-30日** H君から移されたわけでもなからうが、今度は俺自身が病気で寝込み、激しい頭痛&嘔吐。Boris が薬や果物を買って来てくれて、介抱してくれた。頭痛に効くという野草から作った茶や、汗を流して病気を退散させるアフリカの伝統的な処方で、数日後に回復。同家泊。

**8月31日** ひょっこり H君が現れ、今日から Boris の家に一緒に泊めてもらうことになった。確か当時 27-8 歳の彼は 6 年(?)旅行中で、俺より長かった。東アフリカから来て、南アフリカを経由し、北へ向かっており、俺とちょうど反対回りで、お互いに情報交換。H君のお手製のカレーを食べたり、1日目は楽しく過ごしたのだが…?同家泊。

**9月1-7日** マリファナやハシシをやりながら、ヒッピーのように旅してる若い日本人旅行

者は、H君の他にもたくさんいるが、彼が現地人とケンカし滅茶苦茶にやっつけた話を聞いたり、現地の女のコと寝た時の素っ裸の写真を俺に見せびらかしてきて、何か違うナと思いはじめた。まず、彼は大食漢だった。1日に5食程食べ、その毎回の量もふつうより断然多い。彼はやせ型で、吐いている様子もない。消化の速度が超人並みなのだろうか?そして、一緒に食事の時なんかには彼の取り分を取ってしまったりしようものなら、非常に怒った。「食べ物の恨みは恐ろしい」などと言うが、彼の場合はその執着が尋常ではなかった。

「自己チュー」という言葉は彼にピッタリ!居候の身なのに、Boris や俺に行動を強制した。彼の思い通りに行かないとキレて、暴力に訴えるのも厭わない態度を取った。自衛隊上がりで、腕力には自信があるそうだ。どうやら幼少期に父親からも暴力を奮われたらしい。もしも精神科医が分析したら、H君は{アダルト children}であると言うのかもかもしれない。彼は恒常的に腹が減っていた。精神的な飢えは、食べても食べても満たされない。

俺はH君との争いを避けるために、1つの方法を考え出した。彼と日本語で話さないというものだ。そうすれば、カッとなってつい口を出す前に、1拍遅らせられる。また、Borisにも俺達が何を話しているかが明白になり、望むなら会話に参加できるというメリットもある。しかし、H君にその考えを告げると、「なんでそんなことする必要あんの?あんたの英語力を自慢したいのか!殴るゾ!!!」と、猛反対された。その晩、Boris と俺が2人きりの時に、俺がH君をこの家に引き寄せてしまったことを詫び、彼を追い出そうか…と相談を持ちかけた。しかし、Boris はどこまでも心の広い男で、Swahili 語の”Hakuna Matata(大丈夫、なるようになるサ)”という言葉を用いて、笑顔を見せた。家の主人がそう言う限り、俺は彼の滞在を容認した。そのかわりH君が日本語で話しかけてきても無視し、英語かフランス語(たまにポルトガル語も?!)なら返答した。そうして様子をうかがい数日後、彼は日本語を使うことをあきらめた。同家泊。

**9月8-9日** コンゴ大使館で、7日しか滞在できない transit ビザ(CFA20,000)を申請。アフリカの道路状況で、果たしてコレで足りるのかどうか疑問は拭えないが、翌日取得。同家泊。

**9月10-12日** 性格の強いH君は、Boris やたまに訪れる彼の友人にまで、共同生活だか何だか知らない大義名分を提示して、自分のやり方に従わせようとして、冷や汗モノだった。

ある日、Boris がH君のデジカメを借り、その後、壊したとか壊れてないとかで、H君が激怒!ひたすら平謝りする Boris を気の毒に思いながらも、俺は黙っているしかなかった。

炊事もH君が仕切って、無理矢理交代制にしようとしたし、俺が何か作る度に、「あれはこうしろ、それはああしろ」と口うるさくて参った。また、Boris の好き嫌いの多さについても、クドクドと説教した。ただしH君は食物への執着心が強いせいもあってか、調味料をたくさん持っていて料理がとても上手く、醤油味の和風チャーハンは絶品だった。

チェスやバックギャモンなどのゲームをして遊んだし(でも、彼を負かすのはチョット躊躇…もっとも俺が弱くて結果オーライ?!)、TVで日本の古いアニメのフランス語吹き替え版と一緒に見て楽しむこともあった。また、近所の子供とジャレるH君の姿は純粹だった。

日本語で会話しなかったせいか、H君が病み上がりだったせいか、いさ知らず、何とかかんとか、大きなケンカもせずに済んだ。同家泊。

**9月13日** いよいよH君の旅立ちの日。赤道ギニアへ向かう彼を、バス terminal まで見送り。彼が居なくなるとホッとした反面、周囲の人と必ずしも上手くやっっていけない彼の不器用さに、いささか同情もした。長く1人旅を続ける人間の不完全さや脆さは、この俺自身の鏡でもあるからだ。そうはいっても、2度と彼とは会いたくない。家に帰り、BorisとH君の話をした。{デジカメ事件}を仲裁してやれなかったことを謝ると、Borisは「あそこで君が口を出したら、H君は君を攻撃したサ」と、軽く言ってのけた。ああ、このBorisっていう男は全てわかった上で、優しく受け止めてくれる。長居して、病気の看病してもらって、その上迷惑な同胞の世話までさせて、ホント申し訳ないったらありゃしない。

BorisはH君の悪口を一言も言わなかった。「今頃H君はどうしてるカナ?…たぶん、なんか食べてるところダネ!」と冗談を言って笑った。{アフリカ人の陽気さ}と一言で片付けられない、彼の人間としての懐の深さを垣間見たような気がした。同家泊。

**9月14-17日** ガボン西南部に住む、別のHospitality Clubメンバーと、E-mailですでに何度か連絡を取り合っていたが、その友人が、彼らの町までの俺の飛行機代を払ってくれるという話が飛び込んできた。彼らはマレーシア人で、某ヨーロッパ系石油会社に勤めているという。BorisとTVでサッカーの試合を観戦したり、美味しい食事を作ってもらったりしながら、最後の数日をかみしめるようにして過ごす。最後の夕食には、港で新鮮な魚を買い、イモと一緒にトマト sauce で煮込んで、御馳走してくれた。同家泊。

**9月18日 Libreville > Gamba** [某石油会社専属の小型航空機] CFAO Hospitality ClubメンバーViknaの友人Asmahのおかげで、ジャングルを抜ける悪路をひとつ飛びできることになった。タイーインド以来、久々の飛行機利用。その町には海上油田開発のために、あらゆる国から外国人が来ていた。Viknaの友達のガボン人、フランス人、そしてイタリア人と一緒に、レストランで食事後、エアコン&湯シャワー付きの豪華なViknaの家に泊めてもらう。

**9月19日** 夕食にピザを食べようと、昨日と同メンバーが、Asmahの家に集まった。

しばらくして、誰かの携帯電話に、象がマンゴーを食べに住宅地に出没したという情報が入った。俺達はさっそうと車に乗り、その地点へ繰り出し、さながらナイト safari!!!

民家に植えてあるマンゴーの木の下に、小象が1匹いて、5mくらいまで近づくと、「パオーン!」と口をあけて威嚇してきた!俺が興奮して叫ぶと、みんなは「シーッ」と注意!象に襲われて負傷するという事故も起きているという。車を転回させて、慌ててその場を離れた。せっかく野生動物の宝庫アフリカに来ていながら、高価な safari ツアーに参加できない貧乏旅行者(そう、俺のこと)にとっては、誠にありがたい体験となった。同家泊。

**9月20日** Asmahの自転車を借りて周辺をサイクリング中、守衛が何やら指で木の茂る方を示している。指示する方を見ると、数匹の珍しい灰色の猿達が、飛び跳ねながら木の実を食べていた。今晚はViknaの友人のフランス人の自宅へ夕食に招待された。フワフワ食

感のチーズ入りの Quichi (サクサクのパイに生クリームと卵で作った生地を流し込み、好みの具を加え、オーブンでじっくり焼き上げたもの)と、食後にアイスクリームを御馳走になる。同家泊。

**9月21-26日** 街外れにある研究所でいろんな動物の剥製を見物したり、Vikna の勤める油田を見学。Vikna と Asmah はマレーシア人なので、醤油や干魚などの調味料を持っていたし、マーボー豆腐やカレーといったアジア風の料理を作ってくれ、懐かしの味だった。同家泊。

**9月27日 Gamba > Tchibanga** [乗合 pick-up トラック] CFA10,000 途中の町 Mayunami までの道は良かったが、そこから車ごと小さなボートに乗せられ、川を渡ると、ほぼ道はなくなった。サバンナの中に轍だけが見える。そのタイヤの跡に沿って、ガタンガタンと上下左右に振られながら力強く走る、ジャングル探検のはじまりはじまり!

マングローブ、ヤマアラシ、キノコ状のアリの巣…など面白いものが次々と目に飛び込んでくるが、ひどい揺れに次第に車酔いし、景色を楽しむ余裕はなく、しまいには吐いた。

目的地に着いても、まだ地面が揺れているようでクラクラした。ガボン人とモーリタニア人とのハーフだという青年に茶に招かれ、車工場付属の彼の部屋で仮眠させてもらった。疲労で5時間程眠ってしまい、そのままその晩は泊めてもらった。

**9月28日 Tchibanga > Bibora** [徒歩 10km] 中部アフリカ各国の道端では、よくカッサバ団子をバナナの葉に包んで売っているのを見かける。これは腹持ちが良くて、日本のおにぎりのように丁度良い弁当になった。その電気も水道もない小村の村長の家で、水浴びさせてもらい泊めてもらった。

**9月29日 Bibora > Bibora から 20km 地点** [白人運転の車] ヒッチハイク

**Bibora から 20km 地点 > Ndende** [トラック] CFA2,000 2台目のトラックもヒッチしたかったのだが、ちゃっかり金を取られた。コンゴのビザ記載の入国日”01 Oct”の2日前なので、この国境へ向けての最後の町で1-2泊ゆつくりしようと思っていたのだが、宿泊施設がない。そして、いつものようにタイムリーに親切に泊めてくれる人も現れなかったので、また例のカッサバ団子を買って歩き始める。国境まで48kmあるので、今日中にはとても着くまい、どっかで野宿でもしようかと考えていた…そんな時に限って、通りすがりのタクシーがタダで乗せてくれたりしてしまう。

**Ndende > Bole Bole** [親切な taxi] CFA0 勢いで出国スタンプももらい、コンゴ側の村まで乗せてもらってしまった。ビザの入国日前だけど大丈夫か…?でも、まあアフリカだし、”Hakuna Matata!”

## 《コンゴ》

俺が訪れたのはコンゴ共和国の方で、コンゴ民主共和国(旧ザイール)ではない。

**2005年9月29日 Ngongo** なりゆきで、ビザに記載された入国年月日の2日前に入国

してしまったが、入国管理官からは何も言われなかった。さすが、アフリカ！ 国境付近の橋の下の川の水は澄んでいて、地元の人々は飲水にも利用している。俺はそこで水浴びして、洗濯も済ませた。気持ち良い！ ナイジェリア出身のタクシー運転手と知り合い、彼の厚意により車の中で眠らせてくれたのだが、暑く蒸して、蚊のたまり場状態だったので、結局外で寝た。

**9月30日 Ngongo > Mila Mila** [トラック風バス] CFA6,000 夜中に着いた旅客用の大型トラックが、早朝4:00頃出発とのことで、周囲の人に起こされ、慌てて出発支度をして乗り込む。荒野に行く悪路。道中いくつもの検問があったが、俺のビザの入国年月日前であることに気づかないのか、はたまた「1日くらい…」と大目に見てくれているのか、日付については一切お咎め無し。その代わりに(といっは何が…)、管理官によるぶしつけな賄賂請求が何度かあった。幸いにも、断るとあっさり引き下がったので、大したモメず…。

パンクなどで何回か故障しながら、ガタガタ道を揺られること約10時間。到着したその小さな町からは、公共交通機関が一切ない。大きな丸太を積み込むトラックと、個人的に運賃交渉をし、便乗するしかないようだ。それも定期便があるわけでもなく、いつ乗れる保証もなく、とりあえずトラック station で、野宿。

**10月1日 Mila Mila > Inda** [木材搬送トラック] CFA4,000 トラックの数は多くなく、乗せてもらうのを待ってる地元民が数組いて、簡単にはいかなかったが、何台か頼み回って、やっとトラックに便乗。200km程の道のりを、ノロノロと丸1日かけて進む。夜中に着いたこともあって、運転手の家に泊めてもらう。

**10月2日 Inda > Pointe Noire** [木材搬送トラック] CFA0 大き目の港町まであと少し。歩こうと思ったら、別のトラックがタダで乗せてくれた。**Pointe Noire > Fouta** [徒歩] 南へ海沿いに20km歩いたその村で、農場を営んでいる Germain 氏と知り合う。

スモーク fish、自家製野菜サラダ、カッサバ、そしてコンゴ豆のコーヒーの夕食を御馳走になる。フランス語での会話なので、身振り手振りを交えながら時間がかかり、誤解も生じたが、数年前の戦争で逃げながら少しずつ家族を失っていった話に衝撃を受ける。

久々の水浴びをさせてもらい、そのまま泊めてもらった。

**10月3日 Fouta > アンゴラ国境** [Germain 氏と一緒に徒歩] 新鮮なサラダの朝食後、Germain 氏が俺を見送って国境まで歩いてくれることになった。途中、彼の何人かの知り合いに挨拶し、その都度、お宅で水や軽食を頂いた。彼は地酒を飲み、だんだん酔っ払って饒舌になり、戦争の時の様子を事細かく説明してくれた。国境での出国手続きを Germain 氏に手伝ってもらおう。アンゴラの農業大臣と親しいとか何とか自慢していた。チョット飲み過ぎカナ?7日の transit(通過)ビザしかなくて、道も悪く交通機関も不透明で、当初どうなることかと思ったけど、結局5日間でコンゴ南部縦断成功!

## 《アンゴラ》

**2005年10月3日 Massabi > Cabinda** [乗合 taxi] CFA10,000 国境から半ば強引にタクシーに乗せられた。町に着き他の地元客を降ろすと、運転手は俺1人を出入国管理事務所のビルまで連れて行った。外国人はここで登録をしないといけないようだ。立派な建物の正面入口に噴水。管理官は小奇麗な Y シャツにビシッとネクタイ。こういう所に金をかけ、庶民の生活は貧しいままなのか…?いろいろ質問され、書面に必要事項を書き込み、パスポートとビザを厳しくチェックされた。地図を見ればわかる通り、この地域はアンゴラ本国とは陸続きでなく、コンゴ民主共和国を経ないで行くには、海路か空路しかない。無論俺は安い船を選ぶ。船は明日の朝まで待たなくてはならないので、売店の兄ちゃん達とおしゃべり。英語を話す輩も数人いたが、ポルトガル語が公用語なので日常会話のお勉強。彼らの家で水浴びさせてもらって、缶コーラも頂き、泊めてもらった。Obrigado(ありがとう)!

**10月4日 Cabinda > Soyo** [船] 2,500 Kwanza (=約¥3,000) 小さ目の船で揺れて吐き、9時間後到着。親切な警察のジープが、街まで乗せてくれた。バングラデシュやパキスタンへの旅行経験を持ち、小さな食堂も経営している、活発なオバサンと知り合い、泊めてもらう。夜中、警察が俺のパスポートをチェックしに来た。どうやら近所の人達が、怪しい外国人が民家に泊まっていると通報したようだ。内戦が2002年に終わったばかりで、まだ民主主義の自由は確立してないのかも…。

**10月5-6日 Soyo > Luanda** [トラックの荷台] Kz2,000 300km程の道のりだが、戦争の影響で道がガタガタで、仮眠時間も含めて20時間かかった。夜中には小雨が降り、荷台での仮眠はツライものだった。首都到着時には、体はホコリだらけだった。またもや警察に怪しまれ、恒例の質問攻め。でも、おかげで警察署の食堂で、昼飯をタダで食べれた。夕方解放され、野宿。

**10月7日 Luanda > Benfica** [徒歩] ビーチで海水とはいえ、久々に体を洗い、服の洗濯もした。日本の保育園の中古バスが通りかかり、面白くてジロジロ見ていると、運転手と目が合い、乗せてもらった。その町で local バスを運行して生計を立てている家族だった。体の大きなアフリカ人に、園児用の席はどう見ても小さ過ぎ、可笑しかった。夕食やコーラを御馳走になり、そのバスの中に泊めてもらった。

**10月8日** 運行中のバスに同乗し、観光がてら街をグルグル回ったり、彼らがバスの整備中、傍らで読書したり昼寝したりして過ごす。パンや牛乳など食事も頂いた。同じポルトガル語を話すサンバの国ブラジルの影響か、はたまた長い内戦のツラさの裏返しか、その一家はとても乗りが良く、底知れず陽気に感じた。同バス泊。

**10月9日 Benfica > Ramiro** [車4台] ヒッチハイク 首都付近だけは道路の修理も行き届いていたが、再び道が悪くなる。ヘタにアスファルトで舗装した後に穴があくと、未舗装の砂利道より凸凹がひどくなり、タチが悪い。**Ramiro > Porto Amboim** [Lobo さん] ヒッチ その Lobo さんの家に連れて行ってもらい、水浴びさせてもらい、泊めてもらう。夕食時は停電していたが、テーブルに置かれたランプの灯りが、むしろ独特の良い雰

困気。

**10月10日 Porto Amboim > Sumbe** [車3台] ヒッチ **Sumbe >** [トラック] ヒッチ 何しろ道悪く時間がかかり、運転手は途中の村で仮眠。助手はベロンベロンに酔っ払って酒を飲み明かし、俺もコーラを3本もおごってもらい、朝まで付き合いされた。

**10月11日 > Benguela** [同トラック] 寝不足でビーチで昼寝。美術学生のアトリエを見学、缶コーラをおごってもらう。街散歩後ビーチに戻り野宿。子供に物を投げられ、さらに暗い人気のない所へ移動。夜中、人の気配を感じ、ガバッと起きると、銃を持った軍人が1人立っている。何やらポルトガル語でまくしたてるように、「モンゴル人、コノヤロー!」とか何とか言っているような感じだったが、よくわからない。彼は俺をどこかへ連れて行こうとしたが、それは街とは逆の方向で、さらに暗がりへ向かうことになる。コイツ本物の軍人か?酔っているようにも見えたし、たった独りで見回りに来るのも奇妙に感じたし、ひょっとしたら銃もニセ物かもしれないと思い…俺は走って逃げ出すことに決めた。

しかし、足元に発射された実弾が、彼が本物の軍人であることを証明した。走りにくい砂浜で、重いリュックを背負った俺に追いつくのに、十分な体力を備えていた。立ち止まった後も、数発の威嚇射撃!砂が足に飛び散り、耳がキーンとなり、戦慄が走る!彼の後についていくより他はなかった。幸い、彼は俺をぶたなかったし、連れて行かれたのは、本物の軍基地だった。パスポートと荷物検査。英語はあまり通じない。身体検査はパンツの中まで念入りに。逃亡防止のため、ずっと髪の毛を引っ張られていた。財布の中身も調べられ、賄賂要求してきた。ただし、強引に金を奪うわけでもなく、からかい半分のようにも思えた。断固として断ると、街中の警察署に連行された。

警察署では、比較的人間的な対応で、パスポートをチェック後、やっとなんか解放された。

**10月12日** 警察署の前で、グチャグチャの荷物を整理し終わったのが、AM3:00。ビーチで横になってみるが、興奮して眠れず。爽やかな朝日を受けて、数人が海岸沿いをマラソンしていた。 **Benguela > Coporolo** [トラック] ヒッチ 食堂で funge(トウモロコシやカッサバの粉を湯でこねて、モチ状にした、あのアフリカ定番の主食)を食べ、その向かいの空地に寝袋を敷いて寝る。山間の心地よい涼しさと静けさ、そして激しい寝不足が、深いあい眠りを誘う。

**10月13日** 南部アフリカ風景を特徴づける embondeiro(ポルトガル語で「バオバブ」のこと)の太い木々が連なる道。その脇の川で、体と服を洗った。 **Coporolo > Lubango** [コーラ積載トラック] ヒッチ 運転手の Neidy は、ときに南アフリカまでの配送を手がけるそうで、英語も流暢。彼から、さっきの川にたくさんワニが生息していて、外国人が数人食べられたという話を聞き、身震い!地元民には一切手を出さないと云うのだが、ナゼ?不思議、未舗装の悪路を、ホコリをモクモクたてながら進む。そのせいか、俺は咳が出て参った。到着後、Neidy が淹れてくれたコーヒーがノドにしみる。トラックの下で野宿。

**10月14日** Neidy が配送先のコーラ工場に連れて行ってきて、コーラやコーヒーやサン

ドイツを御馳走になる。それにしても、この国では、コーラをよく飲むなあ。今晚はNeidyが自宅に帰るということで、俺が代わりにトラックの運転席の後ろの簡易ベッドで眠らせてもらった。野宿より数倍快適。

**10月15日 Lubango > Lubango 郊外** [Chicoと一緒に、徒歩] 近郊の Serra da Leba (Leba 山脈) は、アンゴラの Kz5 紙幣の図柄ともなっている、風光明媚な場所で、そこへ向けて歩くのに、Neidy の友人 Chico が途中まで付き合ってくれた。

**Lubango 郊外 > Leba** [徒歩 35km] 日没直前に到着し、素晴らしい峡谷と急降下するクネクネの道を見た。空地で野宿。

**10月16日** 近くに店がなく、昨日途中の市場で買った、パンとコンビーフと Maboki という固い殻に覆われた甘い種のギッシリ詰まった果物で朝食。川の水も飲んだが、ゲリしなかった。 **Leba > Lubango** [中型トラック] ヒッチ 帰りはうまい具合にヒッチで戻る。Chico と再会し、彼の家でほとんどパーティー級の豪華なランチに招待され、今夜も彼のトラックの中で寝かせてもらう。

**10月17日 Lubango > Dongue** [車4台] ヒッチ 次第に田舎になり交通量も減り、4台とも村から村への短い距離のみ。 **Dongue > Tapela** [Nelson 氏の車] ヒッチ

Fazenda (大農場) 地主の彼は、明後日ナミビアに行くとのことで、同乗させてもらうことになり、エアコン&湯シャワー付きの超豪華な家に、2泊させてもらう。

**10月18日** アンゴラ南西部の静かな小村での滞在は、とても貴重な体験だった。都市生活を拒むかのように、ひっそりと暮らすヒンバ族。上半身裸で、首と手首、それに足首にいくつもの輪をつけ、カラフルな腰巻をまとい、独特の面白い髪型。体中に赤土を塗っているのは、Nelson 氏によると、日よけにもなり、体も長いこと洗わなくても済むので、この地域での生活にとっても適しているという。彼らの姿をスケッチさせてもらったなら、現地語かポルトガル語か知らないけど、金がどうのこうのと騒ぎ出だした。モデル代要求か?! と思ったら、なんと、彼らは自分達のカメラを持ち出し、俺の写真を撮り、俺に対し金を払うと言うのだ! 東洋人珍しいのカイ? そんなことなら無料で OK... すると、次から次へと村人が現れ、さながら撮影会! ひとしきり撮影が終わると、彼らはコーラ 2 缶おごってくれた。こんな辺鄙な所でも、やっぱり缶コーラはあるんだネ。Nelson の家泊。

**10月19日 Tapela > Ruacana** [Nelson 氏の車] 再び Nelson 氏の車に乗せてもらい、ナミビアを目指す。国境の出入国管理で、俺達の次に並んでいたのはヒンバ族の子連れの女性 2 人。パスポートは持っておらず、赤土で汚れたヨレヨレの紙を提出していたのが印象的だった。A te logo, Angola (またね、アンゴラ)!

## 《ナミビア》

**2005年10月19日 Ruacana > Oshakati** [Nelson 氏の車] アンゴラから引き続き

Nelson 氏にらせてもらう。国境を越えると、突然道が良くなった。Shopping モールの片隅で野宿。警備員が見回りに来たが、笑顔で黙認してくれて、水もくれた。いい人ダーあと喜んでいたら…後で金要求され、ガッカリ。

**10月20日 Oshakati > Oshivelo** [車5台] ヒッチハイク 公用語も英語になり、かなり発展し安心できる国カナ、と思っていたのだが、ヒッチ時に料金を請求する車もチラホラいて、どうもそうでもないらしい…。そんな中でも、親切な人はいるもので、bar で呼び止められ、おしゃべりして、スパゲッティとコーラを御馳走になり、泊めてもらった。

**10月21日 Oshivelo > Tsumeb** [pick-upトラックの荷台] ヒッチ 市場で寝ようとしたら、地元の女性に「ここは危険」と言われ、警察に連れて行かれた。質問攻めされて、かなり怪しまれたが、どうにか警察署に泊めてもらう。

**10月22日 Tsumeb > Otavi** [農場へ行く人] ヒッチ **Otavi > Otjiwarongo** [男性2人 & 女性2人] ヒッチ 街並みや建物がグーウンと綺麗になって、ヨーロッパみたいになってきた。でも、道ゆく人々が気軽に声をかけてくる人柄はアフリカ!空地で眠る。

**10月23日 Otjiwarongo > Windhoek** [ドイツ人旅行者] ヒッチ 料金請求する車ばかりでヒッチできず困っていると、ドイツからの熟年旅行者の 4WD レンタカーが拾ってくれた。反対方向に逆送したり、ナミビアはイギリス式に左側通行なのに間違っって右車線走ったり、ちょっと危なかしかったが…。小綺麗な教会なんかがあり、コンパクトな首都では、丘の上で野宿。

**10月24日** 小さな揚げパンを買っても 5 Namibian dollars(=約¥100)、internet カフェも 1 時間 N\$20 などと、物価も高くなってきたし、ヒッチも上手いかないので、夜行列車で一気に南へ。**Windhoek >** [列車] N\$55

**10月25日 > Keetmanshoop** スーパー近辺には物乞いがたむろしてるし、観光案内所は代理人だからとか何とかで役立たずだし、早々に南アフリカへ向かうことにする。

**Keetmanshoop > Grünau** [南アフリカからのトラック]ヒッチ このトラックも初めは運賃を要求したが、しぶしぶタダにしてくれた。

**Grünau > Noordoewer** [別の南アフリカからのトラック] ヒッチ そのまま歩いて国境まで、ナミビア出国。

## 《南アフリカ》

**2005年10月25日 国境の Violsdrif という町付近** [徒歩] 地図も情報も持たずに、勢いで歩き始めたので、何もない山道で日が暮れて、次の町まで果たしてどのくらいあるのかもわからない状況に陥ってしまった。それでもひたすら歩いていたら、なんと!真夜中頃にもかかわらず、1台のトラックが停まってくれた。

**10月26日 Violsdrif > Piketberg** [トラック] 向こうから停まってくれた トラッ

クの中で眠らせてもらい、朝食にチーズ sandwich とコーヒー頂いた。景色は緑がグッと多くなり、アフリカ中部とは別世界。山林で野宿していたら、誰かが通報したらしく、警察が現れたが、簡単なパスポートのチェックの後、「気をつけて」と言い残し去って行った。

**10月27日 Piketberg > Moorreesburg** [pick-upトラック] ヒッチハイク

夕方から冷たい風が吹き荒れ、夜中には雨。アフリカで寒い思いをするのは久しぶり。教会の横の壁の隅で、風雨に耐えながら眠る。

**10月28日 Moorreesburg > Cape Town** [車] ヒッチ 白ヒゲのおじさんの運転で、コーヒーも御馳走になり、Table mountain 麓の大都市着。Hospitality Club メンバーの Kumbulani の家に泊めてもらう。

**10月29日-11月1日** 街から20km程東の、Belhar と呼ばれる、やや治安の悪そうな住宅街。Kumblani とその親戚や家族が、Pap(トウモロコシ粉を練ったアフリカ定番料理)をはじめ、鶏肉やカボチャやビートなどを使った様々な郷土料理、Snoek という濃厚な味わいの地場産の魚のフライ、そして独特のルイボス茶(Cederberg 山脈にのみ生育する、Rooi-bos{赤い藪}の葉と枝を、天日で自然乾燥させた茶)などを、連日御馳走してくれた。

お返しと言っちゃあナンだが、インスタント麺ながら、焼きソバを作ってあげた。この国は発展しててあらゆる物が買える。Internet カフェも1時間5 Rands (=約¥100)と安い。

Travellers Cheques 両替も手数料がかからないので、ここぞとばかり東アフリカ旅行に備えて、多めに現金化した(コレは安全性を考えるとタブー!後で大変なことに…)

ジュースやコーヒーをすすり、数日間 Kumblani の家でのんびり。同家泊。

**11月2日 Cape Town > Klapmuts** [徒歩] & [ボート牽引車] ヒッチ 喜望峰を折り返し地点として、アフリカ北上の旅開始! ヒッチ試みるが、なかなか停まってくれず、停まっても運賃を請求されたり…。そんな中、1台だけ、ボートを牽引していた車が、短い距離を乗せてくれた。運転手は「こんな犯罪大国で何やってんだ?」と、ヒッチを無謀な挑戦であるかのように言い放った。アパルトヘイト廃止後も経済的な格差が是正されず、発展すればするほど犯罪を助長させてしまい、見知らぬ人を同乗させるのを極端に恐れるのかもしれない。**Klapmuts > Worcester** [観光案内もしてくれた親切な男性] ヒッチ

山間の滝が絶景!いろいろ説明してくれるガイド付(?)のドライブとなった。街をウロついていると、地元のオバサンに「ここは危険」と言われ、彼女の家まで連れていってもらい、鶏肉サンドイッチとコーヒーでもてなしてもらう。その後、彼女の家族が、shelter と呼ばれる安い(無料の?)宿泊施設を紹介してくれた。経済的に恵まれない人や、各地を巡る季節労働者らが泊まる施設らしい。3つの2段ベッドの6人相部屋。俺は宿代を払わず済んだ。Nuwe Begin Skuiling ドミトリー泊。

**11月3日 Worcester > De Doorns** [徒歩 31km] ずっとヒッチできぬまま、とうとう隣町まで歩いてしまう。この先も長く歩き、道中野宿も念頭に、食料を2日分買いこみ、さらに隣町を目指す。ん?!背後から誰かにつけられてると気付いた、その時!食料を詰めたビニル袋ごと、いきなり奪い取られた。振り向くと、ナイフを持った男が睨んでいる。「水

は必要だ」と俺が言うと、水の入ったペットボトルだけ投げて返してよこし、去っていった。貴重品は無事だったけど、食料は盗られてしまったので、街へ戻り警察へ。警察は話を聞いてくれたが、何も記録せず、捜査する気もなし。まあ、被害が食料だけだし、仕方がないか。その晩は、そのまま警察署で眠らせてもらった。

**11月4日 De Doorns > Hex River Pass** [徒歩 20km] 今日は背後にも十分気を配りながら、手に護身用のナイフを握り、万全で歩き始める。峠に差し掛かった頃、何者かが叫び声を上げて道路を横切った。そいつらは山の奥深くまで走っていく。目を凝らすと、それはバブーン（ヒヒ）の群れだった。人間より安全?!

**Hex River Pass > Touwsrivier** [陽気なオッチちゃん] ヒッチ そのオッチちゃんが、なりゆきで、次の車にまで乗せてもらえるよう話をつけてくれた。

**Touwsrivier > Laingsburg** [中国人] 前車のオッチちゃんが手配してくれた 降ろされたドライブ in では、運転手の方から話しかけられ、乗せてもらえた。

**Laingsburg > Prince Albert Road** [pick-upトラック] 向こうから乗せてくれた 今日にはトントン拍子にコトが進み、500km以上先の Johannesburg 行きトラック get!

**Prince Albert Road >** [トラック、長距離、1泊] ヒッチ 運転手にコーラとカレーパンを買ってもらい、助手席で仮眠させてもらう。

**11月5日 > Johannesburg** タ立があられに変わる。本州の春先の天気のように。この大都市の中心部には、黒人と黄色人種しかいないようだ。すさまじい治安の悪化で、白人が郊外に移動したという。キリスト教系の shelter 滞在。1Fが教会で、2Fが2段ベッドの連なる共同寝室。何10人もの宿泊者に、シャワーは2-3ヶ所、大混雑。寝るためだけの施設で、昼間は施錠され必ず外出しなくてはならない。Ekhaya Shelter ドミトリー(R4)泊。

**11月6日** その日は日曜日で shelter 主催のミサに参加。これまでのアフリカ諸国と同様、大音量の歌と、ド迫力の祈り!無料の昼食後、Benoni という近郊の町までみんなで車に乗って行き、そこでもまた礼拝、その後ジュースやおやつを頂いた。帰りの車中も大声で大合唱! ケニア人やジンバブエ人とおしゃべりして、この shelter にはアフリカ各国からの出稼ぎ労働者がたくさん泊まっていることを知った。同宿泊。

**11月7日** モザンビーク大使館で振込用紙をもらい、銀行でビザ代 R85 入金。その直後、事件は起こった。鉄道駅を出てすぐのミニ bus 乗場付近。2人の男が俺の背後から羽交い締めにし、もう1人が正面から俺の肩掛け鞆を引っ張る。首を締められ気絶するまで、わずか数秒!抵抗する間…いや、叫ぶ間すらなく、即 good night! 生まれて初めて気を失った。あの目覚めの瞬間は、知る人ぞ知る独特の感覚?!痛み・ケガは一切なし。通行人は誰1人倒れていた俺を気にも留めないし、道端の物売りは寡黙に商売を続けていた。周囲の人が助けてくれないのは、この町の常識だってサ。財布、時計、ナイフなど所持品のほとんどを持ち去られた。鞆は見るも無残に引きちぎられ、捨てられていた。服の中に隠していた、パスポートとイエローカードと、数枚の Euro & US\$紙幣の入った、小袋もなくなっていた。愚かにも Cape Town で多額の Travellers Cheques を現金化した直後で、被害額は日

本日に換算して¥10 万以上。スケッチ book と地図、それにモザンビーク大使館への振込領収書が残されていたのは、せめてもの救いか…。運が良かったのは、Travellers Cheques を、リュックと一緒に宿に置いてきていたので、無事だということだ。パスポートがないと、両替できないという問題があるが…。警察に報告するも、面倒臭そうにレポートにはんこをつけてくれただけ…。ああ、バングラデシュの金を貸してくれた警察や、トルコの優しかった警察が懐かしーい。日本大使館に連絡したいが、一文無しの身、tel 店へ行き、後払いで電話をかけたいといっても、取り合ってくれず。すると!見知らぬ男性が電話代を差し出してくれた(数日後何度かその店に足を運ぶが、結局その男性に再会できず返金できなかった sorry)。心から礼を言い、大使館に電話。金がないので早口に報告すると、向こうからかけ直すというが、こちらの電話番号がわからないのでそれもできず、とりあえず俺の名前とパスポート番号を告げ、大使館がこの町でなく首都の Pretoria にあることだけ確認して、電話を切る。宿に戻り、牧師の Rony 氏に事件を話すと、とても心配してくれた。

幸運にも、リュックの底に R10 札を 1 枚見つけた!!! もはや一文無しの身ではなくなった、Yeah! これでなんとか、大使館までの列車代確保(片道だけだが…)!同宿泊

**11 月 8 日** またあの鉄道駅へ行くと思うとゾッとす。Rony 牧師が駅まで付き添ってくれて、安全な道を教えてくれた。俺は軽いトラウマ気味で、頻りに後ろを振り向きながら歩く。**Johannesburg > Pretoria** [列車] R8 駅から日本大使館までは、金がないから当然徒歩。大使館に着くと、もう俺のデータが出力されていて、再発行の準備ができていた。さすが情報化時代! 大使館員は、まず「金銭面での援助は一切できない」と言ったが、親切にも最寄の写真屋で顔写真を撮影するのに付き合ってくれた。もっとも金がないから、大使館員に立て替えてもらうしか方法がないんだけど…。アフリカの店員らしく“Smile!” と言うので笑った。日本なら絶対ボツのニヤケ写真だけど、大使館員は呆れ顔で(?)OK。即日再発行。早っ!ただし、そのパスポートは機械読み込み不可で、アメリカに行くにもビザがいるそうだ。さらに大使館員は、車で銀行にも連れてって来て、Travellers Cheques の両替にも付き合ってくれた。パスポート手数料 R705.88 と写真の料金を支払う。ページが真っ白なおニューの旅券。こんなことなら、ナイジェリアでページの増補なんかしなきゃよかった。大使館員によると、1 月 1 回同場所で同被害があるそうだ。あの鉄道駅そばのミニ bus 乗場付近が非常に危険ということだろうが、行ってはいけない場所に、目立つ服装で、大金を持ってフラつく旅行者の側に、責任の一端があることは否めない。

**Pretoria > Johannesburg** [列車] R8 Shelter に戻ると、Rony 牧師の笑顔が出迎えてくれた。同宿泊。

**11 月 9 日** 巨額の出費で今までの節約が水の泡になり、旅行気分もグリーンと盛り下がる。かつて Nelson Mandela が住んでいた Soweto(South-Western Townships) と呼ばれる Johannesburg 南西部の黒人居住区も一目見ておきたかったし、スワジランドやレソトなどの小国も是非訪れてみたいと思っていたのだが、その気力はすっかり萎えてしまった。

新パスポートに入国スタンプがないという心配事もできた。出国時に問題になる恐れがあるので、Home Affair Office(内務省)へ出向き、確かに入国したという証明をもらおうとするも、コンピュータが壊れていて、手続き不可。同宿泊。

**11月10日** モザンビーク大使館を再訪。ここでは南アフリカへの入国スタンプの有無は問題にされず、振込領収書を提出し、無事ビザ取得。同宿泊。

**11月11-18日** Home Affair Officeのコンピュータの復旧をしばらく待ってみたが、埒があかない。街では、シンナー少年がナイフを振りかざしてたり、パトカーが泥棒を追っかけてたり、激しいケンカをしてたり、どこからか銃声が聞こえたり、スレ違いざまに突然「ここを歩くんじゃねェ、オメェの国じゃねえだろう!」と怒鳴られたり、落ち着かない日々。

比較的治安の良い Newtown という地区にある、MUSEUMAFRICA(アフリカ博物館)だけは、かろうじて観光。Shelterに泊まっていたコンゴ人やマラウィ人とおしゃべり。同宿泊。

**11月19日 Johannesburg > Germiston > Johannesburg** 試しに隣町のHome Affair Officeに行ってみると、コンピュータ上に俺の名前がないとか、手続きにR425の手数料が必要とか…しょうもないことばかり言われた。こりゃ、入国スタンプなきまま、いちかばちか国境へ行ってみるしかなさそうだ。

**11月20-21日** 最後もRony牧師に、鉄道駅まで送ってもらい、お別れ。夜行列車に乗車。

**Johannesburg > Komatipoort** [列車] R80 降車駅からモザンビーク国境までは7km。背後に異様に気を配りながら歩く。トラウマ。出国管理官は、入国スタンプの欠落を全く気にせず、拍子抜け。心配し過ぎだった。発行官庁が「南アフリカの日本大使館」となっているから、{再発行}だと一目瞭然だし…。この国でパスポート盗難なんざあ、日常茶飯事ってことかもしれない。

## 《モザンビーク》

**2005年11月21日 Rosano Garcia > Maputo** [ミニバス] R20 国境から首都までのバスは、南アフリカ通貨のRandが使用可。モザンビーク通貨のMeticaisは旧トルコLiraのように”0”が多く、Mt200 = 約¥1。公用語はポルトガル語。Fatima's Place ドミトリー(Mt200,000)泊。ドイツ人宿泊客と一緒に映画を見に行く。ヨーロッパ系の文化施設で、たまたま無料放映をやっていた。

**11月22日** 昨日のドイツ人も、南アフリカで強盗に遭っており、ナイフで脅され全額取られたという。彼の所持金は少なかったのが、俺のように莫大な被害ではなかったらしいが…。モザンビークは比較的治安が良く、夜遅く外出しても平気だと、彼は言っていた。同宿泊。

**11月23日** 俺の旅行気分は盛り下がったまま。ヒッチハイクで攻める気も起こらず、いろんな町をゆったり観光する気分にもならず…夜行バスで、一気に北へ移動。

**Maputo > [バス] Mt550,000 11月24日 > Inchope Inchope > Chimoio [ミニバス] Mt37,500** ちょっとバスの旅続きで疲れたので、この町で小休止。街中を一通り散歩した後、ホームレスの人達と一緒に野宿しようとしたら、警察に連行された。怪しまれ荷物検査をされたが、特に不審物を持っていないとわかると、その後は親切になり、なりゆきで警察署に泊めてもらった。

**11月25日 Chimoio > Tete [バス] Mt250,000** 英語の上手いジンバブエ人の Soja と知り合う。彼も俺も、一応外国人同志という事で、意気投合し、彼の家に泊めてもらう。

**11月26-27日** この国で1番暑い町とのことで、散歩ただけで汗まみれになり、ドッと疲れた。Soja に材料費 Mt20,000 払い、郷土料理の Masa (トウモロコシ粉を練ったアフリカ定番料理) を作ってもらった。付け合せのオクラ汁も旨かった。同家泊。

**11月28日 Tete > Zóbué [ミニバス] Mt80,000** これとって、観光もせぬまま、とうとう国境まで来てしまった。 出国手続きを終えると、両替商がワッと集まって来て、取り囲まれた。違法らしい。とても落ち着いて計算できる雰囲気じゃなく、マラウイ側の銀行で替えることにする。

## 《マラウイ》

**2005年11月28日 Mwanza > Blantyre [ミニバス] 280 Kwacha (=約¥260)**

ミニバスの中で知り合った人に、早速缶ジュースおごってもらい、人の素朴な優しさに触れ、気分が幾分和らぐ。公用語は Chichewa 語だが、独特の癖のある英語も広く通じる。Zikomo Lodge シングル(K150) シャワー&トイレ共同泊。

**11月29-12月2日** 連日雨の中、街を散歩すると、靴がドロドロ。舗装されていない道が多い上に、排水の設備も整っていないからだ。Nshima (トウモロコシ粉を練ったアフリカ定番料理) なんかを食べたりしながら、のんびり過ごす。同宿泊。

**12月3日 Blantyre > Nkhuzi Bay [バス] K350** マラウイ湖畔のリゾート town 的な町に到着。大きな湖は、海洋のようにも見える。バスの中で知り合った学生の Geoffery 君が、俺の安宿探しを手伝ってくれたが、湖畔の洒落たペンションしかなく、どこも高い。

それじゃあってことで、彼の家に泊めてもらうことになった。土壁で藁葺き屋根の、自分達で建てた簡素な家だが、蚊帳も用意してくれて、温かく迎えてくれた。

**12月4-5日** クリスタルの湖水で泳ぎ、地場産魚の Chambo (マラウイ湖に固有の、背が高い白身の魚、太い骨がノドに刺さりやすいので注意!) に舌鼓を打つ。茂みからは、ときたまバブーンが出現! 村人と一緒にサッカーもして、充実した日々を過ごす。同家泊。

**12月6日 Nkhuzi Bay > Lilongwe [バス] K460** バスが首都に到着し降車すると同時に、不意に誰かに名前を呼ばれ驚いた。それは、Geoffery 君の兄 Nesta だった。彼の兄が首都に住んでいること自体は知っていたが、これとって約束したわけでもないのに、バスの到着予定時刻を Geoffery 君から電話で受け、わざわざバス terminal まで出迎えに来

てくれていたのだ! Nesta は当然のごとく、俺を彼の家まで連れてってくれ、泊めてくれた。なんという素晴らしい兄弟だろうか!

**12月7-8日** タンザニア大使館でビザ申請(US\$50)、翌日取得。Nesta の家に電気はないが、明るくもてなしてくれた。弟より背が低いが、飾らなくて物静かで控えめな、感じの良い人物だった。同家泊。

**12月9日** Nesta の会社の上司の車で、バス terminal まで送ってもらい、お別れ。

**Lilongwe > [夜行バス] K700**

**12月10日 > Mzuzu** 早朝にこの小さな町に到着し、少し散歩して、またすぐに別のバスへ乗り継ぎ。**Mzuzu > Karonga [バス] K510** バスはいつもギュウギュウ満席で、チョット疲れ気味。ヒッチハイクの方が快適(?!)。途中の峠から見下ろす、真っ青なマラウイ湖は、絶景だった。Enikani Rest House シングル (K125) 泊。シャワー&トイレ共同で、昼間電気つかず。

**12月11日** 暑くて散歩も大変。ここも湖畔の町だが、マラウイ湖は荒波が立っており、Nkhuzi Bay 辺りの南側ほどは美しくなかった。同宿泊。

**12月12日 Karonga > Songwe [ミニバス] K150** 国境で両替時、両替商はタンザニア紙幣の“0”をひとつゴマかそうとしたので、指摘すると、「あんた、頭いいねェ!」だってサ!オイオイ?!マラウイ出国。

## 《タンザニア》

**2005年12月12日 国境 > Tukuyu [ミニバス] 1,000 Tanzanian Shillings (=約¥100)**

**Tukuyu > Mbeya [ミニバス] Ts1,000** 銀行で Travellers Cheques を両替したら、手数料はたったの 0.5%だったものの、2 時間も待たされた。公用語はスワヒリ語だが、都市部では英語も通用する。 駅のそばで Peter 君と知り合い、Ugali(トウモロコシやカッサバの粉を湯で練ってモチ状にしたアフリカ定番の主食)を御馳走になり、泊めてもらう。

**12月13日** バスより安いという鉄道を利用しようとするも、大幅に遅れ、いつ出るのかもわからないという。Peter 君の家にもう 1 泊させてもらう。

**12月14日** 鉄道はあてにできなそうなので、バスに切り替える。明日まで便がなく、バスの中泊。

**12月15日 Mbeya > Morogoro [バス] Ts12,500** この道は途中 Mikuni 国立公園を抜け、象、キリン、バブーンなどの動物を見かけた。Hospitality Club メンバーの Chrisworny の家に泊めてもらう。

**12月16-17日** タンザニアでは、結構インド料理を食べるようだ。朝食にはチャパティと紅茶、昼食にはカレーを、Chrisworny の姉が作ってくれた。彼の友人も交えて、岩の美しい庭など、いろいろ散歩。同家泊。

**12月18日 Morogoro > Dar Es Salaam [バス] Ts3,000** Chrisworny は首都で機械科

の学校へ通うため、独り部屋を借りて住んでいたの、一緒にバスで行き、引き続き泊めてもらう。

**12月19-20日** ケニア大使館で、7日間のみ滞在できる transit ビザ(Ts20,000)を翌日取得。同家泊。

**12月21-24日** Chrisworny に自転車を借り、彼と一緒に、Oyster Bay の Coco Beach と呼ばれる、とても美しい海岸へサイクリングしたり、独りで散歩したりして過ごす。Chrisworny は料理も上手くて、マンゴーjuice も旨い!同家泊。

**12月25日 Dar Es Salaam > Moshi** [バス] Ts10,000 頭痛がする上に、親指にかなり大きめの血豆ができ、絶不調のさなかのバスの旅。新たな Hospitality Club メンバーの Philip さんが、彼の同僚の車で迎えに来てくれた。頭痛がひどくなり、夕飯は食べられなかった。Philip さんの家泊。

**12月26日** 1晩眠ると、頭痛が残るものの、食欲は回復し、朝食を頂いた。一方、右手の親指の血豆は、ドス紫色に腫れ上がり、直径 2cm 程にまで成長。指全体も熱を持ち、左手と比べて 1.5 倍太い。Philip さんの奥さんに針を借りて、豆に突き刺して破り中の血を流し出してみたが、しばらくすると元通り。右肘と肩にも軽い痛み。何らかの要因で、血が上手く巡っていないようだ。同家泊。

**12月27日** 病院へ行き注射を打つ。痛みに絶えられず叫び、医者腕を蹴ってしまった。Samahani (スワヒリ語で「すみません」)。はずみで注射器の針が傾き、血が床に流れ落ちる。小さなハサミとナイフで、血豆を切り落とす間は、激痛だったが、包帯を巻き待合室に戻ると、肘と肩の痛みと指の腫れが、随分弱まっていることに気づいた。血が巡り始めたせいかもしれない。治療費は Ts2,500。同家泊。

**12月28日** 頭痛はするし、親指からは、ドロドロの黄色い汁が、包帯の隙間から流れ出てくるので、Philip さんの家で静養させてもらう。Ugali など、3食付き、Asante sana!同家泊。

**12月29日** 病院で包帯をほどくと、親指は肉があらわでドロドロの状態、激痛が走った。新しい包帯に巻き替え、Ts500。あまり回復しているようには思えなかった。医者に抗生物質の購入(Ts2,000)を勧められ、その日から服用することにする。同家泊。

**12月30日** 次に包帯をほどくのは数日後でいいと言われたので、抗生物質を飲み、しばし静観。頭痛はある程度とれてきたので、初めて街に散歩に出る。アフリカ大陸最高峰で標高 5,895m のキリマンジャロ山の山頂に、タンザニアに似つかわしくない雪を見た。同家泊。

**12月31日** 体調不良と親指の治療で、遅れてしまったが、Philip さんの紹介をしておこう。彼は旅行会社に勤めており、外国人観光客のためのキリマンジャロ登山やサファリを手配してる。そういった高いツアーに参加しない、貧乏旅行者の俺をも温かく迎え、長居させてくれている。また、彼はツアーで得た利益の一部を、孤児に寄付している。この国の自然の恵みからの利益は、この国の子供達にも当然享受されるべきとの理念の下に。

そんなこんなしてるうちに、早くも年越し。2005年よ kwa heri(さよなら)!同家泊。

**2006年1月1日** Farahi na mwaka mpya(新年あけましておめでとうございます)!早朝、キリマンジャロの右手に昇る初日の出を拝む。同家泊。

**1月2日** 病院の約束の日だったが、医者はいなく、明日来るように言われた。まあ、たとえ日本だったとしても、正月から働く気にヤァーならんかァ…pole pole(ゆっくり)。同家泊。

**1月3日** 本日は無事医者も出勤し(?!)、病院で包帯をほどくと、前回のようにドロドロではなく、かなり固まっていた。抗生物質の威力?!でも、まだ新しい皮膚はピンク色で、バイ菌の入る恐れがあるとのことで、再度包帯を巻いてもらう。Ts500。同家泊。

**1月4-8日** 街を散歩したり、キリマンジャロをスケッチしたり、屋台で安くて美味しいコーヒー(小カップでTs20)や、マンゴーjuice(1杯Ts50)を飲んだりして過ごす。親指は徐々に回復。Philipさん、そしてキリマンジャロ山、asante sana(どうもありがとう)!

**1月9日 Moshi > Arusha** [ミニバス] Ts1,500 **Arusha > Namanga** [ミニバス] Ts3,000 **Namanga > ケニアへ** [ミニバス] 250 Kenyan Shillings (=約¥500)

## 《ケニア》

**2006年1月9日 タンザニアより > Nairobi** [ミニバス] Jambo, karibu Kenya(スワヒリ語で「こんにちは、ケニアへようこそ」)!。7日間の滞在しかできない transit ビザなので、首都へ直行。Maskan Boarding & Lodging シングル(200 Kenyan Shillings = 約¥400)泊。

**1月10日** 犯罪率の高いNairobiで、少し緊張する。事前に調べた危険な路地は通らない。エチオピア大使館まで歩いて行ってみたが、イスラム教の休日で閉館。同宿泊。

**1月11日** エチオピア大使館を再訪し、申請を済ませ、待つこと1時間、ビザ取得(US\$20)。

**Nairobi > Meru** [バス] Ks300 ちょうどこの辺りが赤道付近。南半球の旅を終え、再び北半球の旅開始。Hospitality Club メンバーMuriungi氏が車で出迎えてくれ、泊めてもらう。ドイツへの渡航経験があったり、娘をニュージーランドへ連れて行ったり、国際意識が旺盛な人物。

**1月12日 Meru > Isioro** [ミニバス] Ks120 ここから道が悪くなる。バスは便が少なく(あるいは全くないのかも?)、トラックに乗らなくてはならない。その客引きがかなりウザイ。なぜかみんな酔っ払ってる。酒臭っ! **Isioro >** [トラック] Ks1,000 夕方出発のため、すぐに日没を迎えた。夜走るのは、暑さ対策か? たんまりと貨物が積み上げられた荷台の、そのわずかな空きスペースに、乗客は折り重なるように、無理矢理詰め込まれる。砂利道をパンクし修理しつつ、pole pole(ゆっくり)と進んでいく。カーブでキリン2匹の真横を通り、超至近距離で人間とキリンのご対面。手を伸ばせば触れそうだった。暗かったせいでトラックに気付かなかったのだろうか?、あるいは、就寝中でボーっとしていたのだろうか?全く逃げようとしなかった。

**1月13日 >** [同トラックで引き続き移動] </o:p> 朝方は、数回象の群れを見た。さす

が野生の王国ケニア!途中 Marsabit で長あーい休憩。運転手の仮眠のためか…?山間の村でやや涼しい。道中は石だらけの荒野。揺れる。アンテロープやジャッカルなどの動物を見かけた。その日は小さな村に着いたところで日が暮れた。ペットボトルに水を汲もうとしたら、ないと言われた。そこは水不足に悩む村で、俺達の乗ってきたトラックで運ばれてきたパック入りの牛乳を心待ちにしていたという。トラックの荷台で仮眠。

**1月14日 > Moyale** 2泊3日のトラックの旅を終え、やっと、エチオピア国境の町に到着。大自然の広大なサバンナを抜けてきた後なので、なんだかとても大きな街にやってきたような感覚…。トラックの中で知り合った教師に、朝食を御馳走になる。その後、親切にも、出国手続きや両替も手伝ってもらった。6日間でケニア縦断!

## 《エチオピア》

**2006年1月14日 Moyale > Yabello** [バス] 23 Birr (=約¥350) テロが頻発している国とあって、バスの乗客への警察のチェックはかなり厳しい。Abay Hotel シングル(B10)泊。共同の水浴び場は、水汲みがチョット面倒臭かった。

**1月15日 Yabello > Dilla** [バス] B25 バスを待っている間、地元民にピーナッツをもらい、おしゃべり。いまいち話の内容がつかめなかった。公用語はアマリーニャ(アムハラ)語だが、独特の(変な?!)英語も話す。Emanuel Hotel シングル(B7)泊。トイレ&シャワー共同。

**1月16-17日** ビデオ rental 店で、コーヒーを御馳走になり、おしゃべり。日本の茶文化に相当するのが、この国のコーヒーだろう。食後やくつろぎのひとつに、豆を煎ってすり鉢で粉にするところから、ゆっくりと時間をかけて支度する。お香を焚いたりもする。

そもそもその名は、コーヒー発祥の地とも言われる、エチオピア南西部の標高2,400mの高原地帯に広がる Kaffa 地方に由来するという説がある。それにしても、アマリーニャ語で「ブンナ」と呼ぶのは、どうもしっくりこないが…。宿で働く女性に洗濯をどこでするのか尋ねたら、タンザニア以来治り切らない俺の親指を見て、なんと!代わりに俺の衣類を洗ってくれた。洗濯機はなく手洗いなので、重労働。アマセグナッロ(アマリーニャ語で「ありがとう」)!同宿泊。

**1月18日 Dilla > Awassa** [バス] B11 湖のあるかなり大きな町。道すがら招かれ頂いたブンナには、ハーブの一種のティナダム樹の葉が入っていて、コーヒーの香りを引き立てていた。サトウキビももらった。宿の向かいに住む女学生に、インジェラ(鉄分豊富なヒエ科のテフの粉を水で溶いて発酵させ、丸い鉄板でクレープ状に薄く焼いたこの国の主食)と紅茶を御馳走になった。このインジェラには、独特の強い酸味があり、苦手と言う外国人も多く、俺自身も初め「なんじゃ、この味はっ!」とかなり抵抗があり、慣れるまで時間がかかった。ハムサアッカマルチャ(宿名?!)シングル(B6)泊。汚くてダニがたくさんいた。

**1月19日** エチオピア正教最大の祭日、ティムカット(英語なら Baptism Day)。街ゆく人々は白い民俗衣装を身につけ、広場にはアフリカお得意の大音量の舞踊音楽が流れ、家や店の中には伝統に従って草がまかれた。道端で出会った青年と一緒に写真を撮ったら、彼の家に招かれブンナやジュースやパンなどでもてなしてくれた。宿の汚いベッドのダニが痒くて、ほとんど一睡もできず。同宿泊。

**1月20日 Awassa > Addis Ababa** [バス] B28 首都到着、とりあえず安宿を探す。親切に案内してくれた男性は、後でチップを要求してきた。同じような別の男性もう1人にも出くわし、ガッカリ。警戒心が強まる。その後、1人の青年に導かれ、若者の寮のような所へ。綺麗な女性がたくさんいて、にこやかに話しかけてきたが、日本の悪徳キャバクラみたいにボッタくられてはかなわんと、心から打ち解けておしゃべりすることはできなかったが、ブンナとインジェラを頂いた。その寮を後にし、再び安宿探ししていると、道端で果物をもらったり、みつけた安宿ではサモサ(インド風の揚げ物)をもらう。エチオピア人の親切心の真偽判別は複雑?!Astara Hotel シングル(B12)泊。昼間閉鎖のため外出しなきゃならず、居心地悪し。

**1月21日** 街を歩いていると、片言の日本語で話しかけてくる輩が結構たくさんいた。子供達も元気で、外国人を見かけると、例え遠くからでも、”you!you!you!”と大声で叫んでくる。より安い宿へ移動。標高が高いので涼しく、水シャワーはかなり冷たい。Barの裏手に設けられた簡易宿、Seid Grocery シングル(B10)泊。

**1月22-24日** 歩き過ぎで足が傷だらけだし、宿は安くて居心地が良いので、長居してゆっくりする。ジブティのビザ取得に必要な、日本大使館からの紹介状を、申請し翌日取得。同宿泊。

**1月25-27日** アフリカで最も大きいといわれる野外市場を観光したり、濃厚で美味しいマンゴーやパパイヤ、そしてアボガドなどのジュース(値段はB3くらい)や、ブンナ・ワタツ(コーヒー牛乳)を飲んだり、エチオピア風ホルモン焼きともいえるシャグワラ(内臓と玉ネギの焼肉、B4くらい、美味!)を食べたり…と面白くて街を歩き回り、足の傷は悪化してしまう。散歩中、地元民からシャイ(茶)やジュースなどで歓待される一方、ストリート children に何度となく喜捨を求められる。ここでも貧富の差は激しいようだ。同宿泊。

**1月28-29日** Travellers Cheques が大量になくなっているのに気づく。いつ何処でなぜなくなったかはわからないが、Amex と Visa に紛失届の電話をしなきゃならない。たくさんの質問をされ通話料が莫大なものになることが予想されるので、free ダイヤルを利用したいところ。両社ともコレクト call(料金受信者払い)の番号が存在するが、どうしたことか…?上手くつながらない。電話局に向いて聞いてみたところ、どうも Addis Ababa ではコレクト call が使用不能らしい。そこで次善の策として、internet 回線を利用した安い tel 店で電話をかけ、手短かに用件を話し、かけ直してもらうことにした。しかし、そういう店は概して混雑しており、電話を受けるのも簡単には行かず、Visa と Amex への紛失届の電話

にそれぞれ丸1日費やした。オペレーターとも長電話で打ち解けてしまって、「アディス・アベバって、早口言葉みたいですね！」なんて言ってたっけ…。何はともあれ、無事、再発行(または払い戻し)が許可され、ホッと一息。同宿泊。

**1月30-31日** ジブティ大使館で、日本大使館からの紹介状を添え申請、翌日ビザ取得(US\$30)。同宿泊。

**2月1-4日** 街を歩いていると、よく草をモグモグ噛んでいる男達の集団を目にする。この草はチャットと呼ばれ、覚醒作用ないし麻薬効果があり、この国の文化でもある。他のアフリカ諸国の音楽とは一線を画す、たまにアラビアの影響も感じる、エチオピアの音楽のカセットtapeを買ったり、日本で9年暮らしていたという男性と知り合い昼飯を御馳走になり、サナダ虫の危険性も孕む?!テレスガ(生牛肉)を食べたりして過ごす。足の傷が痛んで歩けない日もあった。同宿泊。

**2月5日** 北のスーダンを抜けエジプトへ行けば、ほぼアフリカ1周達成となるのだが、スーダンのビザ取得が困難らしいという情報を小耳に挟み、また、以前エジプトへは旅行したことがあるので、今回は紅海を渡りアラビア半島へ向かうことにする。長居した首都を、いよいよ出発。明日早朝の出発に備え、バス terminal そばの宿へ移動。メゲバアッレ Hotel 狭苦しいシングル(B11)泊。シャワーなし。

**2月6日 Addis Ababa > Dire Dawa** [バス] B52.65 バスの中で学生の Ephrem 君と知り合い、家に招かれて食事やシャイやブンナを頂き、足の傷のアルコール消毒もしてもらった。そのまま、Ephrem 君の家に泊めてもらう。

**2月7-8日** Ephrem 君と彼の幼い弟が床に寝て、俺はベッドで悠々と寝かせてもらった。Ephrem 君は、学生ということもあってか、チャットはやらないそうだ。むしろ、そのような麻薬まがいの嗜好品に対し、反感の念を抱いているようだった。

父親は夜中も何やら勉強、母親は親類の葬儀で泊まり込みと、いずれも不在だった。

この町はかなり暑い。フルフル(インジェラをちぎってスパイスで味付けした料理)、パスタ、サモサなどの食事や、ブンナで、心ゆくまでもてなされる。同家泊。

**2月9日** 朝食後 Ephrem 君と一緒に鉄道駅へ行くが、ストライキでジブティ行きの列車は運休。途方に暮れる外国人旅行者が、俺の他にもう1人。フランス人の Christoph だった。3人で bar でブンナを飲み話し合い、列車をあきらめ、明日の早朝のバスで行くことにした。

Christoph は、彼の滞在先のホテルへ戻ったが、俺は朝早く起きるのが大変そうだったので、その日の夕方 Ephrem 君と別れ、そのままバス会社に泊まる。

**2月10日 Dire Dawa > Dewele** [バス] B60 日の出前 AM4:00 頃発のバスのエンジン始動音で目覚め、慌ただしく乗り込む。Christoph の姿はない。彼はどうやら寝坊したらしい。小国ジブティへ。

## 《シブチ》

**2006年2月10日 Guililieh > Djibouti** [バス] 800 Djibouti Francs (=約¥500)

小国ジブティの首都は国名に同じ。安宿を探す、どこも¥1,000 以上。街を歩いていると、草をモグモグやってる男達が、エチオピア以上に溢れかえっていて、驚いた。フランス語とアラビア語が公用語のジブティでは、「カート」と呼ばれるこの草には、由緒正しい伝説がある。1人のイスラム教徒がその草を天使から授かり、嘔むと眠気がなくなり、いつまでもコーランを読み、神に祈りを捧げることができたという。もはや庶民の文化として根付いており、麻薬効果があるものの、法律で禁じられてはいない。路上でカートを売っている人達と仲良くなり、彼らの小屋に泊めてもらう。カート売りの人の中には、覚醒して全く眠らない人もいた。

**2月11-13日** 足の傷に油を塗ってくれたり、オートバイの後ろに乗せてもらって街を観光したり、シャイ(茶)やジュース、しまいには食事までも御馳走になったり、近所の家で水浴びもさせてもらったり…とても親切にされた。小屋の中は暑くて蚊がいるものの、布にくるまって、どうにかこうにか眠る。

**2月14日** イエメン大使館でビザ申請。料金を尋ねると、初めは Df15,000 と言い、次は Df5,000 と3分の1まで値下がりし、最後には Df7,500 に落ち着いた。アフリカに勝るとも劣らない、アラビアのテキトーな(!)雰囲気、早くも感じた瞬間であった。帰り道、エチオピアで会ったフランス人旅行者 Christoph と再会し、彼の宿へ遊びに行き、いろいろ情報交換。彼はイエメンのビザ代 Df13,000 払ったときいて、アレレ?と思ったが、フランス人と日本人では違う料金が設定されていることを、後から知った。Christoph も俺と同じく、紅海を船でアラビア半島へ渡る予定。定期便はないので、貨物船に同乗させてもらうしかなく、果たしてどうなることやら…。同小屋泊。

**2月15日** イエメン大使館へ再訪して、ビザを無事に受領できた。港でイエメン行きの船の出航日時を尋ねるが、今日か明日出る…かもしれないとか…インシ・アッラー(神の思し召しがあれば)とか…ハッキリしないので、いったん街に戻る。近所の家で水浴びして洗濯したら、着替えの服を貸してくれた。食事やジュースなども御馳走になり、すっかり世話になる。同小屋泊。

**2月16日** 船の出航予定が把握できない以上、荷物をまとめて小屋を去り、いつでも出発できるように、港で待機することにした。結局その日船は出なかった。昼は蠅、夜は蚊がブンブン飛んでうるさかったが、海風が涼しく、1泊目は安全に過ごせた…と言うのも、数日前に港で殺人事件があったそうだ。尚、これから渡ろうとしている紅海からアデン湾にかけては、海賊船が頻繁に出没している危険水域。欧米や日本国籍の船も被害を受けている。港で野宿。

**2月17日** 今日も、ただひらすら、船が出るのを待つ。ワラにもすぎる心地…。街のカート小屋で世話になっていた近所の人が、昼飯を差し入れしてくれたり、港で知り合ったタ

ンザニア人の船乗りが、軽食とビスケットと水をくれたりして、癒される。港に停泊している船はみんな小型で、中には、ボロボロの木製の船にこれでもか!というほど貨物を積み込み、今にも沈みそうなヤツも見かけた。ホントに大丈夫か…?! 結局この日も船は出ず。イスラム教の礼拝日の金曜だから、出るわけないってサ! 夜、警察が「ここでの野宿は禁止」と、俺を連行し取調べ。警察署泊。

**2月18日** 午前中いっぱい警察による取り調べ。問題なしと解放されると同時に、いよいよ船が出るという報せ!出航前に慌てて、最後のDf100硬貨でスパゲッティを買って食う。

パキスタン籍の比較的大きくて頑丈そうな船で、幸い貨物は降ろしたばかりで空っぽ。1泊2日の航行になるという。運賃は港の係員に前払いした。乗船客は俺の他に、ジブティ人数名と、フランス人1人。どっかで見たと思えば、Christoph じゃないか。港の情報通の現地人を通して、彼はこの船の出航を知ったようだ。**Djibouti > イエメンへ** [船] Df5,000

フレンドリーなパキスタン人の船乗り達が、懐かしいミルク入りの甘あーいチャイ(茶)や食事を出してくれて、快適な船旅となる。Christoph と2人で、「俺達はラッキーだ!いい船に乗れた!」と、顔を見合わせて喜ぶ。Au revoir(さようなら)アフリカ!

## 《イエメン》

**2006年2月19日 ジブティより > Aden** [船] 海賊に出会うこともなく、転覆もせず、無事アラビア半島へ辿り着いたーあっ! …と安心したのも束の間、港の入国管理官から賄賂請求の洗礼(?)を受ける。荷物検査の際、鞆の中身を物色して、「何かお土産は?」と、あからさまにねだってくる。当然断る。Hotel Madina のツイン room を、Christoph とシェアして泊まる。エアコン & TV 付の豪華な宿。俺の払いは、彼よりやや少なくしてもらい、600 Yemen Rial (約¥350)。

**2月20日** Christoph と一緒に、アデン湾の波打つ海岸、それにモスクや市場などを散歩。

しかし、観光より先にやっておくべき、パスポート上の事務手続きがあったのだ。

同じホテルに泊まっていたジブティ人いわく、全ての外国人は警察署で許可スタンプをもらわなくてはならないとのこと。早速、Christoph とともに、警察署へ出向く。その許可は無料のはずだが、警察官は料金を請求。そうっ、御察しの通り、賄賂である。1人の警察官は終始ニヤニヤしながら金のことばかりわめいてる。比較的冷静な対応の、別の警察官と話を進め、料金は払えないと主張し続け、なんとか無料でスタンプ get!その後、街で出会った男いわく、例のスタンプの他に、Tourist Police(先の警察署とは別の場所)で、移動のための許可証をもらわなくてはならないとのこと。え〜っ、また?半信半疑でそこへ出向くと、今回は賄賂請求もなく無料で発行してくれた。手続きがアレやコレやと複雑だし、警察官は賄賂請求が露骨だし、イエメン第2の大都市なのに Travellers Cheques がどの銀行でも両替できないし、公用語はアラビア語で英語を話す人は僅かだし…こりゃあ、厄介な旅になりそうだ。同宿泊。

**2月21日 Aden > Sana'a** [バス] YR1,400 バス terminal で乗車券を買うときに、Tourist Police 発行の許可証の提出を求められた。もし、街の男の情報がなかったら、乗車券を買えないところだった。ふ〜っ。バスの中では各席にミネラル水が配られ、ビデオ映画 2 本上映と、上々のサービス。乾燥した広大な大地の道中の随所に、歴史的な建物がそそり立つ山々の絶景を楽しむ。首都着。Hotel Manakha ツイン room を、再び Christoph とシェア(各 YR600)泊。

**2月22日** そのホテルは日本人客が多く、日本語の情報ノートが設置されており、イエメンの銀行での Travellers Cheques 両替がほぼ不可能であることを知る。でも、そのノートには数少ない(唯一?)可能な両替所の場所も地図付きで記載されており、やっと現地通貨入手!また、そのノートには、Tourist Police 発行の許可証についての記述もあった。

外国人旅行者が移動中に誘拐される事件が頻発しており、警察による許可制度を設けることで、その抑止を目指そうというのが、そもそもの発端のようだ。許可証を持っていないと、バスの乗車券を売ってくれなかったり、途中の検問で追い返されたりすることもあるようだ。ただし、その運用は組織的とは言えず、警察官や状況によってまちまちで、許可証を発行してくれない場合もあるそうだ。逆に、許可証がなくても、バスの乗車券を売ってくれたり、検問で引っかからないこともあるとのこと。全ては、インシ・アッラー(神の思し召しがあれば)ってことか?!でも、まあ、こんな運まかせな所が、アラビア旅行の醍醐味だろうし、その魅力に捕らわれてしまう旅人も少なくはない。許可証をどうしても得られなくて、民俗衣装を買い、ヒゲを伸ばして、イエメン人に変装して、検問をやり過ごす大胆不敵な旅人もいるとか…?!。Christoph と Tourist Police へ行こうとするが、移転していた。やはり許可証を手に入れるには、一筋縄では行かぬようである。今日のところは、いったん引き返そう。帰り道、地元民から食事とコーラを御馳走になった。同宿泊。

**2月23日** UNESCO の世界遺産に指定されている、美しい旧市街を散歩する。粘土で作ったレンガ造りの芸術的な家々を、魅惑されたようにポカンと見上げる観光客も多い。厳格なイスラム教のこの国では、男達は白い民俗衣装に腰にシャンビーヤ(半月型の短刀)を差し、女達はアバーヤ(黒装束)で全身を覆い隠している。幻想の別世界!昼飯にはサルタ(肉や野菜をスパイスで味付けして石鍋で煮込んだ料理)を食べた。余談だが、イエメン国内で普及してる、”Yementon”と呼ばれる{ティーbag}紅茶メーカーのロゴは、黄色とエンジ色の色使いやデザインが、完全に”Lipton”のパクリである。Bab Al Yemen というメイン門の上から見下ろす旧市街の眺めは、実に壮観!同宿泊。

**2月24日** Christoph と一緒に、シーシャ(水タバコ)屋へ。日本の喫茶店に当たるのだろうが、似て非なるもの。座布団と肘掛に体をもたせかけて座るので、アジア人である俺にとって、たまらないくつろぎの空間。西洋人 Christoph は地ベタに座るのが落ち着かない様子。客は男性だけ。シーシャを吸い、カート(麻薬効果のある草)を噛み、シャイ(茶)を飲む。俺はシャイを飲んだだけだったが、Christoph はシーシャとカートも試していた。

宿は春休みの日本人学生で溢れていて、アフリカからアジアに来たことを、こんな点か

らも実感。隣国オマーンから来た旅行者から、いろいろ情報を得る。同宿泊。

**2月25日** Tourist Police の移転先の場所がわかったので、Christoph を誘ってみる。だが、彼は先日独りで既にそこへ足を運んでいて、許可証の発行を断られたと言う。

もう一回行けばもらえるかも?! アラビアは運次第!?! と半ば強引に付き合わせる。

彼はイエメン国内を旅行後、アフリカに戻る予定で、俺は東部国境より、オマーンを目指すつもりなので、許可証の申請都市は各自別々だったが、2人とも見事許可された!

夕方道端でオバサンに、汚く伸びた俺の髪を「長髪は女だけ」と批判された。イエメンの街中で女性の方から話しかけられただけでも不自然だったが、さらに、彼女が去り際に、英語で“Fuck your mother!” と叫んだのには、驚いた。不可思議な国! 同宿泊。

**2月26日** Christoph が先に Sana'a を旅立つのを見送り。それを機に、宿替え。管理が行き届いておらず、あまり評判の良くない、Nile Hotel ドミトリー(YR300)泊。

**2月27-28日** Sana'a の最も高い所は標高 3,760m に達するという高原都市。水シャワーは昼間に浴びなければ、冷たくて耐えられない。朝方は毛布 2 枚くるまっても肌寒く、自前の寝袋を追加。白い民俗衣装を身にまとい、シャンピーヤと日本刀の 2 本を合わせ持った、風変わりな日本人旅行者と会い、アラビア半島の「地球の歩き方」(日本語のガイド book) と、アラビア語教本のコピーをもらう。その日から、アラビア文字の勉強(?) を始めた。

夜の散歩は、ひんやり気持ち良く、ライト up された旧市街は、一風違う趣。同宿泊。

**3月1-2日** 世界遺産の幻想世界で、短期間ながら、暮らせたかのような気分を味わえた。(アラビア風の平べったいパン) やオムレツ、シャイなどを、地元民に頂いたりしつつ…。

宿の目の前が食堂街のようになっており、そこで夜のシャイを飲みながら、アラビア文字の勉強。地元の人々と、片言でおしゃべり。60 才前後のフランス人女性とも知り合い、各国の言語や旅行、それに映画のことなんかを語り合う。同宿泊。

**3月3日** Sana'a の東方の地域は、特に外国人誘拐が多く、当時日本大使館が{渡航延期勧告}を発出しており、安全策を取り南回りルートをとる。つまり、再び Aden へ戻ることにする。真夜中発のバスを予約。時間まで、地元の人達や例のフランスのマダムとおしゃべり。

**3月4日 Sana'a > Aden** [バス] YR1,400 夜行バスなので到着き、すぐに乗り換えて東へ向かうつもりでいたが、満席でダメ。別の会社のバスは、外人料金で(?) 3 倍の運賃請求。乗合タクシーはなぜか(?) 乗車拒否。やはり、この国は何もかも、スムーズにはいかないのかもしれない。500km 程東方の Mukalla という町までの許可証は既に Sana'a で取得してたのにもかかわらず、Aden 発行のが新たに必要と言われ、再度 Tourist Police に出向くハメに…。前に訪れていたの場所を知っていたものの、思わぬたらい回しにすっかりくたびれ、やっとのことで明日早朝のバス乗車券を買えた。そのまま、バス terminal 前で野宿。

**3月5日 Aden > Mukalla** [バス] YR2,150 休憩時、乗客からビスケットやジュースをおごってもら。シュ克蘭(ありがとう)! 外国人誘拐多発地区は、検問も懸念されたほど

は嚴重でもなく、何事もなく通過。Baghdad Hotel トイレ & シャワー付きのシングル(YR800)泊。

**3月6日** 街を散歩してたら、異常におしゃべりなケニア人と会う。彼が Christoph とこの町で会ったと聞き、彼の宿泊してるホテルまで連れてってもらおう。彼とは因縁が深いようだ。Christoph と再会を喜び合い、深夜までよもやま話が尽きなかった。またまた、彼と部屋をシェアし、Mukalla Furnished Flats(俺は YR500 払い)泊。

**3月7日** Christoph は、俺がこれから行く Sayun という町から帰って来て、これから西へ戻るところ。彼と一緒に Tourist Police に行くのはこれで3回目。各自反対方向の許可証 get。昨日おしゃべりなケニア人が、いろいろ変テコなことをしゃべりまくるので、すっかり参ってしまった。同宿泊、今夜は俺の分 YR750 払った。

**3月8日 Mukalla > Sayun** [ミニバス] YR700 エチオピアで初めて出会って以来、ジブティで再会し、同じ船で紅海を渡り、そしてここイエメンでも偶然の再会を果たし、いわば1ヶ月間旅を共にしてきた Christoph とは、今度こそ本当に最後のお別れとなりそうだ。マッサラーマ(さようなら)! 乾燥地帯の各地にある水無川である、ワディ。古来より、その地下水脈を利用して、人々は集落を作ってきた。ここ Sayun もそういう町の1つで、独特の雰囲気漂う。Gasser Al Tawila Hotel 狭苦しいシングル(YR600)泊。

**3月9日** オマーン行きのバスは毎日あるわけではないので、あらかじめ予約。Yemen Rial は外国での両替が難しいので、当面の生活費を除き、所持金を Oman Rial に両替。チキン & ピラフ & サラダ & バナナの定食(YR180)は、安くて旨い。同宿泊。

**3月10日** さすが砂漠、昼間はうだるような暑さ。夜間もあまり気温が下がらない。

旧市街をズンズン歩き、岩山に突き当たって道がなくなる所まで散歩。ここがワディの涸れ谷であることを実感。洗濯を済まし、明日の出国に備える。同宿泊。

**3月11日** イエメン最終日。残り少ない手持ちの Yemen Rial を使い切るように、チキンやマンゴー juice を存分に楽しむ。国際夜行バスで出発。**Sayun > オマーンへ** [バス] YR5,

## 《オマーン》

**2006年3月11-12日 イエメンより > Salalah** [夜行バス] 夜中、国境で入国手続のため、一時降車。山間部の夜の砂漠は、肌寒い。入国管理官から、ビザが必要なのでその代金、6 Oman Rial(約¥1,800)を支払うよう言われる。日本人は要らないはず、と主張したが受け付けてもらえず。免除されるのは、アラブ首長国連邦から入国した場合に限られるらしい。代金をまけてくれないかともちかけてみても、ダメだった。イエメンよりは、組織的な国のようだ?!街や海岸を散歩。ヤシの木畑で野宿。

**3月13日 Salalah > Thumrayt** [4WD] ヒッチハイク **Thumrayt > Thumrayt から 6km 地点** [乗客のいないバス] ヒッチ **上記地点 > Quitbit** [乗用車] ヒッチ

**Quitbit > Ghaftan** [貸し切りの(?)ミニバス] ヒッチ **Ghaftan > Muscat** [トラック] ヒッチ 石油のおかげでオマーンはイエメンよりも豊かで道路整備が行き届いており、治安も良く誘拐などのトラブルはほとんどないので、ヒッチハイクを試みる。延々と続く砂漠を貫く道。光線の具合だろうか、サハラ砂漠とは違って、ここの砂は白く輝いて見えた。オアシスのような小さな村が点々とあるだけで、交通量も少ない。バスにも無料で乗せてもらったりしながら、どうにか首都到着。空地で寝る。

**3月14日** アラブ首長国連邦からペルシャ湾を船で渡り、イランへ行く計画だが、以前イランのビザを取ったときに手続きが複雑だったのを思い出し、大使館を訪れてみる。

案の定、5~10日くらいで発給できそう(?)と、大使館員は曖昧な態度。こりゃ、取れるうちに取っておいた方が良さそうだ。早速、申込書を記入して提出。Mutrah という地区のスーク(市場)は、細い小路にたくさんの店が建ち並び、アラビア情緒満点。入り江の海岸沿いの夜景は、豪華で美しい。{オマーンの秋葉原}といった感じの、Ruwi 地区にある電気屋街も歩き回る。港の事務所の裏で野宿。

**3月15-18日** オマーン人はイエメン人と同じように白い民俗衣装を着ている人が多いが、腰にシャンブーヤ(半月型の短刀)をさしていないし、カートを噛んでいる人もいない。

インドやパキスタンなどからの労働者が多く、安食堂は大抵インド料理店。街中で、インド人にドーナツや果物をもらったり、パキスタン人にチャイ(茶)を頂いたりもした。

Old Muscat(旧マスカット)と呼ばれる地区へ、徒歩にて観光。途中の海水は透き通るように綺麗で、威風堂々たる砦の周りは、西洋人旅行者で溢れていた。

野宿続きなので公衆便所で体と服を洗ったら、掃除のオジサンにパンと果物とチャイをおごってもらった。夜、蚊が多くて熟睡できず、朝方、海岸でウトウトしたりも…。

**3月19日** イラン大使館でビザ申請後5日経ったので行ってみるも、まだできておらず。大使館のある地区はMutrahやRuwi地区から10km程離れているので、歩くとちょっと大変だ。重いリュックを草むらに置き身軽にしようとしたら、イギリス大使館の監視カメラに俺の姿が映っており、警察に捕まり尋問。爆弾か何か仕掛けたテロリストとでも思われたのかもしれない。比較的短い拘束で、簡単な質問の後、解放された。空地で眠る。

**3月20日** 明日から4日間、ノウルーズと呼ばれるイランの大型連休に入り、大使館は閉鎖され、待ちぼうけしても仕方ないので、近郊の小旅行に出る。スークの公衆便所の裏で野宿。

**3月21日** **Muscat > City Center** [車2台] ヒッチ **City Center > Mabela** [ルートtaxi] ORO 決まったルートを走るミニバスを、オマーンでは”ルートtaxi”と呼ぶ。もちろん本来は運賃を払わなくてはならないが、今回は特別に無料で乗せてもらった。

**Al Muladha > Rustaq** [乗用車] ヒッチ この町にはAl Ain Kasfa(カスファ泉)が湧いており、無料の公共温泉浴場があった。気持ちイイ!道端で地元民にコーヒー頂いた。夜、弱い霧雨。モスク付近の軒下で寝る。

**3月22日** 朝、もう1度、温泉を浴び、出発。ヒッチ開始前に、1台の車が停まってくれた。その Hilal さんの自宅に招かれ、鶏肉ご飯とナツメヤシ、それにコーヒーを御馳走になった後、Nakhal Fort (ナハル城)を一緒に観光。入場券は俺の分まで払ってもらってしまった。日本のとも、西洋のとも、趣の異なる城内を、存分に観光。

**Rustaq > Barka** [Hilal さんの車] **Barka > Sawadi** [乗用車] ヒッチ

静かな海辺のリゾートへ、やって来た。ビーチで野宿。

**3月23日** 目覚めたときには、海風に舞ってきた砂で、寝袋全体が覆われていた。午前中いっぱい、砂浜でゴロゴロする。午後、食堂で昼食後、アラビア文字の勉強していたら、何人かの地元民に、チャイやジュースをおごってもらった。ちょうど週末に当たり、歌や太鼓で盛り上がる地元の連中で、夜のビーチは溢れていた。野宿するには、賑やか過ぎ?! 警察にパスポート検査されたが、問題なし。同ビーチ泊。

**3月24日 Sawadi > Muscat** [車4台] ヒッチ 小旅行を終え、再び首都へ帰還。郊外の Shanti Al Qurum 地区で降車。とあるインド人から教えてもらった、タダで泊まれる、Zawawi モスクの大広間でザコ寝。

**3月25日** イラン大使館へ行くと、ビザは用意できていたが、代金 OR22.8 を Ruwi 地区にある銀行に振り込まなくてはならない。10km 程離れているので、面倒だなあと思いきや、時同じくビザ申請に来ていたイギリス人に、親切に車で乗せてってもらい、無事ビザ受領。

その後、道を歩いていると、オマーン人ジャーナリストの Hatim 氏に声を掛けられる。彼は俺の旅に興味を抱き、雑誌に書くとか何とかで、簡潔なインタビューを受けた。そして、彼の編集室でインターネットを使わせてもらい、さらに、彼の家に泊めてもらった。

**3月26-27日** 朝食を一緒に頂いた後、Hatim 氏は仕事なので、俺独りで周辺の観光。

Sultan Qaboos モスクの、豪華絢爛なシャンデリア、絨毯、タイルは、まさにため息の出る美しさ!Gubrah 魚スークや、子供博物館などへも、足を運んだ。同家泊。

**3月28日** 最後にチーズとハチミツのおいしい朝食を御馳走になり、Hatim 氏とお別れ。

**Muscat > Airport Round About** [車3台] ヒッチ

**Airport Round About > Nizwa** [トラック] ヒッチ 歴史的な城下町。城とスークの醸し出す絶妙のハーモニー。モスク泊。

**3月29日 Nizwa > Ibri** [インド人] ヒッチ< /SPAN>

**Ibri > Dank** [トヨタの pick-up トラック] ヒッチ

**Dank > アラブ首長国連邦へ** [国境を越えて乗せてくれた] ヒッチ

## 《アラブ首長国連邦》

**2006年3月29日 オマーンより > Al Ain** [国境を越えて乗せてくれた] ヒッチ

国境の入国審査では、眼の写真を撮られた。新型の身元認証システムか?!時代の最先端をゆく、アラビア半島の大国へやって来た。この国の生粋の地元民は石油の恩恵を受けた大富豪であり、砂漠気候の酷暑の中を歩くよりも、車メインの移動となるせいだろうか…街角ではあまり見かけない。インドやパキスタンからの出稼ぎ労働者ばかりが目立つのは、オマーンと同様。外国人の多い国である証明かのように、この町でやっかいになった Hospitality Club メンバーも、アメリカ人の英語教師だった。Daniel 氏の家に泊めてもらう。

**3月30日** 街並みはとても立派で、道や庭の手入れも隅々まで行き届いていた。Daniel 氏の車で、ラクダ市を見に行っただが、なぜか羊と牛しかいなかった。Al Ain Museum(入場料 0.5 Dirham = 約¥15)見学。考古学的な埋蔵品や、歴史的資料などが、展示してあった。日本からの団体旅行客も見かけた。夕食には、Daniel 氏が、魚介類のピラフを作ってくれ、デザートには、イチゴ風味の豆腐入りアイスクリームを作ってくれた。スーパーでは、ヨーロッパ各国からの輸入品はもとより、日本食材なんかも売っている。同家泊。

**3月31日** Daniel 氏の車で、郊外へドライブ。典型的な砂漠の景色、オレンジ色の砂丘が連なる。ほぼ Al Ain の町の一部であるかのように隣接する、Buraimi と呼ばれる地区は公式にはオマーン領である。しかしながら、"Welcome Oman"の看板をこともなげに通り過ぎるだけで、出入国手続きなしで行き来が可能で、そこにあるスーク(市場)を訪れた。ただし、2006年9月以降は、パスポート検査を受けなくてはならぬように変更になったようだ。

街のシリアの菓子店にも立ち寄り、甘い菓子を試食させてもらった。Palace Museum(入場無料)見学。アラビアの雰囲気満点の、伝統的なハンジャル(三日月型短刀)や食器、それに家具などが、とても美しかった。同家泊。

**4月1日** Daniel 氏は、早朝、仕事に行ったので、俺は独り彼の自宅でゆっくりさせてもらう。午後、帰宅後、Daniel 氏の車で、Hafit 山へ。荒野に忽然とそびえる、標高 1,340m の、恐竜の背のようにギザギザに尖った、特徴のある岩山。頂上から絶景を楽しむ。夜はその登坂道がライト up され、美しいジグザグ線を描き、この町の夜景に花を添える。その光は、Daniel 氏宅の屋上からも眺めることができた。夕食には、ステーキと mashed ポテトとアスパラの炒め物を、御馳走になった。同家泊。

**4月2-4日** Daniel 氏の家で、いろいろな国の民俗音楽の CD を聴いたり、読書したり、彼のペットのチワワと戯れたりして、数日間のんびり過ごす。冷奴など、簡単な日本食を作ったりもした。豆腐や味噌などの日本食材は売っているが、値段は概して高め。申し訳ないことに、Daniel 氏に買ってもらった。同家泊。

**4月5日** スークでインド人(パキスタン人?)から安い靴を買ったら、早速靴擦れしてしまい、それでもムリして歩いてたら、足の親指のつめが剥がれてしまった。夜、Daniel 氏の車で、classic ギターのコンサートへ。豪華な夕食付き。終演後、Rotana Hotel の bar へ連れて行ってもらい、キューバ音楽のライブ鑑賞。贅沢な night ライフを、満喫させても

らった。同家泊

**4月6日** Daniel氏は昨夜飲み過ぎたらしく、二日酔いで昼まで眠っていた。昼食には、pork ステーキを御馳走になった。この国ではイスラム教徒の禁忌もさほどの影響力はなさそうで、豚肉を簡単に入手できるようだ。夕食にはDaniel氏の友人も招いて、俺が日本食を作った。メニューは、湯豆腐、焼きそば、もろキュー、味噌汁など…。彼の家での、最後の夜に、乾杯!同家泊。

**4月7日 Al Ain > Faqa'a** [インド人の車] ヒッチ **Faqa'a > Dubai** [パキスタン人の車] ヒッチイラン行きの船の運航状況を知りたかったので、出航する港のある隣町まで歩く。 **Dubai > Sharjah** [徒歩] 港へ着かないうちに日が暮れて、モスクの横で野宿。毛布を掛けてもらった。

**4月8日** AM5:00 前のアザーン(1日5回、礼拝前に行なわれる、イスラム信徒たちへの、拡声器による呼びかけ放送)とともに起床。早くも仕事場へ向かう、出稼ぎ労働者達に感服。港で聞いたイラン行きの船会社の事務所は街中にあり、3日後の船を予約。

**Sharjah > Dubai** [徒歩] & [車] ヒッチ 約束してある Hospitality Club メンバーに会うために、Dubai へ戻る。船舶関係の会社に勤めるトルコ人 Devrim の、公共プール付きの豪華なアパートに泊めてもらう。

**4月9日** Devrim 手作りの、トルコ風の pasta やチキン rice を、御馳走してもらう。同家泊。

**4月10日** Mawlid Al-Nabi(預言者ムハンマド生誕祭)で、Dervim は仕事が休みで、一緒に観光。豪華なホテルが林立するビーチに連れて行ってもらう。世界中からの水着の海水浴客で賑やかに溢れ返り、そこにもはやイスラムの雰囲気は皆無である。スークも、最新鋭に良く整備されたショッピングの場といった様相。イエメンやオマーンでは、いまだに古き良きアラビアの伝統を垣間見たような気がしたものだが…。室内のスキー場をガラス張りの外側から見学。砂漠に雪というとっぴな組み合わせ。人間が文明という名の下に、自然を克服した産物といえよう。Dervim はブラジルに住んでいたこともあり、最後の夕食に、Dervim がブラジル風のバーベキューを作って、御馳走してくれた。同家泊。

**4月11日 Dubai > Sharjah** [バス2台] D2.5 + 5 渋滞するほどの多すぎる交通量のため、ヒッチはやりづらいので、バスを乗り継ぎ。イランの通貨への両替も済ませ、準備万端で港へ出向くと、なんと船は欠航!勝手に寝させてもらい悪いが、エアコンの名残で涼しい、モスクの中泊。

**4月12日** 本日は無事出航してくれ、ホッと一安心。出国税 D20 支払い乗船。船内で夕食 & コーラ & サラダも振舞われた。日本製の中古のフェリーであった。ペルシア湾航海!

**Sharjah > イランへ** [船] D150

## 《イラン》

2006年4月13日 アラブ首長国連邦より > Bandare Abbas [船] この町は南部に位置する国内有数の港町で、高原にある北部とは異なり蒸し暑い。女性達は、色鮮やかで派手なチャドル(木綿の全身を覆う衣服)をまとい、舞踏会にでも出席するかのよう、赤や黒の仮面をつけていることもあり、非常に興味深い。この国では、前回ちょっと物騒な連中にも遭遇していることだし、なんせ産油国なので、公共交通機関が手頃な運賃なので、ヒッチハイクは一休みし、列車を使ってみる。港から鉄道駅へ向けて歩いていると、海軍兵士 Mohammad 君が、オートバイの後ろに乗せてくれた。切符は駅では買えず、街の事務所で買うという面倒臭いシステムだったが、Mohammad 君が付き添ってくれて助かった。発車まで時間があったので、公園や海に連れてってくれ、ハンバーガーとジュースおごってくれた。

Bandare Abbas > [夜行列車] 41,700 Rials (=約¥520)

4月14日 > Esfahan {世界の半分}と謳われる、この美しい町に来るのも、これで2度目になる。Hospitality club メンバー Farhad に会う。小柄で控えめで、詩と音楽をたしなむ、穏やかな人物。川原の公園を散歩したり、民俗楽器 Tombak(桑の木から作られた打楽器)や Tar(胴体が8の字形の弦楽器)と一緒に演奏して遊ぶ。Farhad の家泊。

4月15日 Farhad の弟の結婚式が自宅で開催され、急遽俺も出席させてもらい、貴重な体験。ギターに近い楽器である Tar を使って、即興を数曲披露(?)した。外ではスカーフで髪を隠す女性達も、身内のパーティーではお洒落。一緒にダンスして、イラン女性の美しさに魅了される。旨い料理、果物、そしてケーキ!同家泊。

4月16日 Farhad と一緒に、Minar-e Jonban(揺れるミナレット)のあるモスクへ。決まった時間になると、係員が片方のミナレット(尖塔)を揺らし、それに共振してもう片方も揺れる。このモスクは14世紀建造ながら、すでに耐震構造を備えていたともいわれる。

ゾロアスター(拝火)教の神殿の遺跡のある、小高い丘アータシュガーにも登る。頂上からの景色は抜群だった。同家泊。

4月17日 Esfahan > Tehran [バス] R19,000 Guest House Mashhad ドミトリー(R30,000)泊。5~6畳の部屋に、所狭しと3つベッドを置き、ノルウェー人と香港系カナダ人と同室だった。

4月18-19日 ノルウェー人と一緒に食事をしたり、香港系カナダ人からロシアのビザの取りやすい情報を聞いたり、同宿の日本人からインスタント味噌汁もらったりして過ごす。やっぱり、アジアには、日本人旅行者が溢れてるな〜あ。同宿泊。

4月20日 Tehran > [夜行バス] R35,000 行く先が一緒の、昨日の日本人と一緒に、トルコ方面行きのバス乗車。

4月21日 > Maku まだ薄暗い早朝に到着。高地で雨天なので肌寒い。散歩中、からかい半分に、子供に石を投げられた。そうかと思うと、民家に招かれ、Kuku-ye Sabzi(ハーブ

入りオムレツ)を御馳走になり、親切にされたりもした。 Hotel Alband ツイン room を日本人とシェア(各 R30,000)泊。

4月22日 Maku > Bazargan [タクシー] R1,000 バスが見つからず、例の日本人と一緒にタクシーで。この国境からトルコへ入国するのは、俺にとって3年振り2度目

## 《トルコ》

2006年4月22日 **Gürbulak > Doğubayazıt** [トラック] ヒッチハイク

**Doğubayazıt > Çaldıran** [ワゴン] ヒッチ **Çaldıran > Ağrı** [中型トラック] ヒッチ **Ağrı > Erzurum** [背広姿の紳士] ヒッチ 途中の山道は、ひょうが降り、視界悪し。4月といえども、トルコ東部はまだ寒い。Otel Çetin(5 Yeni Türk Lirası = 約¥400)泊。貨幣が新しくなった。

4月23日 Erzurum > 郊外 [ワゴン2台] ヒッチ **Erzurum 郊外 > Erzincan** [夫婦] ヒッチ **Erzincan > Sivas** [トラック] ヒッチ 2年半前この町で知り合い、みんなでサッカーもした、学生の **Özgür** と再会。彼の家泊。

4月24日 **Özgür** の大学へ連れてってもらい、数学とコンピューターの講義を受ける。スイスでもこんなことあったっけ…。講義終了後、みんなで食堂へ行き、**İskender Kebap**(削ぎ肉にトマト sauce とヨーグルトを和えたもの)を御馳走になる。同家泊。

4月25日 **Özgür** は朝から大学へ行ってしまったが、彼はたくさんのルーム mate と一緒に暮らしており、彼らが俺のために食事を用意してくれた。同家泊。

4月26 - 27日 1281年建立の神学校の入口の2本のミナレットだけ残る **Çifte Minare** や、1218~1219年建立のセルジューク最大の病院 **İzzettin Keykavus** の墓標など、歴史的建造物を見学。現在その中は、土産屋となっている。同家泊。

4月28 - 30日 学生達と共に生活していると、時間が夜型になりがちで、朝起きるのが遅くなる。**Özgür** 達は、日本ではなじみの薄い **Bulgur**(高温高压で蒸したデュラム小麦を、乾燥させ挽き割ったもの)を使って、**Yumurtalı köfte**(卵の肉団子)を作ってくれたり、**çay**(茶)を淹れてくれたり、大いにもてなしてくれた。明日出発。同家泊。

5月1日 **Sivas > Yıldızeli** [中型トラック] ヒッチ そのトラックで乗せてもらった町に着いた途端、激しい雨が振り出した。学校で雨宿りしたら、先生達に **çay**(茶)頂いた上に、ここでもまた(!)授業に参加。 **Yıldızeli >** [トラック] ヒッチ このトラックは、長距離を乗せてくれ、深夜も運転が続く…。

5月2日 **> Eskişehir** 夜明け前に郊外に着き、暗くて市街地への方向もつかめず、とりあえず路上で仮眠。日の出後、警察に街までの道尋ねたら、派出所で朝食をおすそ分けしてくれ、一緒に記念撮影も?!トルコの警察官、相変わらず感じいいなア…。Hospitality Club メンバーの Emrah と会い、自転車を借りて運河沿いの繁華街を夜のサイクリング後、彼のルーム mate と共に夕食。Emrah の家泊。

5月3日 古工場を改装したショッピング mall や、大学前夜祭など見物。夕食には Emrah が Manti(トルコ版餃子?)を作ってくれ、ルーム mate や友達と TV でサッカー観戦。同家泊。

5月4日 **Eskişehir > Bozüyük** [電気屋] ヒッチ **Bozüyük > Bilecik** [中型トラック] ヒッチ **Bilecik > İstanbul** [トラック] ヒッチ Hospitality Club メンバーの知人である Umrah さんの家泊。

5月5日 早足で İstanbul 観光。アジア側からヨーロッパ側へ船(YTL1)で渡る。安宿や土産屋が連なる一画を歩くと、日本語の看板がたくさんあった。日本語ペラペラのトルコ人も数人出会った。Hippodrome のオペリスク付近も散歩。 Aya Sofya や Sultan Ahmet Camii (Blue モスク)、Topkapı Sarayı(トプカプ宮殿)などは、入場料が高いため、外周を通り過ぎるように眺めて、観光終了。 **İstanbul > Hadimköy** [車4台] ヒッチ

**Hadimköy > Tekirdağ** [中型トラック] ヒッチ **Tekirdağ > Edirne** [怪しげな運転手] ヒッチ 最後の車は、麻薬だか?銃だか?を運搬中で、町の入り口の検問の手前までしか乗せてもらえず。Hospitality Club メンバーの Zekeriya 医師の家泊。

5月6日 丘の上にある **Sükür Paşa Müze** というブルガリアとの戦争についての博物館や、壮麗で重厚な Selimiye Camii (セリミエ・モスク)、そして壁面に大きく描かれた芸術的なアラビア文字で有名な Eski Camii (旧モスク)など観光。同家泊。

5月7日 Zekeriya 医師が、足の傷に効くクリームを、土産に持たせてくれ、出発。

Edirne > Kapıkule [乗用車] ヒッチ 前回のギリシアへの国境越えに際し、徒歩は禁止されていたが、今回のブルガリアへも条件は同じ。団体客の貸し切りバスに便乗させてもらった。オバサンが多く、みんな免税枠以上の煙草を買い、鞆の底などに隠していた。ちやっかり俺も1カートン運ばされちゃった?!

## 《ブルガリア》

2006年5月7日 **Свиленград > Чирда** [トルコのトラック] ヒッチ  
ハイク 第1日目は、市場で野宿

5月8日 **Чирдан > Ямбол** [車3台] ヒッチ 以前泊めてもらった Hospitality Club メンバー、Явор君にまた、泊めてもらう。

5月9日 **Ямбол > Русе** [バス] 12+3 лева (=約¥1,000) Явор君に Автогара (バス terminal)まで送ってもらって、バスに乗り込んだのはいいが、途中で故障して乗り換えさせられた挙句、結局3лв多く払うハメに…。ヒッチの方が経済的かつ快適だったりして…?! 国境の町ということで(?)、道端で警察からパスポート検査あり。夕方、公園でクラシックのコンサートと花火を見た。ドナウ川沿いの廃駅で野宿。

5月10日 ルーマニア国境に架かる橋は、前回同様、徒歩で渡ることは禁じられており、橋の手前でヒッチ試みるが、午前中いっぱい誰も停まってくれず、街に戻り鉄道駅へ。

**Русе > Giurgiu** [列車] 7.3 лв 川渡っただけで、こんなに払うとは…。出国税

でも含まれてるのだろうか?

## 《ルーマニア》

2006年5月10日 **Giurgiu** [列車] 7.3 Л В 道端で、小さな女の子に、ビスケットもらった。マンションの一角で野宿。

5月11日 **Giurgiu > București** [乗用車] ヒッチ **București > Ploiești** [3人組] ヒッチ Hospitality Club メンバーVlad 君と会い、夕食を御馳走になり、泊めてもらう

5月12日 トルコと同じように、新貨幣になっており”0”を4つ取って、1Leu=約¥40。時計博物館(入場料 3.5Lei)と芸術博物館(同 2.5Lei)観光後、Vlad 君の友人の家で映画鑑賞。夜 bar で、スペインからの交換留学生や、ブラジル在住の中国人らとおしゃべり。同家泊。

5月13-14日 Vlad 君の友達 Alina のギター教室へ連れて行ってもらい、そこの先生が、ギターで{きよしこの夜}や日本の箏曲{桜}を弾き、一緒に歌う。Alina の歌声は独特で可愛い。同家泊

5月15日 **Ploiești > Câmpina** [合気道をやる青年] ヒッチ **Câmpina > Sinaia** [タクシーのようだったが…???) ヒッチ **Sinaia > Brașov** [途中で別のヒッチハイカーも拾ってた] ヒッチ Hospitality Club メンバー夫婦 Ovi と Anca の家に泊めてもらう。

5月16日 **Biserica Neagră** (黒教会)をはじめ、美しい旧市街を散歩。天気良好、春到来。チーズやハムなどの美味しい食事を御馳走になり、同家泊

5月17日 **Brașov > Sibiu** [たくさんの別のヒッチハイカー拾いつつ…] ヒッチ **Sibiu > Alba-Iulia** [女性ドライバー] ヒッチ

5月18日 脂身の多い白いベーコンが安くて旨いので、よく買ってパンと一緒に食べていた。Andrea は、そのベーコンに玉ネギを添える郷土料理的な食べ方を教えてくれた。

彼女の職場へ行くと、同僚の看護婦達に紹介され、おしゃべり。彼女達は、例の白いベーコンをプレゼントすると言ってくれたが、リュックサックが重くなるので、謹んで辞退。

夕食に Andrea が、キノコ&アボガド&鶏肉の grill を作ってくれた。心理学や、各国の文化、それに言語の話題に花が咲く。俺のボロ服を見て、シャツを1枚くれた。同家泊。

5月19日 **Alba-Iulia > Aiud** [サングラスをかけた男] ヒッチのつもりだったが…

ルーマニアのヒッチバイクは、一般的に料金を払うことになっているらしく、乗る前に”Gratuite(タダ)?”と聞いた時点で、走り去ってしまう車もいる。乗り込む前に値段を聞いた時点で、運転手は大きく手を振ったので、乗り込んだのはいいが、ジェスチャーの相違だろうか?到着すると、運賃 20Lei を請求してきた。交渉し 2Lei にまけてもらう。

**Aiud > Turda** [初め運賃 5Lei 要求、でもタダにしてもらった] ヒッチ

**Turda > Cluj-Napoca** [好青年] ヒッチ この国最後の Hospitality Club メンバー

は、劇団員である謙虚な若者。Lucian 君の家泊。

5月20 - 21日 近所の湖畔でおしゃべりしたり、教会前の広場の民芸品市場を眺めたり…。

散歩中8回も結婚式を見かけた。Lucian 君いわく、善き前兆らしい(?!)。Lucian 君の友達のチュニジア人学生やハンガリー人 Hospitality Club メンバーとも会う。

丘の上に登り見下ろす夜景は美しかった。同家泊。

5月22日 **Cluj-Napoca > Oradea** [話好きな男性] ヒッチ ハプスブルグ家の建築様式の優雅な建物が立ち並ぶ。廃屋で野宿。

5月23日 **Oradea > ハンガリー国境** [徒歩 10km 強]

## 《ハンガリー》

2006年5月23日 **Ártánd > Berettyóújfalu** [英語ペラペラの人] ヒッチハイク

**Berettyóújfalu > Földes** [音楽ガンガンかけてる車] ヒッチ

**Földes > Bàrànd** [トラック] ヒッチ

**Bàrànd > Püpekkladány** [爽やかな青年] ヒッチ

**Püpekkladány > Kalcag** [オジさんの小型車] ヒッチ 公園で野宿。

5月24日 **Kalcag > Buda Pest** [ワゴン車] ヒッチ 首都で迎えてくれた Hospitality Club メンバーは、イタリア人の Livia。夕食の Pasta を御馳走になった後、Livia の車で、フォークダンス教室へ連れて行ってもらう。ハンガリー舞踊音楽を聴きながら、ステップを学ぶ。Livia の家泊。

5月25日 Livia は仕事なので、独りで散歩。美しいドナウの真珠である Buda 旧市街を一望できる、Citadella(城砦)など観光。観光客で溢れている。同家泊。

5月26日 Magyar Nemzeti Múzeum(ハンガリー国立博物館)、Zsidó Múzeum(ユダヤ人博物館)、Iparművészeti Múzeum(工業美術館)などの博物館(いずれも入場無料)、1884年にルネッサンス様式で建てられたオペラ house、Kossuth Ter(荘厳な国会議事堂のある広場)、Hősök Tere(英雄広場)、Vajdahunyad 城といった美しい建物を見物。同家泊。

5月27日 Livia と一緒に街へ繰り出し、Néprajzi Múzeum(民族博物館)見学。

画家達による屋外写生会や、民俗音楽コンサート、チベット砂曼茶羅作成会、ポーランド観光局による郷土料理試食会などの各種イベントにも参加。同家泊。

5月28日 **Buda Pest > Tatabánya** [日本語話すカップル] ヒッチ ここで泊めてもらうはずの Hospitality Club メンバーは不在。電話すると英語の全く話せない母親が出て、なんとか話し、家の住所をつきとめ、どうにかたどり着き、泊めてもらう。

5月29日 **Tatabánya > Győr** [古い黄色い車] ヒッチ

**Győr > Mosonmagyaróvár** [トラック & ワゴン車] ヒッチ ビルの裏で野宿。

5月30日 **Mosonmagyaróvár > スロヴァキア国境** [徒歩] ヒッチできず、歩いて国境越え。

## 《スロヴァキア》

2006年5月30日 国境 > Bratislava [徒歩] Hospitality Club メンバーの Miro が車で迎えてくれ、夕食を御馳走になった後、友人宅へドライブし、ケーキを頂いた。Miro の家泊。

5月31日 Miro は仕事なので、俺は独りで城や旧市街を観光。その日の晩もやはり Miro が、チーズをふんだんに使ったサラダを用意してくれ、彼の奥さんの手作りの苺ケーキも頂いた。スポーツ man である Miro は、しばしば友達とホッケーをやっていて、スティックを借りて、試に俺も参加させてもらった。初体験なので、難しかったが、面白かった。同家泊。

6月1日 Bratislava > Senec [優しいオジサン] ヒッチハイク

Senec > Trnava [ノリのよさそうな若者] ヒッチ Trnava > Madunice [徒歩 18km] つぶれたスーパーの裏で野宿。

6月2日 Madunice > Piešťany [徒歩 10km] 連絡があやふやだった Hospitality Club メンバーに電話してみると、案の定、彼はチェコ渡航中のため不在。両親は英語が全く話せないのにもかかわらず、温かく迎えてくれた。庭からもぎ立ての野菜を使った料理、サラミやチーズ、そしてコーヒーやジュースやクッキーなどでもてなしてもらい、泊めてもらう。

6月3日 早朝、父親の手伝いをする事になり、車で山へ出かける。木こりの仕事で、重い丸太運び。山上から見下ろす街の景色や、湖の眺めが美しかった。その日は春祭りで、街のあちこちでパレードやコンサートを楽しんだ。夜、不在の Hospitality Club メンバーが狩猟したという、鹿肉を御馳走になった。同家泊。

6月4日 Piešťany > Hrádok [徒歩 10km] Hrádok > Trenčín [中国人のワゴン車] ヒッチ ビルの横で野宿。

6月5日 駅で Hospitality Club メンバー Mimka と待ち合わせ。昼食&コーヒー後、城を観光、子供達による民俗舞踊鑑賞。Mimka の家泊。

6月6日 Trenčín > Zilina [イタリア人 3 人組] ヒッチ スロヴァキア最後となる Hospitality Club メンバー Lenka と会い、一緒に公園を散歩。夕食にパスタを頂き、チョコレートや紅茶でリラックス。Lenka の家泊。

6月7日 午前中、Lenka は仕事なので、俺は独りで街を散歩。

午後は、彼女の友人の車で、Terchova という町にある Mala Fatra 国立公園をハイキング。すがすがしい山間の空気を吸いこむ。同家泊。

6月8日 Lenka は1日中仕事なので、俺は独りで Budatinsky Zámko Múzeum という博物館見学。夕食は、パンにチーズと豆ペースト。夜は DVD のコメディ映画鑑賞。チェコ語だったので、Lenka が俺のために英語に同時通訳してくれた。同家泊。

6月9日 Zilina > Sočany [機械関連の職業の人] ヒッチ

**Sočany > Ružomberok** [トラック] ヒッチ

**Ružomberok > Oranský Podzámok** [丸太積載トラック] ヒッチ

**Oranský Podzámok > Krivá** [徒歩 10km]

**Krivá > Trstená** [スロヴァキア語でしゃべりまくるオヤジ] ヒッチ

教会の門の下で野宿。雨で肌寒い。

6月10日 **Trstená > ポーランド国境** [徒歩]

## 《ポーランド》

2006年6月10日 **Chyžne > Głogoczów**

**Głogoczów > Kraków** [葬式へ行く僧侶] ヒッチ

**Kraków > Katowice** [優しい青年] ヒッチ Hospitality Club メンバー Agnieszka

の彼氏 Michał が、駅まで迎えに来てくれた。夕食後、友人のパーティーに参加。野外ライブ鑑賞。酒を飲んで興奮した奴が、空のグラスを放り投げ、それが俺の隣にいた Michał の友人に命中し、流血騒ぎに…。Agnieszka の家泊。

6月11日 **Katowice > Kraków** [列車] 10.03 Złote (=約¥350) Agnieszka と一緒に、公園や博物館を散歩。Michał の家泊。

6月12日 月曜は Wawel (ヴァヴェル) 城の入場無料なので観覧。子供がたくさんいた。

昼食に、Agnieszka が Kotlet Schabowy (カツレツ) を作ってくれた。同家泊。

6月13 - 15日 たくさんの美しい教会やユダヤ人地区など観光したり、郊外の川や森を散策したり…。ちょうど隣国ドイツでサッカーの W 杯が開催中で、特設会場の映画スクリーンでドイツ VS ポーランドを観戦し、みんなで盛りあがった。Agnieszka が連日、イモ料理や、サラダ、旬のイチゴなどを振舞ってくれたので、お返しにスーパーで麺を買って焼きソバを作ってあげた。同家泊。

6月16日 **Kraków > Kielce** [車] ヒッチ **Kielce > Skarżysko-Kamienna** [男2人女1人] ヒッチ 天気良好、暑い。花粉舞い、目と鼻が痒い。野宿。

6月17日 **Skarżysko-Kamienna > Warszawa** [トラック] ヒッチ

街の南に位置する空港の付近で降ろしてもらい、中心部を抜けて、北部まで歩くと、さすがに首都だけあって時間がかかり、日が暮れてしまった。スーパー横の空地で寝る。

6月18日 **Warszawa > Pułusk** [小さな車] ヒッチ Hospitality Club メンバー、Gregorz の家に泊めてもらう。

6月19日 朝・昼・夕と3食たっぷり御馳走になり、Gregorz の庭仕事を手伝ったり、彼の幼い娘とサッカーをして遊んだり、川を泳いだり、ソヴィエト時代の軍事建造物を見学したりした。同家泊。

6月20日 **Pułusk > Maków Mazowiecki** [長髪の青年] ヒッチ

**Maków Mazowiecki > Ostrów Mazowiecki** [陽気なオジサン] ヒッチ

**Ostrów Mazowiecki > Zambrów** [トラックのアンちゃん] ヒッチ

**Zambrów > Białystok** [車] ヒッチ

**Białystok > Augustów** [英語の試験直後の若い父親] ヒッチ

**Augustów > Suwałki** [車] ヒッチ Hospitality Club メンバー、**Żaneta** の家泊。

6月21日 学生である **Żaneta** は午前中講義があるので、俺は独りで教会や公園を散歩。

午後、自転車を借りサイクリング。彼女の友人と3人で郊外の湖で泳いだ。その後、ヒトラーによって破壊されたという、ユダヤ人墓地を見学。夕方、再び独りで、ロシア人墓地や駅を観光。父親手作りの夕食頂き、同家泊。

6月22日 今日もまた自転車を借り、**Żaneta** と一緒に、昨日とは別の湖へサイクリング。

帰宅後、焼きソバを作ってあげたら、父親が好礼に **Suwałki** 周辺の写真のCDをくれた。

**Żaneta** は今晚遅く母親の仕事を手伝うために、北欧へ向けて旅立つことになっており、俺よりも一足先に発っていった。俺は明日の朝出発、もう1泊させてもらう。

6月23日 **Suwałki > Budziko** [韓国車の4WD] ヒッチ ポーランドを去り、リトアニア

## 《リトニア》

2006年6月23日 国境 > **Kalvarija** [徒歩] **Kalvarija > Vilnius** [道中のガイドもしてくれた親切車] ヒッチハイク リトアニア入国初日のうちに、小国なので、首都まで到着。約束してある Hospitality Club メンバーの家へ向け、歩いている途中、到着時刻の連絡もしていないのにも関わらず…なんという偶然だろうか!!!そのメンバーの父親の車が、俺の真横を通りかかり、拾ってもら。メンバー自身はあいにく外出中で不在だったが、両親が面倒を見てくれ、泊めてもらう。近所の人達とのホーム party に参加させてもらい、御馳走にありつけた!みんな大いに飲んで盛りあがっていたが、俺は酒を飲めなくて、ちょっと残念…。

6月24 - 25日 日がすっかり昇った頃に目覚め、昨夜遅く帰宅した **Miglė** と初めて対面し、遅れ馳せながら挨拶を交わす。食事を作ってくれたり、もてなしてくれ、一緒に散歩もした。好きな音楽は民族音楽や古いロック、好きな映画は前衛的な一風変わったもの。それらを家で鑑賞しつつ、おしゃべりしたりしながら、ゆったりと過ごす。同家泊。

6月26日 ロシアのビザ申請に時間がかかりそうなので、**Vilnius** に長期滞在しなくてはならなくなりそうだが、**Miglė** のプロフィールによると、最大滞在は3泊までとのことだったので、今日から別の Hospitality Club メンバー、**Giedre** の家に移る。早速一緒に街を散歩し、食堂で **Cepelinai** (豚肉やキノコ、野菜などを、すりおろしたジャガイモで包んだ郷土料理) を御馳走になる。**Giedre** の家泊。

**6月27日** 以前ロシアのビザを日本国内で取得しようとして、招聘状が必要だとか、あらかじめ宿泊先と行程を決めなければならないとかで、結局あきらめたことがある。この国のロシア大使館でも、個人のビザ申請は受け付けてもらえず、旅行代理店へ行くように言われた。大使館近くの代理店ではビザの値段が高く、駅の方へ行ってみる。鉄道駅の一角で営業している Kelvita という旅行代理店で、1週間後の受領の条件で 200Litas(=約¥8,000)とのこと。それまで Giedre の家に滞在させてもらう。

**6月28日** Giedre とバスで近郊の Trakai へ。湖に浮かぶように城がそびえる風光明媚な場所。水鳥と戯れながら、赤いレンガと石造りの城を散策し、手漕ぎボートで小島へ渡って泳ぐ。食堂で Kibinai(羊肉包みパイ)も食べた。帰宅すると、母親が Šaltibarščiai(ビート root が原料の、鮮やかなピンク色の冷たいスープ)を作ってくれた。同家泊。

**6月29日** Giedre の友人(彼女も Hospitality Club メンバー)の家に、夕食に招かれる。そこには、オーストラリアからの旅行者が滞在していて、彼らのお手製の Pasta とサラダを頂いて、おしゃべり。同家泊。

**7月3-4日** 独りで街を観光。芸術的な共和国である(?) Užupis 地区へ。Vilnius 内にありながら、独立している(?)この地区には独自の憲法が制定されており、冗談めかした条項が箇条書きされている看板がある。4月1日の独立記念日には、この地区へ入るのにパスポートが必要っていうから、ヨーロッパ人のジョークは徹底してるな～。Bernardiny Kapines という年季の入った墓地も訪れ、旧市街のパノラマが一望できる Tryskryžiai(3つの十字架)の丘にも登った。帰宅後、Giedre の家族に、オムライスやチャーハンを作り、父親と一緒に皿洗い。その後、彼とギターを弾いたり、母親とチェス対戦したり(2連敗!)、楽しく過ごす。同家泊。

**7月5日** 大いに世話になった Giedre と、その彼氏と、最後の朝食を頂き、お別れ。Kelvita 旅行代理店へ出向く。ロシア大使館の手違い(?)で約束の時間を若干遅れたものの、無事ビザ取得。ロシアに、ヨーロッパ諸国並みの几帳面さは、望めなさそうだ。鉄道駅でまた別の Hospitality Club メンバーと待ち合わせ。Inga は田舎に住んでいるが、ここ首都で働いており、帰宅ついでに車で迎えに来てくれたのである。 **Vilnius > Molėtai** [Inga の車]  
湖と森林に囲まれた、サウナ付きの、農村の静かな民家に泊めてもらう。

**7月6日** 朝食にパンケーキを焼いてもらい、とブルーベリー-jam やサワー-cream を添え頂く。Inga と一緒に畑のイチゴを摘み、汗びっしょりになる。その後、親戚の幼い子2人を連れて手漕ぎボートに乗り、対岸へ上陸し、みんなで泳いで遊ぶ。夕食には、七面鳥の豪華な BBQ を御馳走になった。同家泊。

## 《ラトビア》

7月7日 **Molėtai > Utena** [美人の映画翻訳家] ヒッチ

**Utena > Jotaučiai** [笑顔のオジサン] ヒッチ ラトヴィア入国。今回は超短期滞在、南東部をかすめるように、ロシア国境を目指す。

**Jotaučiai > Daugavpils** [ワゴン車の親子] ヒッチ

**Daugavpils > Rēzekne** [釣り人] ヒッチ

**Rēzekne > Ludza** [フレンドリーだが英語の全く話さない人] ヒッチ

**Ludza > Zilupe** [Viktor氏] ヒッチ 最後の運転手 Viktor 氏の自宅の庭に、寝袋を敷き眠らせてもらう。

7月8日 **Zilupe > Torehova** [徒歩 7km] EU 圏を去り、いざ大国、ロシアへ!

## 《ロシア》

2006年7月8日 **国境 > Кунья** [ラトヴィアからのトラック] ヒッチハイク

初めてやって来たロシア、привет(こんにちは)!地図もガイド book も持たずに、およそ 1 万 km の東西縦断を、陸路でやってのけようと考えているが…。ビザに許された滞在期間はわずか 30 日。果たしてどうなることやら…?

**Кунья > Старая Торопа** [ロックを聴きながら] ヒッチ

**Старая Торопа > Западная Двина** [パトカー?] ヒッチ  
オンボロの車で、地方の警備員かもしれない。気楽に乗せてくれた。

**Западная Двина > Москва** [Олет氏] ヒッチ

このラトヴィア人の Олет 氏が大変親切で、途中のコーヒーもおごってくれ、お土産に干魚を買ってくれた。Спасибо(ありがとう)!ロシアの厳しい寒さの冬を乗り越える保存食として、干した魚はこの国で頻繁に食べられているようだ。モスクワ到着後、Олет 氏は、ここ首都で泊めてもらうことになっている Hospitality Club メンバーに連絡をとり、待ち合わせ場所までアレンジしてもらい、彼女の家の近くの метро (地下鉄) 駅までの行き方も説明してくれた。Настя の家に泊めてもらう。

7月9日 Настя の両親の別荘へ行き、サッカーの W 杯決勝戦を TV 観戦。そこで彼らは、とても美味しい鶏肉や魚介類の料理を御馳走してくれた。「ロシア人はみんな Водка (ウォッカ) を飲む、酒を飲めないと交流ができない」なんていうガセ前評判を聞かされていたが、実際には日本の飲んだくれオヤジのような、しつこい酒の強要もなく、下戸の俺でも楽しく過ごすことができた。彼らの別荘泊。ロシア独特の Квас と呼ばれる微アルコール飲料について触れておきたい。ライ麦と麦芽を発酵させて作るもので、家庭では黒パンとイーストで手軽に作られる。酸っぱいような独特のクセがあり、最初は抵抗があったが、慣れると美味しく飲めるようになった。街角では黄色いタンクに積んで、屋台のように売られていて面白い。確か 1 杯 10 Рубль (= 約¥40) 程であったと記憶している。

7月10-11日 市街を歩き回り、芸術的な彫刻で知られる метро (地下鉄) 駅も観光。夜

には、**Настя**が、彼女の友達とおしゃべりをしに、barへ連れてってくれた。

**Настя**は郷土料理のビート汁**Борщ**(ボルシチ)を、彼女の父はステーキを作ってくれた。俺はお返しにチャーハンと刺身(妙な組み合わせだが…)を料理した。そう!ここ**Москва**では生魚も買えるのだ。“**Якитория**(ヤキトリヤ)”と呼ばれる日本食レストランのチェーン店までもある(ちなみに焼き鳥以外も売ってた!)。**Настя**の家泊。

**7月12日 Москва > Балашиха** [空軍のパイロット] ヒッチ

**Балашиха > Лосино-Петровский** [車] ヒッチ

**Лосино-Петровский > Владимир** [寡黙な人] ヒッチ

**Владимир > Смолино** [老夫婦] ヒッチ

真夜中頃、道の駅のような所に到着。トラックの騒音がうるさく、静かな森林で寝る。

**7月13日 Смолино > Нижний Новгород** [中型トラック2台] ヒッチ

**Нижний Новгород > Лысково** [クールな若者] ヒッチ

**Лысково > Цивильск** [**Анатор氏**] ヒッチ この運転手は、水、パン、サラミ、そして便利な!ロシア道路地図をくれた。ロシア語表記のみだが、格段に旅がしやすくなった。**Хорошо**(いいねエ)!モスクワなど大都市では近代的なスーパーも増えてるが、地方では小さな商店のみ。ビルの半地下のような所で、あまり商売っ気なくひっそりやってるような店などは、社会主義時代の名残だろうか?俺の食事は、大抵そこで、安いパンとソーセージ、それにキュウリ(またはパック詰のサラダ)ってカンジ…。“**Магазин**(商店)”の看板が目印! **Цивильск > Казань** [トラック] ヒッチ  
このトラックの運ちゃんは、**чай**(茶)とキュウリをくれた。橋の下で野宿。

**7月14日 Казань西 > Казань東** [徒歩] & [車2台] ヒッチ

**чай**の朝食後、市街地を取り囲むような環状道路に沿ってヒッチハイク。短い距離の車が多く、2台乗せてもらった他は、グルッと歩くことになってしまった。

**Казань > Уфа** [**Дима**さんのトラック] ヒッチ

**Дима**さんは恰幅の良い頑丈そうな男性。途中の野原で、インゲンに似た野生の豆を摘み、一緒に生で食べた。強い味はないものの、素朴でクセになるおいしさ。

ウファという町に到着後、湖で一緒に泳ごうということになる。1日の汗を流し、気持ち良い。その晩は、**Дима**さんのトラックの中で眠らせてもらった。

**7月15日 Уфа > Курган** [同トラック] 今日**Дима**さんのトラックで

行く。**Урал**(ウラル)山脈の眺めの良い峠で写真撮影。ヨーロッパとアジアの境のモニュメントに、久々に故郷アジアへ戻って来た感慨…。**Дима**さんが、友人である別のトラック運転手、**Слава**さんを紹介してくれて、明日は彼のトラックでさらに東方のオムスクという町まで乗せてもらえることになった。**Дима**さんとはこの町でお別れ、**До свидания**(さようなら)!トラックの下で寝る。

**7月16日** **Курган > Омск** [Славаさんのトラック] この町で泊めてもらった Hospitality Club メンバーは、医学部の学生で、ギター弾き、作曲もする Иван。おみやげに、彼の自作の CD をもらった。日本のアニメ好きで、なんと日本語が話せ、かなりの数の漢字も書けたので、驚き！

**7月17日** Иван が連れてってくれた、旧ソビエト時代から続く安食堂で、食事をする。その後、彼のいとこと 3人で一緒に街を散歩。教会を訪れたり、たまたまやっていた日本画の展覧会を見学したりして、面白かった。夕方、Иван の父親の車で彼の別荘へ。ロシアの平均的な家庭は、**дача** と呼ばれる別荘を持っている。新鮮な果物や野菜を庭で採って食べ、夕食に旨い鶏肉。別荘泊。

**7月18日** **Омск > Калачинск** [ヴァン] ヒッチ この辺まで来ると、雄大なシベリアの中にポツンポツンと町がある感じ。狭〜あい日本ではめったにお目にかかれないであろう、隣町までの距離 500km(…いやいや、1,000km!)なんて記載された標識も珍しくはないのである。 **Калачинск > Новосибирск** [古いトヨタ車] ヒッチ Hospitality Club メンバーの **Антон** の家に泊めてもらう。

**7月19日** **Сокур > Мошково** [遅おお〜い〜シャベル car] ヒッチ

**Мошково > Устьтула** [Толя氏] ヒッチ 3台目の車の運転手は、ロシア語しか話さないのではっきりわからないが、どうやら彼の村に寄っていかないと誘ってくれているようだった。俺は“да(はい)”と一言! 彼の村は、主要道を外れた森の奥にあった。凍るように冷たい川で泳ぐ。帰宅後、近所の人達と一緒に絶品の **Шашлык** (シャシリク=ロシア風バーベキュー)を御馳走になり、**баня** と呼ばれるロシア風蒸し風呂でくつろぐ。フィンランドでも愛用されているサウナと同じく、葉で体をビシバシ叩く。薪をガンガン燃やすので、極寒の北半球の森林地帯で発祥したのは必然的なことだったのだろう。日本の温泉文化に相当か? 近所の人達の 1人が英語の教師で、おしゃべりに花が咲く。Толя 氏の丸太小屋で寝る。

**7月20日** **Устьтула > Болотное** [Толя氏の近所の人] 世話になった Толя 氏に、最後の 1杯の чай を頂いた後、ちょうど出かける予定だった近所の人、主要道まで送ってくれた。 **Болотное > Юрга** [陽気な中年の男性] ヒッチ

**Юрга > Кемерово** [コーヒー1杯くれたトラックの運ちゃん] ヒッチ 野宿で、たくさん蚊にさされる。**Тайга** (タイガ)と呼ばれるこの針葉樹林には、数え切れないほど恐ろしい数の蚊が飛びまわっている。極寒の地の印象が強いが、緯度が高いため、北欧などと同じように、夏は夜遅くまで明るくて暑い。

**7月21日** **Кемерово > Мариинск** [蚊除け cream くれた兄ちゃん] ヒッチ **Мариинск > 付近の村** [女性運転手 & バス] ヒッチ

**付近の村 > Красноярск** [冷凍車] ヒッチ

**Красноярск > Березовка** [父と息子] ヒッチ

**Березовка > Уяр** [犬連れのカップル] ヒッチ このウヤルという町で

の野宿では、比較的涼しかったため、蚊にさされなかった。

**7月22日** Уяр > Канск [トラック] ヒッチ Канск >

Карапсель [満員ギューギューの緑のロシア国産車] ヒッチ

Карапсель > Нижний Ингаш [英語少し話す人] ヒッチ

Нижний Ингаш > Тайшет [?]

Тайшет > Алзамай [おしゃべりな人] ヒッチ 日本で言えば、道の駅のような所で降ろされる。あるトラック運転手が干魚をくれて、彼のカメラと一緒に記念撮影をするという交流もあった。駐車場で眠る。

**7月23日**

Алзамай > Замзор > Нижнеудинск [車2台] ヒッチ

Нижнеудинск > Хингуй [オジサン2人組] ヒッチ 2台目の車が、湖畔に連れて行ってくれて、牛乳とキュウリの漬物をくれた。

Хингуй > Худоеланское [夫婦とその子] ヒッチ この温厚そうな夫婦が、キュウリを5本もくれた。ロシアでは葉ものの野菜をほとんど見かけない代わりに、キュウリやトマトをよく食べるようだ。車の数が減りヒッチがしにくいなあと感じ始めたのは、この辺りからだっただろうか…。

Худоеланское > Вершина [徒歩10km]

Вершина > Шебрга [ヴァン] ヒッチ

Шебрга > Тулун [中型トラック] ヒッチ

アフリカのような悪路、交通量も激減、限られたビザの滞在日数…。もうヒッチは限界と判断し、シベリア鉄道による旅に切り替えることに決めた。トゥルンというその町の駅に向かって歩いていると、1人の男性が彼の仕事場に招き入れてくれ、軽食と чай を御馳走してくれ、ジュースも持たせてくれた。さて、駅に着いたはいいが、乗車券を買うのに一苦労。中年女性の駅員は、ニコリともせず、淡々とロシア語のみでの対応。さらに、ロシア各地で時差があるのだが、鉄道においては一貫してモスクワ時刻を採用していて、複雑で厄介だった。ヒッチの方が簡単かぁ?!や~っとのことで、切符を買えたのは、真夜中。日付が変わってからの出発となった。

**7月24日** Тулун > Иркутск [列車] Р246 シベリア鉄道は上下2段に分かれた寝台列車だが、俺の切符には座席の記載がなく、ほぼ満席で、荷物棚である3段目に横たわる。それでも、野宿より数倍快適で、深く眠る。イルクーツクに着き、ちょっと街を散歩。再び駅に戻り、その日発の別の夜行列車を予約し、旅を続けることにした。美しき Байкал (バイカル)湖を観光できなくて、残念…。

Иркутск > [列車] Р258 車内で警察のパスポート検査。外国人がロ

シアに 3 日以上滞在する場合、登録しなくてはならないが、俺はしていなかったのが、別室で尋問。警察は片言の英語で、規則のことを述べ、しまいには賄賂を請求してきた。

マケドニアでもこんなのあったけ…?断固として拒絶すると、パスポートは警察により一時保管され、俺はとりあえず客車へ戻る。この辺り *Бурятия* と呼ばれる地方の人々がたくさん乗っていて、*чай* を飲み、干魚やお菓子をつまみながら、おしゃべり。

彼らはロシア国籍ではあるが、モンゴル系の顔立ちで、日本人とそっくり!白人から黄色人種まで多様な、東西に長い巨大国家と、実感。

**7月25日** > *Улан-Удэ* ウラン - ウデ駅到着後、依然としてパスポートは返却されぬまま、駅構内の派出所へ連行された。フランス人の自転車旅行者が一緒だった。

問題は登録していないことだと思っていたけど、そのフランス人はすでに登録は済ませていると言う。2人で規則の曖昧さについて、ブツクサと不平を言い合う。警察からいくつかの質問を受け、俺達は難なく解放され、ちょっと拍子抜け?!この町には、複数の Hospitality Club メンバーがいて、その内の1人のアパートに、他の5人と共に泊めてもらい、食事を御馳走になり、ギターを弾いたりして遊んだ。

**7月26日** Hospitality Club メンバーの友人が、湖へドライブに連れて行ってくれた。途中の食堂で、汁ダクで旨〜あい *Позы* (ブリャティヤ方言で「ポーズ」と発音) を食べた。これは肉まんのことで、中国語の「包子(パオズ)」が語源であろう。ひとしきり泳いだ後、雨が降り始め、帰り道には、綺麗な虹を見ることができた。今晚は違う Hospitality Club メンバー姉妹の家に泊めてもらう。姉は素晴らしい写真家で、妹は想像力豊かな絵描き。一緒にスケッチしたり、面白かった。

**7月27日** 姉妹の母親が、美味しい朝食と昼食を振舞ってくれ、出発に際して、父親が鉄道駅まで車で送ってくれた。姉妹の大勢の友達が、俺を見送りに来てくれて、感激!

*Улан-Удэ* > [列車] P1,477

**7月28日** 2000km 程東方のハバロフスクまで、一気に行ってしまうことにした。果てしないシベリアの大地を駆け抜ける、50 時間以上の鉄道の旅。車窓の外には、無限に広がる *Тайга*。山間の峠を通過時、草原に真っ白いみぞれが舞っていた。警察によるパスポート検査があったが、今回は登録の有無について、一切お咎めなし。昼、持参したカップ麺と梨を食べていたら、隣の乗客が野菜を差し出してきて、「ビタミンつける」と温かい一言。そんな人情にも触れつつ…列車内泊。

**7月29日** > *Хабаровск* いよいよ極東着!ここで会うことになっている Hospitality Club メンバーの *Женя* 君は、日本渡航経験があり、英語も日本語も話せる。

駅から自宅に電話してみたが、あいにく本人不在。両親と話すも、いまいち理解できず、とりあえずタクシーで家まで向かうように言われたので、それに従う。

**7月30日** *Женя* の日本を旅行したときのアルバムなどを見て、少しおしゃべりした後、街を散歩。日本料理店の看板のひらがなが間違っていたのが、可笑しかった。日本に

あるロシア語表記も、同様に間違っているんだろうが…。

今夜は、Женяの友人の家に泊めてもらう。

**7月31日** 再びヒッチハイクで、Татарский пролив (間宮海峡)を目指そうかとも考えていたのだが、大雨のためあきらめ、やはり鉄道を使うことにする。

Женяの友人宅で昼飯を御馳走になった後、鉄道駅へ行き、そこで深夜発の普通列車を待つ。

**8月1日** Хабаровск > [列車] Р403.5 何度も停まり、停車時間も長い、遅い列車。特急は値段が高いから仕方ない。ここでも警察がパスポート検査。ちょっとすったもんだの議論の後、無事解放された。1人の乗客から Пирожки (ピロシキ) をもらった。列車内で寝る。

**8月2日** > Ванно ユーラシア大陸東端着!到着した鉄道駅の真ん前に、Сахалин (樺太)行きフェリーの乗船券売場があった。食事代とシート代が含まれていたの、やや高めだった。

**8月3日** > Холмск (真岡) 下船直後、またもや警察によるパスポート検査。しばらく待たされたが、問題なし。

Холмск > Южно-Сахалинск (豊原) [バス] Р180

Южно-Сахалинск > Корсаков (大泊) [バス] Р76

そのコルサコフというサハリン南端の町で、Женяの友達彼女の Hospitality Club メンバーに会う。ご飯とサラダをタッパーに詰めて、俺に弁当を作って持ってきてくれた。

夜は、彼女の勤める石油関連の会社の同僚の車で小高い丘に登り、美しいパノラマの夜景を見た。彼女の同僚の夫婦のアパートの1室に、俺が泊まれるよう手配してくれた。

**8月4日** その夫婦宅で、ロシア最後となる朝食と чай を頂き、港へ向けて歩く。

Корсаков > 稚内 [船] Р5,010 + Р500 (港湾使用料) 日本船籍の(東日本海フェリー)は、ものすごく高かった。港税も空港並み! 帰国。

## 藤田健君の世界ヒッチハイクブログ掲載終了に当って

### ～281 回にわたって掲載し、知名度も人気も出てきた～

このブログの主要テーマであったかのごとき、「藤田健君の世界ヒッチハイク」記事は 281 回を持って終了します。掲載者としても名残惜しい感じがします。

思えば同じテーマで書き綴られてこられたのは、藤田君の話が大変興味がわいたからです。掲載者として小見出しをつけて掲載しました関係で、よく読んでからでないで見出しはつけることが出来ません。

そのため私が一番身近な読者になったのではないのでしょうか。彼の旅は目線の低い国際交流だと、私は口癖のように言ってきました。ほんとに言葉の壁など感じさせないいい旅日記でした。こんな旅は誰にでも出来るものではないと思っています。藤田君のユニークなキャラクターがあってこそ成り立ってものと思っています。野宿をしながらの旅、誰にでも出来るものではありません。

この藤田君のレポートからは言葉の壁などというものは、人間生きていくうちにはそんなに大きなものではないという気がします。生き物として何が大切かと言うことを学んだ、含蓄のある旅日記でした。

### ～この旅行記で特に認識を新しくしたものは3つある～

一つ目はイスラムについての認識

イスラムについてはイスラム過激派の印象が悪く、怖い国であるという印象が強かった。ところが藤田君が訪れたイスラムの国々では歓待を受け、とても楽しい旅を続けています。

この庶民の歓待振りは、イスラム教の教えからくるものであるようです。他人に施しをすれば自分も救われるという教えのようです。庶民の生活はこんなに親しみやすいのに、なぜ良く理解されないのでしょうか。この理解が進むと世界の平和が近づくとおもいますが、こんな世界が来るといいと思ったイスラム世界でした。

藤田君にモデルになって欲しいと、お金をだすという裸族

これはアフリカ奥地の話です。藤田君が母娘の裸族をスケッチのモデルにしていたときのことといます。お金の話が出たので、てっきりこのモデル代がいるという理解をしたようです。

ところがこの話は逆の話で、藤田君にお金を出すから、珍しい東洋人をカメラで写したいという話であったようです。この奥地では白人はそんなに珍しいことではないが、黄色人は珍しかったということです。無料でいいとなると沢山の方が藤田君の写真を撮りに来たということです。ロシア人も結構親切であった

日本人はロシア人にはなじみがないせいか、あまり親しみを持ちません。ところが藤田君は、そんな日本人の偏見を吹き飛ばすような歓待振りです。大きな国を 1 ヶ月で横断するのは勿体無いことです。

もっとゆっくりと横断すれば面白かったと思われます。残念な旅であった気がします。次の町まで 500 キロ、1,000 キロと言う国はこの地球上には存在しないと思います。

愛読を感謝します

この藤田君の旅の掲載はこれで終わりますが、少し心残りの気がします。英語版や藤田君には絵心があり、スケッチをしてきているはずです。今後についてはゆっくりまた考えてみたいと思っています。

最近はこの藤田君の記事を読まれる方も増え、長い間のお付き合い、掲載者として感謝いたします。